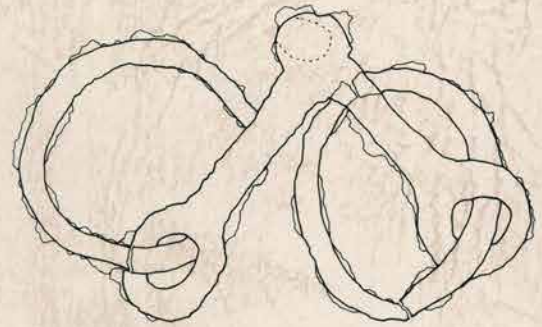


かつお ざわ  
鱈 沢 遺 跡

—平成2年度発掘調査報告書—



馬具(くつわ金具)

1992.3

岩手県宮古市教育委員会



# 鯉 沢 遺 跡

—平成2年度発掘調査報告書—



第17号竪穴住居跡 馬具の出土状況

1992.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education  
Miyako, Iwate, Japan



## 序 文

私たちの住む宮古市には、幾千年も前の縄文時代から江戸時代までの数多くの遺跡があります。これらの遺跡は、私たちの先人たちによって守り継承されてきたものです。そして、現代に生きる私たちに様々なことを教え、物語ってくれます。この様な遺跡は更に後世へ伝えていかなければなりません。しかしながら、交通網の整備や宅地造成、公共施設の建設など社会基盤の整備に伴う開発により、日々、貴重な文化遺産である遺跡が消滅しているという事実も否定できません。

さて、本書は、市立花輪中学校の移転新築工事に伴い止むをえず消滅をまぬがれなくなった鰹沢遺跡の緊急発掘調査の成果をとりまとめたものです。

その結果、縄文時代、弥生時代そして奈良・平安時代の遺構・遺物が数多く発見されました。弥生時代にあつては、県内でも類例が少ない土製の紡垂車がほぼ完全な形で見つかりました。そして、今回の調査では何よりも奈良・平安時代の竪穴住居跡が32棟も検出したことです。市内では、昭和59年から61年度に調査された磯鶏館山遺跡に匹敵するものでした。市内における古代の集落の在り方や土器群の様相、当時の社会状況などを構築していく上では欠くことのできない資料と考えられます。

また、多量に見つかった遺物の中には、鉄製の馬具のひとつである轡金具がほぼ完全な形で、しかも、住居跡の床面から発見され、まさに貴重な調査例となりました。遺構・遺物とも豊富な内容をもった遺跡であることがわかりました。

最後となりましたが、発掘調査から本報告書の作成に際してご指導、ご助言を賜りました関係各位ならびに地元の方々、そして冬期間中にもかかわらず直接発掘調査作業にご協力をいただきました皆様方に心より感謝申し上げる次第です。

平成4年3月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

## 例 言

1. 本書は岩手県宮古市大字花輪第5地割字程久保<sup>はとくほ</sup>地内に所在する<sup>なつばわ</sup>鰹沢遺跡の平成2年度に実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）で、発掘調査は鎌田、鶴田、阿部、高橋が担当した。また、本書の執筆、編集はⅠ、Ⅳは鎌田、Ⅱは阿部、Ⅲは両者で担当し、高橋がこれを補佐した。
3. 調査座標は地形にあわせ任意に設定した。高さは標高をそのまま使用した。
4. 遺構・遺物の表現は次のとおりとした。なお、土器の器面調整の表現法については本文中に記した。



地 山



焼 土



炭の広がり



石の断面

5. 発掘調査及び、本書の執筆に際しては次の方々のご指導、ご教授を頂いた。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

相原 康二	（岩手県教育委員会文化課）	佐々木清文	（岩手県立博物館）
高橋 信雄	（岩手県教育委員会文化課）	佐藤 嘉広	（岩手県立博物館）
熊谷 常正	（岩手県教育委員会文化課）	赤沼 英男	（岩手県立博物館）
中村 英俊	（岩手県教育委員会文化課）	岸 昌一	（宮古市史編纂室）
小田野哲憲	（岩手県埋蔵文化財センター）	竹下 将男	（宮古市史編纂室）
高橋 義介	（岩手県埋蔵文化財センター）	斎藤 英樹	（宮古市文化財保護審議委員）
酒井 宗孝	（岩手県埋蔵文化財センター）		

6. 出土した鉄製品の保存処理は新日本製鉄株式会社釜石製鉄所釜石文化財保存処理センターに依頼し行った。

7. 本文中における引用文献は次の通り略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1983～86 【宮古市遺跡分布調査報告書 1～4】 武田将男 → 【分布調査 1～4】

1986 【宮古市遺跡分布図 昭和63年度版】 武田将男 → 【分布図 86】

1987～91 【崎山遺跡群 I～V 昭和61年度～平成2年度発掘調査概報】

高橋憲太郎 → 【崎山遺跡群 I～V】

1984 【赤前遺跡群 第1次・2次発掘調査報告書】 武田将男 → 【赤前 84】

1985 【金浜館－昭和55年度発掘調査報告書－】 武田将男 → 【金浜館 85】

1990 【狐崎遺跡－平成元年度発掘調査報告書】 盛合義信 → 【狐崎 90】

1990 【鉄ヶ崎館山貝塚－平成元年度発掘調査報告書】 鎌田祐二 → 【館山貝塚 90】

1991 【弘川Ⅰ遺跡－平成2年度発掘調査報告書】 朴澤正耕 → 【弘川 91】

# 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査要旨	1
3 調査体制	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 調査内容	8
1 調査の方法	8
2 各調査区の状況	16
3 検出した遺構・遺物	19
IV 調査のまとめ	128
1 縄文時代の遺構と遺物	128
2 弥生時代の遺構と遺物	129
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	131
4 宮古市内における古代の集落と土器群の様相	147
5 まとめに代えて	149
参考・引用文献	149

# 挿 図 目 次

第1図	位置図	3
第2図	周辺の遺跡	5
第3図	地形分類図	6
第4図	調査区と周辺の地形図	7
第5図	調査区A区全体図	9
第6図	調査区A区基本層序図	10
第7図	調査区B区、C区全体図	11
第8図	調査区B区基本層序図	13
第9図	調査区C区基本層序図	14
第10図	調査区D区全体図	15
第11図	調査区D区基本層序図	16
第12図	第1号土壇跡	19
第13図	第4号土壇跡	21
第14図	第2号～第4号土壇跡出土土器	21
第15図	第1号竪穴跡、第6号土壇跡	23
第16図	第1号竪穴跡出土土器	23
第17図	第1号竪穴住居跡、第8号、第9号土壇跡	25
第18図	第1号竪穴住居跡カマド跡	26
第19図	第1号竪穴住居跡出土遺物	27
第20図	第2号竪穴住居跡、第10号、第11号土壇跡	29
第21図	第2号竪穴住居跡カマド跡	30
第22図	第3号竪穴住居跡	32
第23図	第3号竪穴住居跡カマド跡	33
第24図	第4号、第5号竪穴住居跡	35
第25図	第4号、第5号竪穴住居跡断面図	36
第26図	第4号竪穴住居跡カマド跡	37
第27図	第4号竪穴住居跡出土遺物 ①	38
第28図	第4号竪穴住居跡出土遺物 ②	39
第29図	第6号、第7号竪穴住居跡	41
第30図	第6号竪穴住居跡カマド跡	42
第31図	第6号竪穴住居跡出土遺物	43
第32図	第8号、第9号竪穴住居跡	45
第33図	第8号、第9号竪穴住居跡カマド跡	46
第34図	第8号竪穴住居跡出土遺物	47
第35図	第10号竪穴住居跡	49
第36図	第10号竪穴住居跡カマド跡	50



第37図	第10号竪穴住居跡出土遺物	51
第38図	第11号竪穴住居跡	52
第39図	第12号、第13号竪穴住居跡 第12号、第13号土壇跡	54
第40図	第12号竪穴住居跡出土遺物	55
第41図	第14号竪穴住居跡	57
第42図	第14号竪穴住居跡カマド跡	58
第43図	第14号竪穴住居跡出土遺物	59
第44図	第15号土壇跡	60
第45図	第15号竪穴住居跡	61
第46図	第16号竪穴住居跡	62
第47図	第16号竪穴住居跡カマド跡	63
第48図	第17号、第18号竪穴住居跡平面図	66
第49図	第17号、第18号竪穴住居跡断面図	67
第50図	第17号竪穴住居跡カマド跡	68
第51図	第18号竪穴住居跡カマド跡	69
第52図	第17号竪穴住居跡出土遺物	69
第53図	第18号竪穴住居跡出土遺物	70
第54図	第19号竪穴住居跡	72
第55図	第19号竪穴住居跡カマド跡	73
第56図	第20号竪穴住居跡	74
第57図	第20号竪穴住居跡カマド跡	75
第58図	第21号竪穴住居跡	76
第59図	第21号竪穴住居跡カマド跡	77
第60図	第21号竪穴住居跡出土遺物	78
第61図	第22号竪穴住居跡	79
第62図	第23号竪穴住居跡	80
第63図	第24号、第25号竪穴住居跡	81
第64図	第26号竪穴住居跡	83
第65図	第26号竪穴住居跡土層断面	84
第66図	第26号竪穴住居跡カマド跡 (1)	85
第67図	第26号竪穴住居跡カマド跡 (2)	86
第68図	第26号竪穴住居跡出土遺物 (1)	89
第69図	第26号竪穴住居跡出土遺物 (2)	90
第70図	第26号竪穴住居跡出土遺物 (3)	91
第71図	第27号竪穴住居跡	93
第72図	第27号竪穴住居跡カマド跡	94
第73図	第27号竪穴住居跡出土遺物 (1)	96
第74図	第27号竪穴住居跡出土遺物 (2)	97

第75図	第28号竖穴住居跡	98
第76図	第28号竖穴住居跡カマド跡 I、II	99
第77図	第28号竖穴住居跡出土遺物 (1)	100
第78図	第28号竖穴住居跡出土遺物 (2)	101
第79図	D区焼土遺構	102
第80図	D区遺構外出土遺物 (1)	105
第81図	D区遺構外出土遺物 (2)	106
第82図	D区遺構外出土遺物 (3)	107
第83図	D区遺構外出土遺物 (4)	108
第84図	第29号、第30号竖穴住居跡	110
第85図	第29号竖穴住居跡カマド跡	111
第86図	第29号、第30号竖穴住居跡出土遺物	112
第87図	第1号炉跡と炭の広がり	113
第88図	第1号炉跡	114
第89図	第1号炉跡出土遺物	115
第90図	第31号竖穴住居跡	117
第91図	第31号竖穴住居跡カマド跡 I、II	118
第92図	第32号竖穴住居跡	119
第93図	第32号竖穴住居跡カマド跡	120
第94図	第33号竖穴住居跡、第2号、第3号土坑跡	121
第95図	第33号竖穴住居跡カマド跡	122
第96図	第33号竖穴住居跡出土遺物	123
第97図	第34号竖穴住居跡	125
第98図	第34号竖穴住居跡カマド跡	126
第99図	道路跡	127
第100図	鯉沢遺跡竖穴住居跡変遷図	134
第101図	竖穴住居跡の土器 (1)	140
第102図	竖穴住居跡の土器 (2)	141
第103図	竖穴住居跡の土器 (3)	142
第104図	竖穴住居跡の土器 (4)	143
第105図	宮古市内における古代の集落と土器群の様相 (1)	150
第106図	宮古市内における古代の集落と土器群の様相 (2)	151

## 写真図版目次

- 中表紙 第17号竪穴住居跡馬具出土状況
- 第1図版 調査前の景観（B、C区）、同左（D区）
- 第2図版 第1号土壇跡（完掘）、同左（土層断面）
- 第3図版 第1号竪穴住居跡（完掘）、同左カマド跡
- 第4図版 第4号竪穴住居跡（完掘）、同左カマド跡
- 第5図版 第4号竪穴住居跡土層断面（東西）、同左（南北）
- 第6図版 第3号竪穴住居跡（完掘）、第8号竪穴住居跡（完掘）
- 第7図版 第17・第18号竪穴住居跡（完掘）、第8号竪穴住居跡（完掘）
- 第8図版 第19号竪穴住居跡（完掘）、第21号竪穴住居跡カマド跡
- 第9図版 第22～25号竪穴住居跡土層断面、第26号竪穴住居跡
- 第10図版 第26号竪穴住居跡カマド跡、第27号竪穴住居跡
- 第11図版 第28号竪穴住居跡、同左カマド煙出口の礫出土状況
- 第12図版 第30号竪穴住居跡、同左カマド跡
- 第13図版 出土した鉄製品（1）
- 第14図版 出土した鉄製品（2）
- 第15図版 出土した鉄製品（3）

## 付表目次

- 第1表 鯉沢遺跡住居跡一覧 .....133
- 第2表 鯉沢遺跡住居跡出土土器群 .....138



# I 調査経過

## 1 調査に至る経過

鯉沢遺跡は、宮古市西部の花輪地区に所在する。平成2年（1990年）に発見された遺跡で、宮古市の遺跡コードLG42-0355として周知・登録されている。

周知の遺跡

宮古市では昭和57年度から4ヶ年にわたり市内の遺跡詳細分布調査を実施しており、その成果として『分布図 1～4』及び遺跡台帳としての『分布図 86』を刊行しているが、本遺跡はその後に発見され登録されたものである。

調査は、市立花輪中学校の老朽化に伴う新築工事のために実施されたものである。宮古市教育委員会では、新築用地の選定にあたっては地元民との協議を重ね遺跡以外の場所となるよう事前の調整をはかったが、地元の要望が強く遺跡の現状保存が無理となったため、記録保存を前提とした緊急の発掘調査を実施することとし、予算措置を施した。

記録保存

発掘調査は、平成2年9月1日から宮古市教育委員会が主体となり実施したが、調査が進行するに従い多数の遺構・遺物が検出したため、厳寒期の2月を除き平成3年3月31日まで行なった。

## 2 調査要旨

調査地点 宮古市大字花輪第5地割字程久保3

調査原因 宮古市立花輪中学校建設工事に先だつもの

調査面積 対象となった面積は約12,700㎡であったが、大部分が山の急斜面や谷部であり、実際の調査は尾根の平坦面や緩斜面部などを中心に行なった。

調査期間 〈発掘調査〉平成2年9月1日～平成3年3月31日（平成3年2月は除く）

〈整理作業〉平成3年11月1日～平成4年3月31日

調査担当 高橋憲太郎、鎌田祐二、鶴田均、阿部豊（このうち鎌田、阿部が主担当）

検出遺構 遺構の大半を占めるのは、奈良～平安時代の竪穴住居跡で尾根や洞の平坦部や斜面部から合計32棟を検出した。また、同時期の遺構としては竪穴住居跡が埋まりきらない面に鍛冶炉跡1基、竪穴と竪穴を連結すると考えられる道路跡のほか土壇跡や焼土遺構を検出している。前記以外の遺構としては、縄文時代のラスコピットなどの土壇跡6基や弥生時代の竪穴跡1基を検出している。

検出遺物 遺物は竪穴住居跡などの遺構を中心に出土しているが、大半が土師器・須恵器類である。これら以外には、馬具や刀子などの鉄製品や鉄滓、土製の紡垂車、羽口片などが出土している。

奈良・平安時代以外のものでは、縄文時代の土器片や弥生時代の土器、土製品（紡垂車）、近世～近代の陶磁器片が出土しているが量的には少ない。

### 3 調査体制

発掘調査の体制は次の通りである。

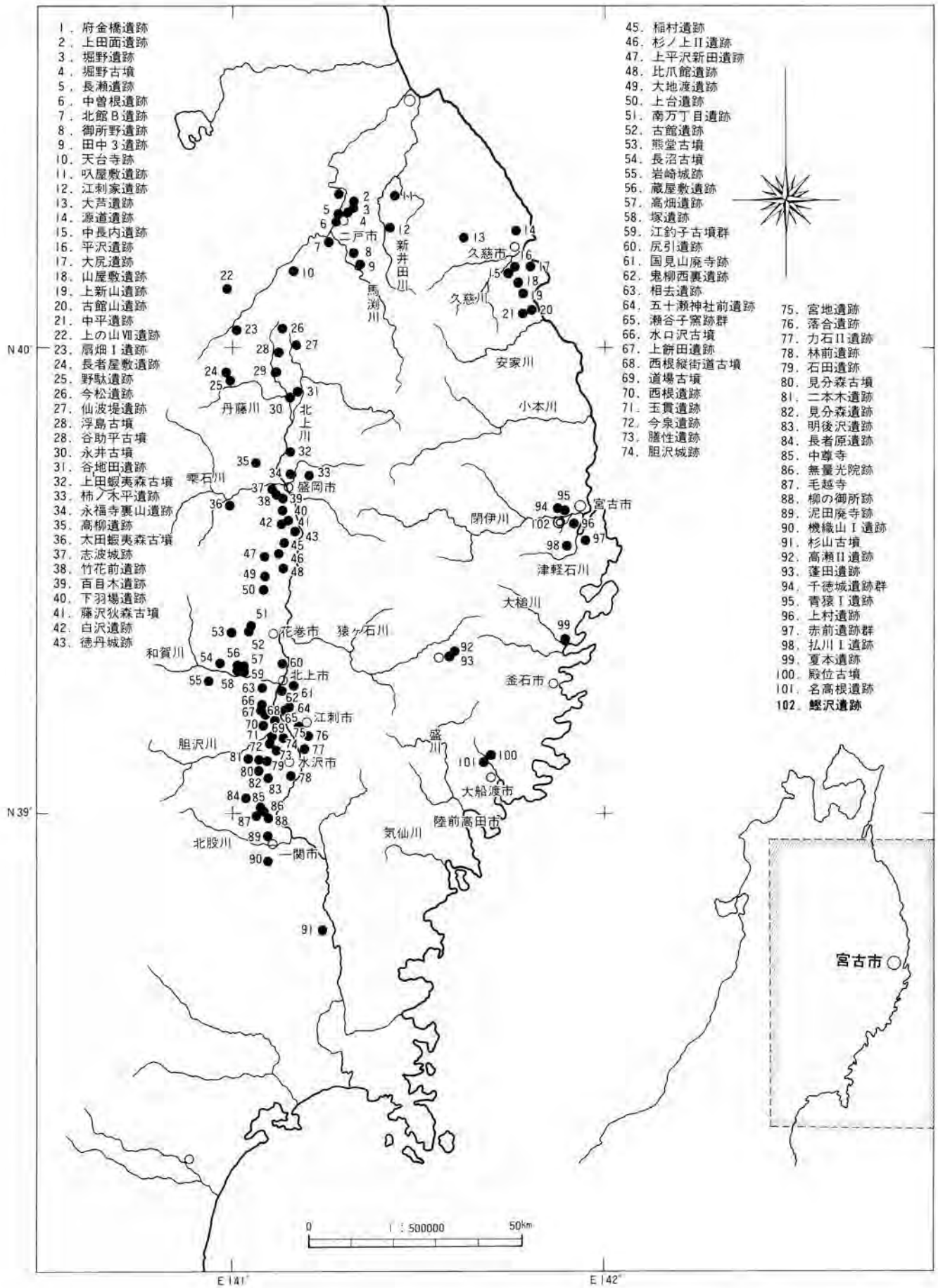
調査主体	宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）		
調査総括	〃	社会教育課長	大森 翼
事務総括	〃	〃	係長 小本 哲（平成3年4月異動）
	〃	〃	〃 山崎吉章（ 〃 ）
事務担当	〃	〃	主任 坂下 昇
調査担当	〃	〃	主事 高橋憲太郎
	〃	〃	〃 鎌田祐二（主担当）
	〃	〃	〃 鶴田 均
	〃	〃	埋蔵文化財調査員 阿部 豊（主担当）

なお、発掘調査にあたっては、地元をはじめとする多数の方々の御協力を頂いた。（敬称略、順不同）

- 《発掘調査》 古館友三、佐々木清、吉田昭、佐伯裕則、刈屋昭三、斎藤貞子、菅原テルミ、藤谷晶子、山崎林之、吉田ユミ子、清水トミ子、伊東法子、又村知子、山崎咲子、石崎コウ、清水国雄、伊東善吉、山根幸三、永田美弥子、久保田チエ、山野目崇子、佐々木ヨシ子、阿部ハルコ、阿部亮子、木村博、田沢信義、田沢ヒロ子、大洞好子、佐々木明美、伊東孝一、佐々木茂、北村忠治、館崎礼子、山内専太郎、大手末吉、味曾作宣子、竹原昌江、佐々木朝子、伊藤晴男
- 《整理作業》 菅原テルミ、吉田昭、久保田チエ

#### 現地説明会

また、調査終了後の平成3年4月26日には地元の花輪小学校児童を含め遺跡の現地説明会を開催した。



第1図 位置図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置と立地

宮古市は岩手県沿岸のほぼ中央に位置する。沿岸線は、宮古を境として景観を大きく異にし北は隆起性海岸で、断崖、絶壁が連なり、南の沈降性海岸はリアス式海岸として知られている。

本州最東端

本州最東端に位置する重茂半島は東北に向かって突き出し、宮古湾を形成している。宮古湾には二つの大きな川が流れ込んでいる。湾の最深部である南からは津軽石川、西からは閉伊川が流れ込み、現在の市街地は閉伊川河口の氾濫平野の上に築かれている。

宮古市は周辺部を丘陵と山地に囲まれている。北から小本丘陵、西の千徳丘陵、南の八木沢丘陵、豊間根丘陵と連なり、その背後に黒森山山地、花輪山地、サンボトジ頭山地がひかえている。

閉伊川は北の黒森山地と南の花輪山地を隔てているが、その花輪山地を貫いて南西から閉伊川に流れ込んでいるのが長沢川である。

長沢川

鯉沢遺跡はこの長沢川に面した丘陵上に位置する。長沢川は花輪山地に入ったあたりで川幅を広げ、花輪山地からはいくつかの沢が流れ込んでいる。鯉沢遺跡の南を流れる沢が鯉沢である。

遺跡は南東にのびる二つの尾根と尾根に挟まれた洞地に広がり、緩斜面、急斜面から形成されている。標高値は、尾根上でおよそ23m～42m、洞地で18m～23mである。

### 2 周辺の遺跡

鯉沢遺跡は、長沢川に面する山地から丘陵地に変わるあたりに位置することはすでに述べたが、川沿いの山地、丘陵地は館跡などの城館跡が多く確認されている所である。周辺部を沢で開析され川にむかって張りだした見晴らしの良い地形が館山の特徴である。鯉沢遺跡の南には沢を挟んで花輪館、南東には長沢川を挟んで鱗沢館が位置している。長沢川の上流では、長沢館と折壁館が川を挟んで向かい合い、さらに上流にいくと南側の尾根上に長沢川向遺跡がある。鯉沢遺跡の北では閉伊川と合流するあたりで、長沢川を挟んで田鎖館と松山館、その西では閉伊川を挟んで老木館と根市館が向かい合って位置しており、さらに西にむかうと規模の大きい根城館がある。

城館跡

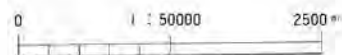
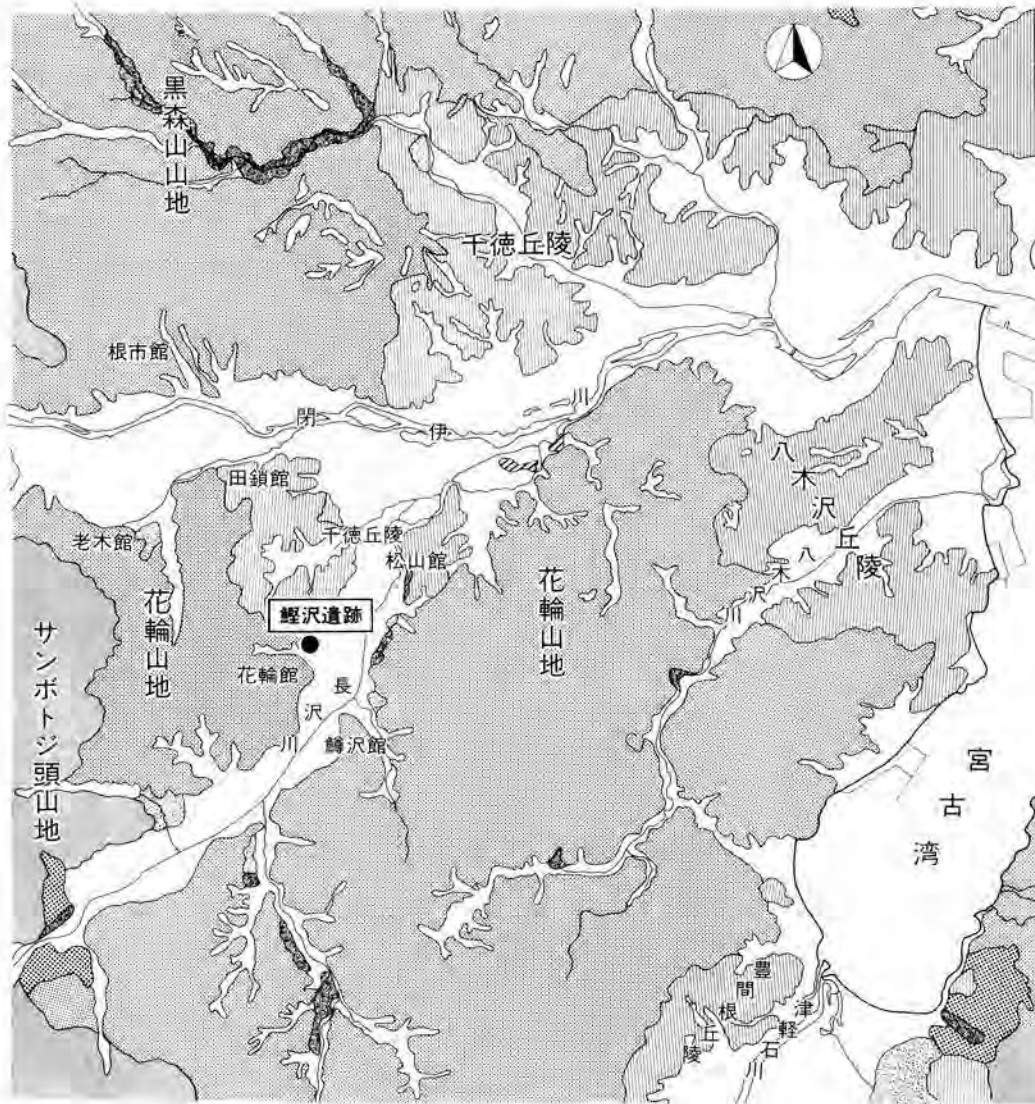
根城館

鯉沢遺跡は多くの館跡に囲まれているわけであるが、それらの館跡はすべて未調査のものである。周辺遺跡での調査例では、1982年、1983年に実施された長沢川向遺跡での調査が唯一のものである（未報告）。その調査では、平安時代の竪穴住居跡、竪穴、鉄滓、フイゴの羽口などが出土している。

長沢川向遺跡





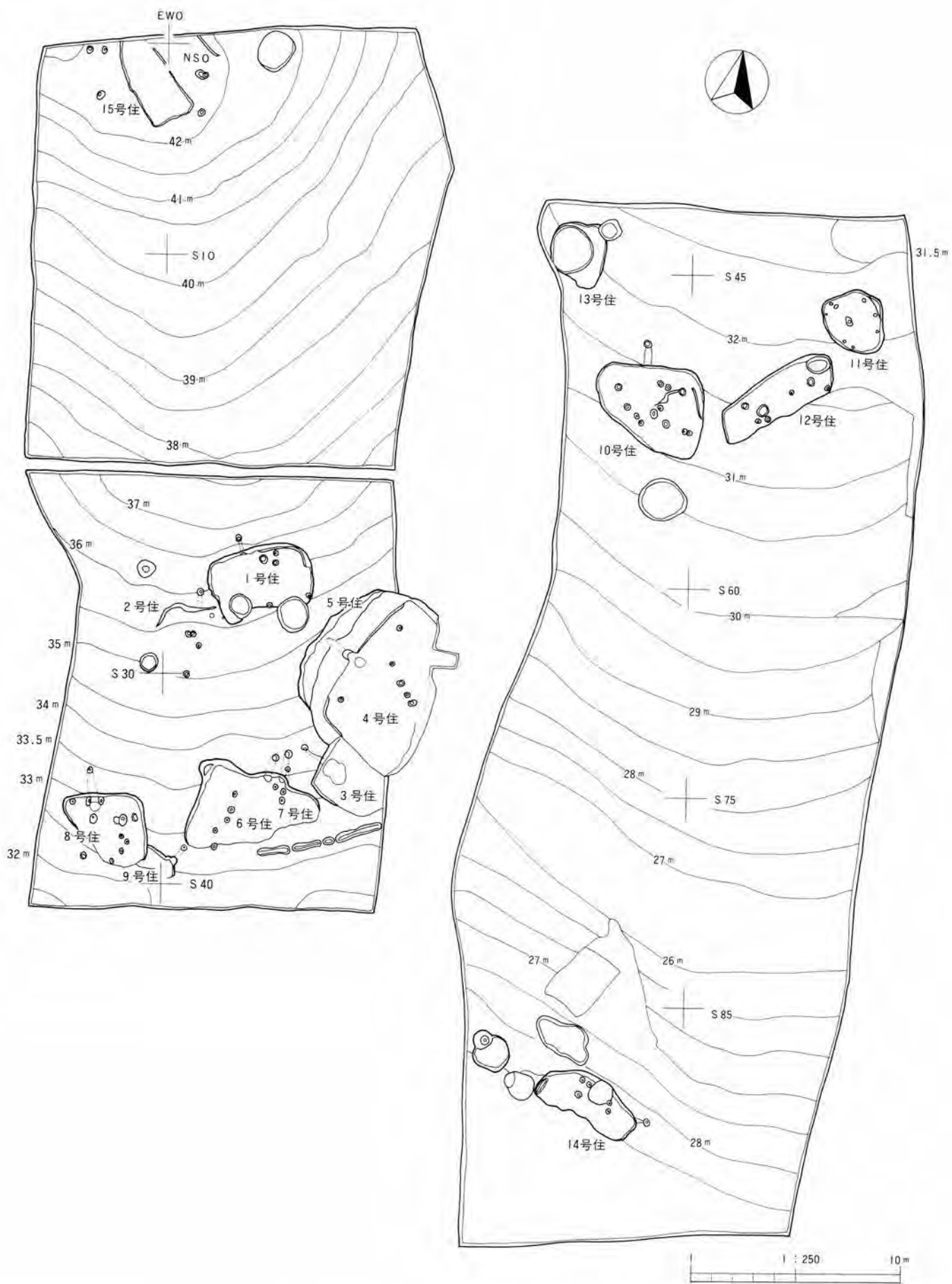


第3図 地形分類図

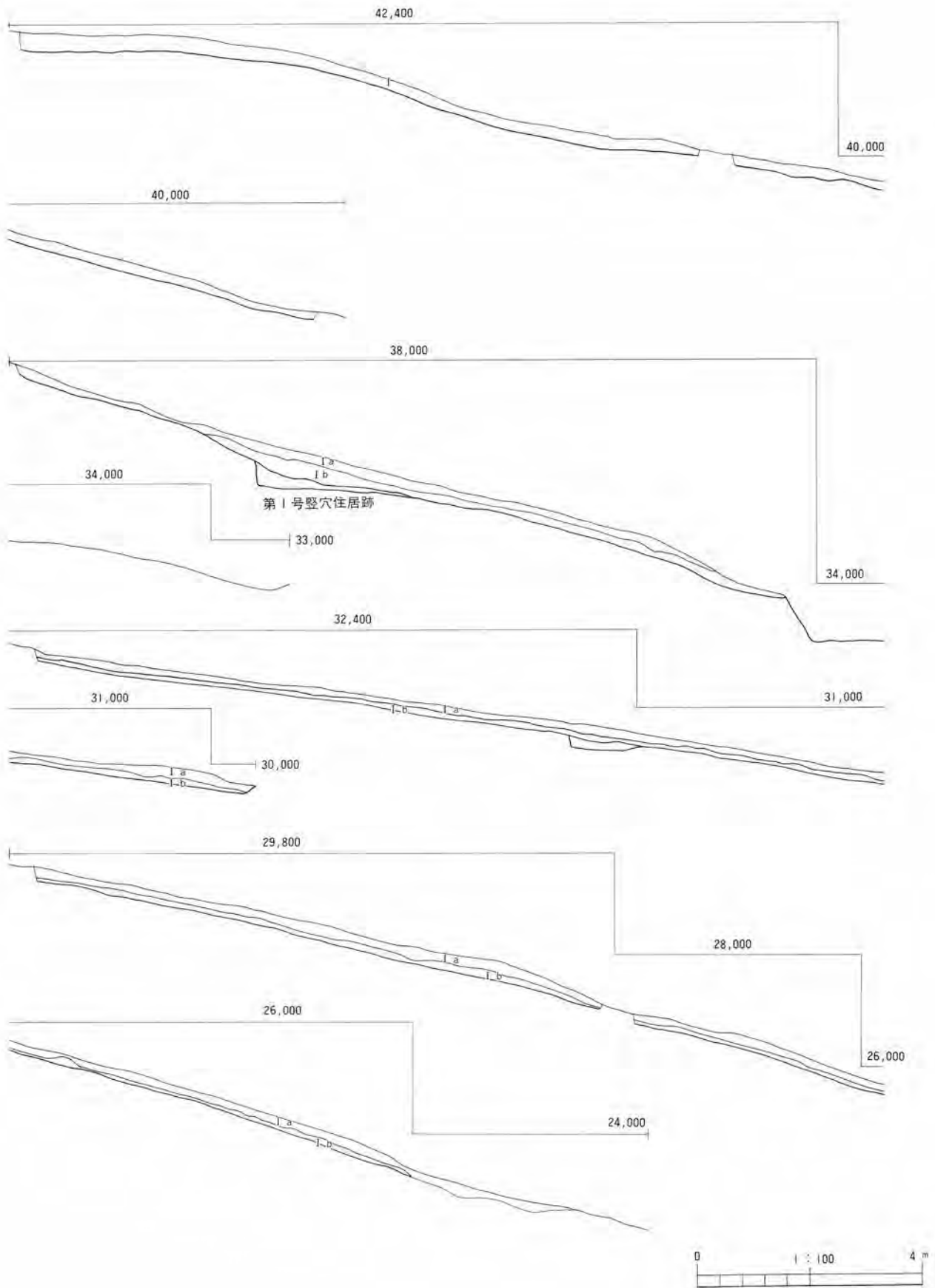


第4図 調査区と周辺の地形図

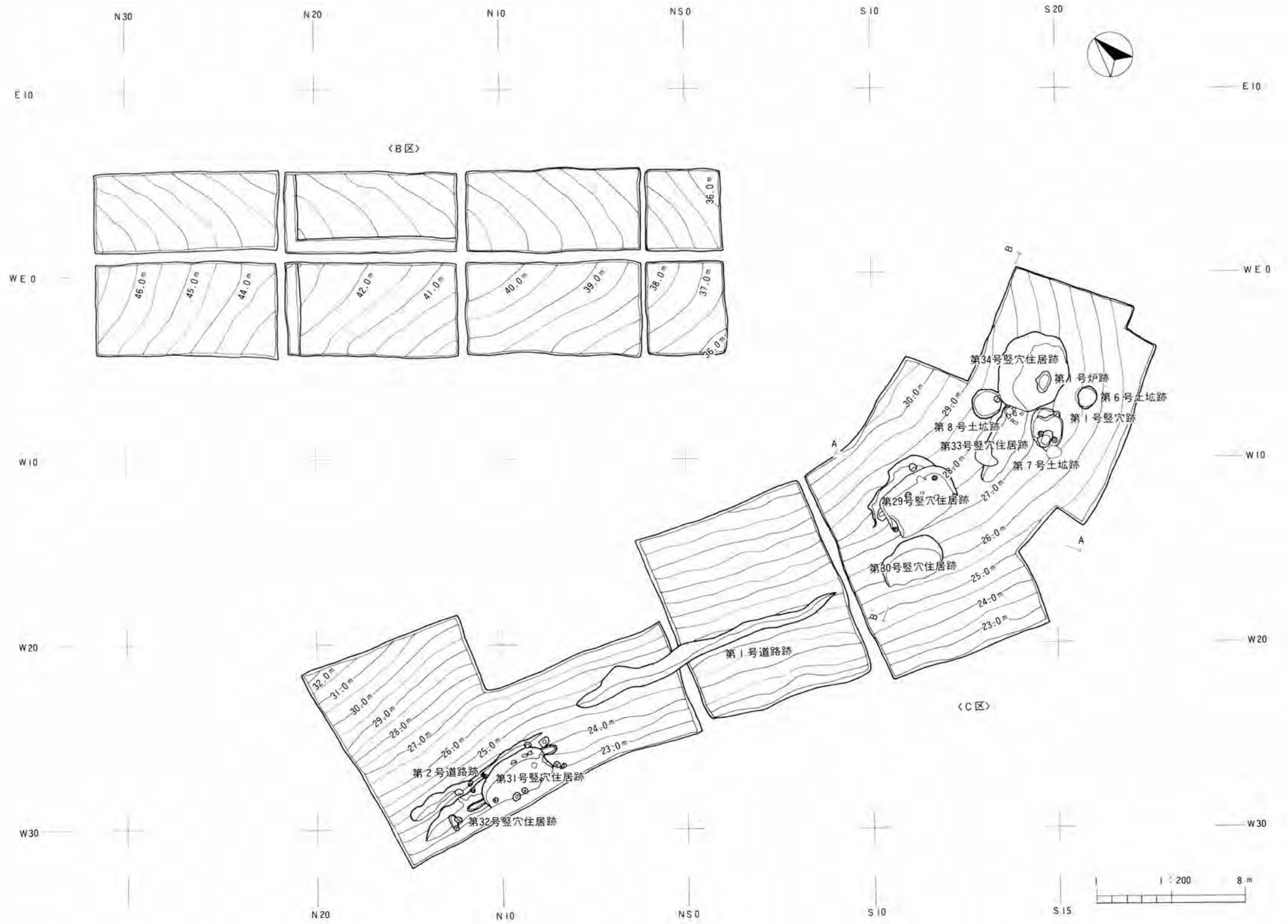




第5図 調査区A区全体図



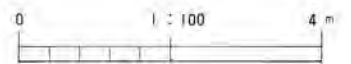
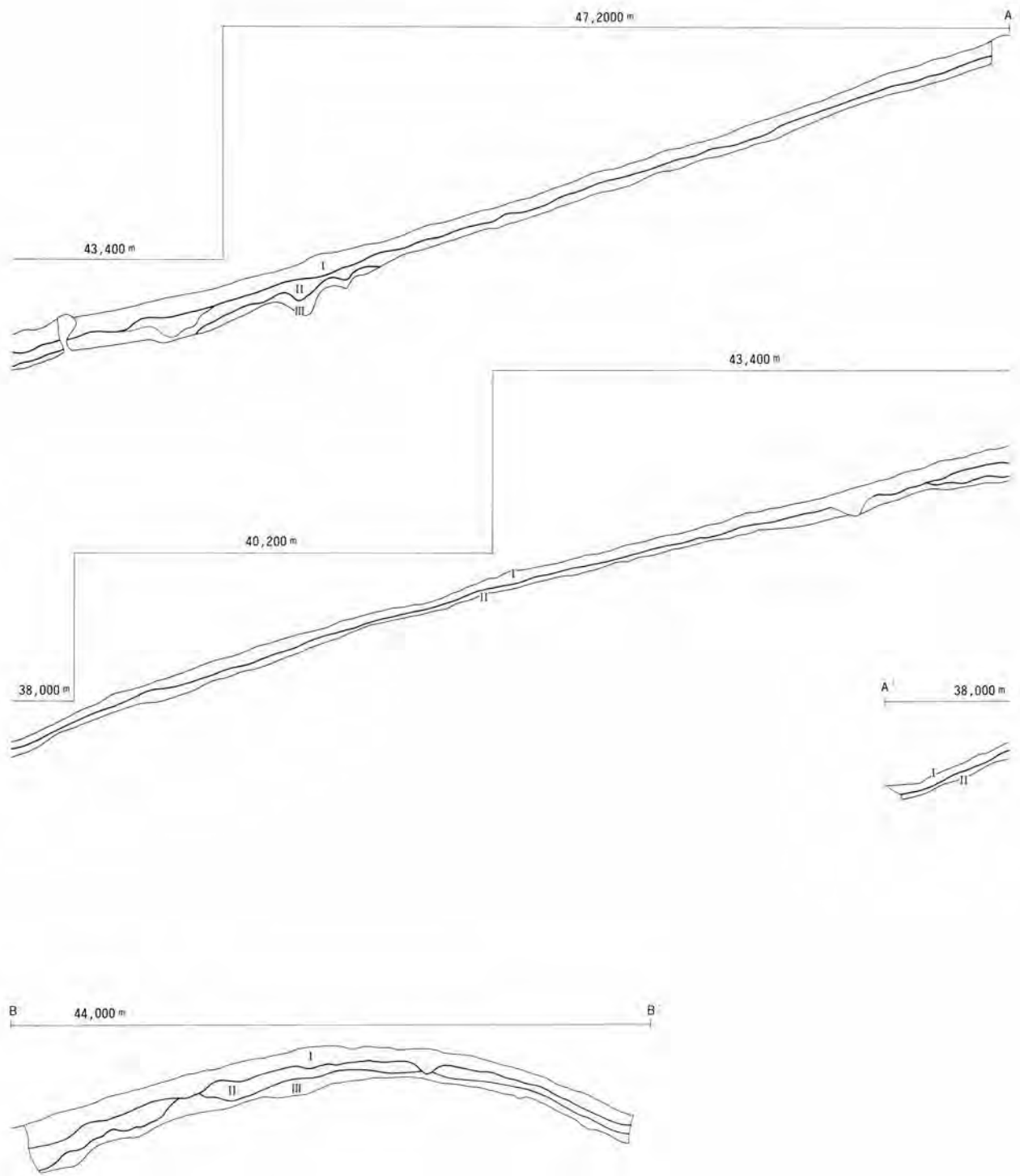
第 6 図 調査区 A 区基本層序図



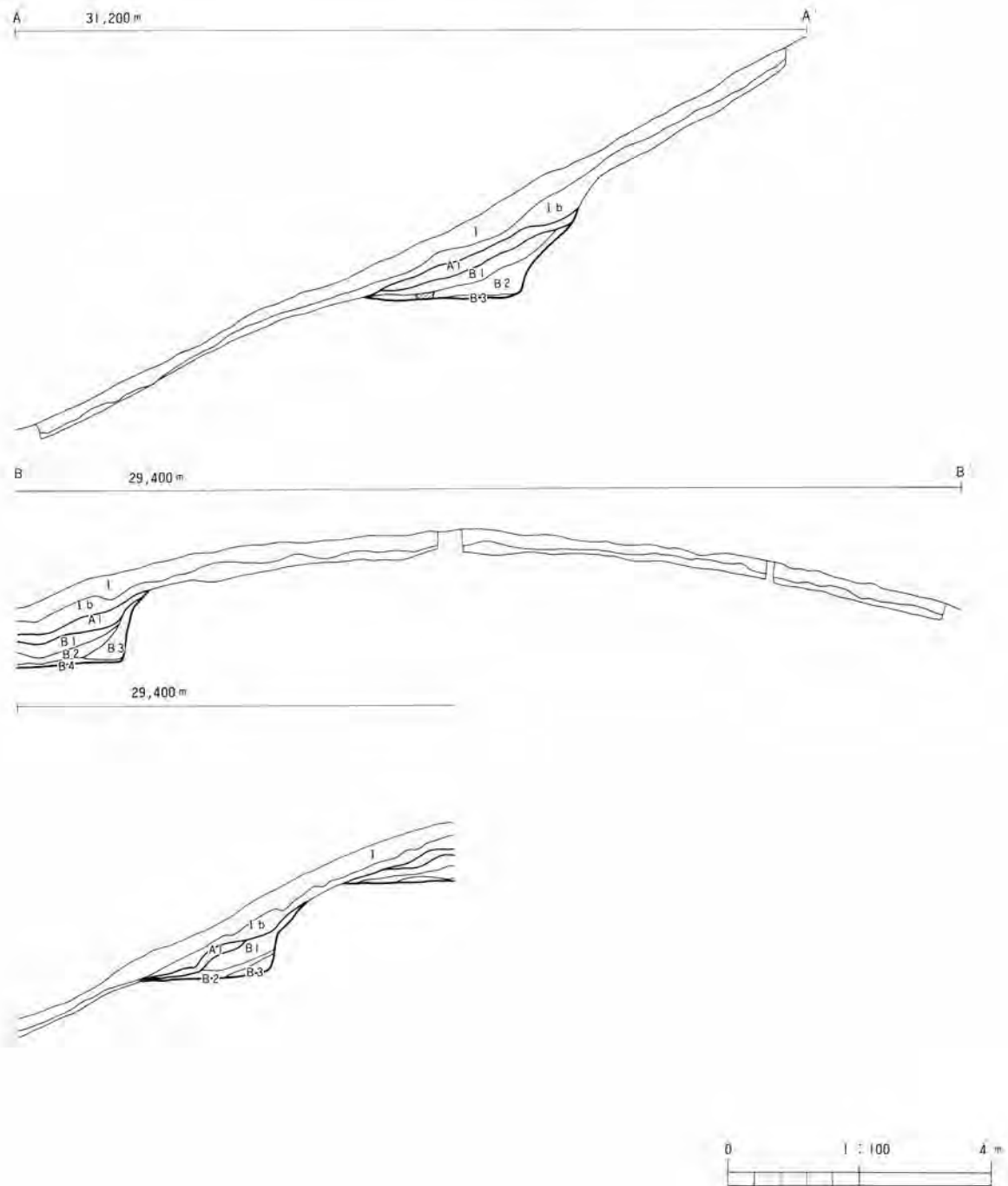
第7図 調査区B区、C区全体図



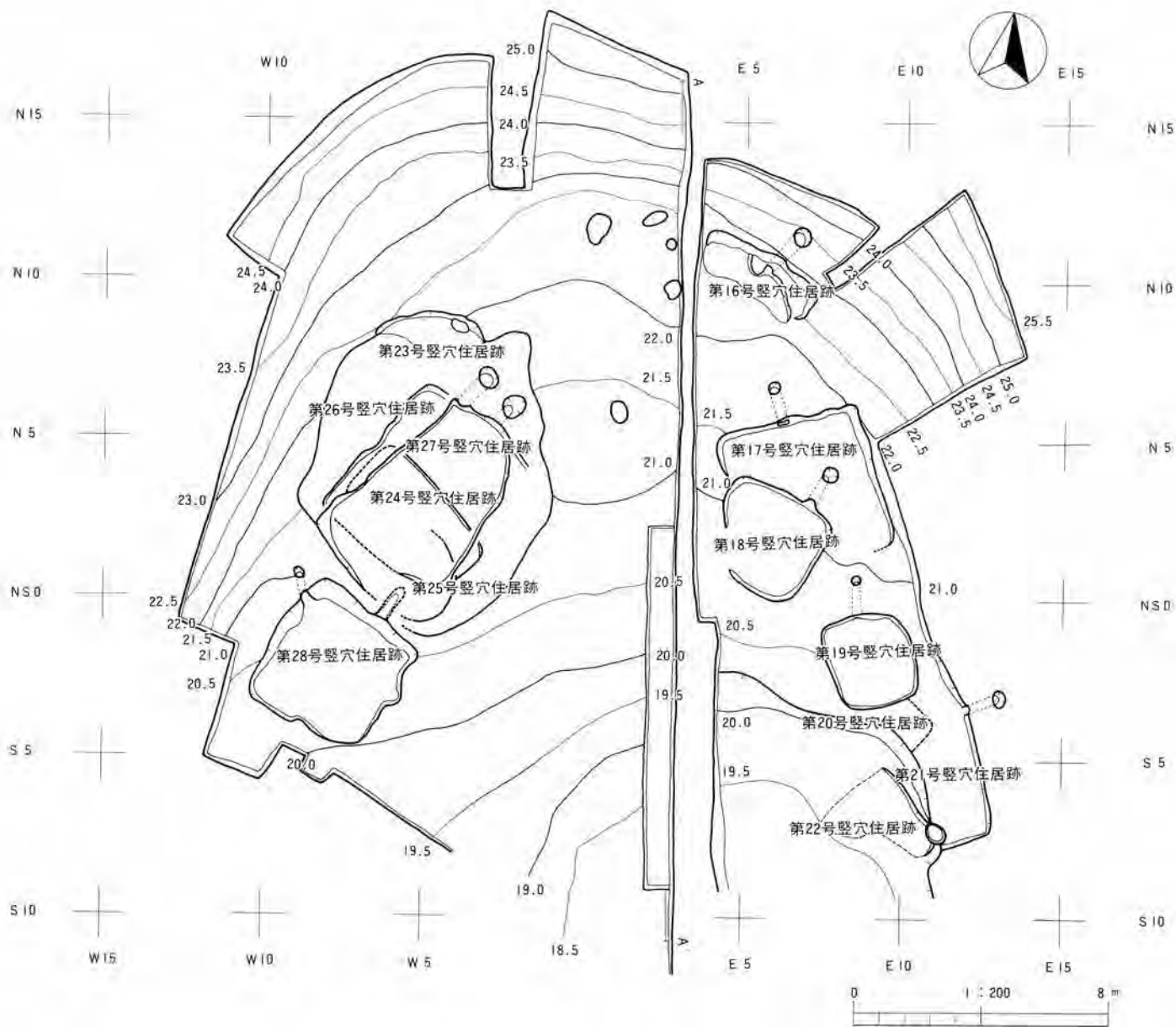




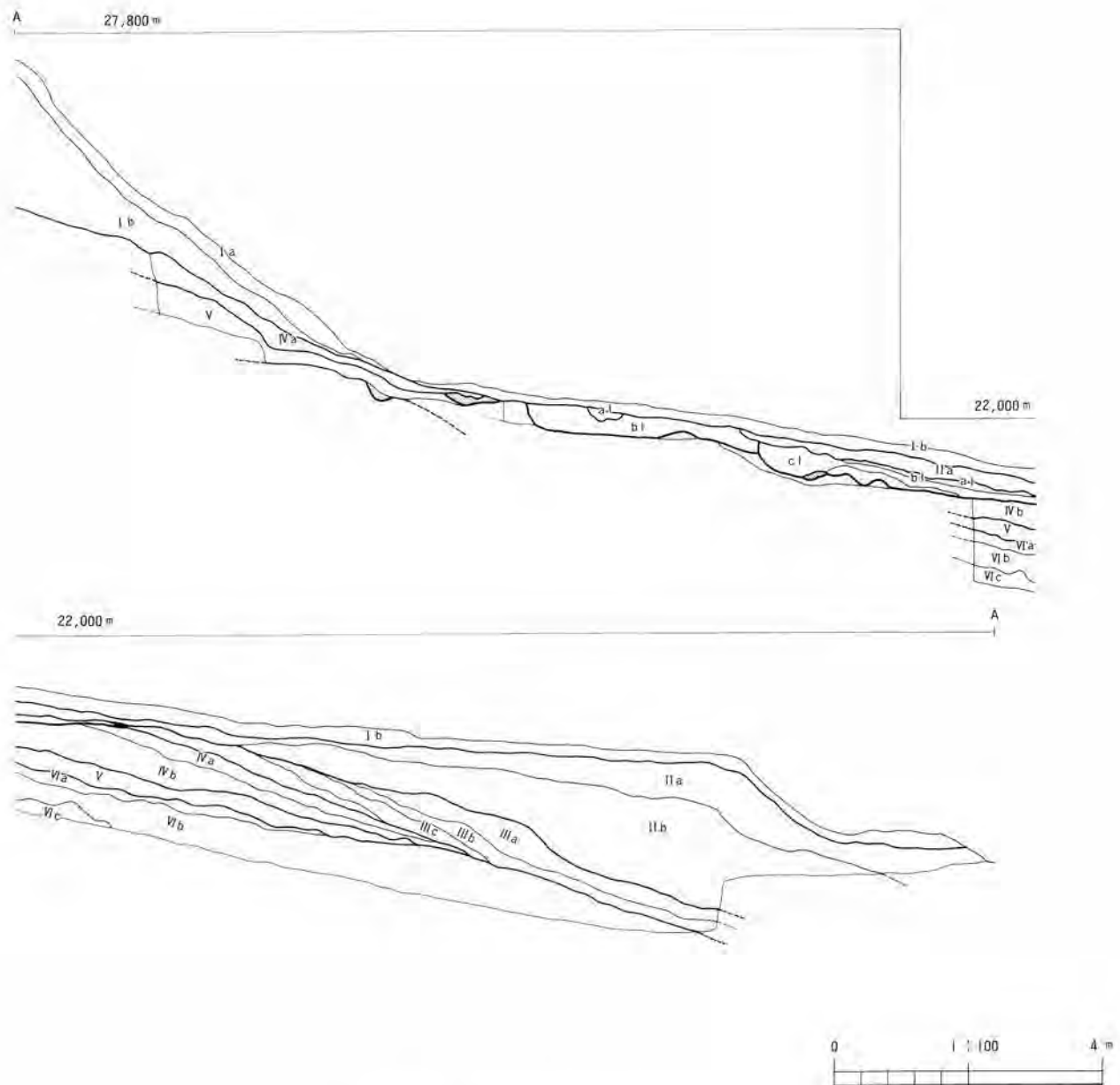
第 8 図 調査区 B 区基本層序図



第9図 調査区C区基本層序図



第10図 調査区D区全体図



第11図 調査区D区基本層序図

## 2 各調査区の状況 (第5図～第11図)

既述の通り、今回の調査ではA～D区という調査区を設定して行なった。以下、各区の基本土層や遺構・遺物の出土状況などについて記す。

### ① A調査区

尾根

最も東側に位置するほぼ南北にのびる尾根である。最北端で標高約45mで最南端で約25mで標高約35mと30m付近で段状を呈するが、大むねゆるやかな傾斜である。遺構は、等高線がや

や広くなる段状付近を中心に検出しており、竪穴住居跡が11棟、土壇跡4基、縄文時代の土壇跡5基を検出している。

基本層序は、3層に大別される。

基本層序

I層 表土層。黒褐色から暗褐色のやわらかくしまりのないもので、腐葉土層のI a層と地山に漸移する黄橙色砂質土塊を多量に含むI b層に細分される。

II層 尾根の頂部では確認できず両斜面に堆積する。明黄褐色の砂質土を基本とするものである。

III層 地山層。黄橙色の真砂土（花崗岩風化土）層である。

遺構は、I層以下のIII層で検出している。遺物は、遺構を中心に出土しており表土層などには現代の磁器片などが含まれる程度で少ない。

なお、A区調査区の北側には、ほとんど平坦面に近い広い緩斜面が広がっており多数の遺構・遺物の存在が想定される。

## ② B・C区の基本層序（第8～9図）

B・C区は、南東にのびる2つの尾根の西側の尾根である。B区は、標高37m～46mの尾根稜線部の先端であり、C区は、尾根の先端中腹に築かれた削平地と西側の急斜面で、標高は約23m～30mである。

尾根中腹の削平地

急斜面

基本層序

B・C区で観察された土層は、3層に大別できる。

I層は表土であるが、2層に細分される。

I a層 表土層。黒褐色土を基本土とする軟らかい腐食土である。細礫?を多く含む。B・C区全体を覆い、尾根稜線部では薄く、斜面で厚く堆積する。

I b層 やはり黒褐色を基本土とするが、暗褐色土を多く含むやや明るく、しまりのない砂壤土である。細礫を多量に含む。西側斜面にとくに厚く堆積する。

II層 明黄褐色土を基本土とする軟らかく、しまりのない砂壤土である。にぶい黄褐色土が混じり、細礫?を多く含む。主にB区で観察された土層である。

III層 地山層。黄橙色を呈する花崗岩の風化した層である。C区の遺構は、大半がIII層上面で検出されている。

## ③ D区の基本層序（第11図）

D区は、A区とB・C区の2つの尾根に挟まれた洞地である。現状は盛土で築かれた耕作地であったが、遺構検出面は、南の低湿地に向かって緩やかに下る斜面をなしていた。大半の遺構は、両側の地山を掘り込んで形成されていた。

洞地

土層は、大別して10層観察された。VII層～X層については第65図を参照されたい。

基本層序

I層は2層に細分される。

I a層 表土層。にぶい黄褐色を呈する軟らかく、しまりのない層である。にぶい赤褐色土が混じる。

I b層 黒褐色土を基本土とする締まりのない層である。灰赤土がわずかに混じる。D区北の急斜面より上に厚く堆積する。

- II層は、盛土層で、2層に細分される。
- II a層 暗褐色土を基本土とするやや固めの層である。黒褐色土が混じる。
- II b層 暗褐色土を基本土とする締まりのない層である。褐色土が混じる。
- III層は、南緩斜面に堆積する層である。4層に細分される。
- III a層 暗褐色土を基本土とする締まりのない層である。微量の炭化物を含み、多量の細礫が混じる。
- III b層 黒褐色土を基本土とするやや固めの層である。少量の炭化物を含み、多量の細礫が混じる。
- III c層 暗褐色土を基本土とする軟めの層である。微量の炭化物を含む。
- III d層 黒褐色土を基本土とする締まりのない層である。少量の炭化物を含む。
- IV層は、主にD区の西側に堆積する層である。竪穴住居跡、焼土遺構などの検出面である。
- IV a層 黒褐色土を基本土とするやや固めの層である。多量の炭化物や少量の焼土塊を含む。
- IV b層 黒褐色土を基本土とする締まりのない層である。少量の炭化物、土器片などを含む。
- V層 黒色土を基本土とする固く締まりのあるシルト質の層である。粘性があり、少量の炭化物、土器などを含む。D区中央の谷に堆積する。
- VI層は、2層に分かれ、D区中央に堆積する。
- VI a層 黒色土を基本土とするやや固めの締まりのない層である。少量の炭化物を含む。
- VI b層 黒色土を基本土とするやや固めの締まりのある層である。粘性があり、微量の焼土粒を含む。かなり厚く堆積する。
- VI c層 軟らかい黒褐色土を基本土とする締まりのない層である。
- VII層は、D区西側の斜面に厚く堆積し、2層に分かれる（→第11図）。いずれも固さ、軟らかさともに中程度である。
- VII a層 暗褐色土を基本とし、細礫を多く含む。
- VII b層 褐色土を基本土とし、暗褐色土が混じり細礫を含む。
- VIII層は、D区北西の隅に堆積する。
- VIII層 褐色土を基本土とする中程度の固さの層である。明黄褐色土、明赤褐色土の粘性を多量に含む。
- IX層は、VIII層と重なるようにD区北西隅に堆積する。
- IX層 黒褐色土を基本土とするやや締まりのない層で、微量の炭を含む。
- X層 西側の斜面から中央部にかけて堆積する。黒褐色土の混じる固い暗褐色土層である。
- I層～VI層は主に中央部で、VII層～X層は西側斜面部でそれぞれ観察された層であるが、層の対応関係については確認できなかった。

### 3 検出した遺構・遺物

#### (1) 縄文・弥生時代の遺構・遺物

今回の調査で明らかに縄文時代・弥生時代と判明した遺構は少なく縄文時代の土坑跡6基と弥生時代の竪穴1基である。

##### ① 縄文時代の遺構・遺物

##### 第1号土坑跡（第12図）

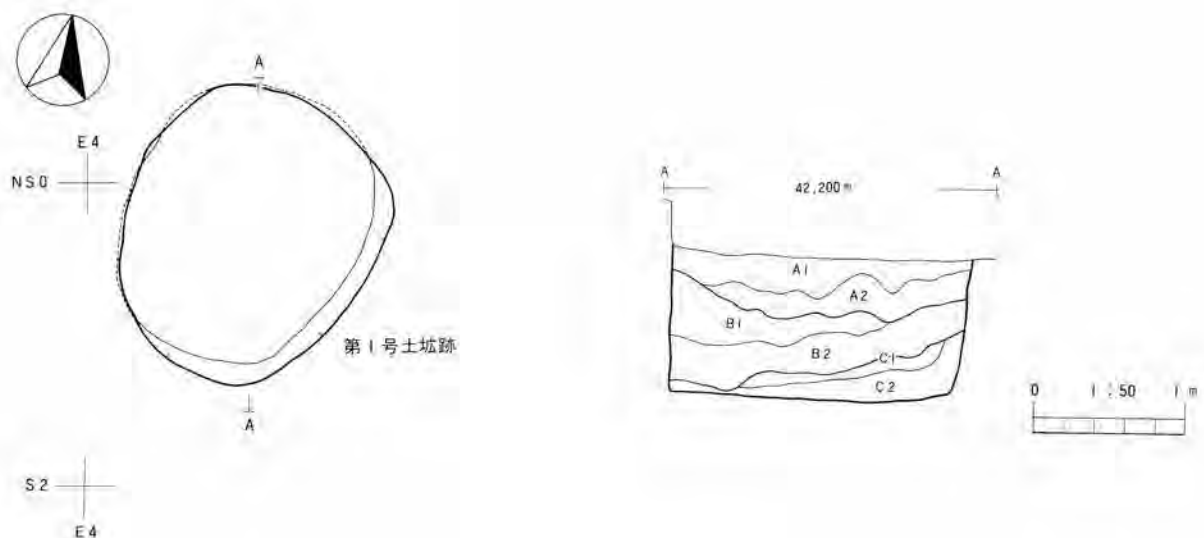
調査区A区の最北端部の調査区内ぎりぎりの所に位置する。更に北側の調査区外にも同様な土坑跡がまだ存在する可能性がある。

平面形は、楕円形状を呈する。規模は、1.9×1.65mをはかる。壁は、垂直からフラスコ状を呈し検出面からの深さは、0.95mをはかる。

埋土はA～C層に大別される。A層は褐色の砂質土を基本とするものでA<sub>1</sub>層よりA<sub>2</sub>層の方がやや明るい色調である。いずれも固さ、しまりは中程度である。B層は黒褐色土を基本とするもので2層に細分される。ともに固さ、しまりは中程度で少量の炭化物粒子が含まれている。B<sub>1</sub>層の方が真砂土塊の混入割合が多くなる。C層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本とするもので2層に細分される。ともに固さ、しまりを欠く。C<sub>1</sub>層には黒褐色土が塊粒状に混入しており、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>層ともに炭化物粒子の混入が認められる。

底面は、地山面の平坦面である。

遺物は、縄文土器の小片が数片出土している。



第12図 第1号土坑跡

#### 第2号土坑跡（第13図）

調査区A区の最南部に検出した。第15号竪穴住居跡と重複するが、これに切られる。

平面形は、円形を呈する。規模は、径1.2mをはかる。壁は、垂直からフラスコ状に立ち上がり検出面からの深さは0.75mをはかる。

埋土は、A層、B層に大別される。A層は黄褐色から明黄褐色の砂質土を基本とするもので混入土の割合や色調の違いなどにより5層に細分される。A<sub>5</sub>層中からは土器片が出土している。B層は、底面全域を覆うものでかなり明るい黄褐色の砂質土を基本とする。固さ、しまりはなく、少量の土器片が出土している。

底面は、平坦面で第15号竪穴住居跡床面より約0.15m深くなる。

遺物は、A<sub>5</sub>層、B層より出土しているが、いずれも縄文主体の施文である。第14図1～6であるが、3には沈線が施されている。6は底部片で網代痕を底面に残している。

#### 第3号土坑跡（第13図）

第2号土坑跡の西側へ位置する。

平面形は、不整の楕円形を呈し、規模は、上場で直径1.25m、下場で直径1.5mをはかる。検出面からの深さは0.55mをはかる。

埋土は、A層からC層に大別される。A層は、暗褐色土を基本とするもので固く、比較的しまっている。B層は、褐色の砂質土を基本とするもので2層に細分される。B<sub>2</sub>層の方がやや暗い色調となる。また、B<sub>1</sub>層には多量の黒褐色土の混入が認められる。いずれも固さ、しまりは中程度である。C層は、にぶい黄褐色砂質土を基本とするもので、固さ、しまりに欠ける。

底面は、ほぼ平坦面であるが西壁側が一段低くなっている。

遺物は出土しなかった。

#### 第4号土坑跡（第13図）

第3号土坑跡の更に西側に位置する。第5号土坑跡と重複しているが、これに切られる。

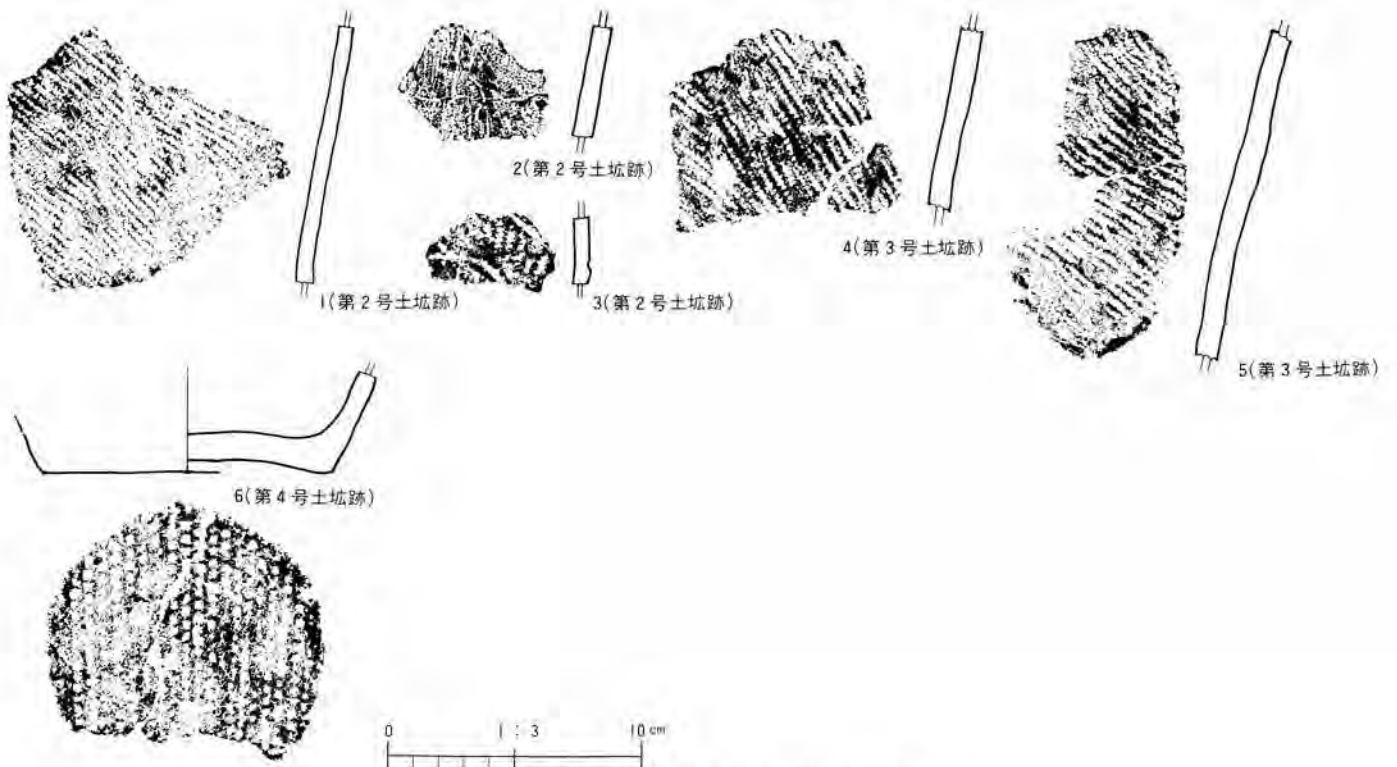
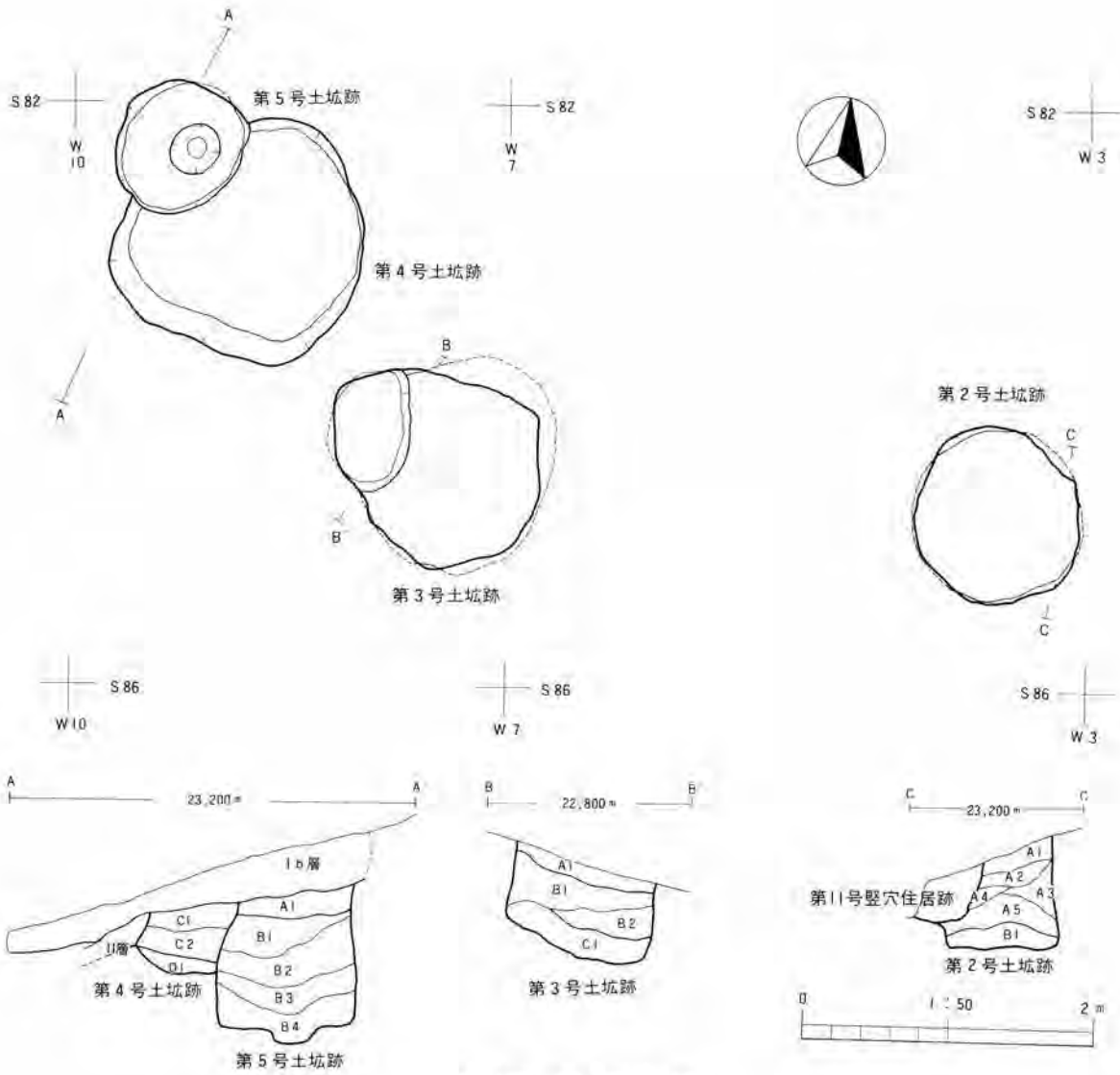
平面形は、ほぼ円形を呈するもので、規模は、径1.6mをはかる。検出面からの深さは0.5mをはかる。壁は底面よりほぼ直に立ち上がる。

埋土は、C層、D層に大別される。C層は、褐色の砂質土を基本とするもので2層に細分される。C<sub>2</sub>層の方がやや明るい褐色土となる。ともに固さは中程度だが、しまりに欠ける。D層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本とするもので、固さ、しまりを欠く。

底面は、平坦面である。

遺物は出土していない。





第14图 第2号~第4号土坑跡出土土器

#### 第5号土坑跡（第13図）

第4号土坑跡と重複するが、これを切る新しい時期のものである。

平面形、規模は、径0.8mをはかる円形を呈する。壁は、底面より垂直に立ち上がる。

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、褐色土を基本とするもので、固さ、しまりは中程度である。炭化物粒子を含む。B層は、暗褐色から褐色の砂質土を基本とするもので色調や混入土の割合により4層に細分される。B<sub>1</sub>層が最も暗い褐色土で、B<sub>1</sub>層には比較的多くの真砂土塊の混入がみられる。固さ、しまりはB<sub>1</sub>～B<sub>3</sub>層が中程度で、B<sub>4</sub>層は固さ、しまりを欠く。

底面は、平坦面だが、やや東偏する位置に径0.3mの浅い小ピットが確認された。

遺物は、縄文土器片が少量出土しているが、いずれも細片である。

#### 第1号竪穴跡（第16図）

第1号竪穴跡は、西尾根の先端部中腹に築かれた削平地に位置する。検出面はⅢ層上面である。標高は約27mの地点である。平面形は楕円形を呈し、南北2.2m×東西1.7m測る。北壁には段差5cmの小段がつき、南の床面では、土坑を挟んで2基の柱穴が掘られている。壁の高さは北壁で0.4m、南壁で0.05m測る。周溝、貼床などは検出されなかった。

埋土は4層に大別される。A<sub>1</sub>層は、表土直下の締まりのない黒褐色土である。B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>層は、締まりのない黄褐色土である。C<sub>1</sub>層は、やや固めの暗褐色土層である。D<sub>1</sub>層は、やや固めのふい黄褐色土であり、土坑の埋土でもある。D<sub>1</sub>層は一気に埋められており、A～C層との時間差が考えられ、一時期D<sub>1</sub>層上面を生活面とした可能性がある。

柱穴P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>の埋土は同一のものである。東の壁際に位置するP<sub>3</sub>の掘り方は浅く、埋土は竪穴のものと同じである。

遺物はA層から出土している。1は、土層断面にみられるような形で出土した埋設土器。内面の剥離が甚だしく進むなど遺存状態が悪く三分の一程度しか接合できなかった。鉢の胴部。全体に縄文を施す。土器の埋土には多量の炭粒が含まれていた。

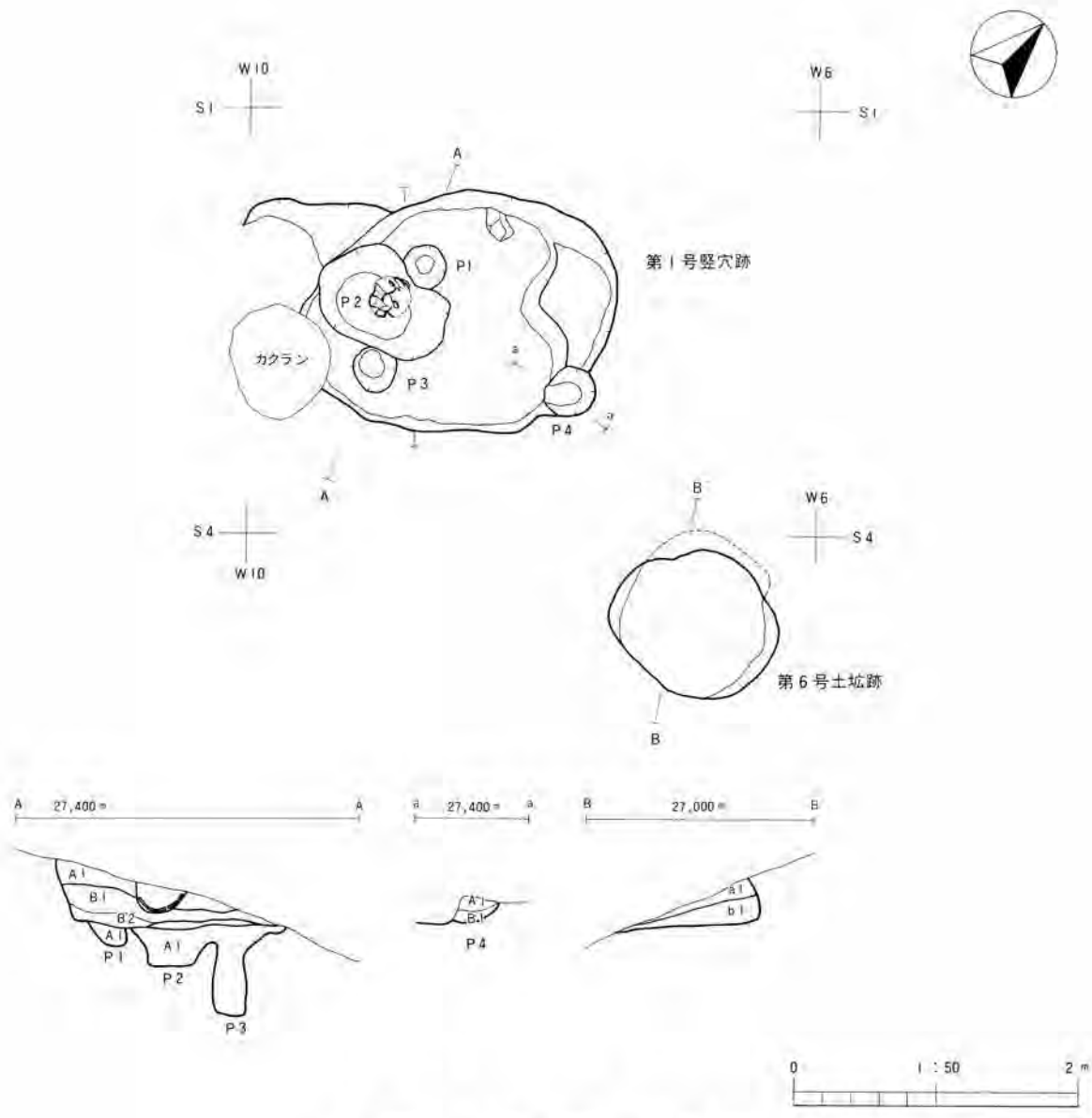
2は、同層から出土した口縁部。口縁部の一部を波状に成形し、頸部でくびれる。外面口縁部に稜線が入り、縄文が口唇部まで施されている。1と同一個体。

#### 第6号土坑（第16図）

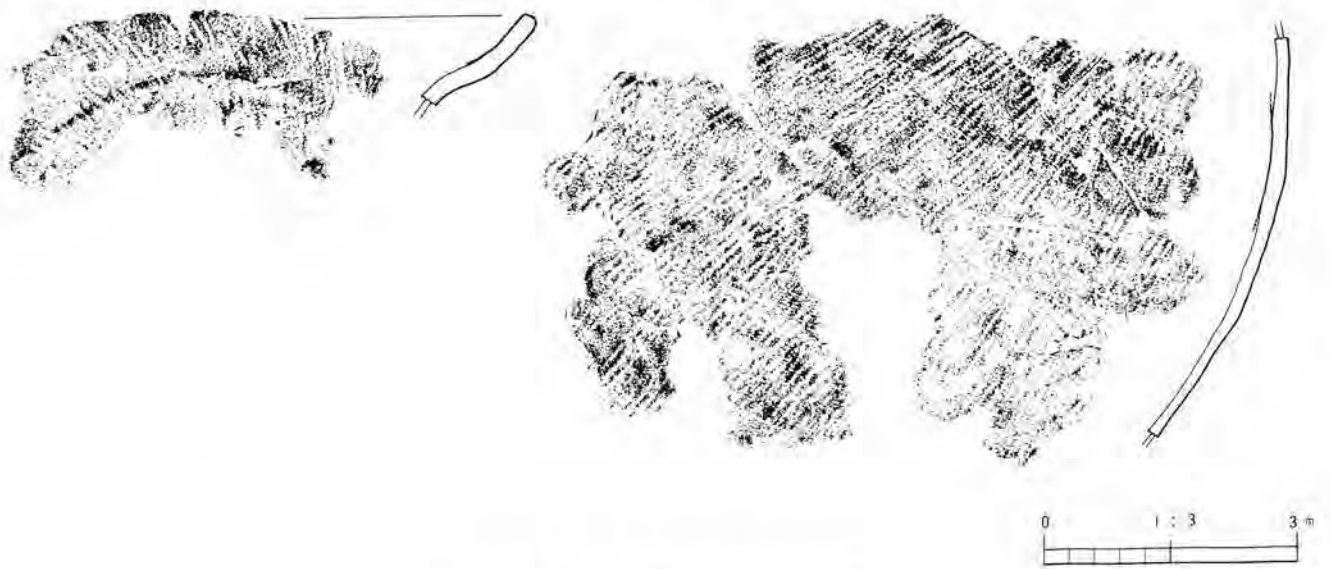
第1号竪穴跡の南に位置する。検出面はⅢ層上面である。平面形は、不整円形を呈し、南北1m東西1.15mを測る。底面は平坦で、壁高は0.3mを測る。

埋土は2層からなる。灰黄褐色や黄褐色を呈するやや固めの土層である。

遺物は縄文土器の小片が1点出土している。



第15図 第1号竖穴跡、第6号土壇跡



第16図 第1号竖穴跡出土土器

## (2) 奈良・平安時代の遺構・遺物

### 第1号竪穴住居跡（第17図）

調査区A区の標高約36m付近の尾根のほぼ中央部に位置する。第2号竪穴住居跡と重複するが、これを切る新しい時期のものである。また、第8号、9号土壇跡とも重複しているが、伴うものなのか新旧関係があるのかは把握できなかったが、遺物からは第8号土壇跡は新しい。南壁側が流出しており不明確であるが、平面形は、隅丸の方形ないしは長方形を呈する。規模は東西が5.1m、南北は3.2m以上をはかる。北壁中央部からやや東寄りにカマドが存在する。

埋土は、A層・B層の2層に大別される。A層は、竪穴の全域を覆うものでA<sub>1</sub>からA<sub>3</sub>層に細別される。A<sub>1</sub>層は、褐色の砂質土を基本とするもので固さ、しまりを欠く。A<sub>2</sub>層は、にぶい黄褐色砂質土を基本とし固さ、しまりは中程度である。A<sub>3</sub>層は、床面のほぼ全域を覆うもので、やや黄褐色に近い褐色土を基本とし、固さ、しまりはA<sub>2</sub>層よりも欠く。B層は、竪穴の北壁沿いの床面に堆積するものでB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>層に細分され、ともに砂質の度合いが強い。B<sub>1</sub>層は明黄褐色を基本土とするもので褐色土が混入する。B<sub>2</sub>層は、にぶい黄褐色土を基本とするものでやはり褐色土塊が混入する。カマドの崩壊土に相当するものと考えられる。

床面は、地山面をそのまま利用した平坦面である。固さ、しまりはさ程ない。また床面の北東壁沿いには幅が0.15m、深さ0.05m程度の周溝状の落ち込みを検出した。

柱穴ないしは柱穴状のピットは、床面上にP<sub>1</sub>からP<sub>3</sub>までを検出したが、床面の西側では1個も確認できなかった。いずれも深さ0.1～0.2m内外と浅く柱痕跡も確認できないものである。

カマドは、北壁側の中央からやや西寄りに存在する。煙道部入口前面の床面上に0.75×0.5mをはかる不整の焼土と角礫の少量の拡がりを確認したのみで、カマドの構築方法等は確認できなかった。焼土の厚さは、0.02mをはかる。焼土除去後は、浅い皿状のピットを検出した。煙道部分は、削り貫きで、煙出口底面が一段高くなっている。

## 遺物

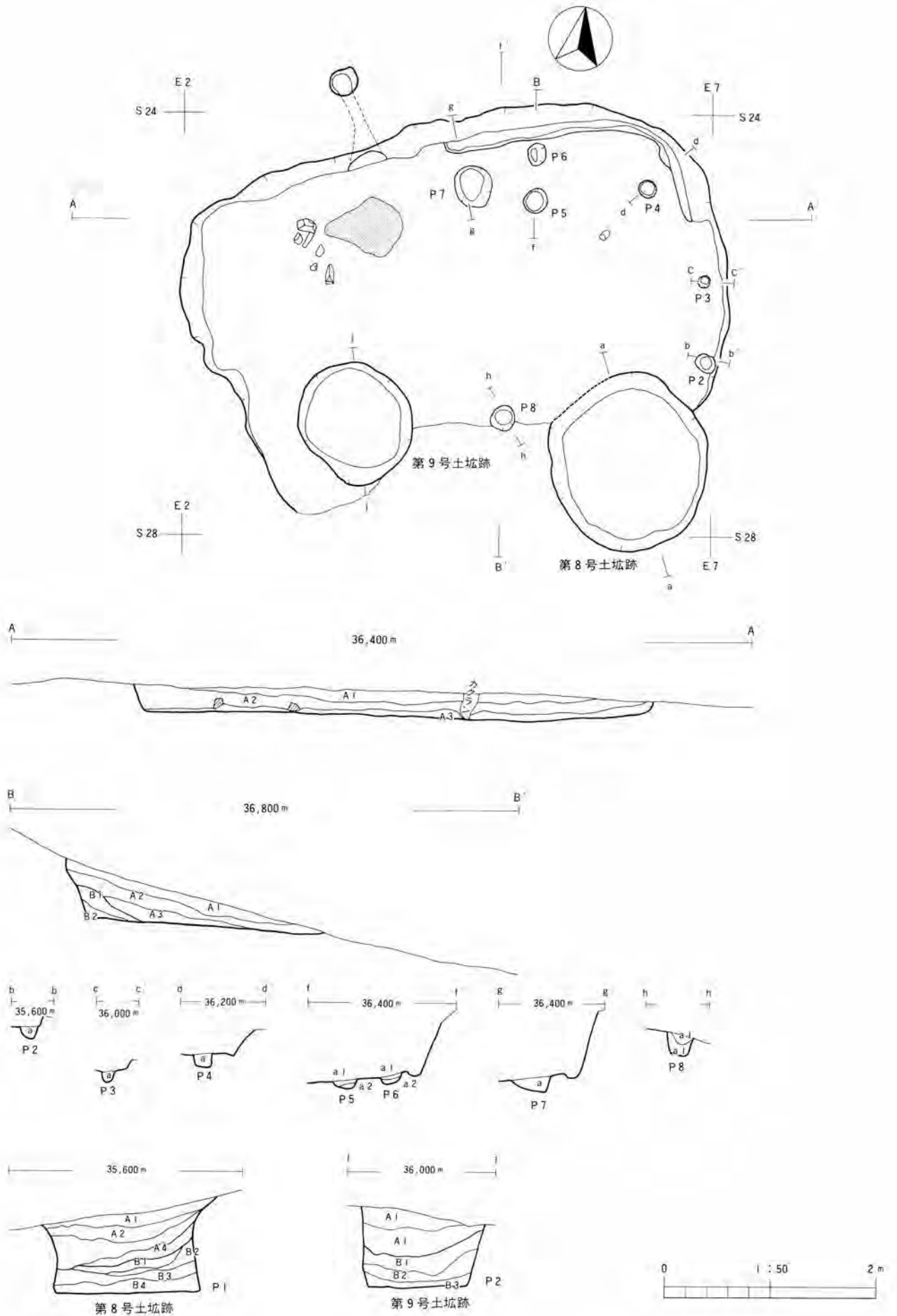
遺物は、カマド跡付近を中心に若干量出土している。第19図1～4が当住居跡から出土したものである。1～3はいずれも土師器甕である。1、2は底部が幾分張り出し気味となるもので長胴形の甕と思われる。1～3の外面には、強いヘラナデ、1の内面には、刷毛目による調整が認められる。4は、砥石もしくは石皿と考えられるもので敲打痕や沈線状の擦痕が認められる。

出土遺物より奈良時代に属する。

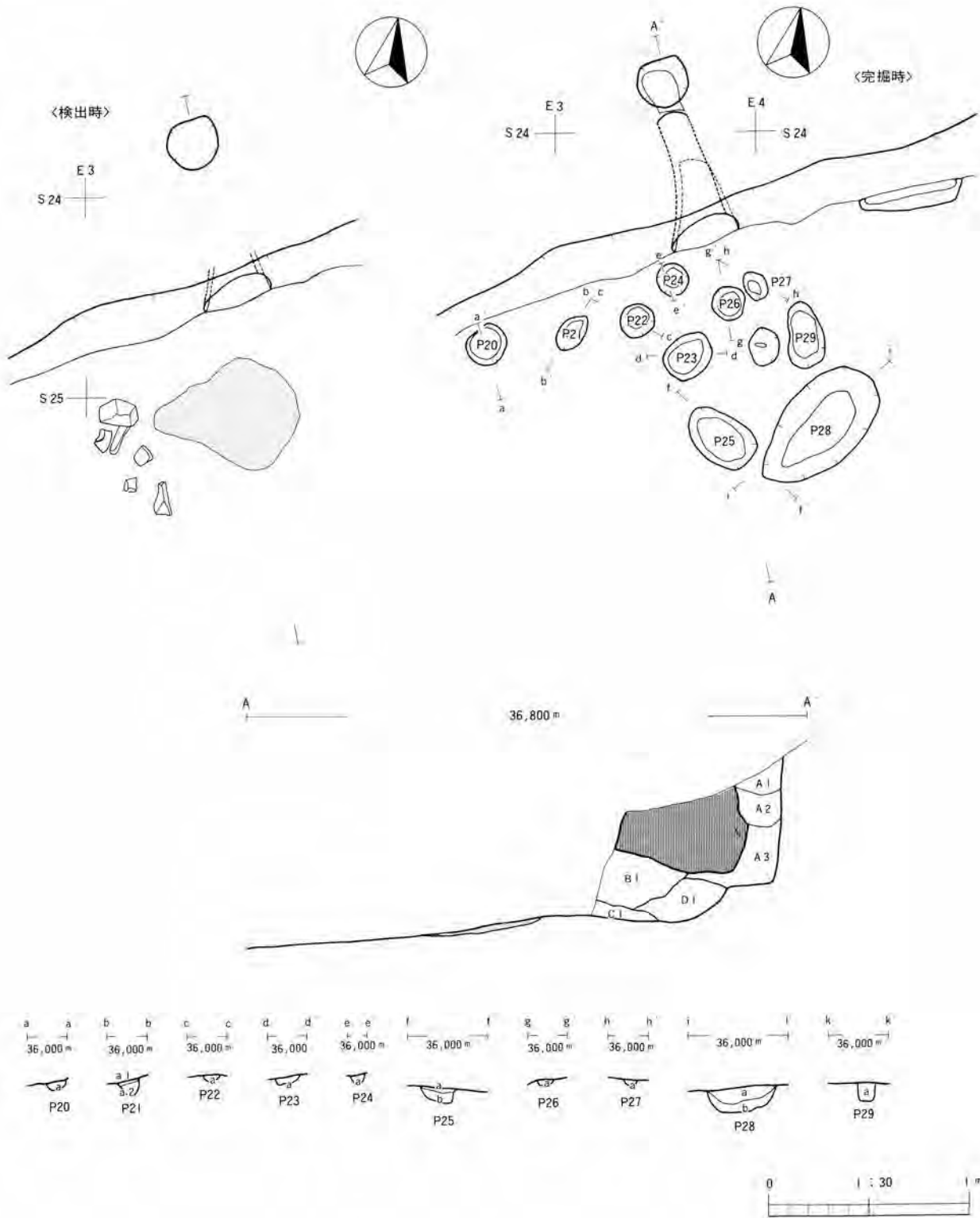
### 第8号土壇跡（第17図）

第1号竪穴住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかったが、出土遺物より当土壇跡の方が新しい。

平面形は、ほぼ円形を呈し規模は1.7×1.5mをはかる。その断面形は、フラスコ状を呈し底面からの深さは0.75mをはかる。



第17图 第1号竖穴住居跡、第8号、第9号土坑跡



第18図 第1号竖穴住居跡カマド跡

埋土は、A層、B層に大別される。A層は更にA<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>層に細別される。いずれも暗褐色から褐色の砂質土を基本とするもので、固さ、しまりを欠く。混入土の割合により細別された。B層は、A層よりも更に砂質の割合が強い土褐色土を基本とするもので、やはり固さ、しまりを全く欠く。やはり混入土との若干の色調の明暗の割合により4層に細分された。

底面は、地山面で全くの平坦面である。

遺物は、若干出土しており第19図5～7である。5は土師器甕の口縁部片で、口縁部が短かく外反し、体部が膨らむ器形となるものと考えられる。口縁部上端は、ナデ調整で内外面とも強いヘラナデにより調整される。6は土師器甕の底部片。体部がやや開き外傾するように立ち上がる様である。7はロクロ成形による小形の甕である。

遺物

出土遺物より平安時代のものかと思われる。

### 第9号土坑跡（第17図）

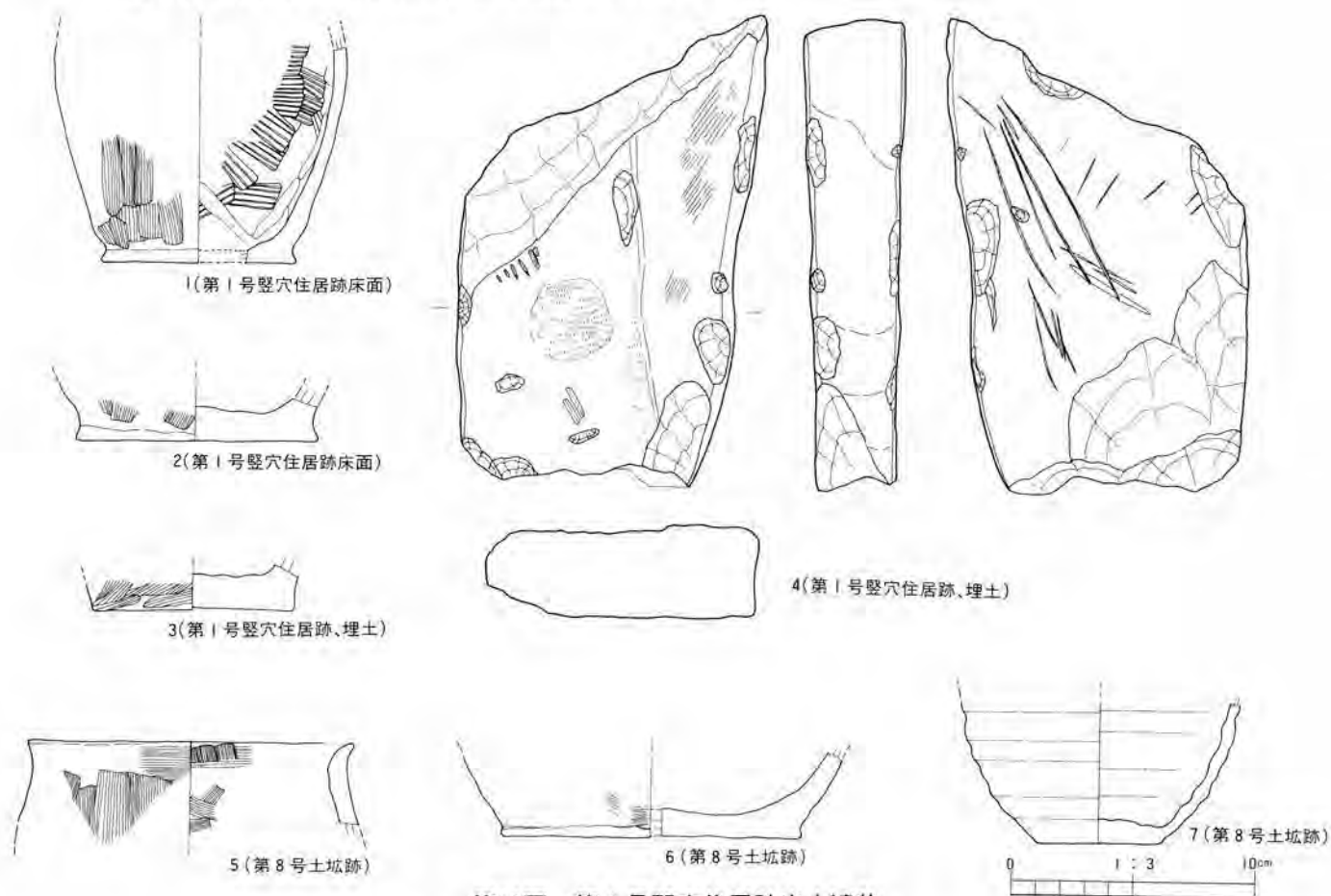
やはり第1号竪穴住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

平面形・規模は、直径が1.1mをはかる円形を呈するものである。壁は底面より垂直に立ち上がり、深さ0.75mをはかる。

埋土は、A層・B層に大別される。A層は、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層に細分され褐色の砂質土を基本とする。A<sub>2</sub>層の方が若干明るくなる。固さ、しまりは両方とも欠く。B層は4層に細分される。明るい褐色からにぶい褐色の砂質土を基本とする。やはり固さ、しまりは欠く。

底面は、平坦面である。

遺物は、細片が若干出土しているが図示可能なものはなかった。



第19図 第1号竪穴住居跡出土遺物

## 第2号竪穴住居跡（第20図）

第1号竪穴住居跡の西側に位置し、これに切られるものである。

平面形、規模は、南側・東側を切られ流出しており不明確である。壁は床面よりほぼ約45度の角度でゆるやかに立ち上がり、北壁側で壁高0.2m程をはかる。

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層に細分される。A<sub>1</sub>層は、褐色の砂質土を基本とするもので固さ、しまりを欠く。A<sub>2</sub>層は、にぶい褐色の砂質土を基本とするもので、やはり固さ、しまりを欠く。B層は、北壁際に堆積するもので、A<sub>1</sub>層よりは明るい褐色の砂質の強い土を基本とする。固さ、しまりは全くない。

床面は、地山面をそのまま利用したもので、南側に向かってゆるやかに傾斜している。

柱穴及び柱穴状のピットは、P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>迄の7個検出したが、P<sub>1</sub>、P<sub>6</sub>以外はいずれも柱痕跡を確認できなかった。深さ的には、P<sub>1</sub>もP<sub>6</sub>とほぼ同じ位の0.35mをはかるが、それ以外は0.1～0.2m前後の浅いものである。

カマドは、北壁に存在するが、具体的に構築方法は不明であるが、煙道部分入口の床面の東側袖部に角礫が立てられており、西側にも同様に礫を据えたとと思われるピットが存在することから、礫を芯材としてカマドを構築していたものと想定される。燃烧部は、煙出入口付近に形成されており、焼土の厚さも0.15mをはかる。煙道部は、住居外へ約0.9m、やはり削り貫きで煙出口底面に向かってゆるやかに下り勾配となっている。煙出口は径0.3mをはかる円形を呈する。

遺物は、土師器の細片が主で極少量の出土で図示できるものはなかった。

## 第10号土坑跡（第20図）

第2号竪穴住居跡の南西部に位置するが、第2号竪穴住居跡に伴うのかなどの新旧関係は不明である。

平面形・規模は10.0×0.85mをはかる楕円形状を呈する。壁は底面よりほぼ直に立ちあがり、深さ0.5mをはかる。

底面は、中央部がやや凹むようであるが、ほぼ平坦面である。

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、2層に細分される。いずれも褐色の砂質の強い土を基本とするが、A<sub>2</sub>層の方が幾分明るい。固さ、しまりはいずれも欠く。A<sub>2</sub>層には多量に黄褐色土の地山を塊状に含む。B層は、暗褐色から褐色土を基本とし、3層に細分される。いずれも固さ、しまりは欠く。

遺物は、出土しなかった。





第11号土坑跡（第20図）

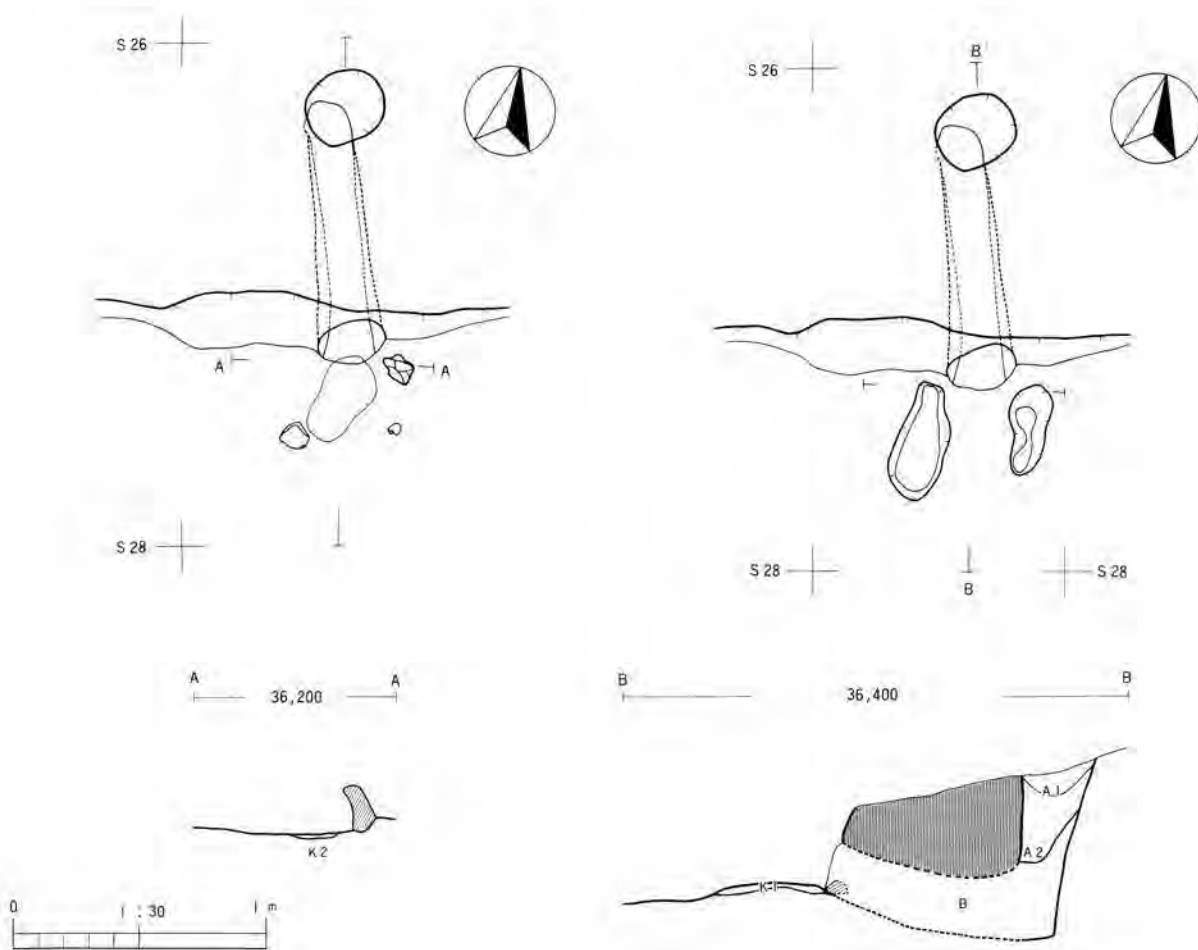
第2号竪穴住居跡の北西側に位置する。

平面形・規模は、0.9m×0.8mをはかるほぼ円形を呈する。壁は底面より垂直に立ち上がり、深さ0.4mをはかる。

埋土は、A層から成りA<sub>1</sub>からA<sub>3</sub>層に細分される。いずれも褐色の砂質土を基本とし、A<sub>2</sub>層がやや暗く、A<sub>3</sub>層が明るくなる。いずれも固さ、しまりは中程度である。A<sub>2</sub>、A<sub>3</sub>層には黄褐色の地山の小塊を少量混入する。

底面は、平坦である。

遺物は、出土しなかった。



第21図 第2号竪穴住居跡カマド跡

### 第3号竖穴住居跡（第22図）

調査区A区の中央部尾根頂部から東側の傾斜部に、位置する。第4号竖穴住居跡と重複するが、土層断面の観察によりこれよりも新しい時期のものであるが、調査時点で同時に掘ってしまった為、北壁側が不明確となってしまった。

平面形は、ほぼ方形を呈するもので規模は、南北で4.3m、東西で4.0m以上をはかる。東側は流出しており不明であった。壁は床面より垂直に立ち上がり、北壁側で壁高1.0mをはかる。

埋土は、AからC層に大別される。A層は、北壁側に堆積するもので5層に細分される。褐色からいぶい黄褐、黄橙色の砂質土を基本とするもので、いずれも真砂土塊粒を混入する。固さ、しまりはいずれも中程度である。B層は、明黄褐色のほぼ真砂土に近い砂質の強い土を基本とするもので、褐色から黄褐色土塊を多量に混入し、その割合で2層に細分された。いずれもややしまりに欠ける。C層は、床面を覆うもので、いぶい黄褐色土を基本とする。4層に細分されたが、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>層は若干粘性を有するもので、炭化物粒子や土器片が含まれている。

床面は、地山面をそのまま利用した平坦面で、固くしまっている。

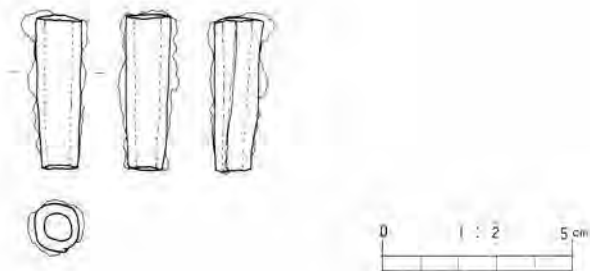
柱穴及び柱穴状のピットは、床面上では確認できなかった。

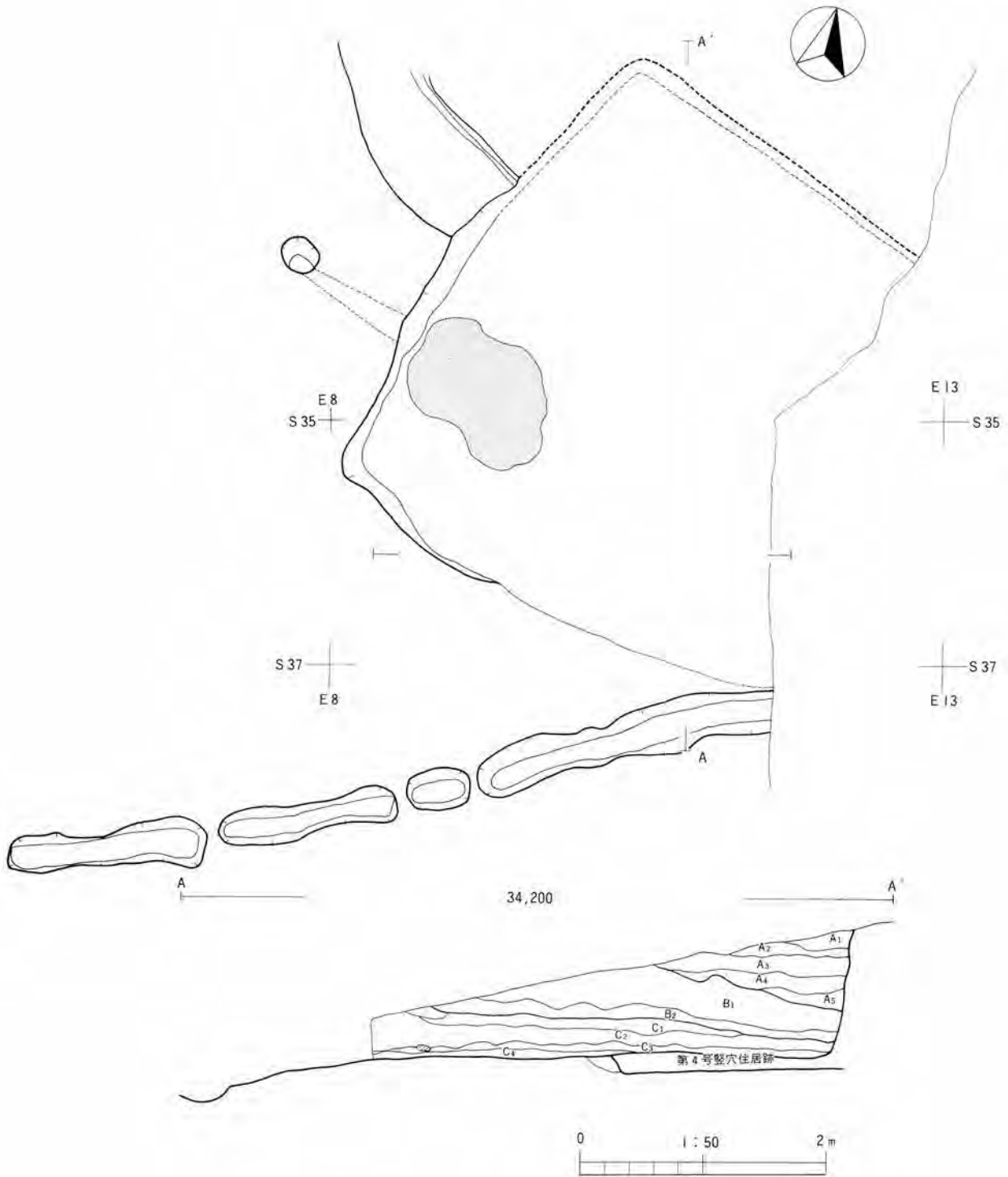
カマドは、西壁の南寄りに位置する。煙道部分入口の床面に1.3×0.85mの不整楕円形の焼土の拡がりを検出した。焼土は、厚い所で0.06mをはかる。焼土除去後は、礫を据えていたと考えられるピットが、煙道入口のカマド両袖にあたる部分に検出しており、本来は、礫を利用して構築していたものと考えられる。煙道底面は、煙出口に向かって緩かに下り勾配の傾斜となっている。煙出口は、径0.3mをはかる円形を呈している。

遺物は、C<sub>3</sub>、C<sub>4</sub>層より若干出土したが、いずれも土師器甕の体部片で図示できるものはなかった。下図は、埋土より出した筒状の形をした鉄製品である。一枚の鉄板状のものを筒形にまるめているもので、中空となっている。

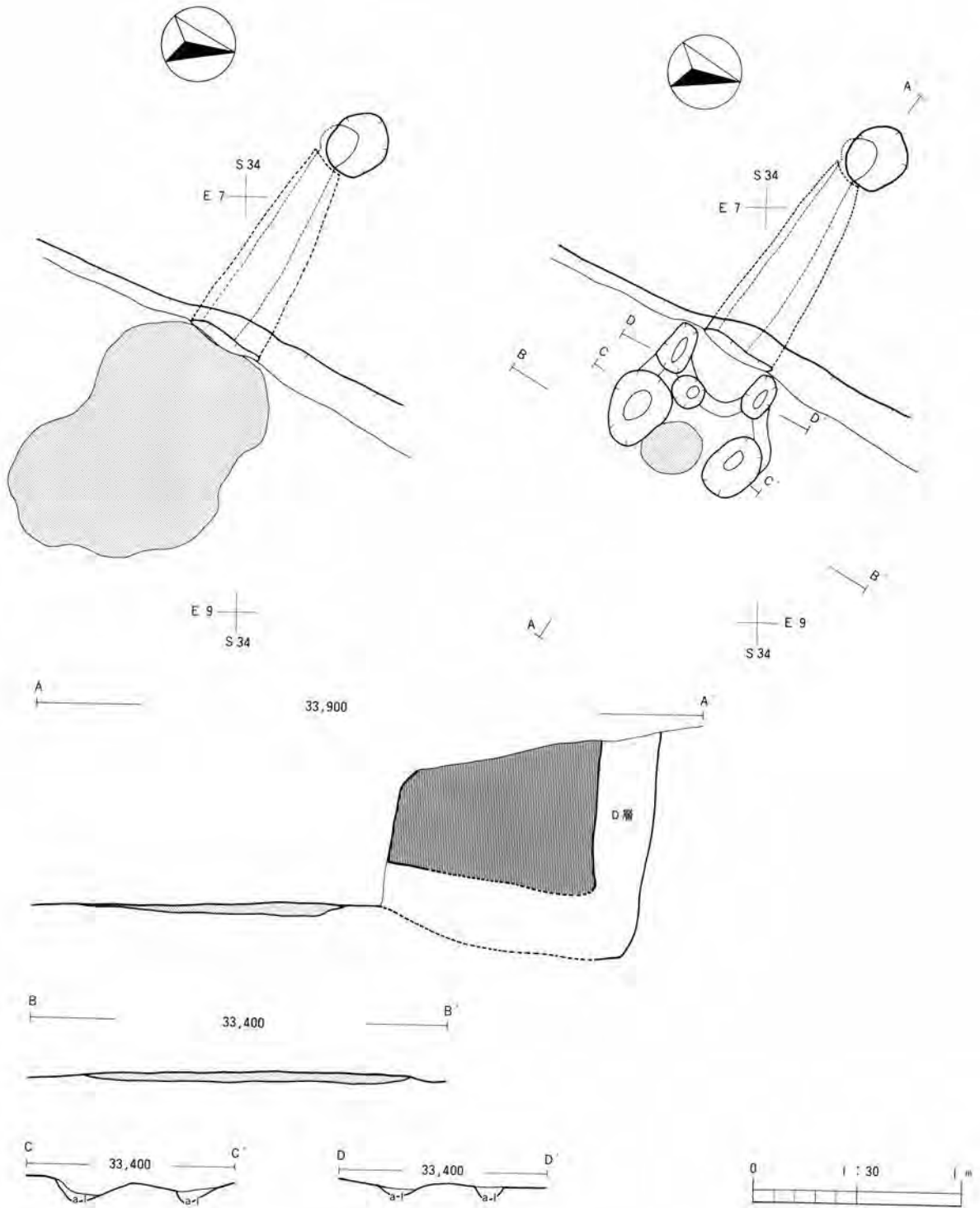
遺物

また、当住居跡の南側には、東西にのびる浅い溝状の遺構（途中で途切れ途切れとなっている）を検出したが、当遺構に関連するものかは不明である。





第22図 第3号竖穴住居跡



第23図 第3号竪穴住居跡カマド跡

#### 第4号竪穴住居跡（第24図）

第3号竪穴住居跡に切られるものであるが、今回の調査においては最大の規模を有するものである。また、当住居跡とほぼ同位置で重なるように第5号住居跡が重複するが、これよりは新しい時期のものである。

平面形、規模は、東側が確認できず不明確であるが、隅丸方形状を呈するものと推定される。長軸で7.4m、短軸で5.5m以上をはかる。壁は、床面より約45度くらいの角度で立ちあがり、壁高は西壁側で1.7mをはかる。

埋土は、一部が雨による流水で崩壊し、不明となってしまった部分もあるが、AからD層に大別される。A層は、A<sub>1</sub>からA<sub>7</sub>層に細分される。いずれも暗褐色から褐色の砂質土を基本とする。A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層以外は固さ、しまりは中程度で、A<sub>3</sub>、A<sub>4</sub>層はやや固さ、しまりを欠く。いずれもやや明るい褐色から黄褐色土を混入するが、A<sub>5</sub>層中には黒褐色土塊がわずかに混入する。また後述するが、A<sub>5</sub>層中からは弥生時代の遺物が出土している。B層は、竪穴中位に堆積するもので、B<sub>1</sub>からB<sub>6</sub>の6層に細分された。褐色から黄褐色の砂質の比較的強い土を基本とするもので、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>層以外は固く、しまりとも中程度である。B<sub>3</sub>、B<sub>4</sub>層は固さ、しまりを欠く。B<sub>5</sub>層中には、炭化物粒子を多量に含む。C層は、竪穴に床面中央部以外を覆うもので、明黄褐色の真砂土質の土を基本とする。主に南北西壁際に堆積するもので6層に細分される。いずれも比較的固さは中程度である。D層は床面中央部を覆うものでにぶい黄褐色の砂質土を基本とする。固さ、しまりはない。

床面は、地山面をそのまま使用した固くしまった平坦面である。

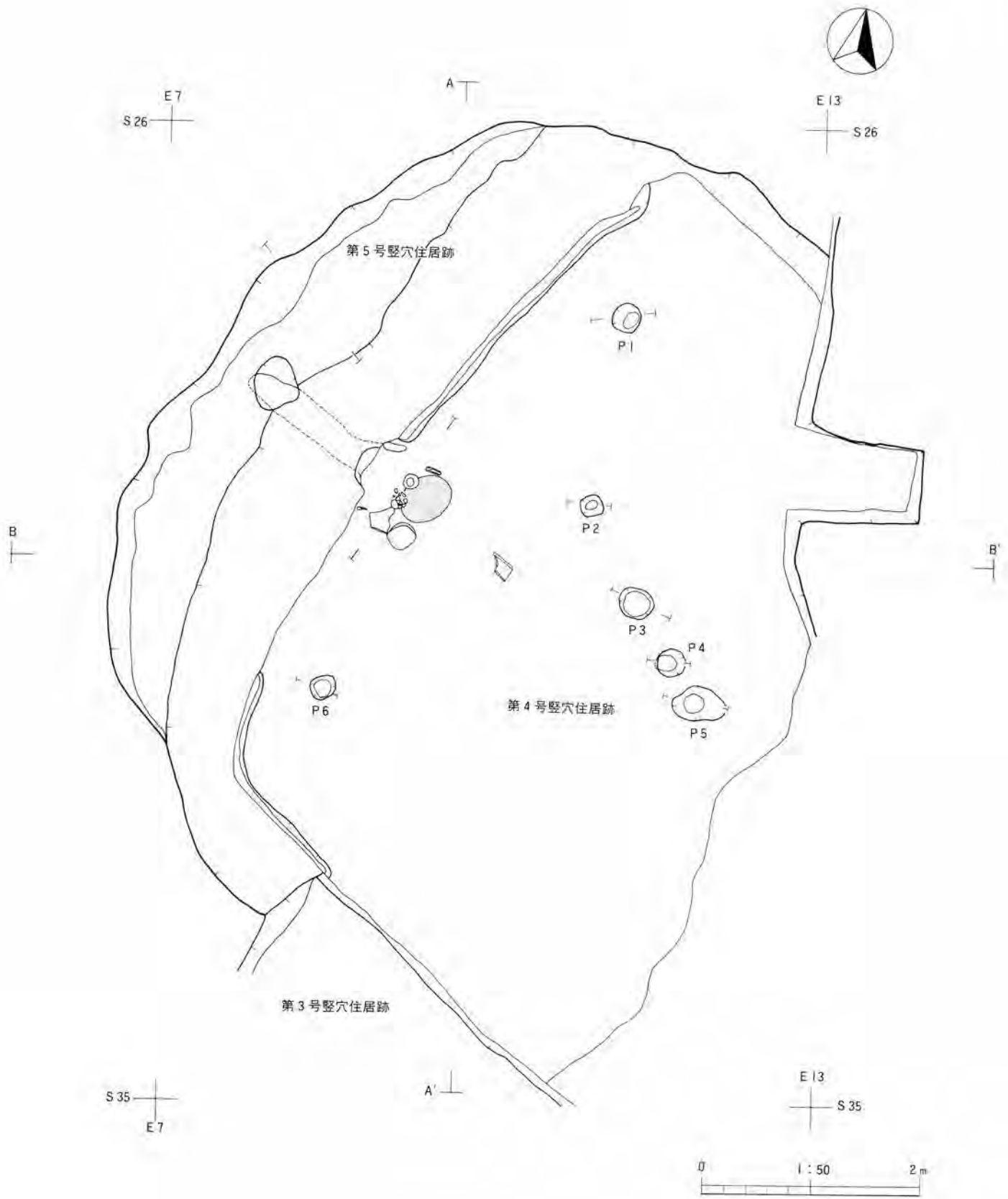
柱穴及び柱穴状のピットは、床面上にP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までを検出したが、P<sub>3</sub>以外は柱痕跡を確認されなかったが、P<sub>1</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>いずれも床面からの深さ0.6m以上をはかり主柱穴を構成するものと考えられる。

西壁から南西壁隅には、幅0.1m程の周溝状の溝跡を検出している。

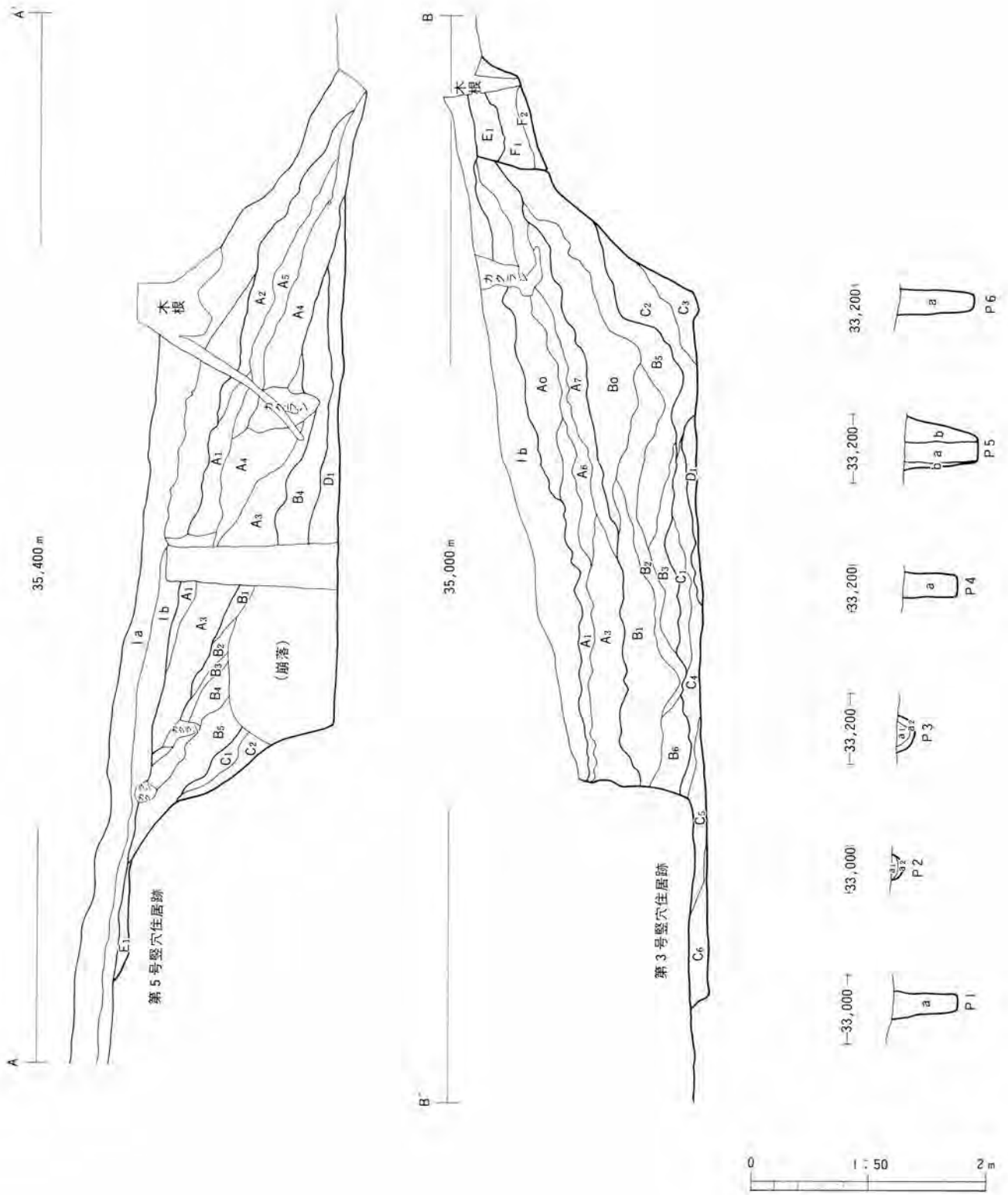
カマドは、西壁中央部に存在する。0.8×0.5mの不整形焼土とともに扁平礫や角礫が存在しており、これらの礫を利用して構築されたカマドと考えられる。また、煙道部分入口が床面より一段高くなっており、煙道底面はそのまま煙口底面まで上り傾斜となっている。煙出口底面から煙出口までは深さ1.05mをはかる。煙道部分は地山を刳り貫いてつくられている。

#### 遺物

遺物は、土師器、須恵器の他に前述したとおりA<sub>5</sub>層中より弥生時代の遺物が出土している。第27図1～24は、土師器の坏・甕類である。カマド崩壊土・埋土とした竪穴以外は、北東区のB層から出土したものである。1～5は坏である。1、2、4は内面黒色処理を施したもので、いずれも体部に段もしくは沈線を有するもの。3は、口縁部がやや内わん気味となるもので内面に一部刷毛目調整が観察される。5は、坏といえるものか不明確だが、体部から口縁にかけてほぼ直線的なもので、体部中位に一条の沈線が認められる。6は、小形の甕の口縁部でクロロ成形されたものである。8は、口縁部が大きく外反する小形の甕で、外面にはヘラケズリ、内面には刷毛目調整がされる。9～24は、甕である。9～16は、口縁部から体部にかけて残存するもので、13の頸部には沈線がめぐる。9、13、14、16は、体部外面を刷毛目で調整している。17～24は、体部下半から底部にかけての破片で、17～19、22、24は底部が張り出す。21の底面



第24図 第4号、第5号竖穴住居跡



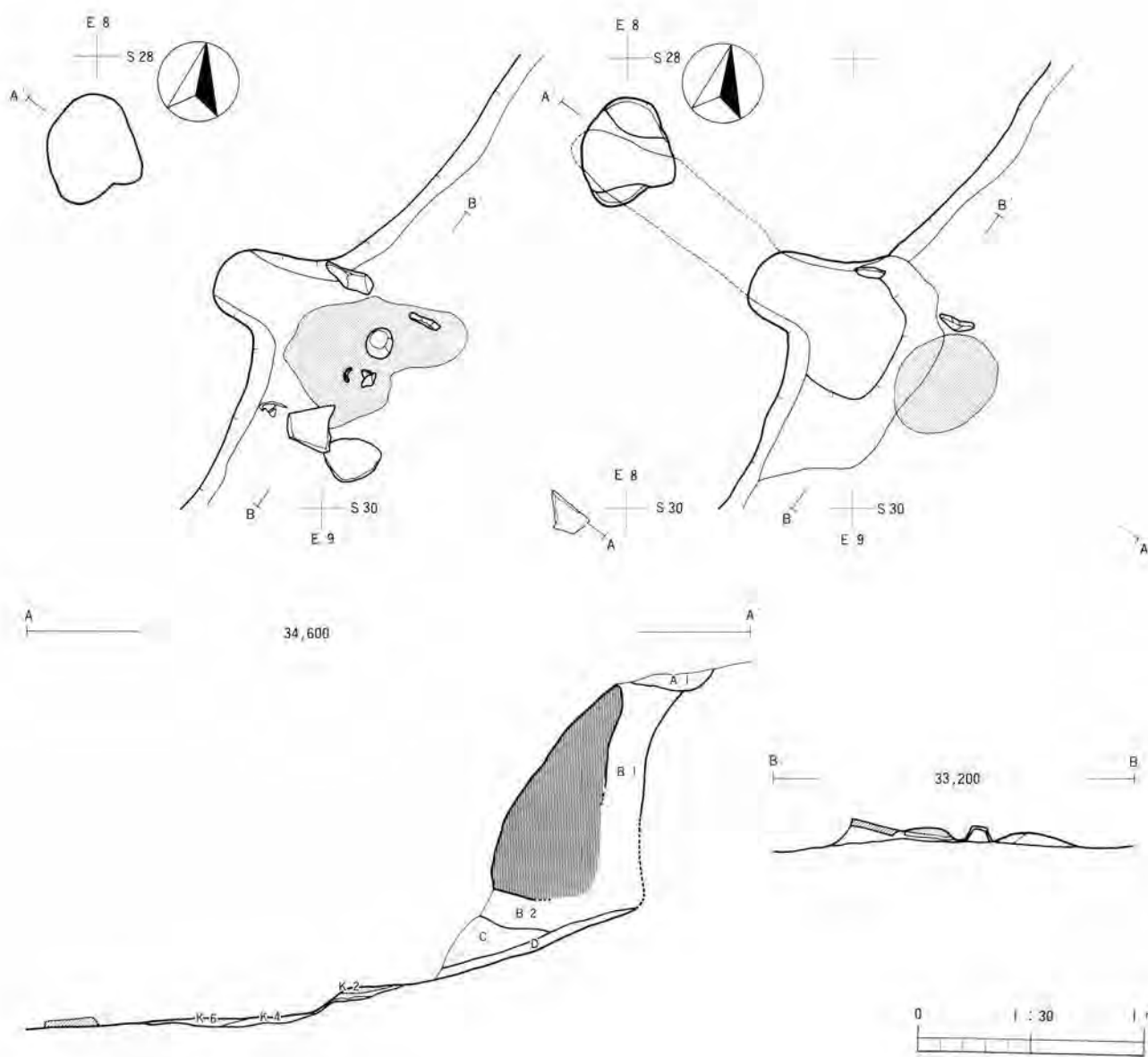
第25图 第4号、第5号竖穴住居跡断面图



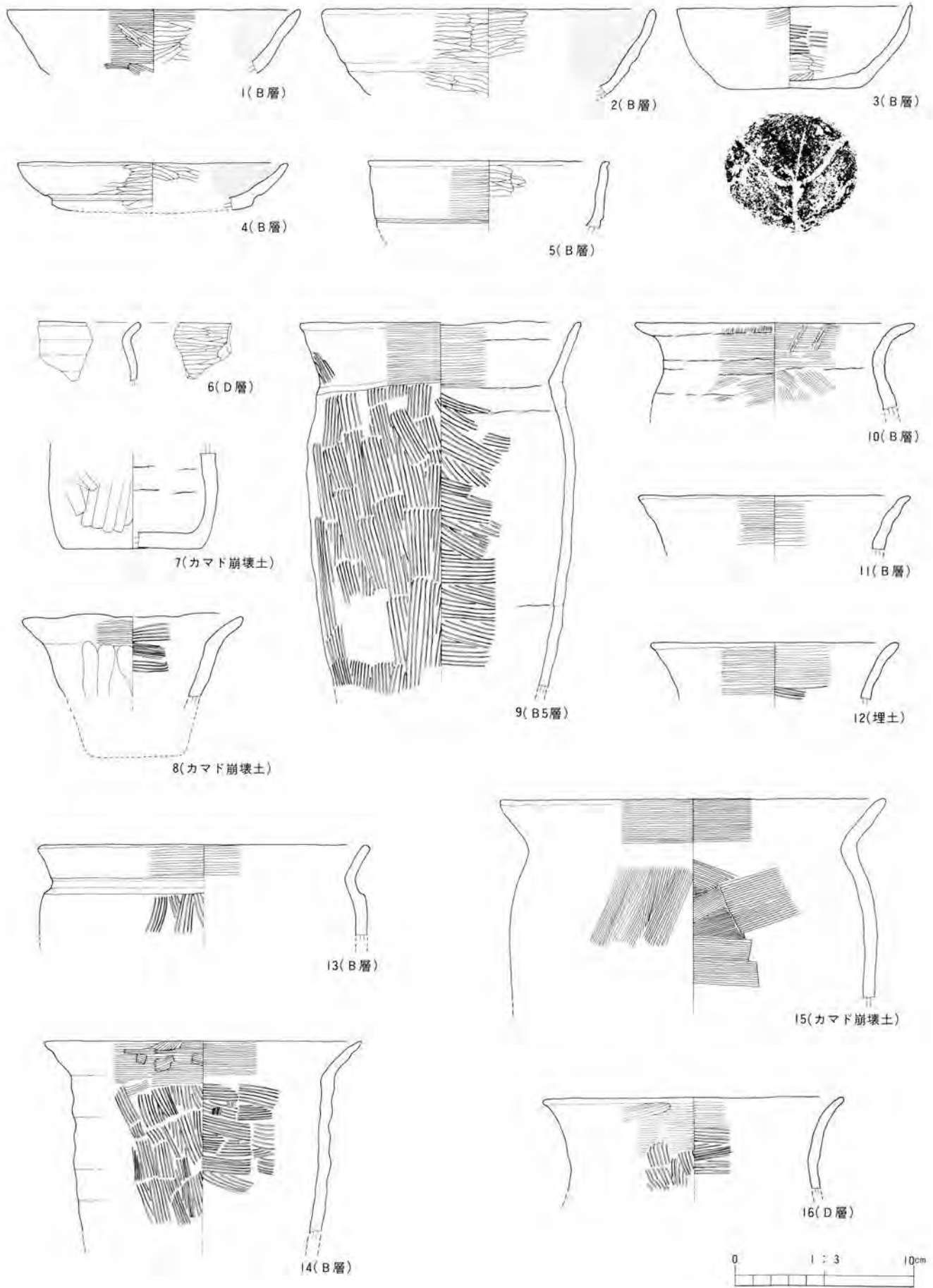
は、ヘラナデ調整される。

25～30は、A層中より出土した弥生時代の土器片で、縞縄文が施文されるものである。31は、これらに伴って出土した弥生時代の土製紡垂車で、中央に孔を穿ち内外面、及び側縁部には沈線とハ字状の刺突で文様を施文している。

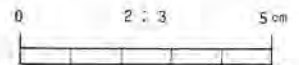
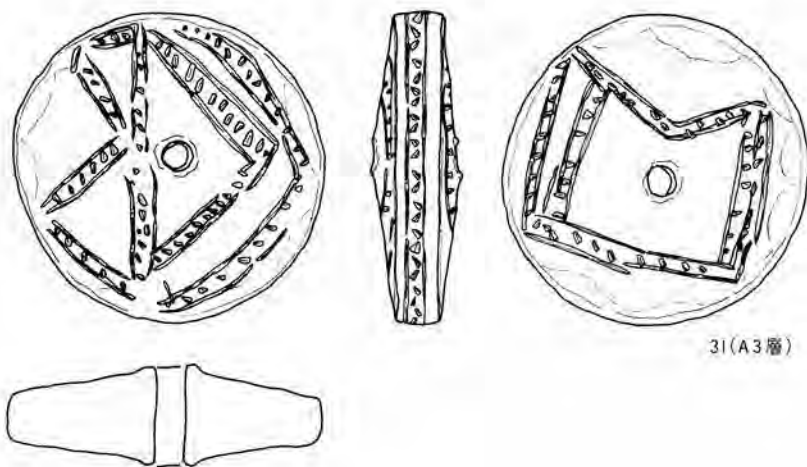
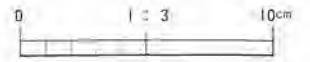
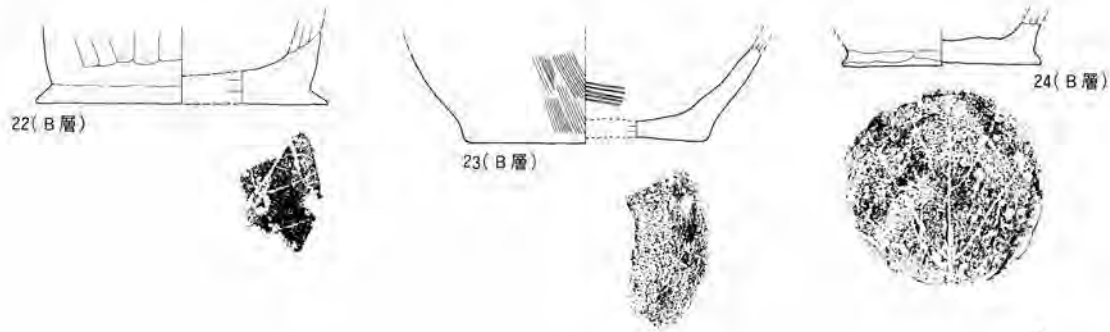
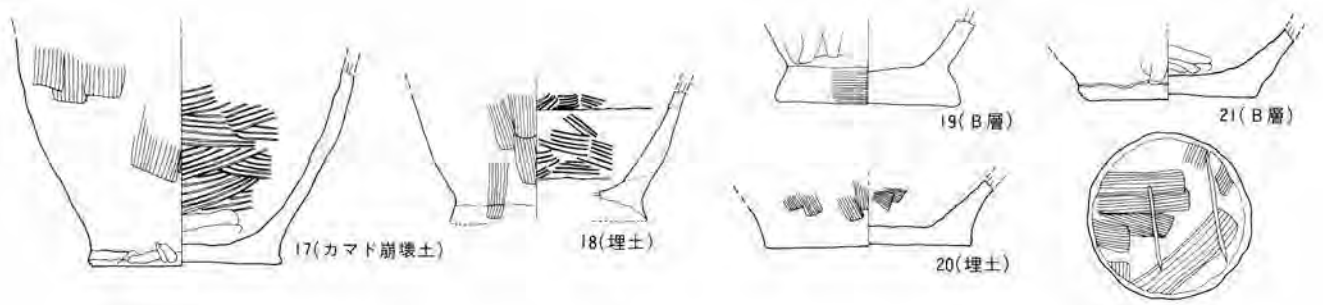
弥生時代の遺物



第26図 第4号竪穴住居跡カマド跡



第27図 第4号竪穴住居跡出土遺物 ①



第28図 第4号竪穴住居跡出土遺物 ②

#### 第5号竪穴住居跡（第24図）

第6号竪穴住居跡とはほぼ同位置で重複しており、わずかに西壁部分を残すのみである。

平面形は、その大半が4号住に切られており不明だが、楕円形状のプランを程するものと推定される。規模は、残存部で長軸6.0m以上、短軸で1.1m以上をはかる。壁は、約45度位の角度で緩かに立ち上がる。検出面からの深さは、0.1mをはかる。

床面は、地山面をそのまま利用した平坦面だが、さほど固くしまっていない。

埋土は、E層、F層に大別される。E層は、暗褐色の砂質土を基本とするもので固さ、しまりを欠く。F層は、北壁側で堆積するものでF<sub>1</sub>、F<sub>2</sub>に細別される。いずれも褐色土を基本とするが、やはり固さ、しまりを欠く。F<sub>1</sub>層には、黒褐色土塊の混入が認められる。

カマド、柱穴は確認できなかった。

遺物は、全く出土しなかったが、最後のまとめの章でも記述するが、弥生時代の竪穴住居跡の可能性が考えられる。

#### 第6号竪穴住居跡（第29図）

第7号竪穴住居跡と重複するが、調査開始当初はひとつの竪穴を想定して完掘したが、土層断面観察の結果、新旧2時期の重複と判明した。第6号竪穴住居跡の方が新しい。

平面形は、若干不整ながら隅丸方形と推測され、北西隅に小さな張り出し部を有する。規模は長軸で4.7m、短軸で4.0m以上をはかる。壁は、床面よりほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は、北壁側で0.45mをはかる。

埋土は、AからC層に大別される。A層は、竪穴上面を覆うもので、砂質の強い褐色土を基本とする。暗褐色土や黄褐色土を粒塊状に混入する。固さ、しまりは中程度である。B層は、竪穴中位から竪穴床面南半に堆積するもので、黄褐色の砂質土を基本とする。固さ、しまりは中程度で、炭化物粒子を若干量含む。C層は、竪穴壁際に堆積するもので、明黄褐色の砂質土を基本とする。真砂土塊を含むC<sub>1</sub>と含まないC<sub>2</sub>に細分される。

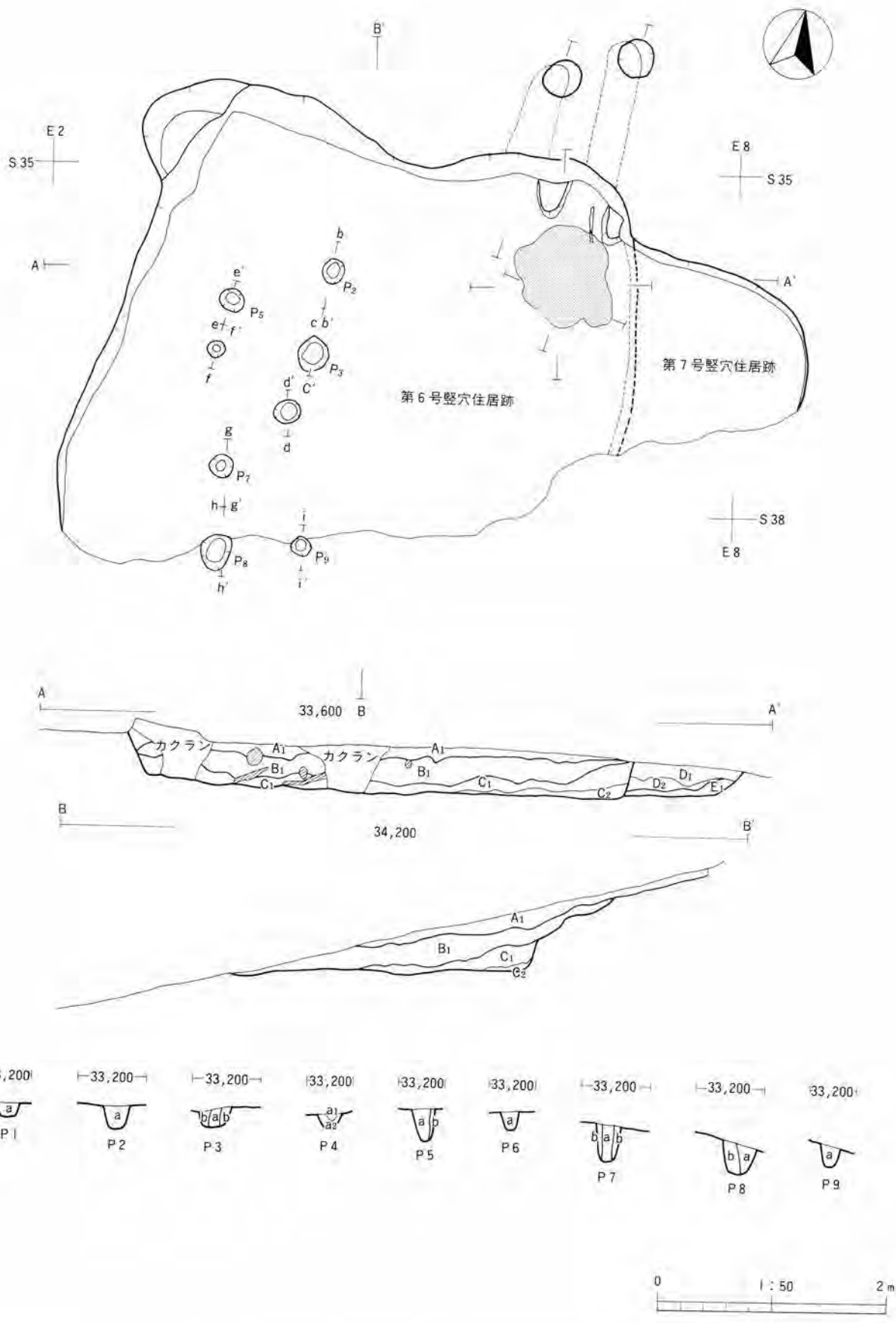
床面は、地山面をそのまま利用したほぼ平坦面となっているが固さ、しまりは第3号、第4号程ではない。第7号竪穴住居跡床面よりは若干であるが深くなっている。

柱穴及び柱穴様のピットはP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>まで検出したが、いずれも床面の西側に偏しており具体的な柱穴配置は不明である。P<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>7</sub>では柱痕跡を確認したが、これらが支柱穴を構成する一部となるものかは定かでない。

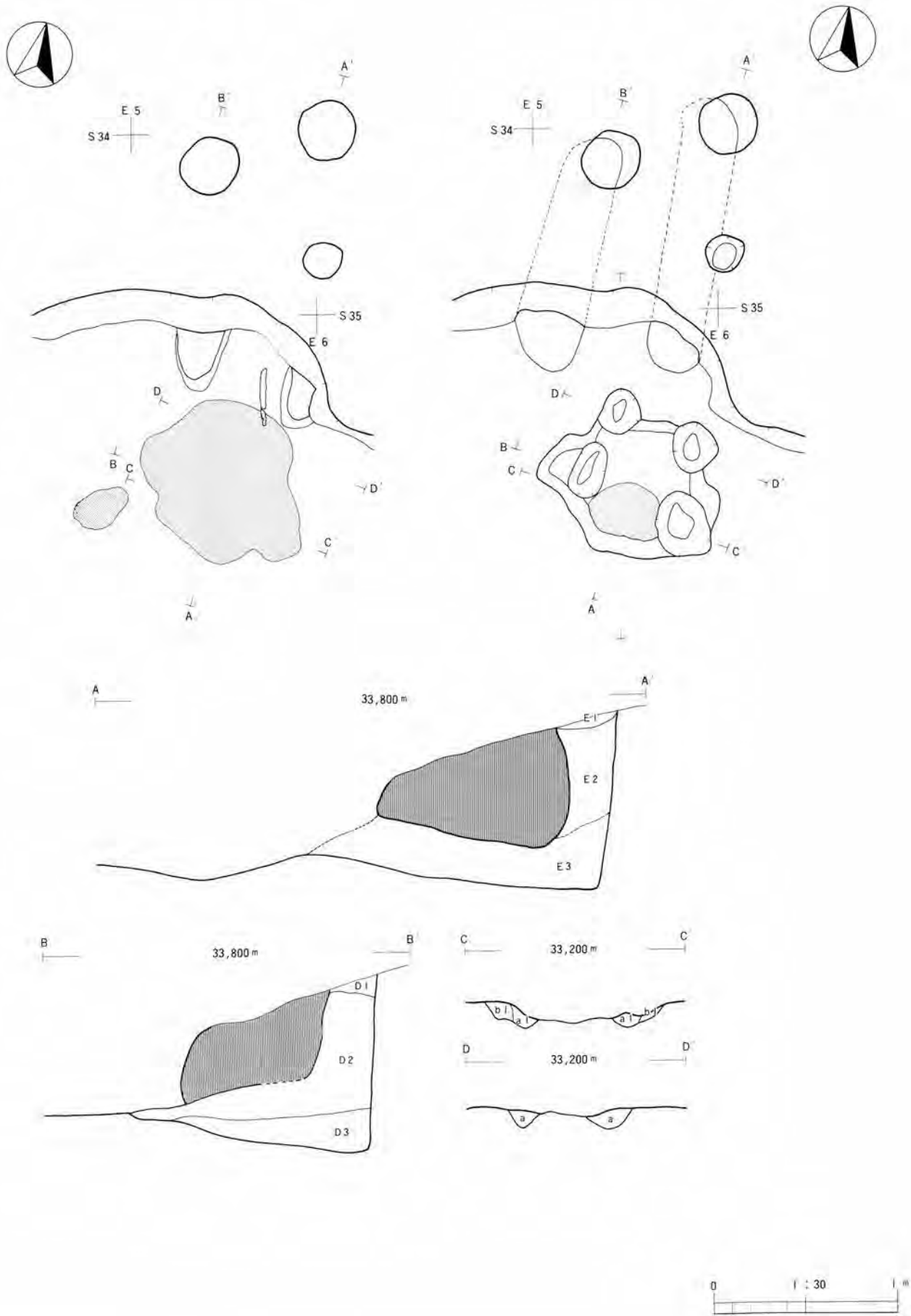
北西隅の張り出しは、床面と約0.25mほどの段差を有するものである。

カマドは、北壁の東寄り第7号竪穴住居跡との重複部分近くに2基存在する。どちらも煙道部分が刳り貫きのもので、そのうち西側のものは煙道部を残すだけのものである。

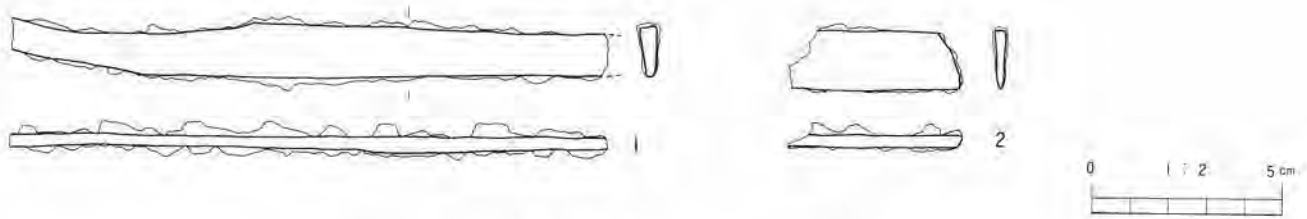
東側のものは、浅く掘り下げられた皿状の部分に焼土が堆積しており、更に礫を据えたと考えられる小ピットが検出されており、やはり礫を芯材として構築されていたものと推定される。煙道底面は煙出口に向かって緩かに傾斜しており、煙出口は径0.3mをはかる円形を呈する。



第29図 第6号、第7号竖穴住居跡



第30図 第6号竖穴住居跡カマド跡



第31図 第6号竪穴住居跡出土遺物

遺物は、埋土より土師器、甕の体部の細片が若干出土しているだけである。第31図の1と2は、カマド焼土から出土した鉄製品である。どちらも刀子片と思われる。

#### 第7号竪穴住居跡（第29図）

第6号竪穴住居跡に大半を切られ、東側部分を残すのみである。

平面形は、北東隅から隅丸方形ないしは楕円形と推定される。規模は不明。壁は床面よりほぼ直に立ち上がる。

埋土は、D層、E層に大別される。D層は、にぶい黄褐色から黄褐色の砂質土を基本とするもので、2層に細分される。D<sub>2</sub>層の方が真砂土塊の混入も多く固さ、しまりも欠く。E層は、褐色の砂質土を基本とするもので、固さ・しまりをやや欠く。炭化物粒子をわずかながら混入する。

床面は、平坦面で比較的固くしまっている。

遺物は、検出していないが、やはり弥生時代の住居跡の可能性も考えられる。

## 第8号竪穴住居跡（第32図）

A区調査区中央部尾根頂部より西側に位置する。よって西側から南側壁を流出している。第9号竪穴住居跡と重複するが、これよりも新しい時期のものである。

平面形は、隅丸方形を呈する。規模は、南北で3.4m以上、東西で3.9mをはかる。壁は床面より直に立ち上がる。壁高は、北東側で0.3mをはかる。

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、褐色のやや砂質の強い土を基本とするもので、2層に細分できる。A<sub>1</sub>層よりA<sub>2</sub>層の方がやや明るい褐色土である。ともに固さ・しまりを欠く。B層は、竪穴の中位から床面を覆うもので砂質の強いにぶい黄褐色土を基本とする。ともに固さ・しまりは中程度だが、A<sub>1</sub>層の方がやや明るい色調を呈する。

床面は、地山面をそのまま利用しており、西側へやや傾斜する様である。固く、しまっている。

柱穴及び柱穴状のピットは、P<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>まで検出したが、柱痕跡が確認できたのはP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>9</sub>だが、主柱穴を構成し得る規模のものはP<sub>3</sub>が考えられる。P<sub>12</sub>を除けば、いずれも小規模なものである。

北壁からカマド跡をはさみ、北へ東壁直下に幅0.15m、深さ0.15m程の周溝を検出した。

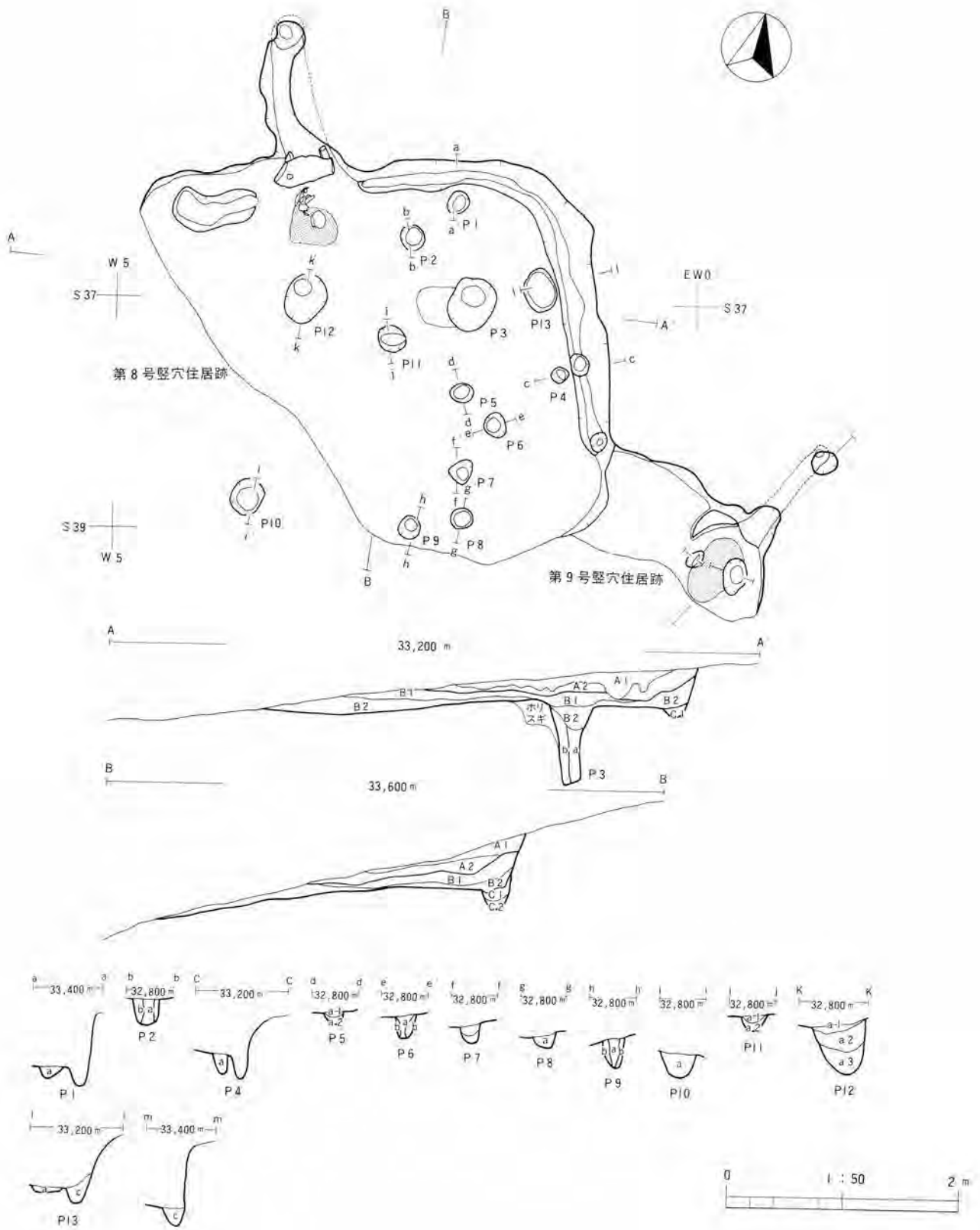
カマドは、北壁側のやや西偏に存在する。カマド袖部分は、扁平な礫をたて並べ、更に天井部にも扁平な礫が置かれており、礫を使用して構築されていたものと考えられる。

燃焼部は、カマド袖支脚礫を据えていたと思われるピットの最前列側に形成されている。煙道部分は住居外に約1.25m程のびており、煙出口は、径0.25m程の円形を呈する。煙道底面は、煙出口に向かって、緩やかにわずかながら下り勾配の傾斜である。

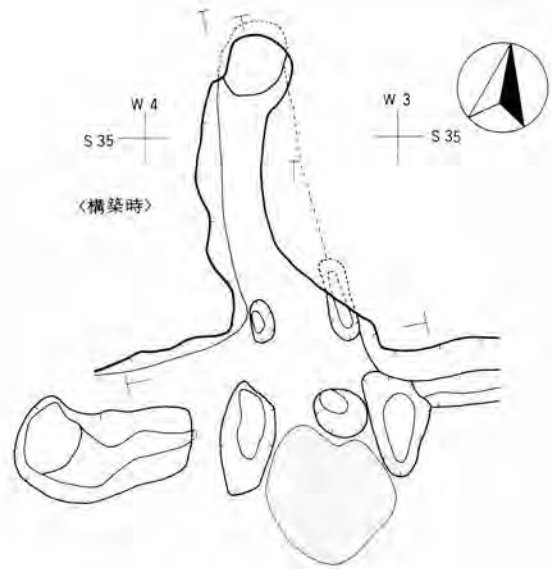
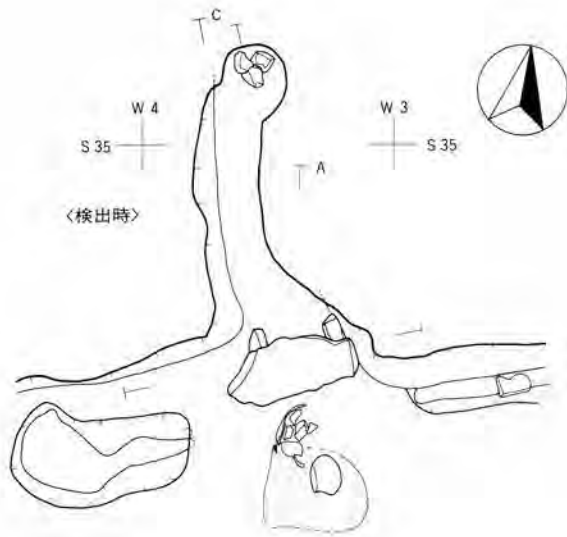
## 遺物

遺物は、B層を中心に出土している。第34図1は土師器坏である。内面黒色処理を施したもので、口径14.6cm、器高6.5cm、底径8.0cmをはかる。内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整されており、体部下端から底部にかけてはヘラケズリ調整が施されている。2、3は須恵器坏で、2は体部から口縁部にかけて外傾するもので、口径14.2cmをはかる。3は底径7.8cmをはかる。底面は、回転糸切り無調整である。4、5はカマド崩壊土内から出土した甕で、4は外面はヘラケズリ、内面は刷毛目調整がされる長胴形の甕と思われる。5は、肩部に段を有するもので、口縁部が短かく外反する。体部は、強いヘラナデ調整である。7は、須恵器甕の外反する口縁部片である。8は、床面上から出土した砥石で擦痕が確認される。図示できなかったもの以外でも、肩部に沈線を有する甕の小破片が検出している。

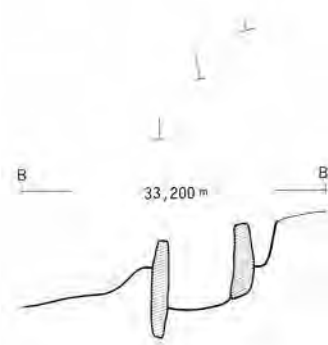
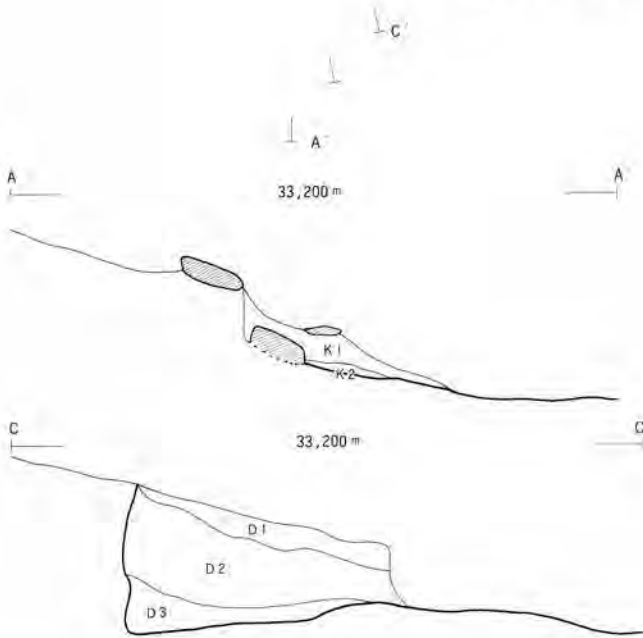




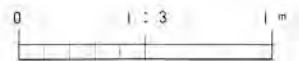
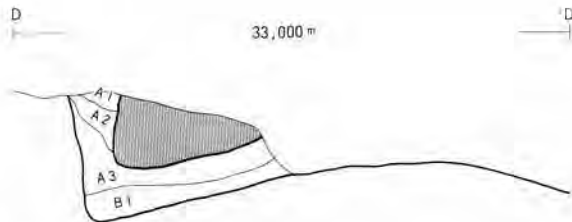
第32图 第8号、第9号竖穴住居跡



<第8号竖穴住居跡カマド跡>



<第9号竖穴住居跡カマド跡>



第33図 第8号、第9号竖穴住居跡カマド跡

第9号竪穴住居跡（第32図）

第8号竪穴住居跡に大半部分が切られており、わずかに北東隅に存在するカマド周辺部だけが残存したもの。

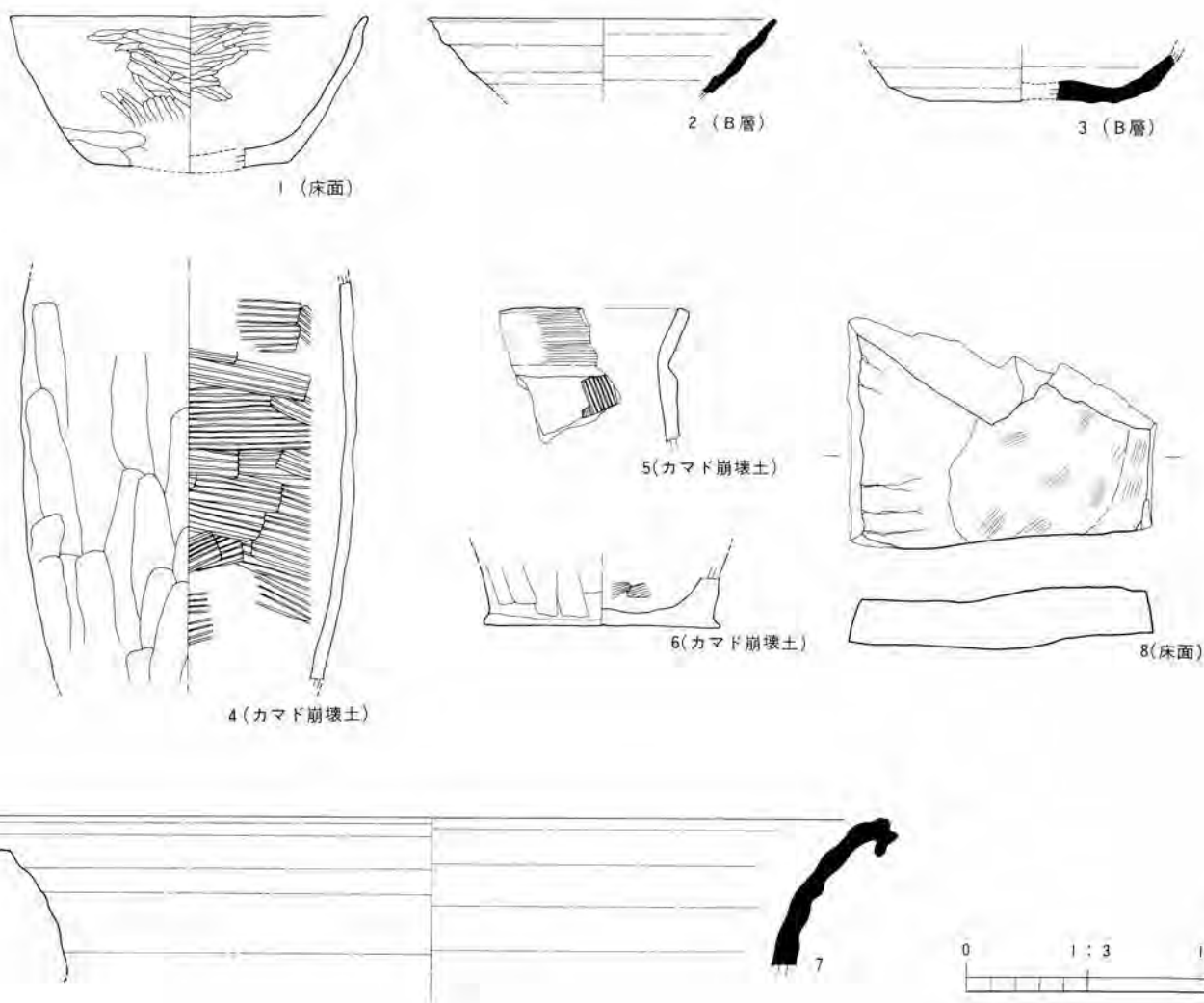
平面形、規模等は不明である。

埋土は、A層から成り褐色の砂質土を基本とするもので、固さ・しまり共に欠く。

床面は、平坦で第8号住よりは固さ・しまりを欠く。第8号竪穴住居跡床面よりわずかに高い。

カマドは、北東隅に存在する。焼土の広がりとかまど支脚礫を据えたと思われるピットを確認しただけである。煙道部分は、刳り貫きで住居外へ約1.1m程のびている。煙道底面は、煙出口へ向かって、緩やかに傾斜している。煙出口は直径0.2m程の円形を呈する。煙出部埋土も褐色土を基本としたA層と、暗褐色土を基本としたB層から成り、B層中には炭化物粒子を多量に含む。

遺物は、出土していない。



第34図 第8号竪穴住居跡出土遺物

## 第10号竪穴住居跡（第35図）

調査区A区の中央部に位置し、尾根頂部から西側に傾斜するところに検出した。西南側から南側を欠く。

平面形は、隅丸形状を呈する。規模は、南北で4.3m、東西で5.1mをはかる。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がり、北壁側で壁高0.2mをはかる。

埋土は、A層からC層に大別される。A層は、にぶい褐色の砂質土を基本とするもので、A<sub>2</sub>層の方がやや暗い色調となり、真砂土塊状の混入割合も多くなる。A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層どちらも固さ・しまりは欠く。B層は、北壁際にのみ堆積するもので、明るい褐色の砂質土を基本とする。固さ・しまりは中程度である。C層は、床面東側に存在する一段低い面に堆積するもので、黒褐色土を基本とするもので、多量の炭化物片を含む。軟らかくしまりがなく若干の粘性を有する。

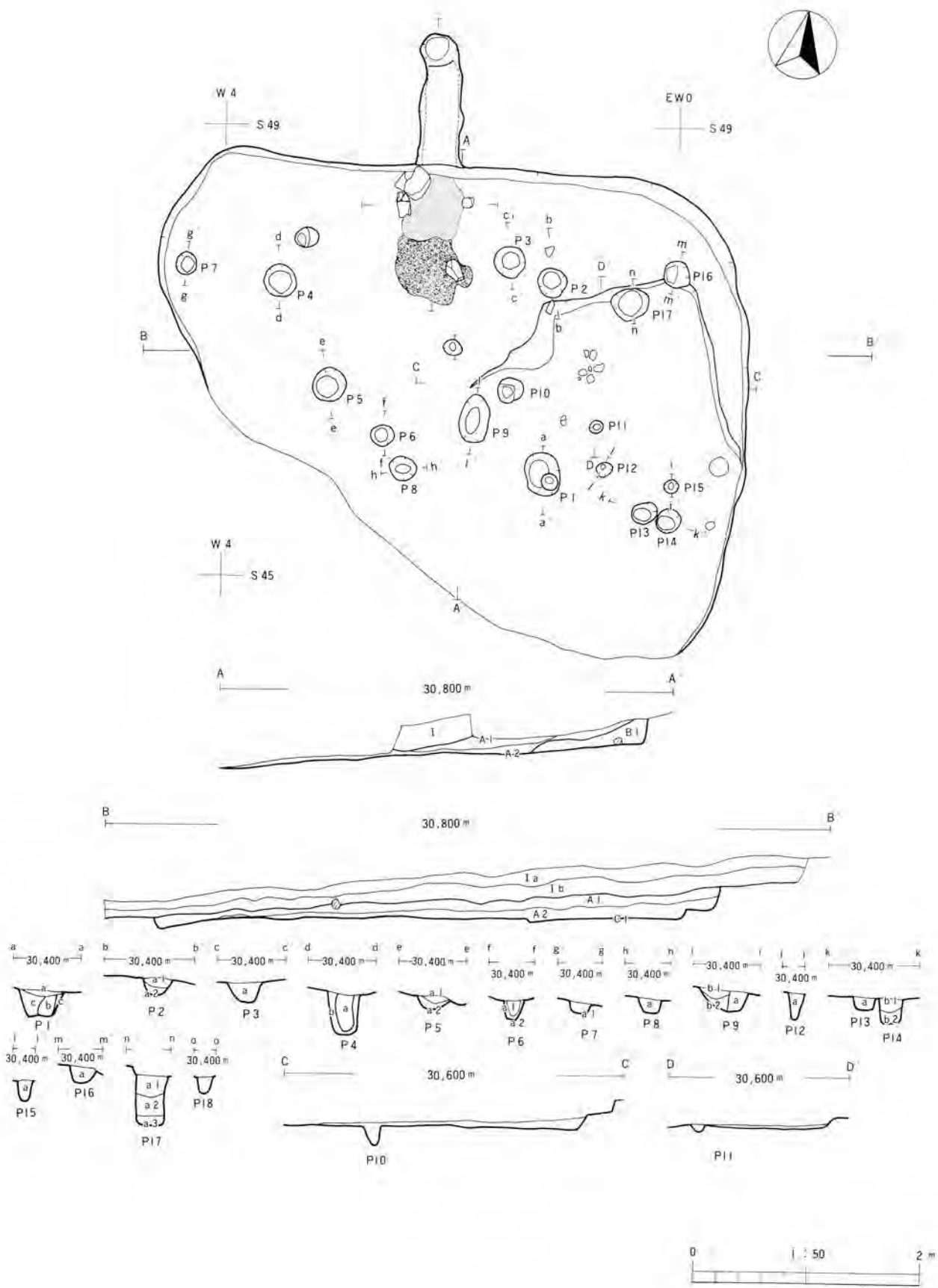
床面は、前述の通り東側の一部が一段低くなっているが、それ以外は地山面をそのまま利用した平坦面である。

柱穴及び柱穴状の小ピットは、P<sub>1</sub>～P<sub>10</sub>まで検出したが、このうち柱痕跡が確認できたのは、P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>である。支柱穴を構成する可能性のあるものとしては、P<sub>1</sub>、P<sub>6</sub>が考えられるが、具体的な柱穴配置は不明確である。

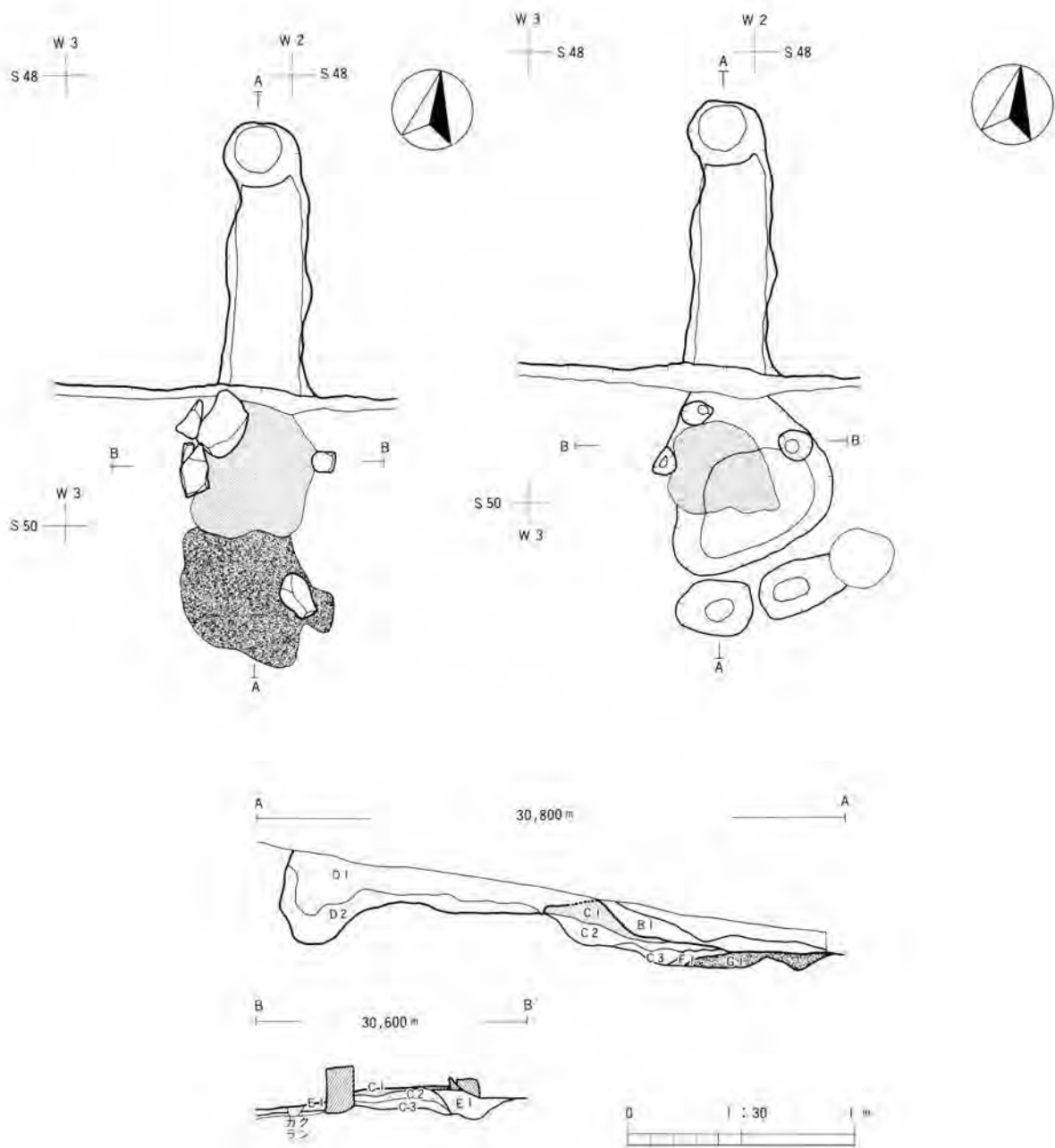
カマドは、北壁中央部に存在する。カマドの構造は、カマド前面を一度浅く長楕円形状に掘り下げて、その中に礫を支脚として利用し構築したものと考えられる。煙道入口部前面には、焼土の広がりとともにその前面には、炭化物粒子の広がりが明瞭に区別して認められた。煙道部分は、住居外へ約1.2m程伸びており、煙出口は、直径0.3m程の円形を呈する。煙道部分は煙出口まではほぼ平坦で、煙出付近で急激に深くなっている。煙道部分埋土D層中には、炭化物粒子が少量ながら含まれている。

## 遺物

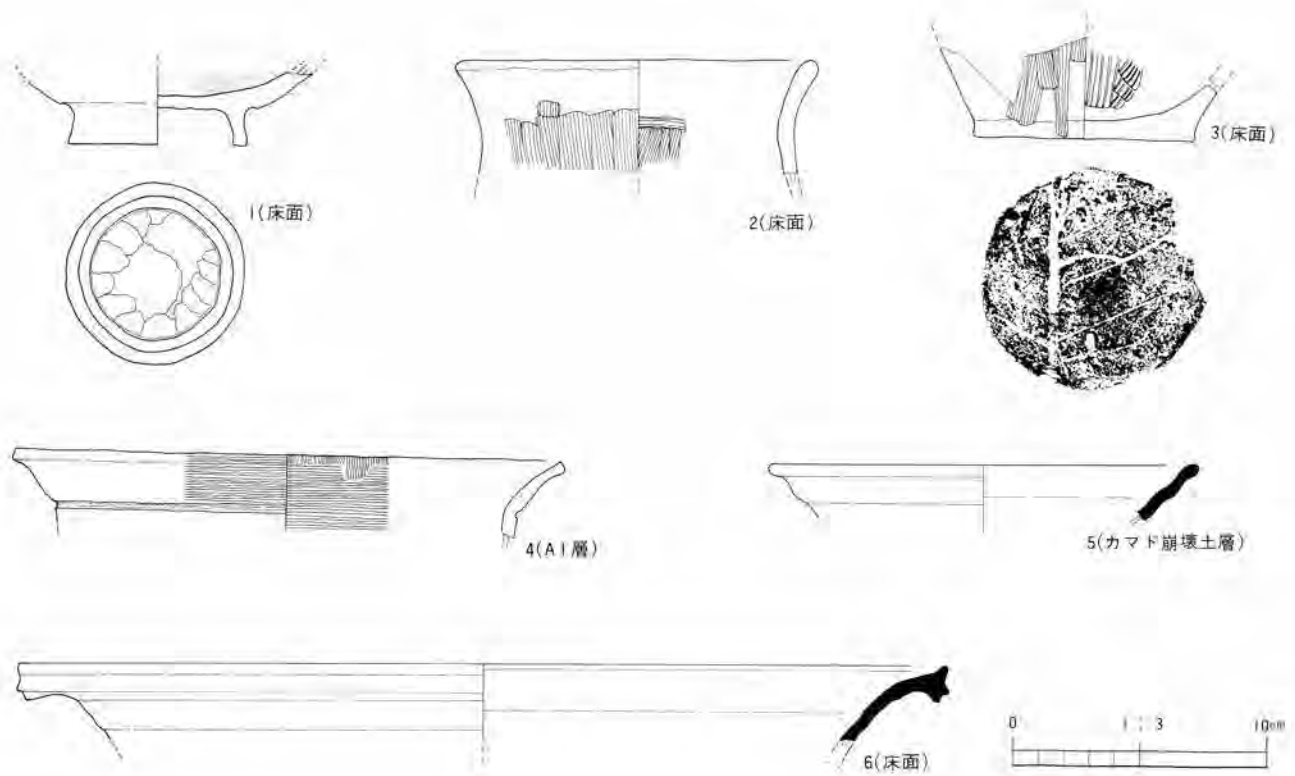
遺物は、床面やA<sub>2</sub>層を中心に若干量出土している。第37図1は、ロクロ成形の台付の坏で、内面黒色処理を施こしている。台部は、ロクロ成形した坏に貼りつける様にしている。2は、体部が膨らむ土師器甕の口縁部である。内外面とも強いヘラナデで調整されている。3は、土師器甕の底部片で2と同一個体の可能性が考えられるものである。底面には、木葉痕を残す。4は、肩部に沈線を有する長胴形の甕と思われる口縁部である。口縁部が大きく外反する。5、6は須恵器で、5は坏、6は甕の口縁部である。



第35图 第10号竖穴住居跡



第36図 第10号竪穴住居跡カマド跡



第37図 第10号竪穴住居跡出土遺物

第11号竪穴住居跡（第38図）

第10号竪穴住居跡の東隣に位置する。カマド跡の存在が確認されなかったが、竪穴住居跡として記述する。

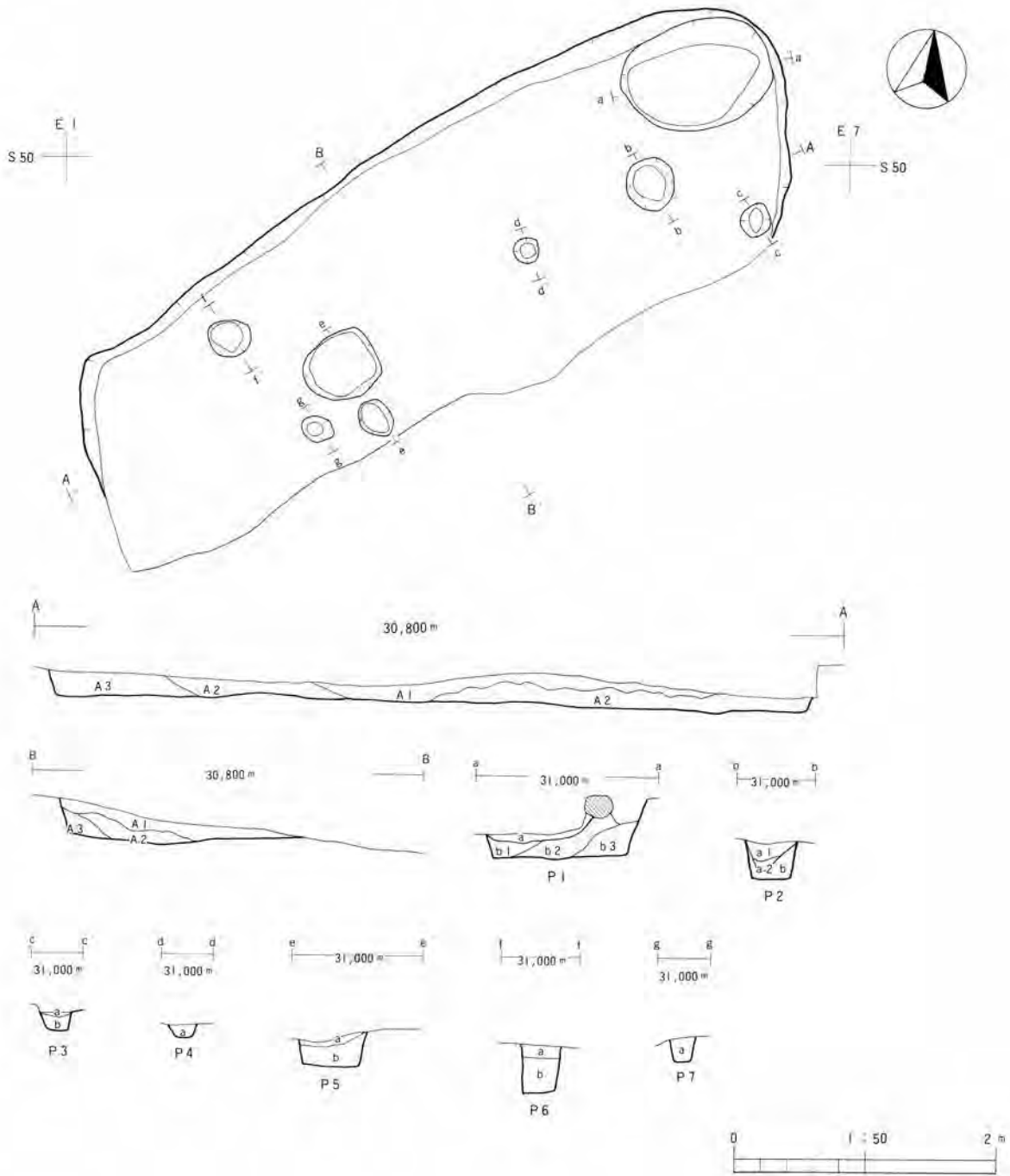
南半部分を確認できず不明確だが、平面形は、長楕円から長形状を呈するものと推定される。規模は、東西方向で6.0m、南北で2.1m以上をはかる。壁は床面よりほぼ直に立ち上がり、壁高は北壁側で0.25mをはかる。

埋土は、A層から成り3層に細分される。いずれもにぶい褐色の砂質土を基本とするもので固さ・しまりも欠く。A<sub>2</sub>層がやや明るく、A<sub>3</sub>層がやや暗い色調となり、真砂土塊の混入割合もA<sub>2</sub>層が一番多く、A<sub>1</sub>、A<sub>3</sub>層は少ない。また、A<sub>3</sub>層中には炭化物粒子を少量ながら含む。

床面は、ほぼ平坦面である。

床面上では、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>までのピットを検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。P<sub>1</sub>は北東隅に検出したもので1.1×0.85mの長楕円形を呈するものである。暗褐色土を基本とするa層と、褐色から黄褐色土を基本とするb層の埋土から成る。P<sub>3</sub>は、床面よりの深さ0.35mをはかり、柱穴としての可能性も考えられる。

図示できる様な遺物は出土しておらず、土師器の甕の細片が出土しているだけである。



第38图 第11号竖穴住居跡



#### 第12号竪穴住居跡（第39図）

調査区A区の中央部、尾根の東側の方に位置する。前述第11号同様カマド跡を有さないものだが、竪穴住居跡として記述する。

平面形は、南西側が円状となるもののほぼ楕円形状を呈するが、東壁の一部に張り出し部を有する。規模は、南北3.1m、東西2.5mをはかる。壁は西から南壁側を直に、北から東壁側はなだらかに立ち上がる。

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、暗褐色の砂質土を基本とするもので、固さ、しまりを欠く。B層は、にぶい褐色から褐色の強い土を基本とし、3層に細分される。いずれも固さ、しまりを欠く。B<sub>1</sub>層は、暗褐色土を塊粒状に混入する。B<sub>2</sub>層は、B<sub>1</sub>層よりは少ない。B<sub>3</sub>層は、真砂土を塊状に多く混入する。

床面は、地山面を利用した平坦面だが、北東隅が一段約0.1m程高くなる。

柱穴及び柱穴状ピットは、P<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>まで検出したが、柱痕跡を有するのは中央部に位置するP<sub>1</sub>のみだけである。それ以外のP<sub>2</sub>～P<sub>9</sub>は、いずれも小規模なもので、しかも壁際をめぐる様に位置している。

遺物は、少量ながら出土している。第40図1は床直上のB<sub>3</sub>層より出土した土師器甕で、体部が膨らむものである。口縁部を欠くが、肩部には一条の沈線が巡る。体部外面上部は、刷毛目後にヘラミガキ調整されている。内面は、刷毛目や弱いヘラナデの調整が観察される。底面には、木葉痕が残る。2・3は、いずれも床面より出土した土師器甕の底部片である。図示した3点以外には、短かく外反する土師器甕の口縁部片や、非常にキメの細かい胎土（赤褐色を呈する）の須恵器の小片などが出土している。

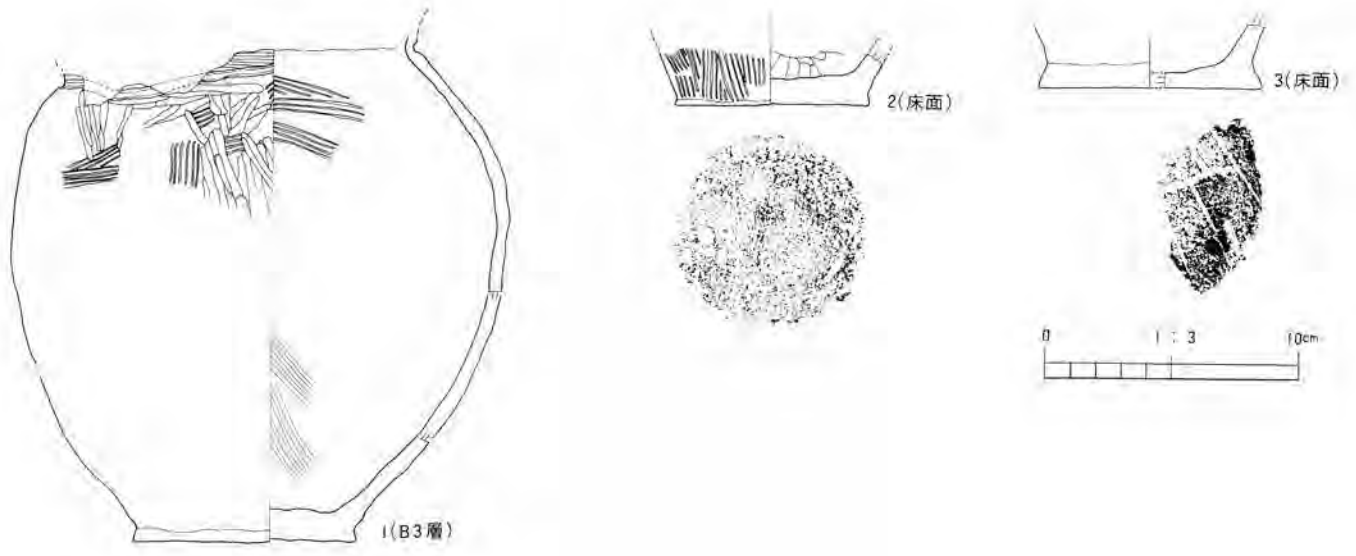
遺物

#### 第13号竪穴住居跡（第39図）

第12号竪穴住居跡の西側延長線上に位置し、尾根の西傾斜部に検出した。第12号、第13号土坑跡と重複するが、第15号よりは新しい時期のものであるが、第14号については新旧を把握せず掘ってしまった。

平面形は、方形ないしは楕円形状を呈するものと推定される。規模は、残存部分で南北3.0m、東西2.1mをはかる。壁は床面より直に立ち上がり、北壁側で壁高0.2mを残す。





第40図 第12号豎穴住居跡出土遺物

#### 第14号竪穴住居跡（第41図）

調査区A区の最南部に位置する。

南半部を欠き不明確だが平面形は、隅丸の方形状を呈するが、北壁側が楕円状に張り出す様である。規模は、東西5.0m、南北2.0m以上をはかる。壁は床面より直ないしはやや傾斜を持ち立ち上がる。壁高は、北壁側で約0.35mを残す。

埋土は、A層から成り3層に細分される。いずれにもぶい黄褐色の砂質の強い土を基本とするもので、固さ・しまりを欠く。A<sub>3</sub>層が、一番明るい色調で砂質の度合も強い。

床面は、地山面をそのまま利用しており貼床等は認められない。

柱穴及び柱穴状ピットは、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>まで検出したがP<sub>1</sub>で柱痕跡が確認された。規模や形状等はすべて似かよっており、具体的な柱穴配置は不明である。

カマドは、北東隅に存在する。検出時では、北東隅の広範囲に焼土と炭の拡がり認められたのだが、それらを掘り下げると礫を据えたと考えられるピットが両袖に検出しており、元来は礫を芯材として構築されたものと考えられる。煙道部分は、住居外に約0.7m程のびており、煙出口は径0.3m程の円形を呈する。煙道底面は、煙出口に向かって緩やかに下がっており、煙道部埋土a 3層中には比較的多くの焼土粒、炭化物粒を含む。

#### 遺物

遺物は、カマドの崩壊土内を中心に、わずかながら出土している。第43図1、2、4は、カマド崩壊土より出土した土師器甕である。1、2とも口縁部に最大径を有す長胴形の甕である。1は、輪積み痕が明瞭に残るもので、体部内外面とも強いヘラナデ調整がされる。2は、弱いヘラナデにより調整されている。4は、底部片で底部がわずかに張り出す。3は、埋土中より出土したロクロ成形の坏で、推定口径13.0cmをはかるものである。5、6はカマド前の焼土の広がり上で検出したもので、5は、楕円から小判形をした鉄製品だが用途等不明。6は、フイゴ羽口の破片で両端部を欠く。直外径8.2cm、内径3.4cmをはかる比較的大形のものである。全面にわたり軽いヘラナデ調整が観察される。

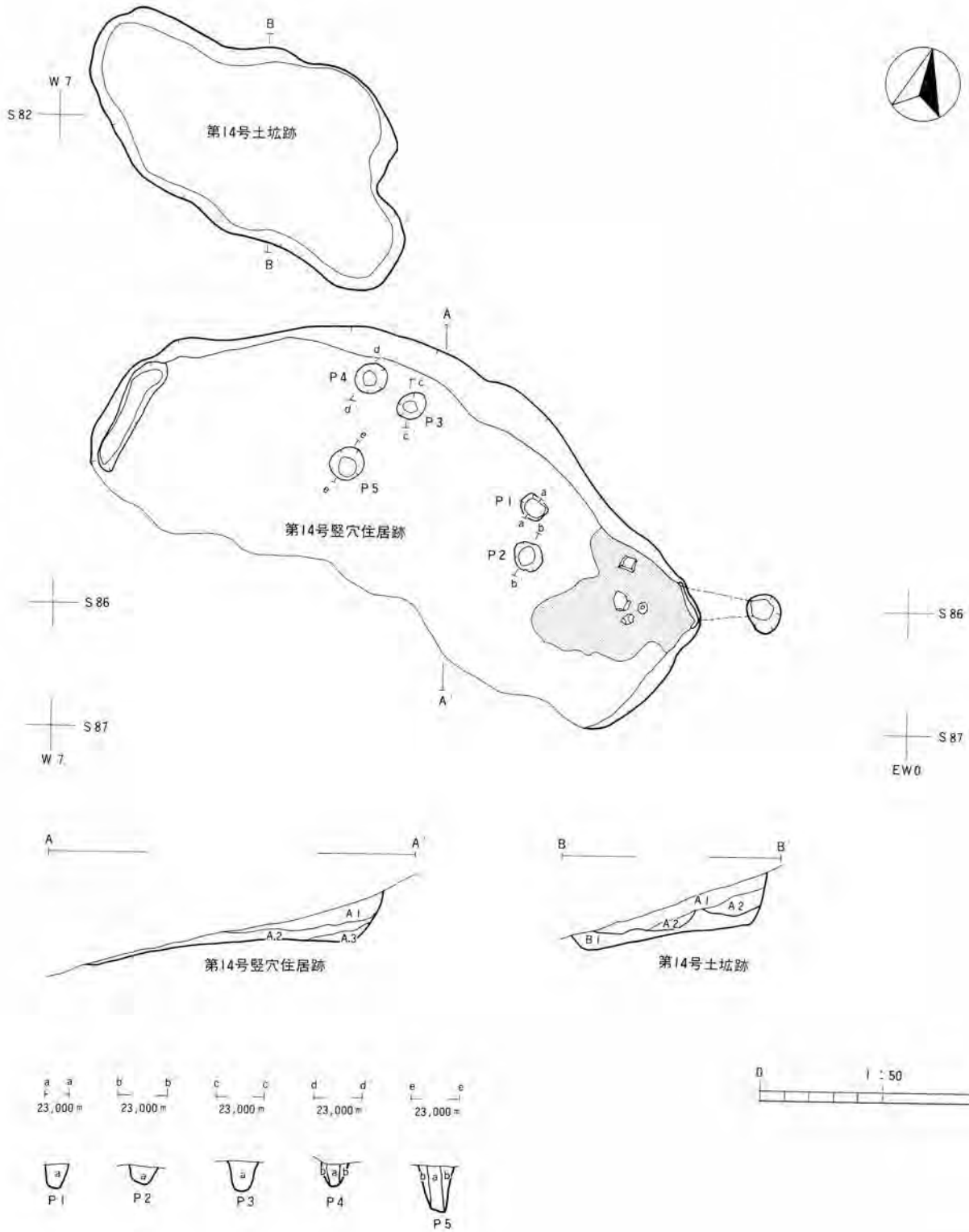
#### 第14号土坑跡

第14号竪穴住居跡の北側に位置するもので、長軸3.05m、短軸1.55mをはかる不整形を呈する。

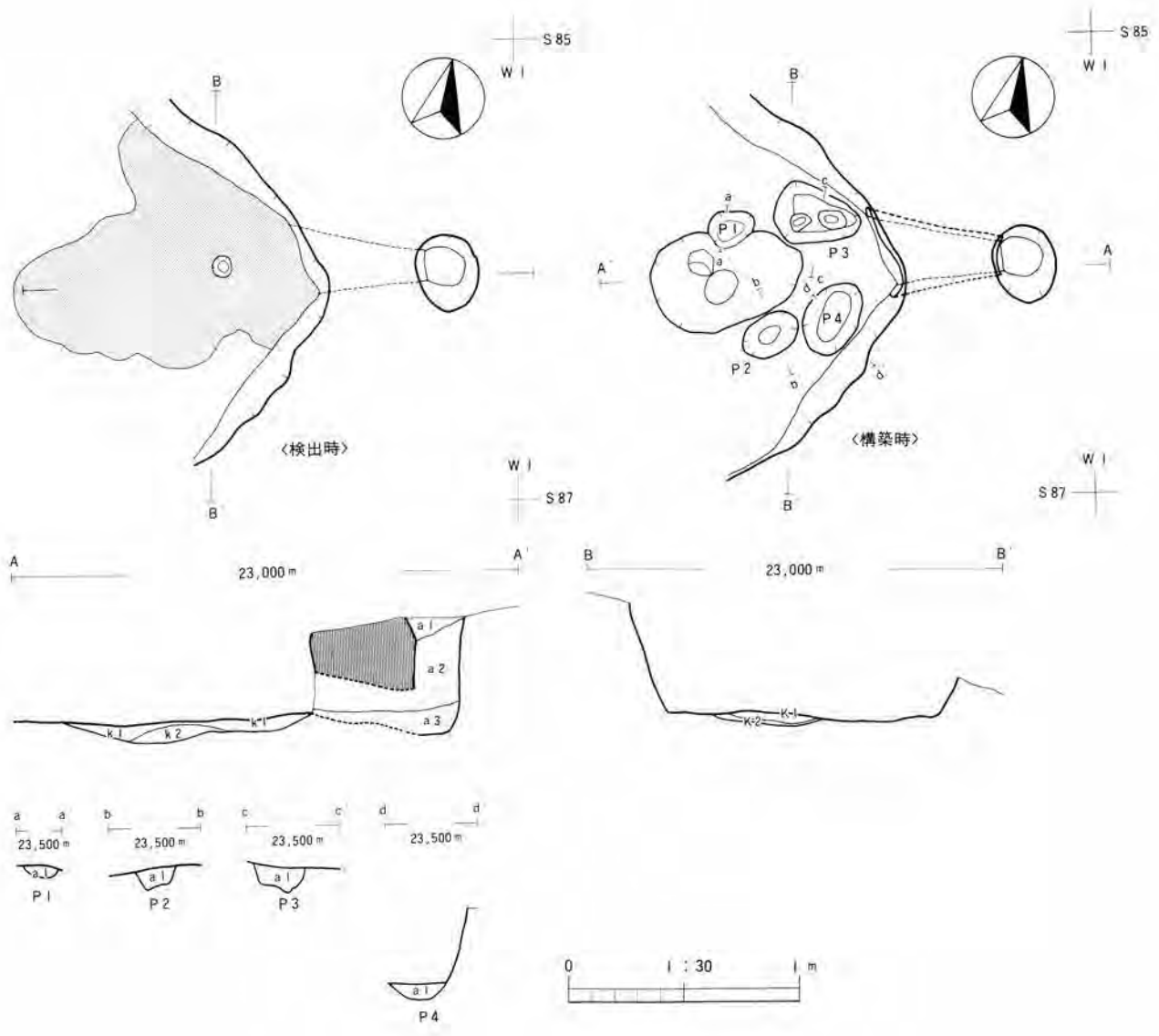
埋土は、A層、B層に大別される。A層は、2層に細分される。いずれも黄褐色の砂質の強い土を基本とするが、A<sub>2</sub>層の方が幾分暗い色調である。いずれも固さ・しまりを欠く。B層は、明黄褐色の砂質の強い土を基本とするもので、やはり固さ・しまりを全く欠く。

底面は、平坦だが南側へ傾斜する。

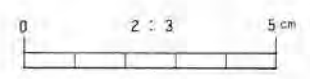
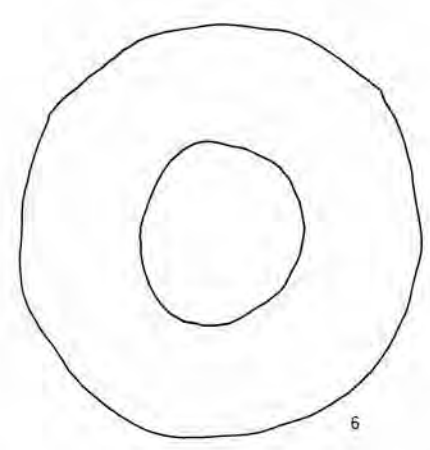
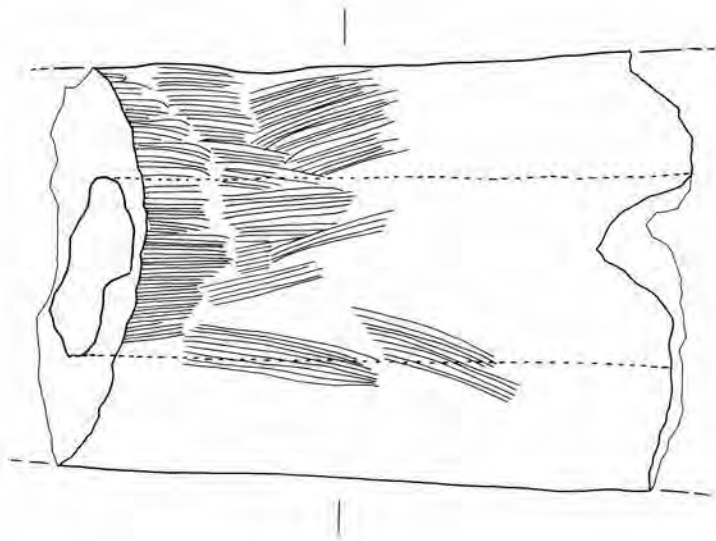
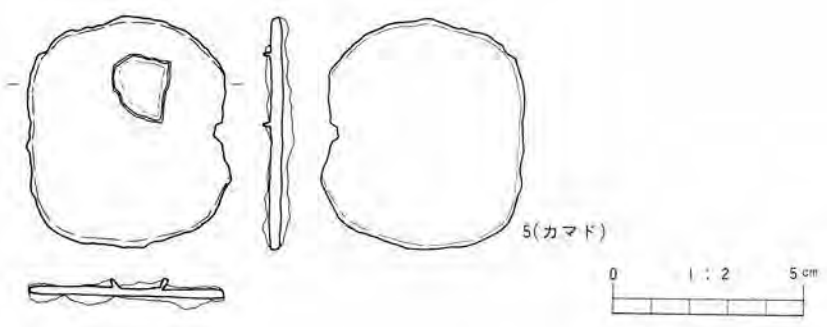
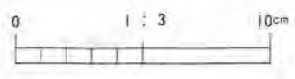
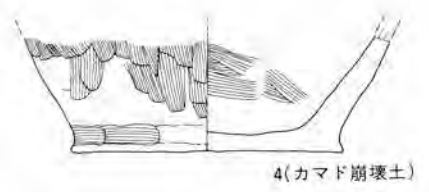
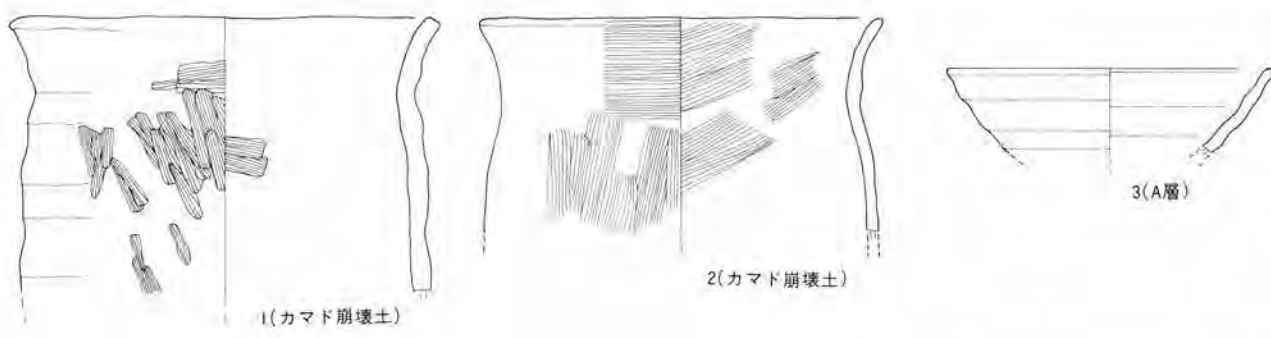
遺物は、図示できるものは無かったが、B層中より土師器甕の体部片が若干出土している。



第41图 第14号竖穴住居迹



第42図 第14号竪穴住居跡カマド跡



第43図 第14号竪穴住居跡出土遺物

第15号土坑跡（第44図）

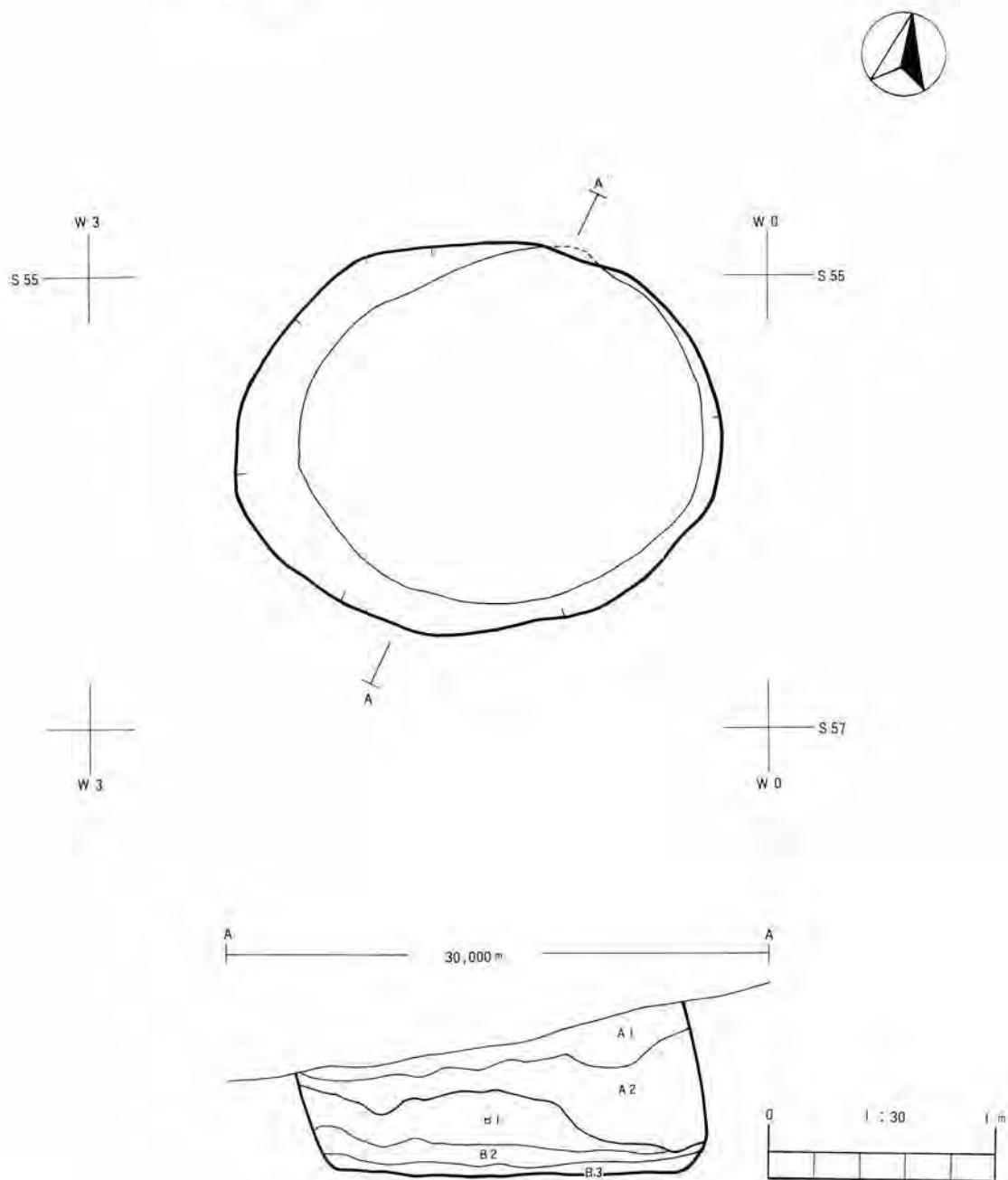
第10号竪穴住居跡の南側に位置する。

平面形は、楕円形状を呈する。規模は、長軸2.1m、短軸1.7mをはかる。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは0.75mをはかる。

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、にぶい黄褐色の砂質土を基本とし、2層に細分される。いずれも固さ・しまりを欠くが、A<sub>1</sub>層の方には真砂土塊が混入する。B層は、褐色の砂質土を基本とするもので、3層に細分される。いずれも固さ、しまりを欠く。B<sub>2</sub>層が、やや明るい色調を呈し、真砂土塊の混入割合も高い。

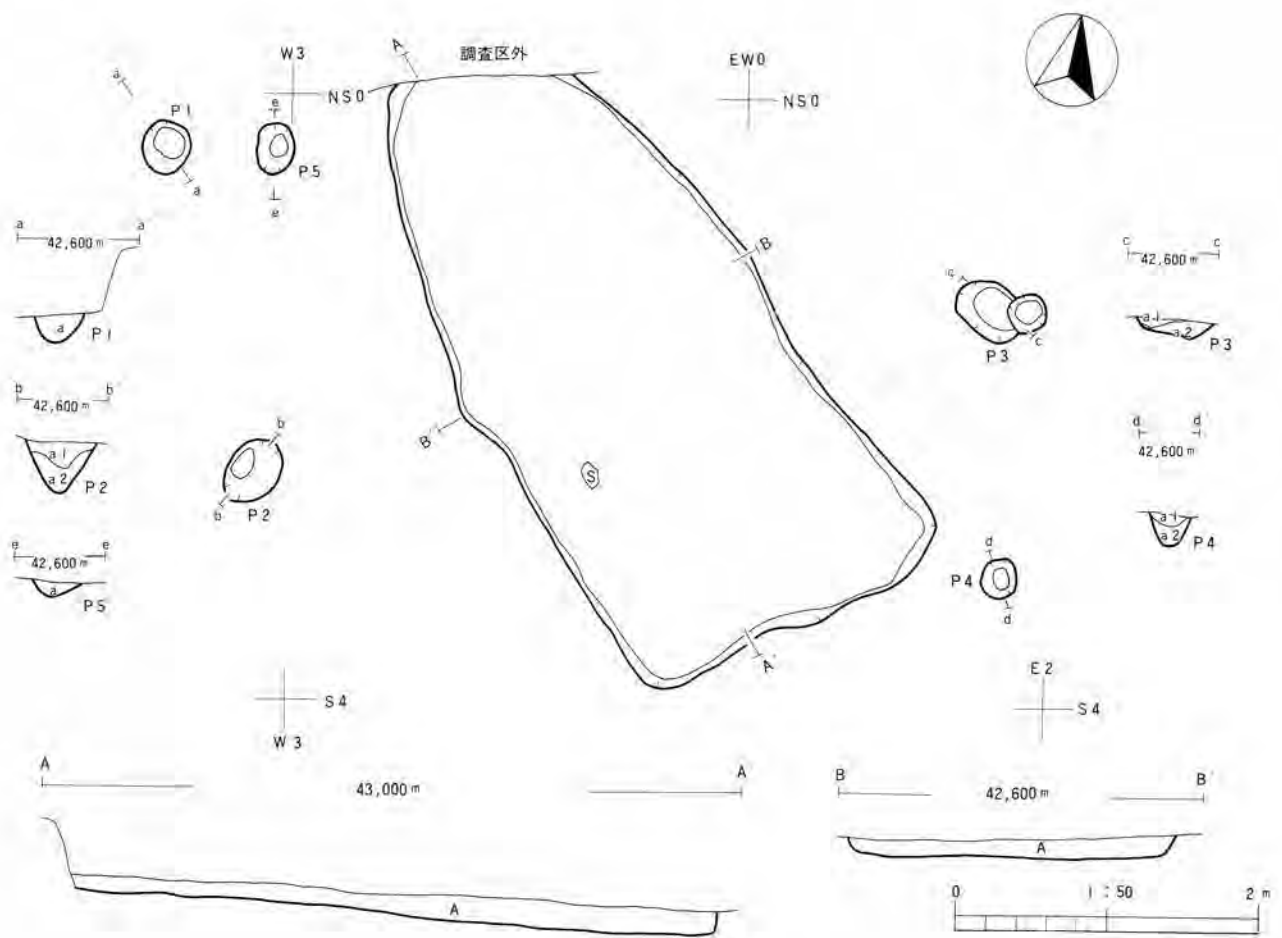
底面は、地山面の平坦面である。

遺物は検出しなかった。



第44図 第15号土坑跡





第45図 第15号竪穴住居跡

第16号竪穴住居跡（第46図）

調査区D区の北東側に位置する。

南側の大半部分が確認できず不明確だが、平面形は、北東、北西隅の状態からほぼ方形を呈するものと推定される。規模は、東西で3.9m、南北で1.5m以上をはかる。壁は、ほぼ直に立ち上がり、北壁側で約0.3mの壁高を残す。

埋土は、A層から成り3層に細分される。いずれも砂質の暗褐色から褐色土を基本とするもので、固さ、しまりや混入土の割合で3層に細分された。A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層は、斜面上部が崩壊し一緒に堆積したもので、当住居跡の本来の埋土はA<sub>3</sub>層と思われる。微量の炭化物の混入が認められる。

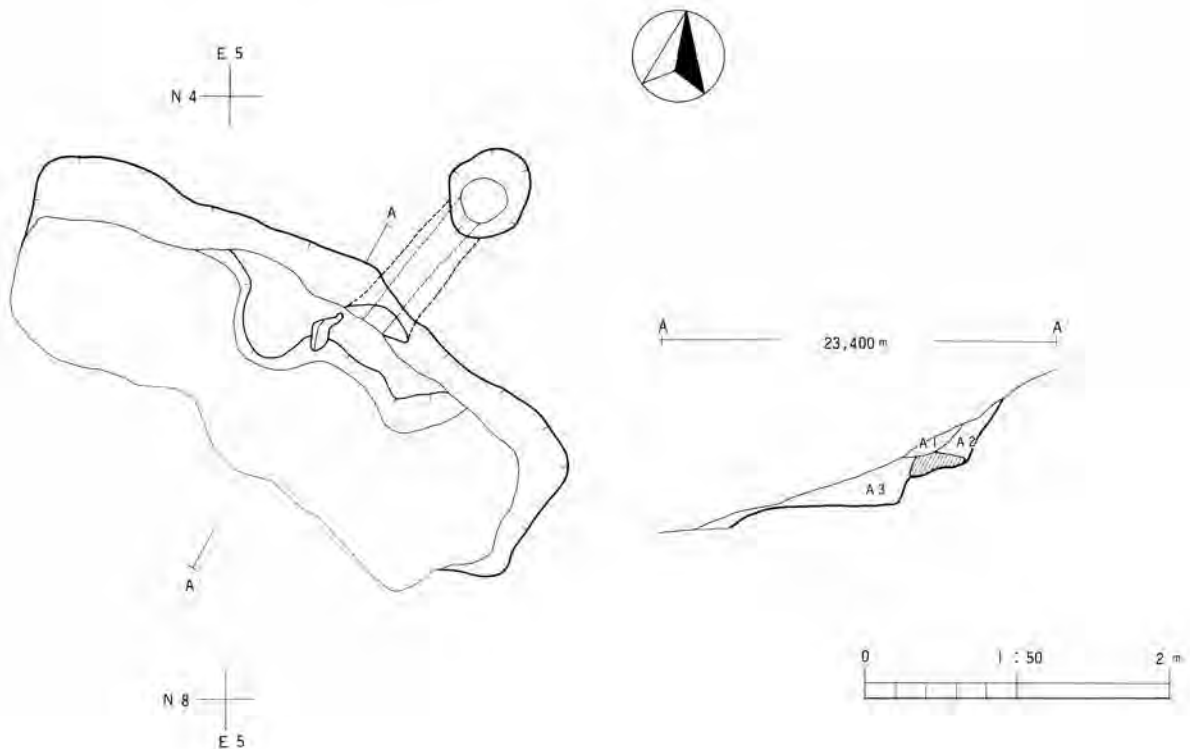
床面は、地山面をそのまま利用した平坦面で、カマドの煙道部分入口の前面が0.1m程高くなっている。

柱穴及び柱穴状のピットは、検出しなかった。

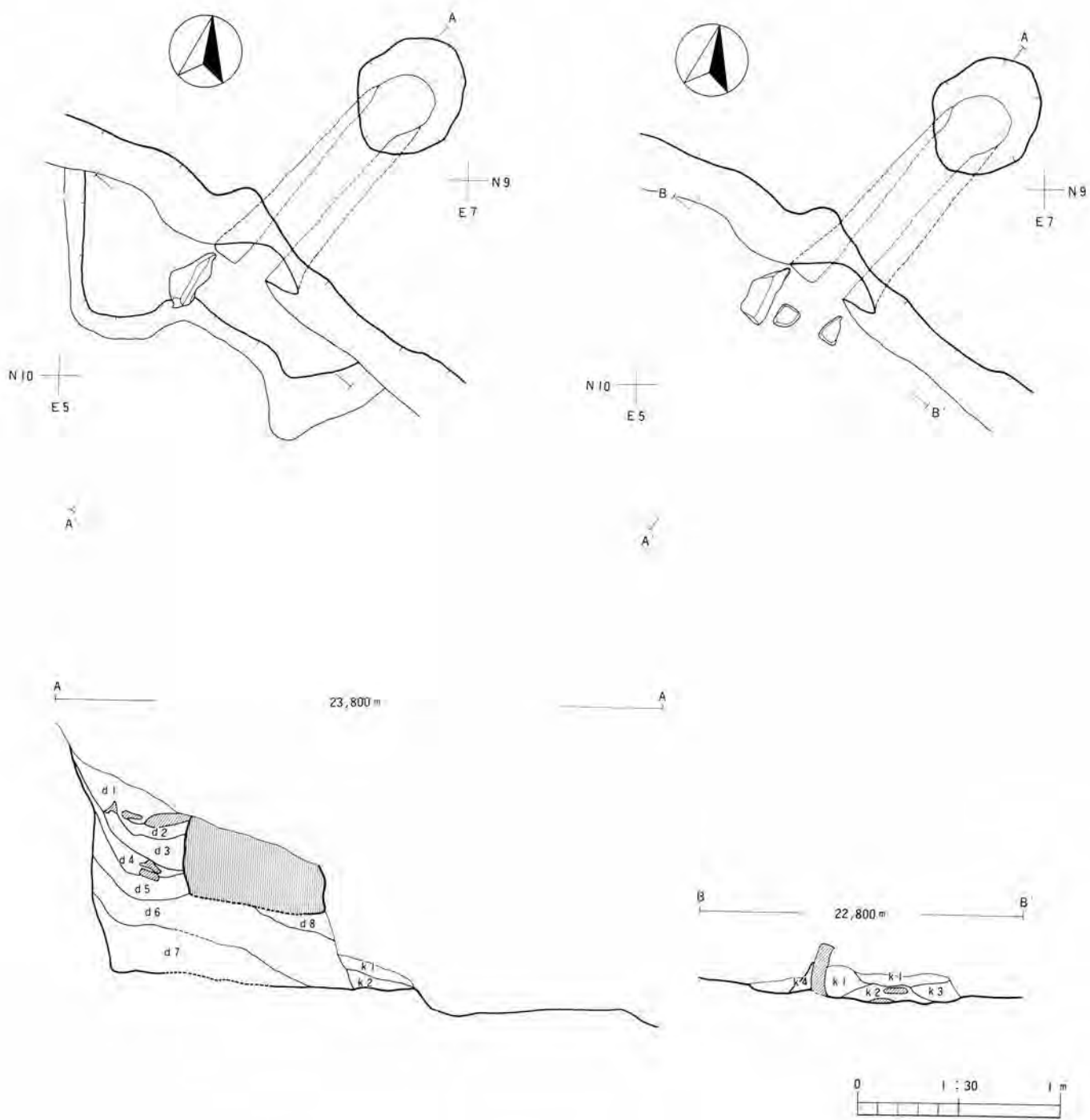
カマドは、北壁中央部に存在する。西側袖部には角礫が立てられており、礫を芯材として構築されていたものと考えられる。煙道部分は、住居外に1.3m程のびており、煙出口は直径0.5mの円形となっている。煙道部分は、削り貫きで埋土上部のd<sub>1</sub>からd<sub>7</sub>層中には多量の中から小礫が混入していた。また、煙道部分埋土は、d<sub>1</sub>～d<sub>7</sub>層に細分されたが、基本的には褐色土塊混じりの黒褐色土を基本としている。中～小礫は、d<sub>1</sub>～d<sub>7</sub>層までで、それ以上の層には混入していない。d<sub>7</sub>層中には、焼土や炭の塊りが混入する。

煙道底面は、煙出口に向かって緩やかに上り傾斜となっている。

遺物は、出土していない。



第46図 第16号竪穴住居跡



第47図 第16号竪穴住居跡カマド跡

## 第17号竪穴住居跡（第48図）

調査区D区東側中央付近、第16号竪穴住居跡の南の山裾側に位置する。第18号竪穴住居跡と重複しているが、これに切られている。

平面形は、長方形を呈する。規模は、長軸で5.6m、短軸4.55mをはかる。壁は床面より直よりわずかな傾斜をもち立ち上がる。壁高は、北壁側で0.45mをはかる。

埋土は、A層から成る。全体的に山の斜面部から流れ込んだ様な堆積状況で褐色から暗褐色土を基本としている。A<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>層に細分される。A<sub>2</sub>層からA<sub>3</sub>層にかけては多量の炭化物、焼土の塊まり、広がり確認され、ほぼ床面まで達している。

床面は、地山面をそのまま利用した平坦面で固くしまっている。また、床面直上の北東側から南東側にかけて、焼土・炭化物の広がりを検出した。

柱穴及び柱穴状ピットは、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>を検出したが、これらが主柱穴に相当するものと考えられる。南西部は第18号竪穴住居跡に切られており不明だが、主柱穴が、4本柱の構造になるものと考えられる。

カマドは、北壁中央部に存在する。煙道部入口に比較的広範囲の焼土の広がりや礫の散乱が確認された。焼土除去後の構築時の状態では、礫を据えたピット等は確認できなかったが、前述の状態から礫を含んだ粘質土で、カマドを構築していたものと考えられる。煙道部分は、住居外に約1.0m程伸びており斜り貫きとなっている。煙道底面は、煙出口に向かって急激に下り傾斜となっている。また、煙出口は0.35×0.3mの楕円形を呈しており、第16号竪穴住居跡同様、煙出口埋土には、中から小礫が多数混入していた。

### 遺物

遺物は、床面や埋土中より出土している。第52図1は、ロクロ成形の坏で推定で口径18cmをはかる。口縁部上端が肥厚気味となる。2はロクロ成形の甕で口縁部が短かく外反する。3はロクロ成形後、体部外面は強いヘラナデ、内面は刷毛目で調整されている。口縁部が大きく外反する。4も3同様ロクロ成形後、内面に強いヘラナデの調整が施されている。5もロクロ成形の甕で、肩部に沈線を巡らせる。体部外面にヘラナデ調整が観察される。6は土師器甕の底部片で軽いヘラナデ調整がみられる。7は、床面ピットP<sub>1</sub>周縁の床面上に密着状態で出土した鉄製の馬具（くつわ金具）である。「はみ」と「鏡板」部分が残存していたもので、「はみ」の長さは約15cm、「鏡板」の直径は約6cmである。

### くつわ金具

図示できたこれら以外にも、内面黒色処理を施した坏の口縁部や、体部に段を有す内外黒色の土師器の坏片や須恵器甕の破片が埋土中から出土している。また、琥珀の親指の先大の原石が南東側の床面上より出土している。

## 第18号竪穴住居跡（第48図）

第19号竪穴住居跡と重複するが、これを切るものである。

西側を確認できなかったが、平面形は隅丸の方形を呈する。規模は、長軸が3.2m、短軸2.6mをはかる。壁は床面よりほぼ直に立ち上がる。

埋土は、A層からC層に大別される。A層は、黒褐色土を基本とするもので固さ、しまりとも中程度である。B層は床面の一部にまで堆積するものでやや暗褐色の土を基本とするものである。C層は壁際を中心に堆積するもので、褐色の砂質土を基本とする。東壁側では一部、カマドを構築したと考えられる白色粘質土の塊を混入するが、全体的には固さ、しまりともあまりない。

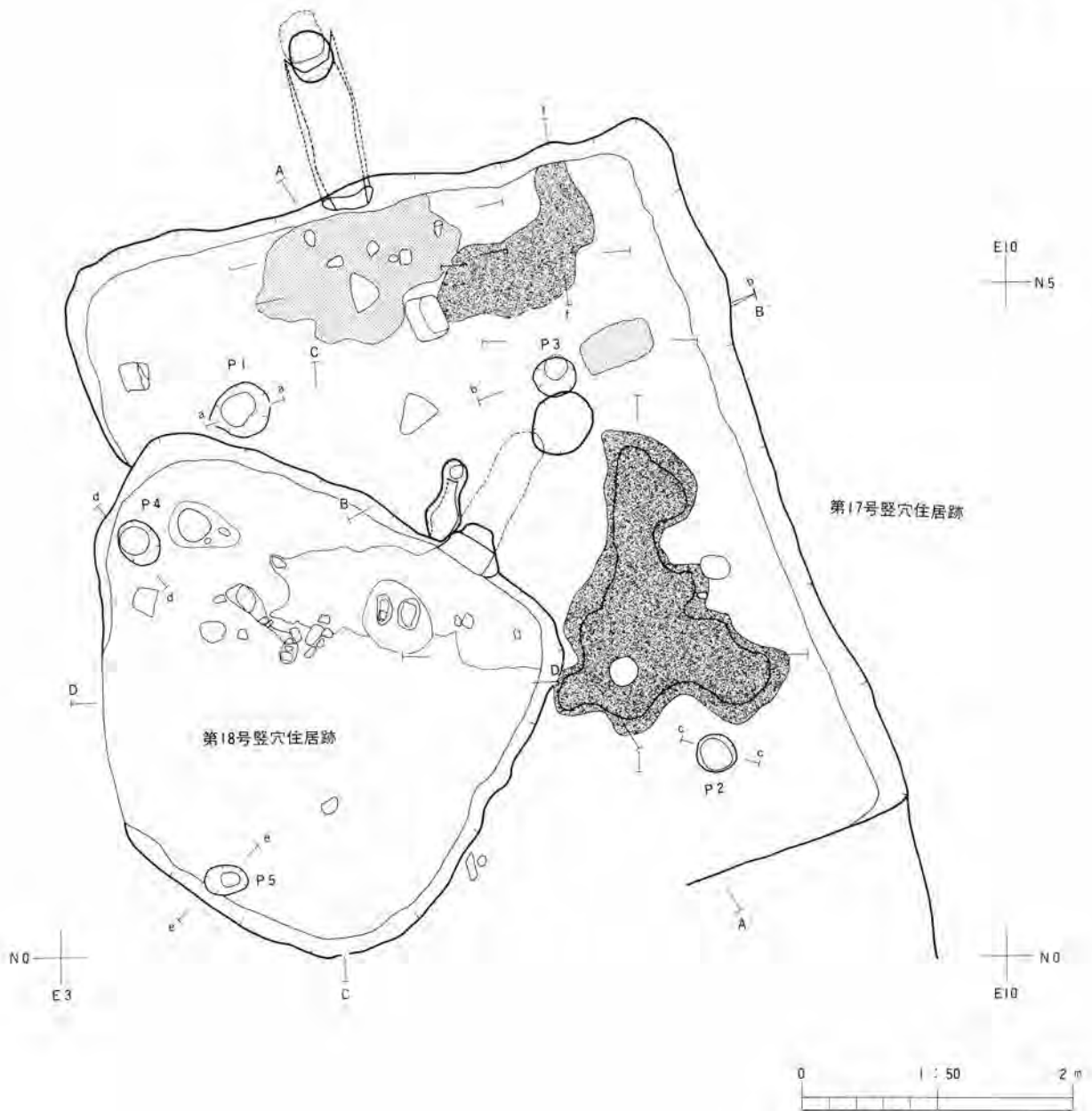
床面は、地山面をそのまま利用した平坦面である。

柱穴及び柱穴状ピットは、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を検出したが、柱穴配置等は不明である。

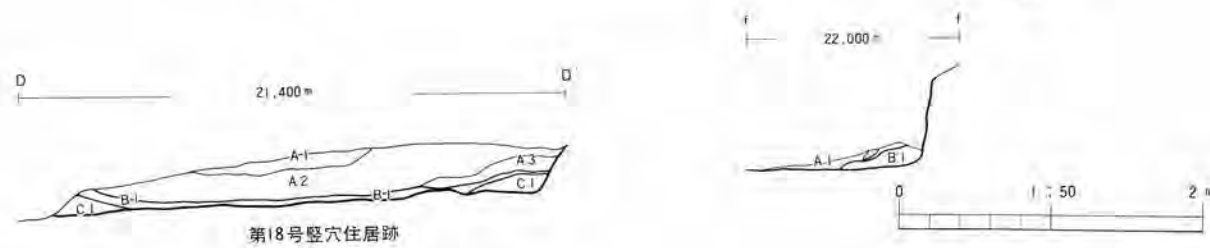
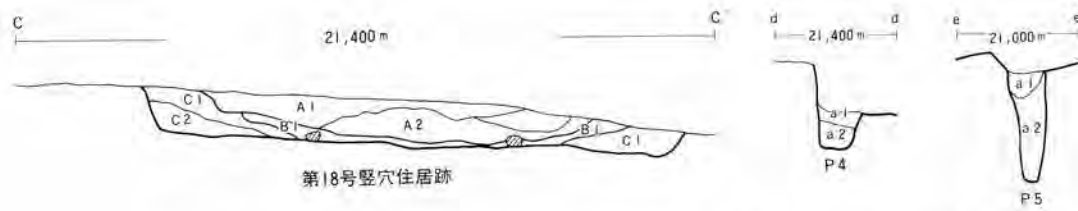
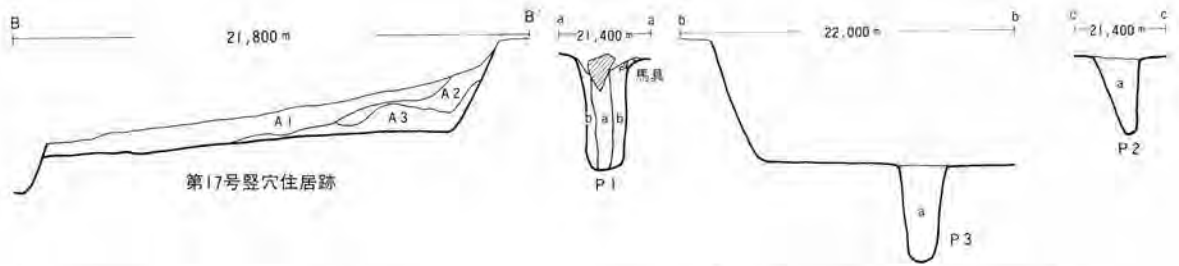
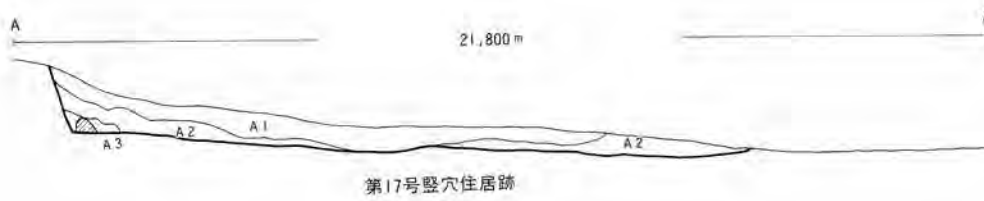
カマドは、北壁やや東寄りに存在する。カマド前面に明黄褐から灰白色の粘質土と中小礫の広がりを検出したが、カマドを構築していたカマドの崩壊土と考えられる。カマド両袖部分には袖状に粘質土が確認されており、この崩壊土除去後は、前述の第17号住同様礫を据えたピット等は確認できなかった為、礫を芯材として構築したものではないと思われる。煙道部分は住居外へ約1.2m程のびており、削り貫きで煙道部底面は、煙出口底部へ向かって急激に下り勾配の傾斜となっている。煙出口は0.5×0.4mの楕円形を呈し、やはり煙出口の埋土には中～小礫が多量に混入していた。

遺物は、床面上やカマド崩壊土より出土している。第53図1はカマド煙道部埋土より出土した土師器甕で、体部が膨らむ球胴形を呈するものである。口縁部は短かく外傾し、口縁部の調整は内外面ともナデ調整されている。体部外面は弱いヘラナデ、内面は強いヘラナデ調整が施こされている。口径は22cm、体部の最大径は32cmをはかる。底径は推定で12.0cmをはかる。2は、床面上から出土したロクロ成形の坏で、内面黒色処理後ヘラミガキ調整が施されている。3も、床面上から出土したロクロ成形の坏で、坏の体部下半から底部片で外面の一部に墨書痕が認められる。体部下半から底部にかけてヘラケズリ調整がされており、底部には糸切り痕が観察される。4はロクロ成形の甕で体部に最大径を有するものである。口縁部は短かく外反する。体部内外面の一部には強いヘラナデの再調整が認められる。5は球胴形の甕だが、体部の中下半部に最大径を有する。体部外面には、ヘラケズリ後に強いヘラナデ、内面には刷毛目調整が認められる。6は土師器甕の口縁部片である。7は小形甕の体部下半から底部片で底部が軽く張り出している。8は須恵器甕の口縁部片である。

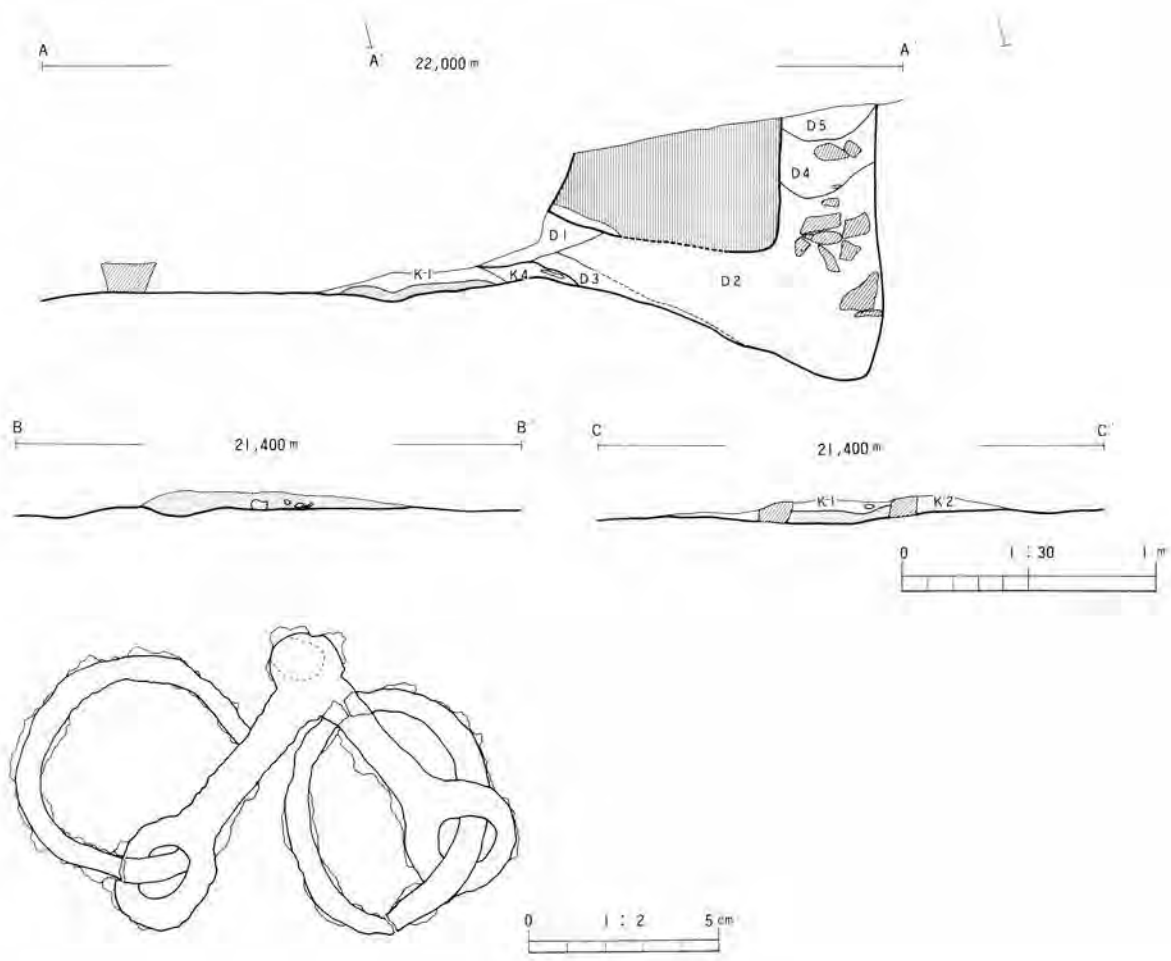
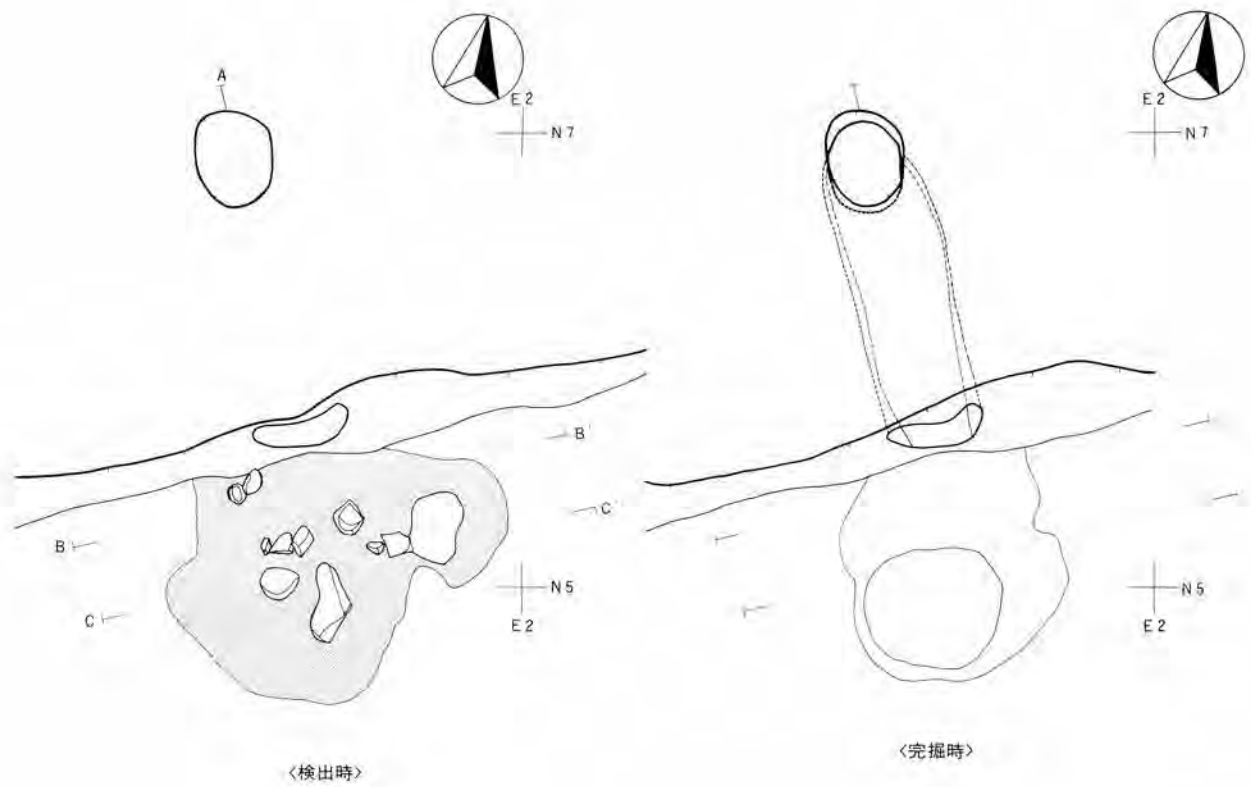
遺物



第48图 第17号、第18号竖穴住居跡平面图

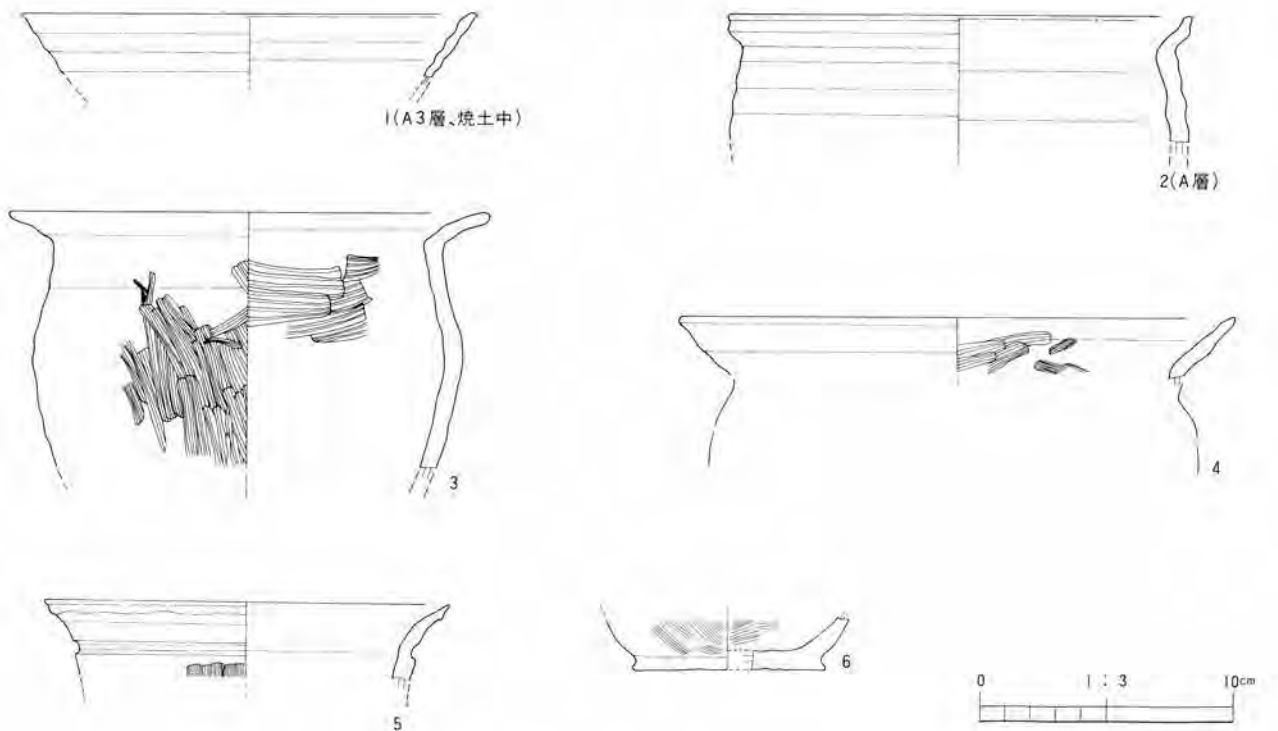
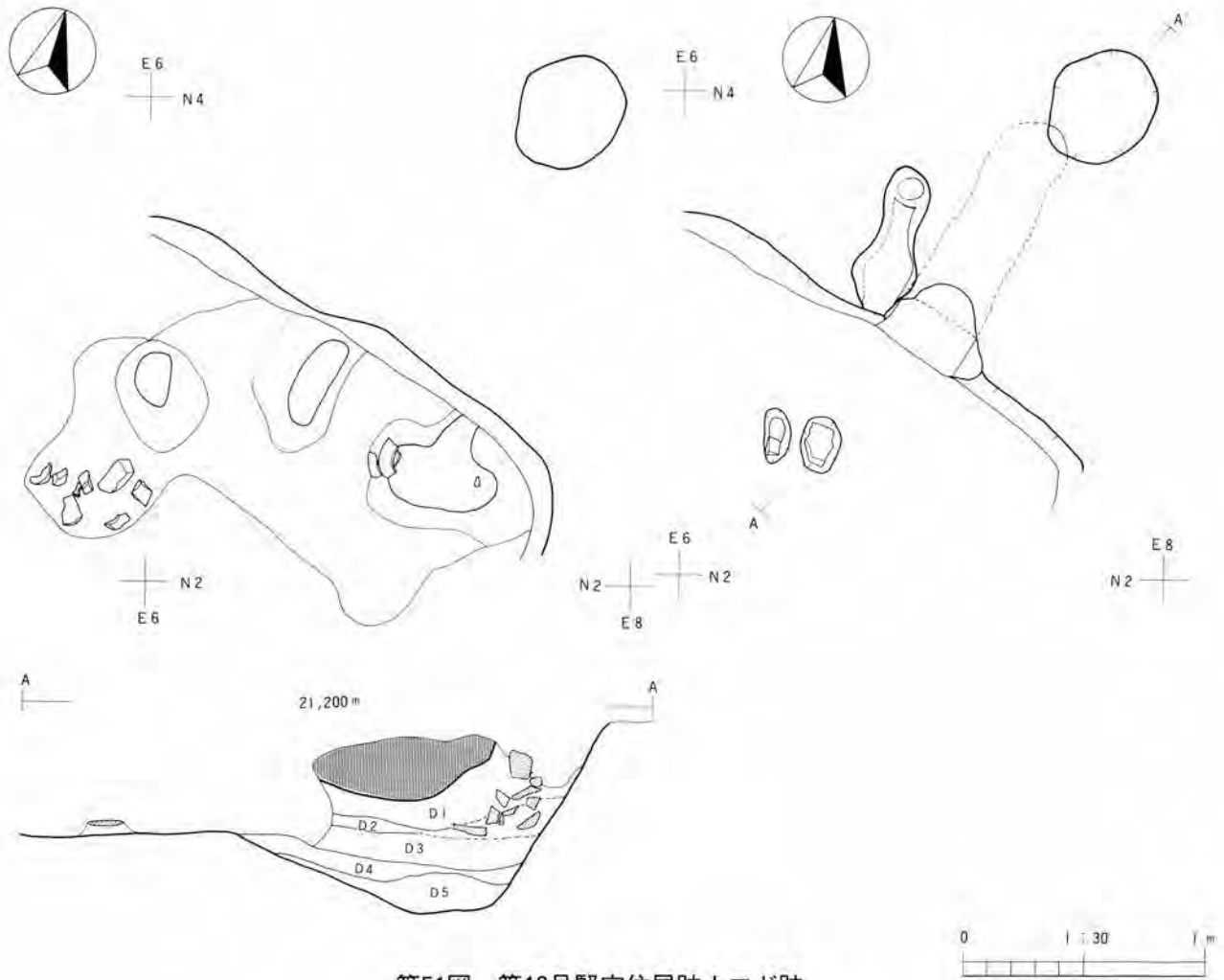


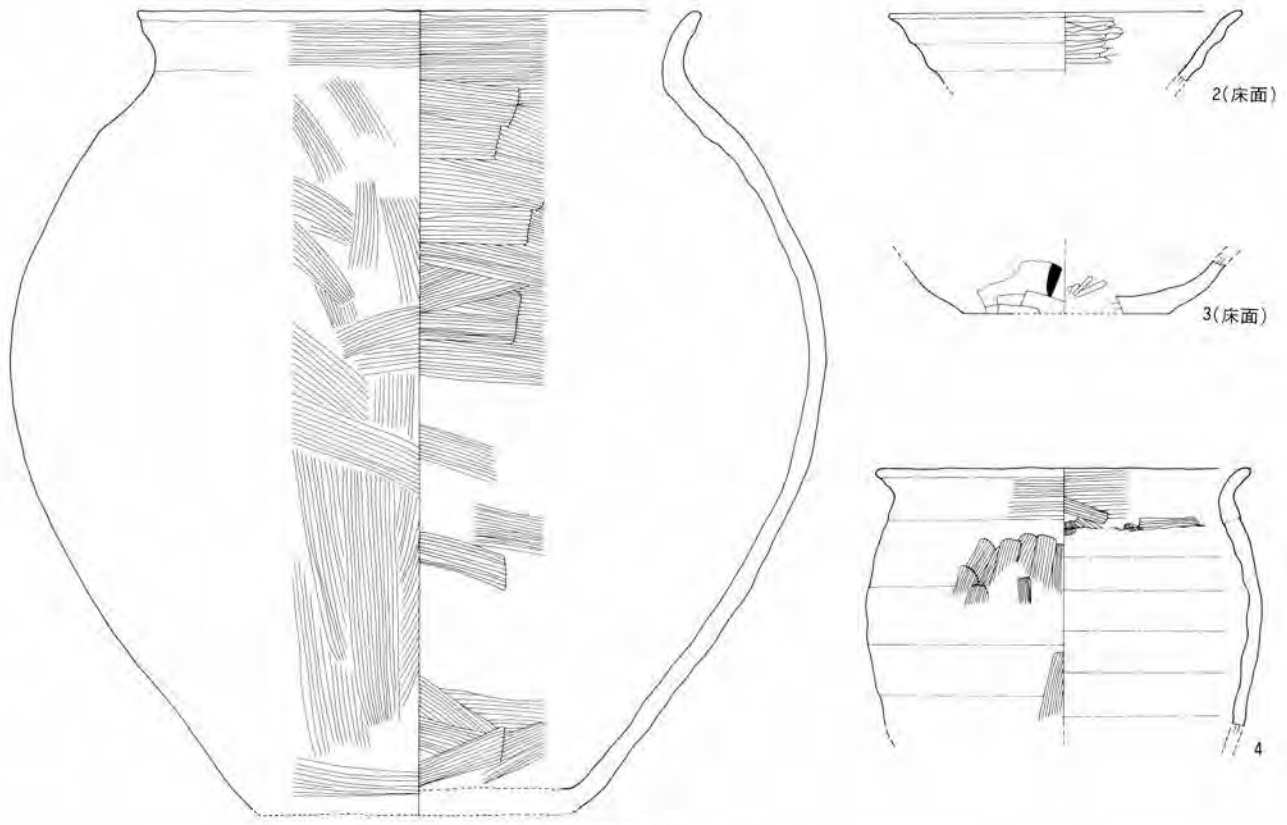
第49图 第17号、第18号竖穴住居跡断面图



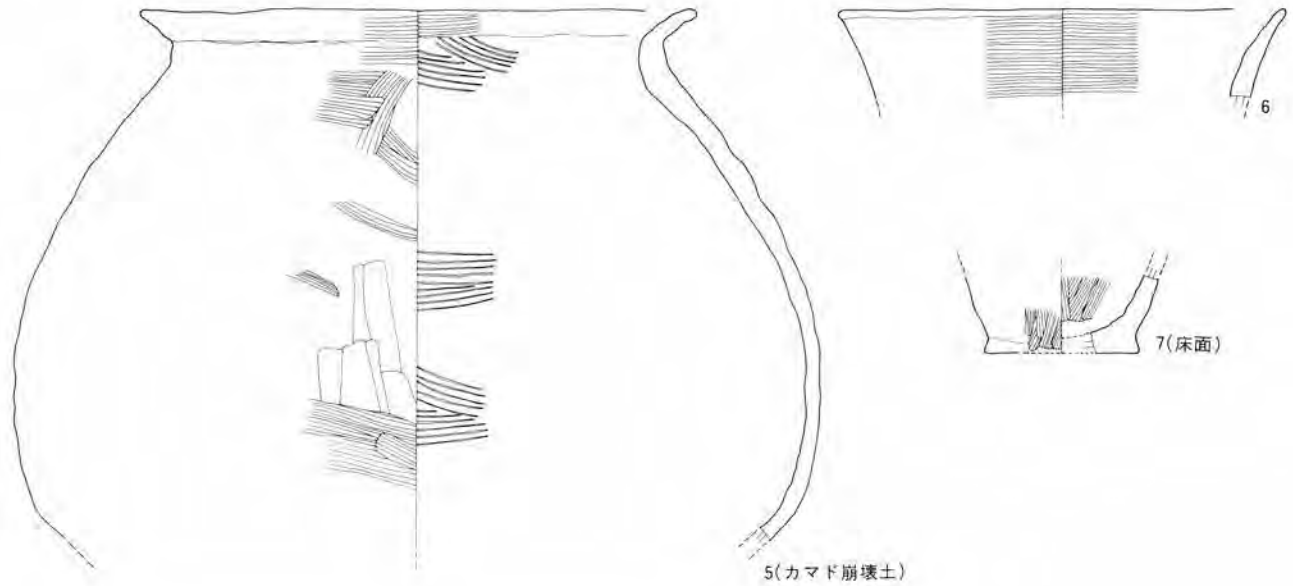
第50図 第17号竖穴住居跡カマド跡と出土した鉄製品（馬具）と出土した鉄製品（馬具）



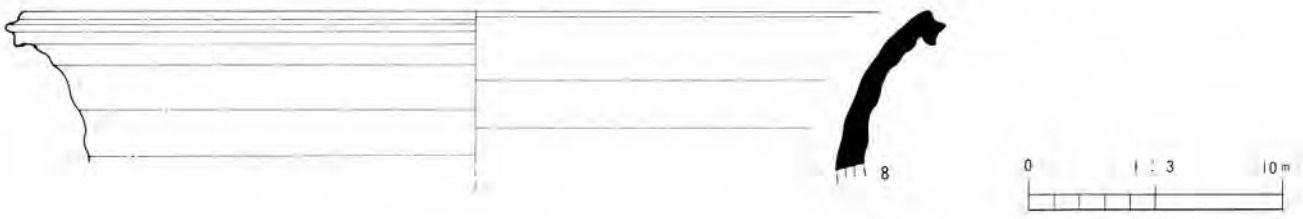




1(カマド煙道部埋土)



5(カマド崩壊土)



第53図 第18号竪穴住居跡出土遺物

#### 第19号竪穴住居跡（第54図）

D区調査区の東南部に位置する。後述する第20号、第21号竪穴住居跡と重複するが、これらを切る新しい時期のものである。

平面形は、方形を呈する。規模は、南北2.9m、東西2.7mをはかる。壁は床面より直に立ち上がり、北壁で壁高0.3mを残す。

埋土はA層から成り、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層に細分される。ともにやや暗い褐色土を基本とするもので、褐色土塊や炭化物の混入割合からA<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層とした。調査時のミスから、竪穴全体を把握できるような土層図を未作成のまま掘り進めてしまったため、詳細は不明と言わざるを得ない。

床面は、ほぼ平坦面で南側の一部に貼床を認められる。柱穴等のピットは、確認できなかった。

カマドは、北壁中央に存在する。カマド前面に焼土の広がり、カマドを構築したと考えられる粘質土（K<sub>1</sub>、K<sub>2</sub>層）を検出し、袖状の作り出しが認められただけで、焼土除去後は、礫を据えたピット等は確認できなかった。煙道部分は、住居外へ約1m程のびており削り貫きとなっており、煙出口底面へ向かって緩やかに下り勾配の傾斜となっている。煙出口は直径0.25m程の円形を呈する。

遺物は、極く少量出土している。第60図1は、口縁部に最大径を有する土師器甕で、体部外面は縦方向に弱いヘラナデ、内面は横方向の強いヘラナデ調整が施されている。2はロクロ成形の小形の甕である。口縁部が短く外反し、口縁上部が直立するようにぬける。

遺物

#### 第20号竪穴住居跡（第56図）

第19号竪穴住居跡と重複するが、第19号に切られ、第21号を切る。調査当初は、広範囲の焼土と礫の広がりしか確認できなかったものである。

平面形は、検出時にはすでに床面に近い状態で掘り過ぎていた為不明確だが、ほぼ方形を呈するものと推定された。規模は、長軸で約4.5mと推測される。

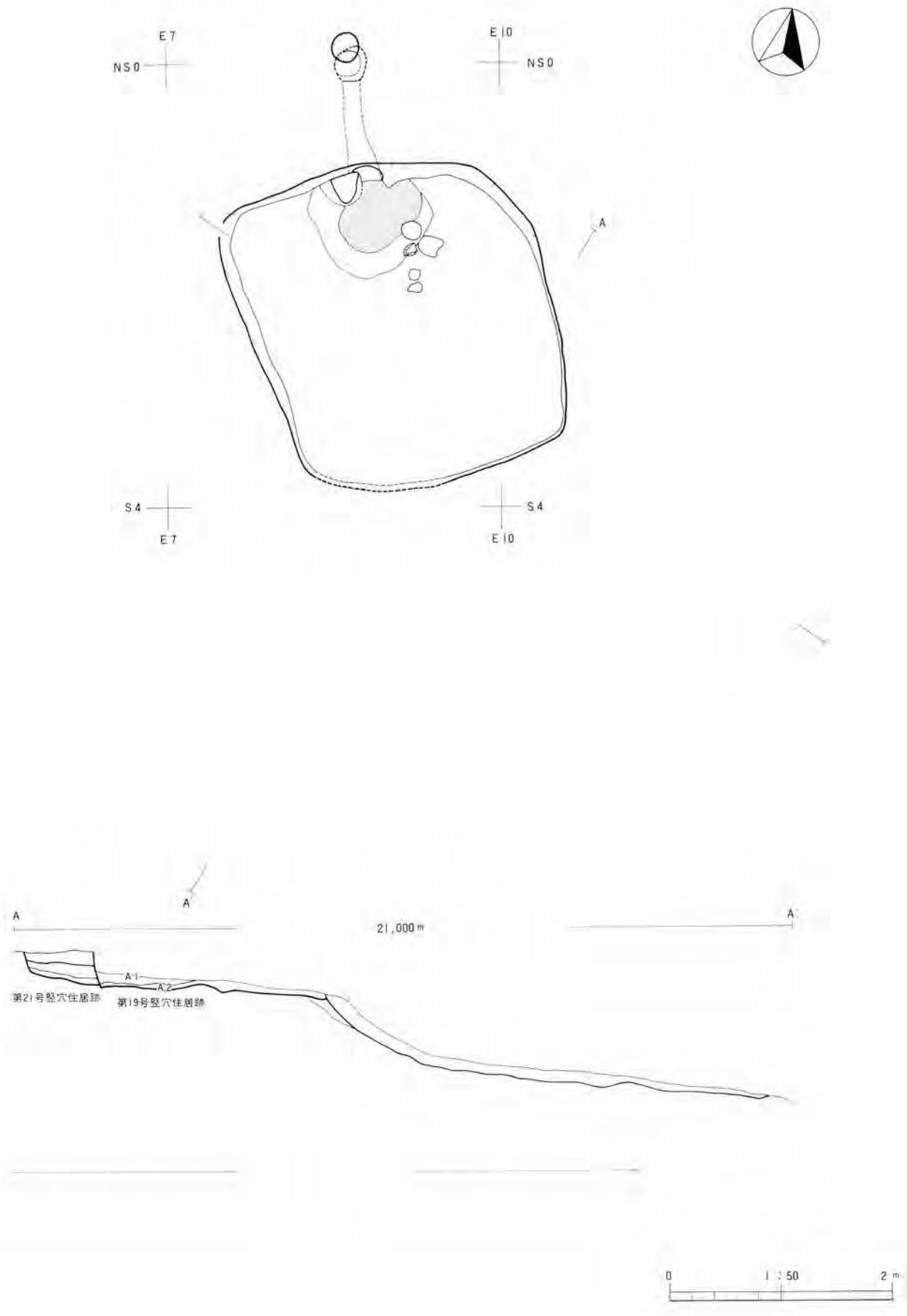
埋土は、前述の通りの状況であるため、不明である。カマドを構成していたと思われる黄褐色土の広がり、かなり焼けた焼土を確認しただけである。

床面は多少凸凹が認められたが、ほぼ平坦面である。

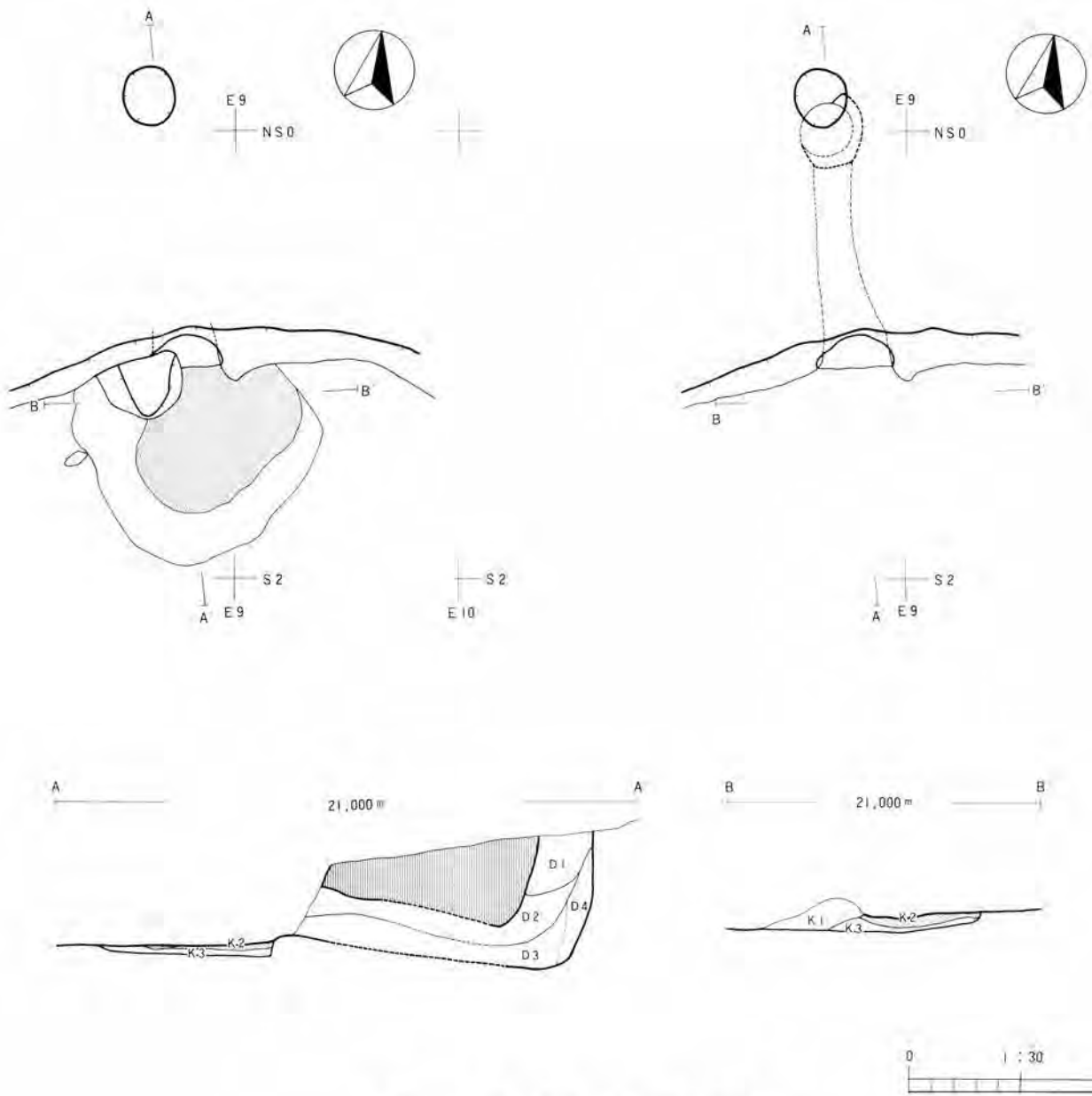
カマドは、東側中央付近に存在するが、すでに原形をとどめるほど破壊されており大から中礫と焼土が広がっており、元々はこの礫を利用して構築していたものと考えられる。煙道部分は住居外へ約1.2m程伸びているが、断面U字形の浅い溝状となっている。

遺物は、焼土の広がり中から出土している。第60図3、4で、どちらも土師器甕である。3は口縁部が短く外反する長胴形の甕で、内外面とも強いヘラナデ調整が施されている。4は体部が膨らみ体部に最大径を有する球胴形の甕と考えられるものである。

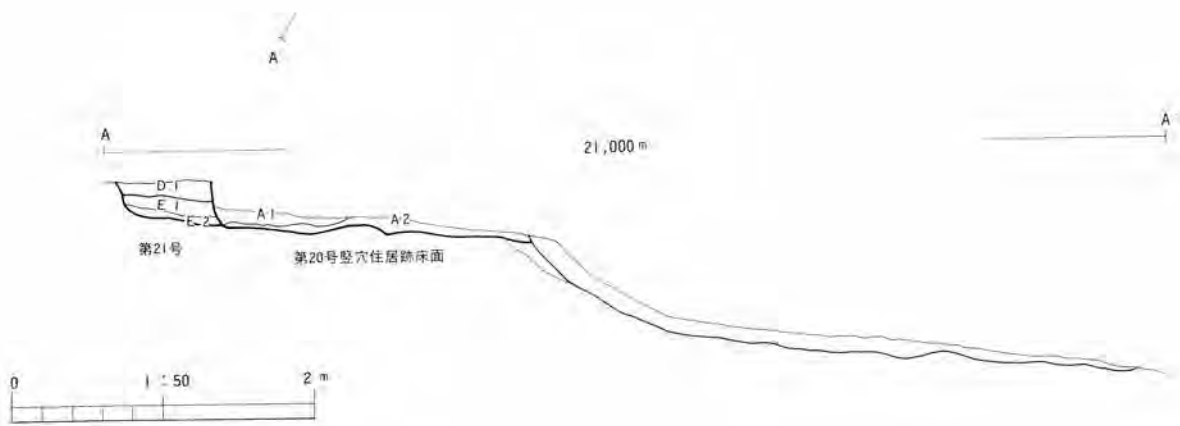
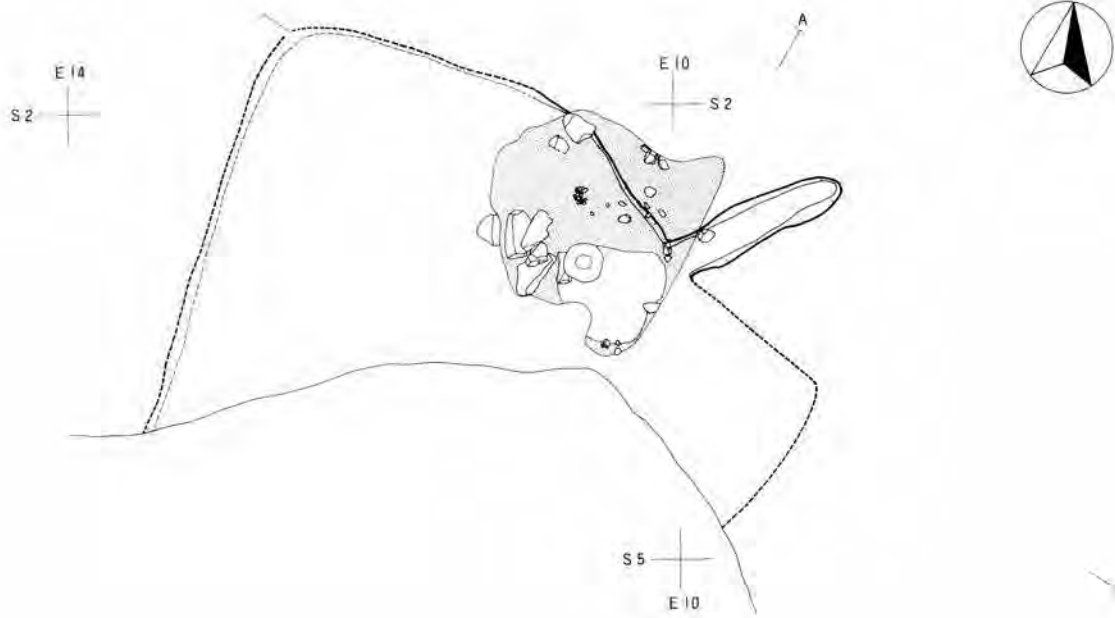
遺物



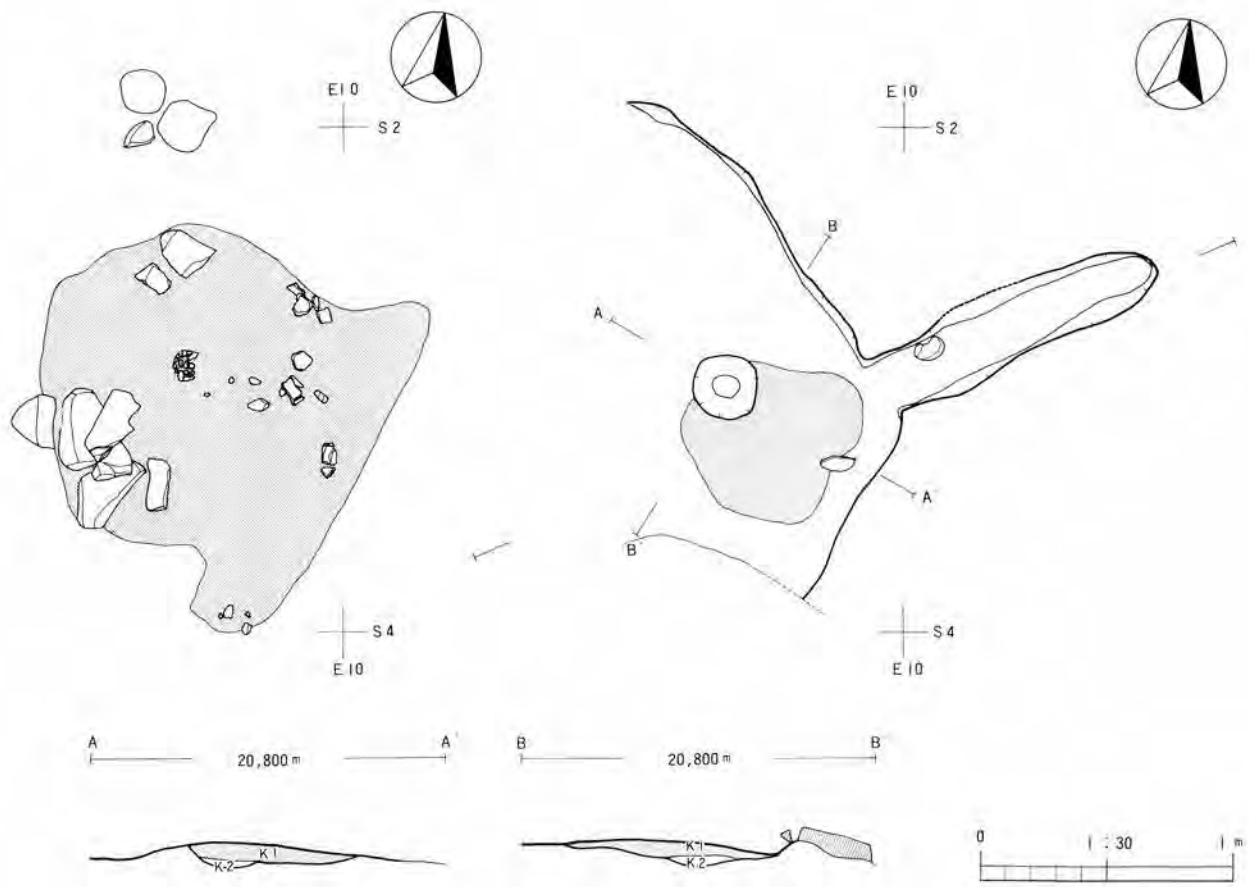
第54图 第19号竖穴住居跡



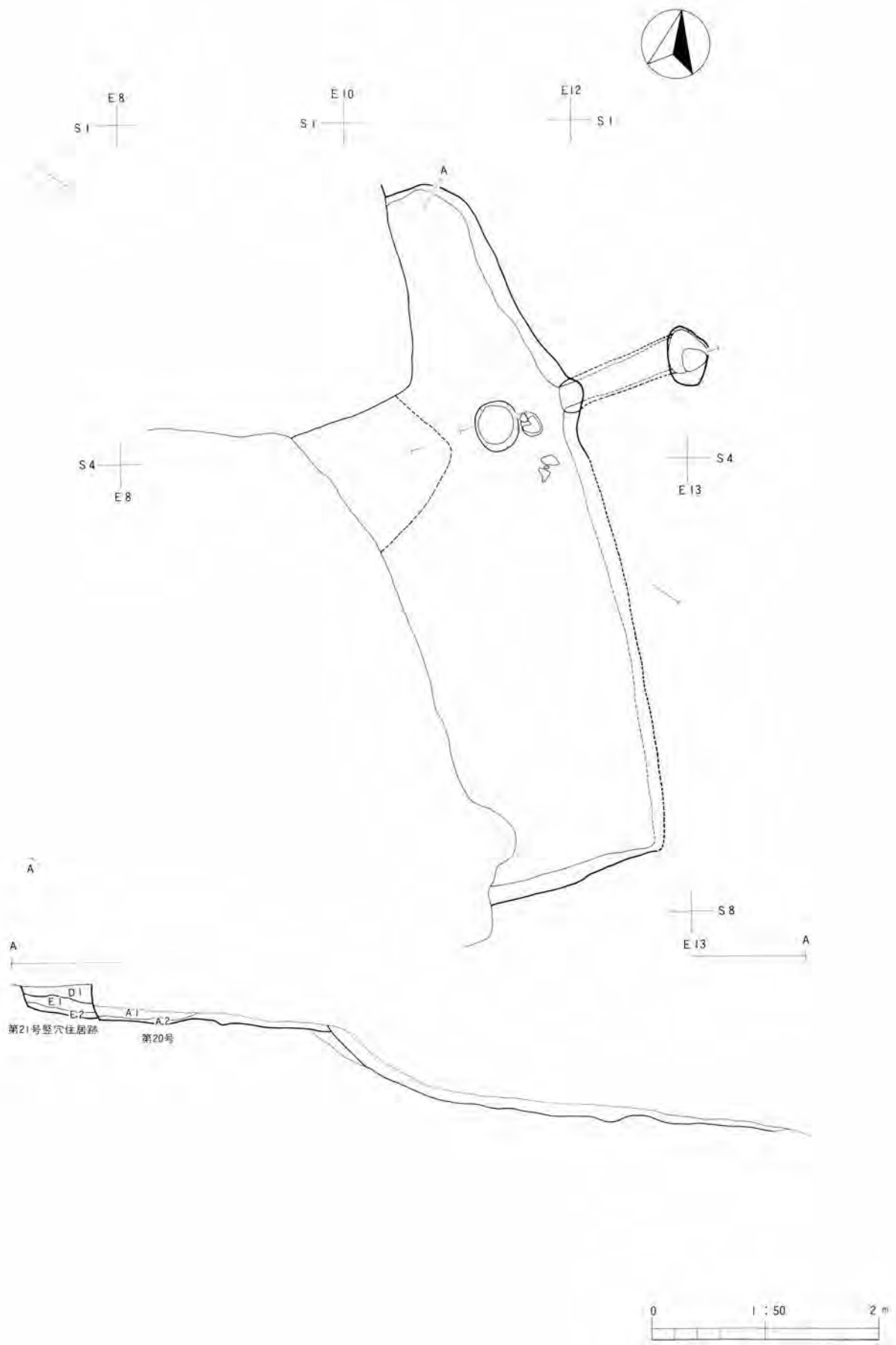
第55図 第19号竪穴住居跡カマド跡



第56図 第20号竖穴住居跡

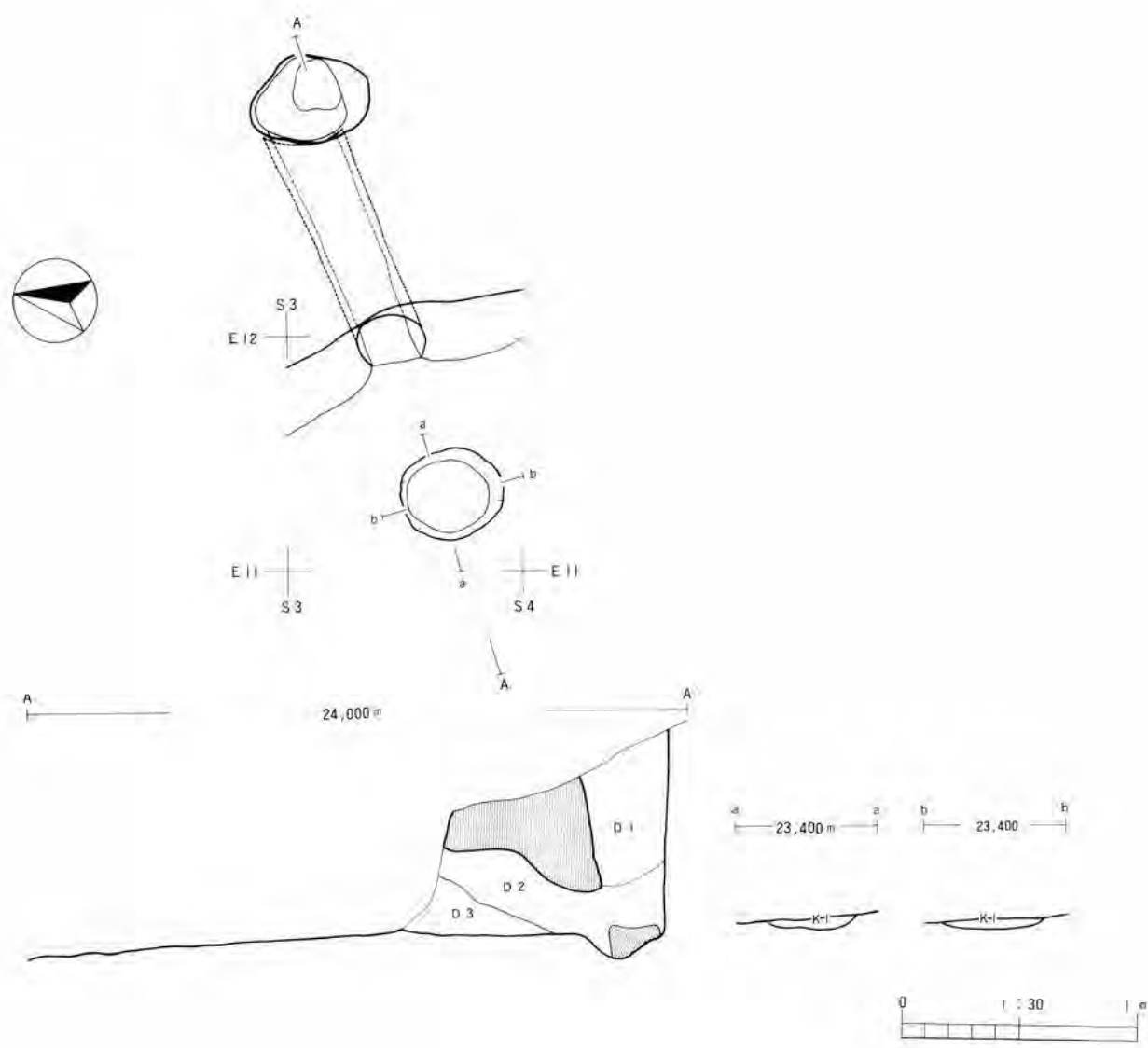


第57図 第20号竪穴住居跡カマド跡

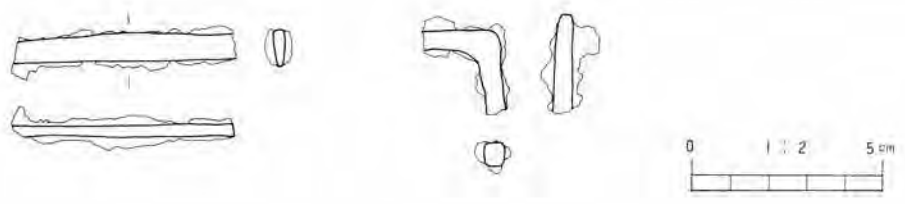
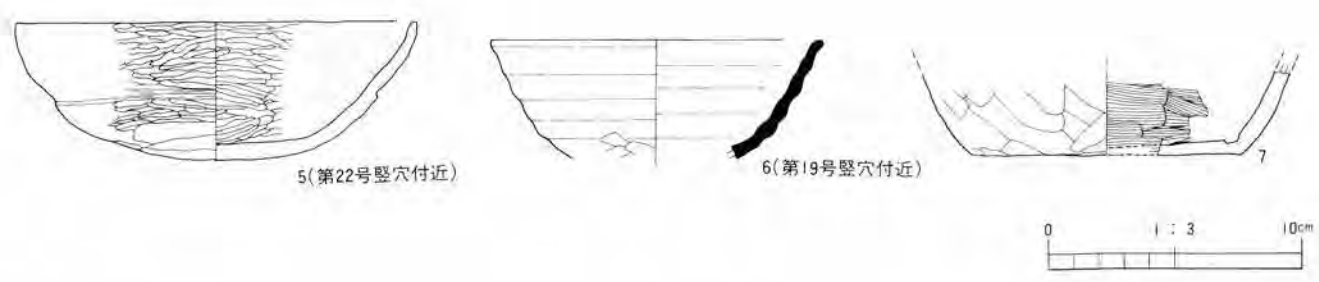
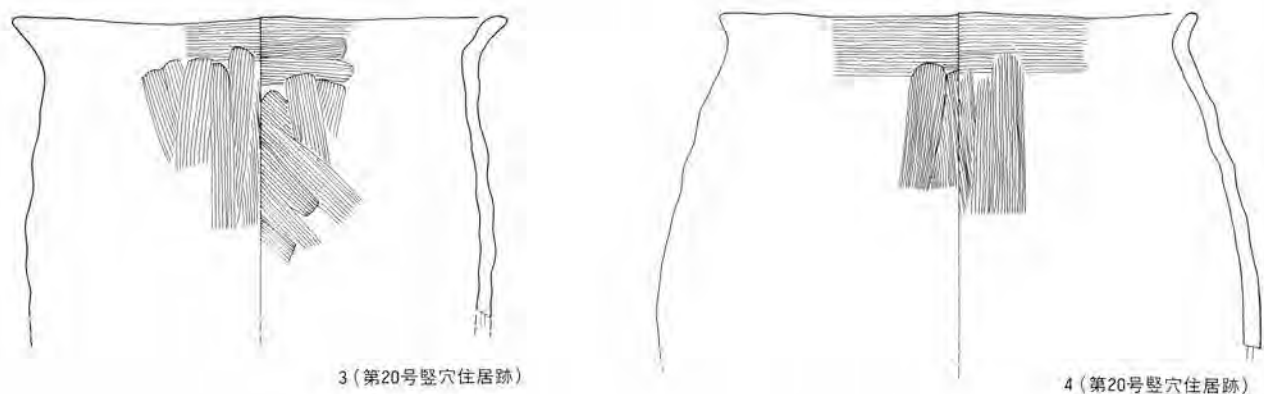
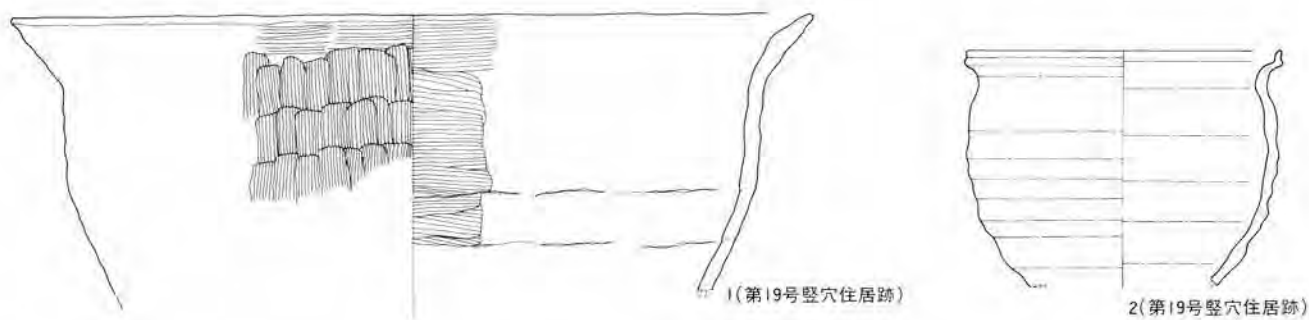


第58图 第21号竖穴住居跡

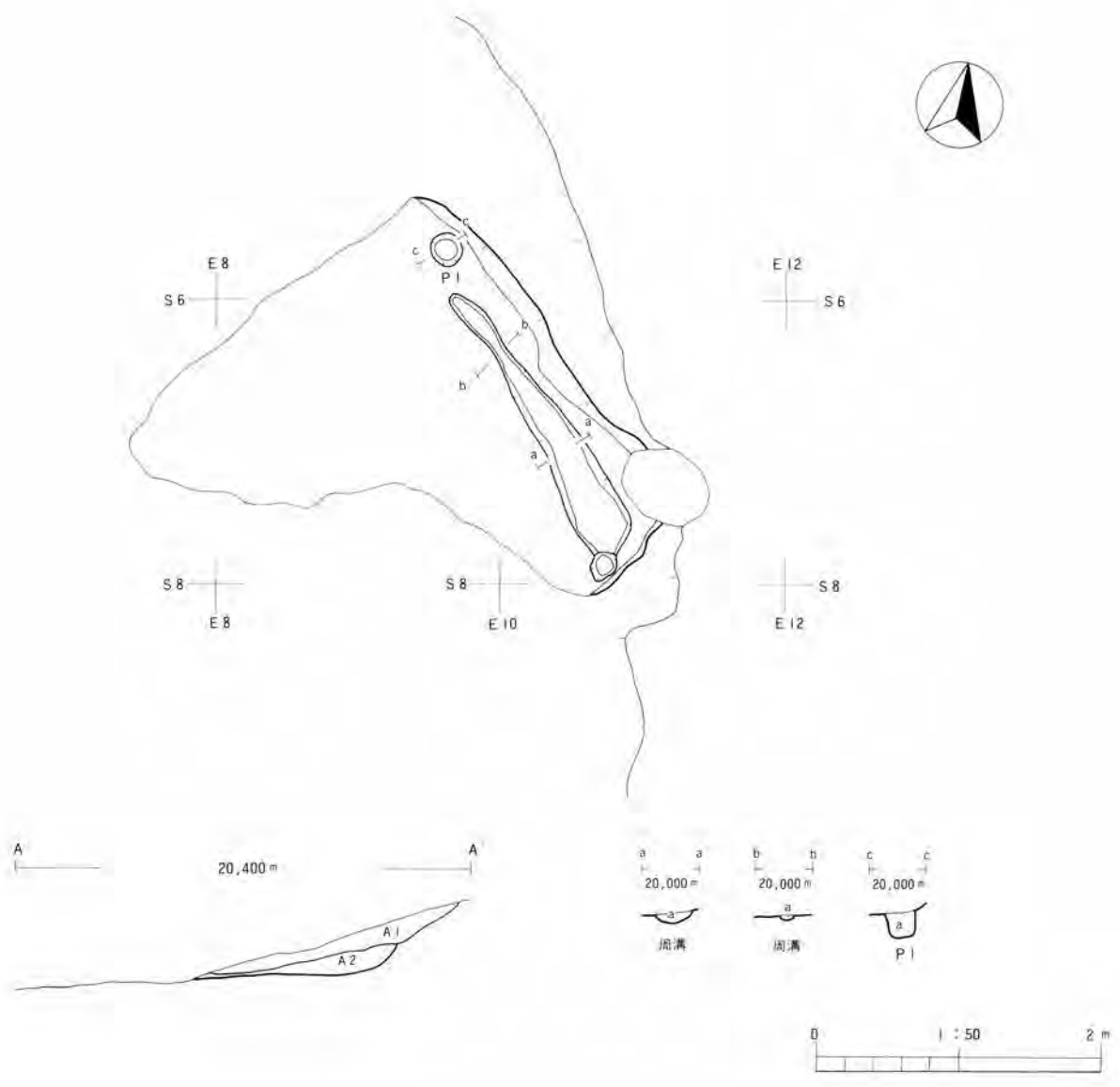




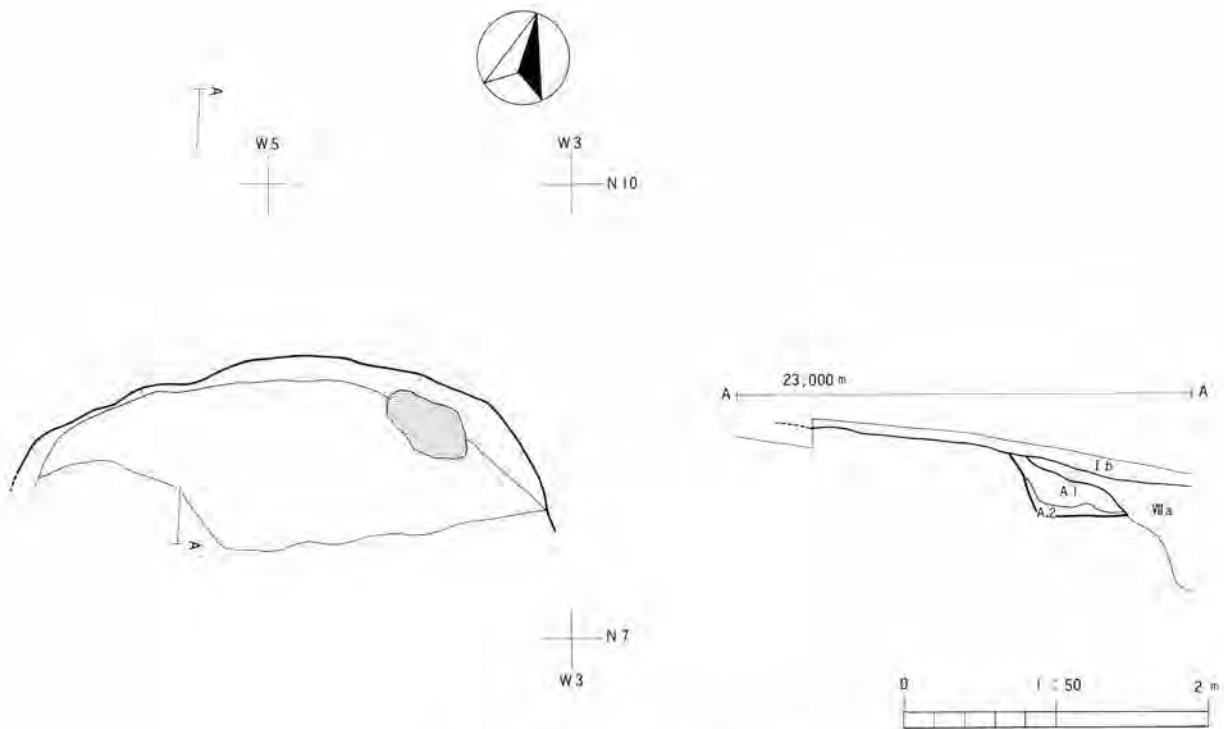
第59図 第21号竪穴住居跡カマド跡



第60図 第19号～第21号竖穴住居跡出土遺物



第61図 第22号竖穴住居跡



第62図 第23号竪穴住居跡

第23号竪穴住居跡（第62図）

D区の北西に位置する。検出面はⅦa層上面で、遺構の南側は削られている。住居の北端が弧状に遺存し、規模は東西3.5m、南北1.2mを測る。埋土は、固めの黒色土で、A<sub>2</sub>層には褐色土が混じる。壁は外傾しながら真っすぐに立ち上がる。床面は平坦であり、周溝、貼床柱穴は検出されなかった。東の壁際で焼土遺構を検出したが、煙道、煙出しなども出土せず、本遺構のカマドに伴うものではないことが確認された。

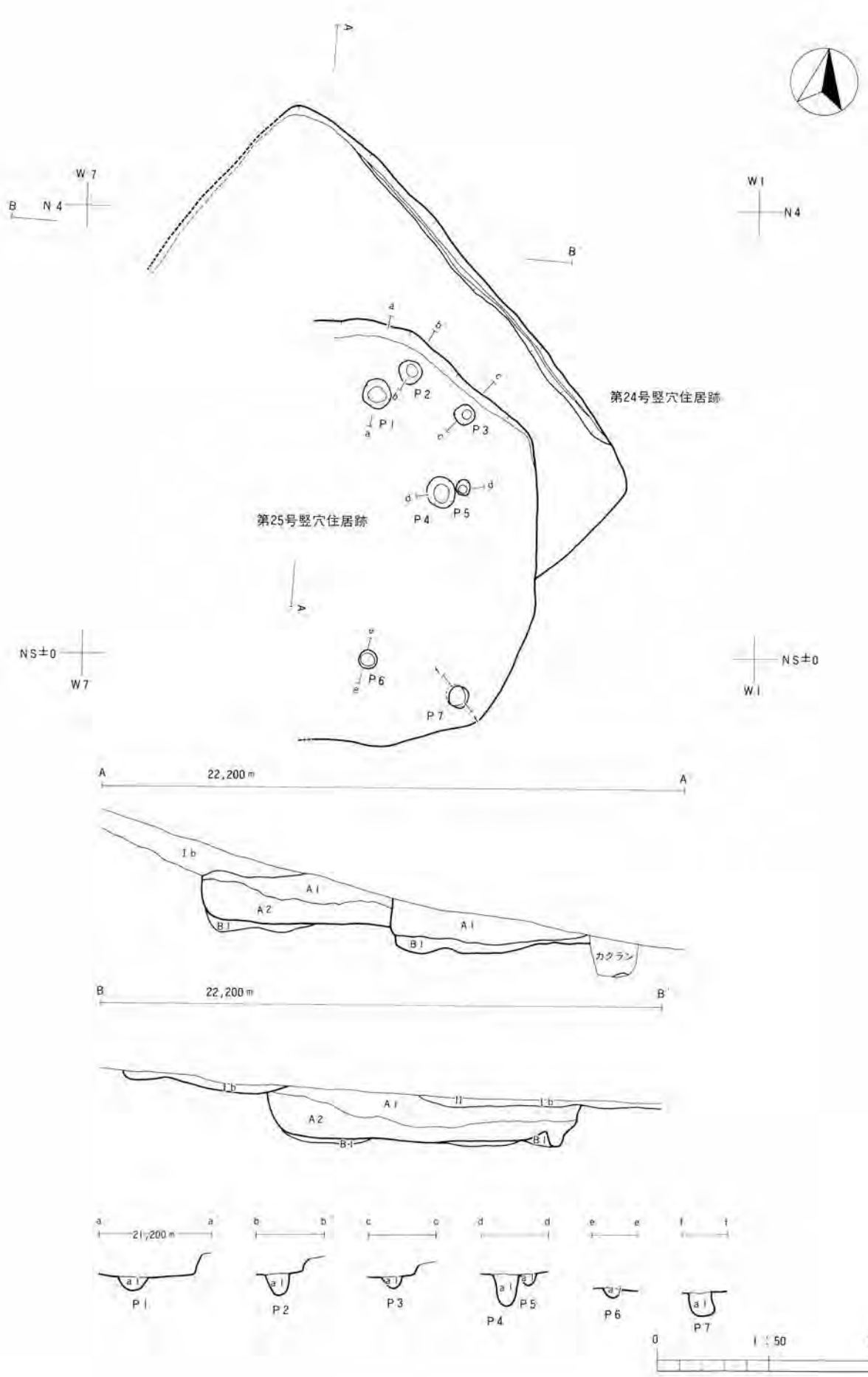
遺物は検出されていない。

第24号竪穴住居跡（第63図）

D区西側の中央部に位置する。検出面はⅣa層上面である。竪穴の北側の一部が検出し、南東部を第25号竪穴住居跡に切られている。平面形は方形を呈し、規模は南北2m、東西4.5mを測る。埋土は2層に分かれる。いずれも固めの暗褐色土層で、わずかに炭を含む。A<sub>1</sub>層はやや明るい層である。

壁はやや外傾しながら立ち上がり、高さ約0.4mである。床面は平坦で貼床が施されている。貼床は黒色土の混じる褐色土で、焼土粒や炭が含まれている。北壁際には周溝が巡っている。幅は0.05m～0.1mである。床面からの深さは0.05m～0.08mである。

柱穴、遺物は検出されていない。



第63図 第24号、第25号竖穴住居跡

#### 第25号竪穴住居跡（第63図）

当住居跡は第24号竪穴住居跡の南東に位置し、同住居跡を切っている。竪穴の東半分だけが確認できた。平面形は不整円形を呈し、径約4mを測る。埋土は2層に分かれる。いずれも黒褐色土を基本とするやや固めの層であるが、B<sub>1</sub>層には多量の黄褐色土が混じる。

壁は北面に遺存し、ほぼ垂直に立ち上がり、高さは約0.4mである。床面は平坦であり、貼床や周溝は検出されなかった。

柱穴は7本検出している。掘り方は浅く、深さ0.1m～0.26mを測る。柱あたりを確認できたものはなかった。

遺物は検出されていない。

#### 第26号竪穴住居跡（第64図）

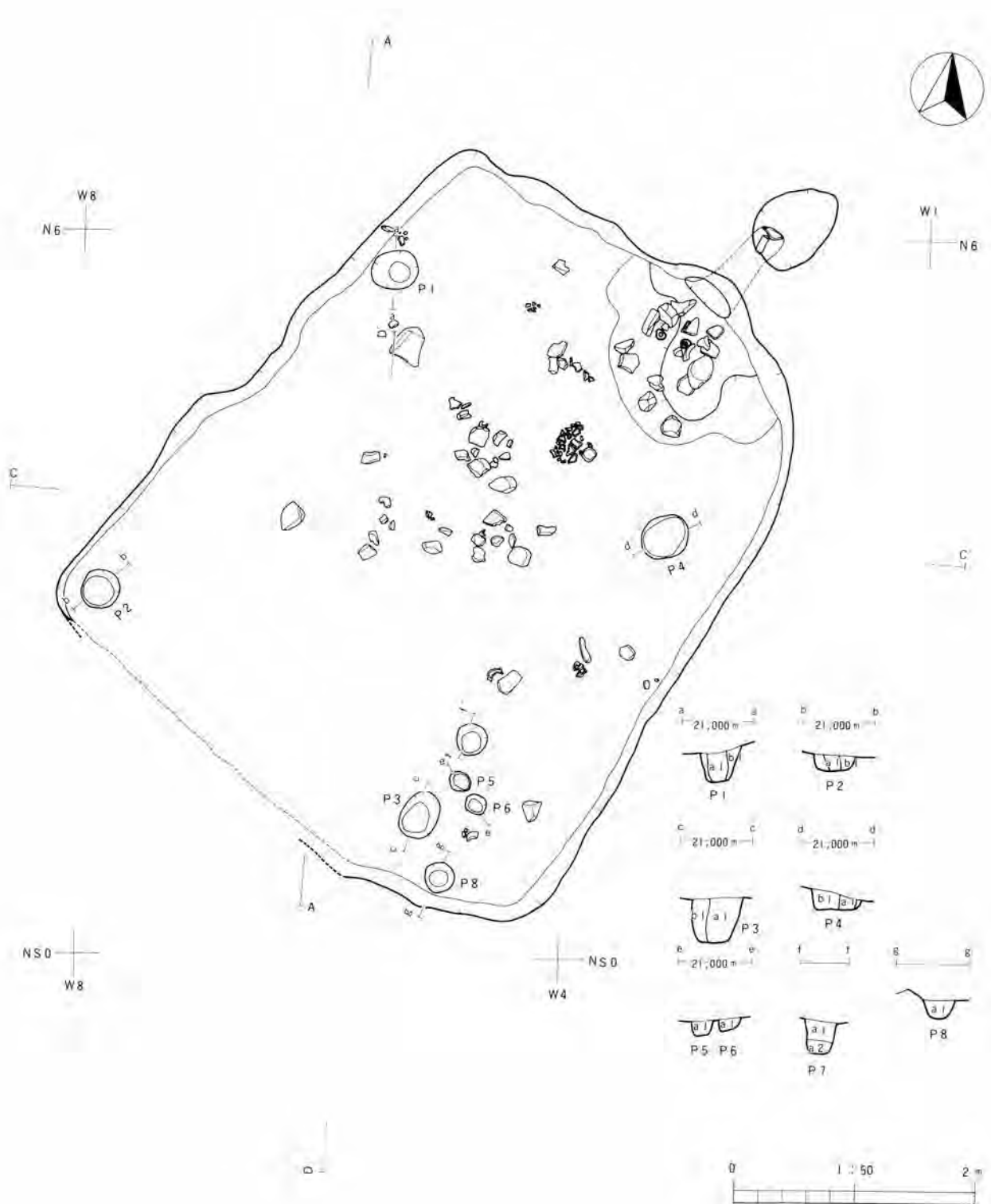
D区西側の中央に位置する。検出面はⅦa層上面である。遺構の大半の部分が後述する第27号竪穴住居跡と重複する。西側の地山と北斜面の堆積層を深く掘り込んで構築されている。遺構平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北約5.5m、東西約4.3mを測る。D区で最大規模の竪穴住居跡である。埋土は3層に大別できる。A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層は、固さ締まりともに中程度の暗褐色土で、微量の炭が混じる。A<sub>1</sub>層には褐色土が混じる。B<sub>1</sub>層はやや固めの黒色土で、炭、焼土塊を多量に含む。C<sub>1</sub>層は、粘性のあるシルト質の黒褐色土である。

壁は外傾しながら真つすぐに立ち上がっているが、壁高は、北と東西の面で0.2m～0.36mを測る。南壁は遺存せず、実線は貼床の範囲である。床面は平坦である。貼床は、後述するH20号の検出面に厚く施されている。貼床層は、ややかための黒褐色を基本土とし、黄褐色土が多量に混じる。周溝は検出されていない。

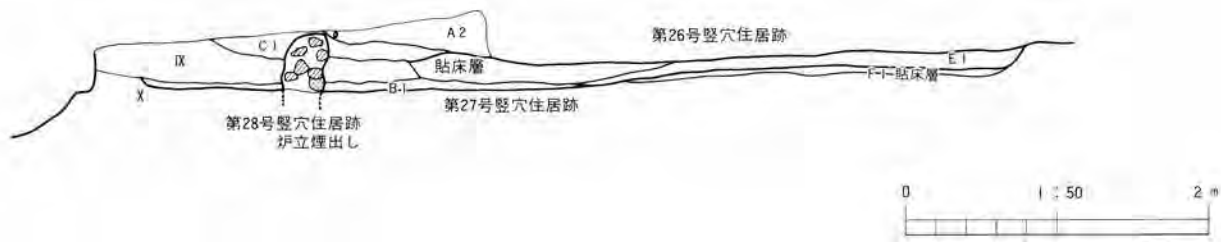
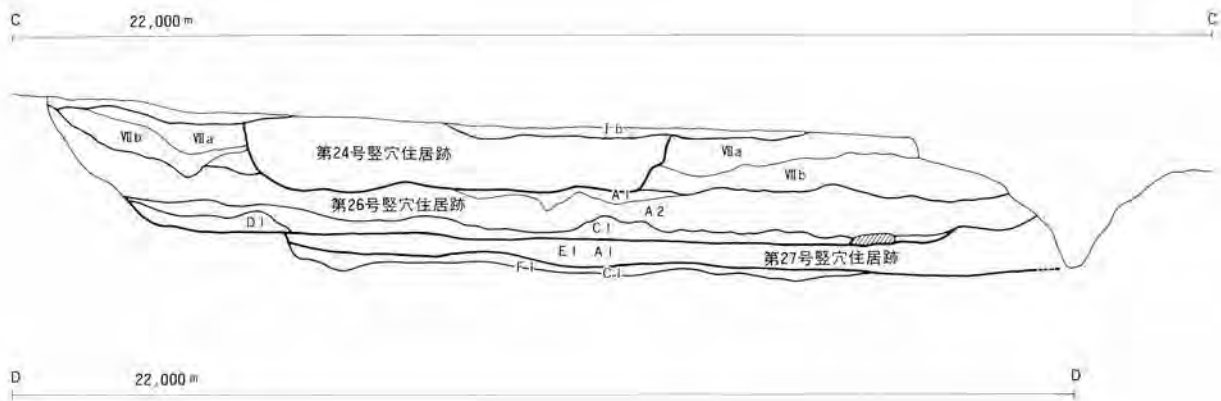
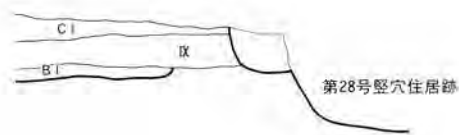
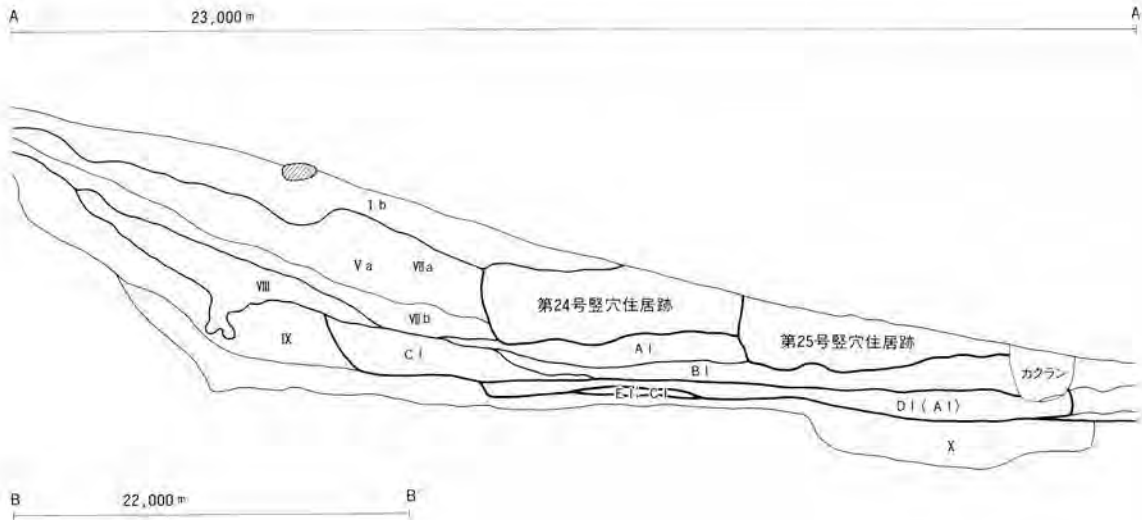
柱穴は8本検出された。深さは0.1m～0.38mを測り、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>で柱あたりが確認されている。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の距離は3.6m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>、3.2mで、それぞれ長方形の角に位置する。柱穴の埋土は、いずれも黒褐色土を基本とし、微量の粘土粒を含んでいる。

カマドは北壁の東寄りで1基検出した。天井部と袖部は崩壊しているが、芯礫と燃焼部に東西方向に並べられた2個の羽口が遺存している。燃焼部のおよそ0.5m×0.3mである。構築土層は、4層に分かれ、K<sub>1</sub>～K<sub>3</sub>層はかなり柔らかい層である。K<sub>1</sub>層は、シルト質の暗褐色土で、黄褐色土が混じり、礫、土器片を含む。K<sub>2</sub>層は、シルト質の明黄褐色土で、黒褐色土、にぶい黄橙土が混じり、礫、土器片、羽口、極く微量の骨片を含む。K<sub>3</sub>層は、シルト質の褐色土で、粘性があり、極く微量の骨片を含む。K<sub>4</sub>層は、固い赤褐色の焼土層で、最大厚は0.03mである。燃焼部はわずかに掘り窪められている。煙道は刳貫式で、長さは約0.9m、断面は楕円形を呈し、0.4m×0.3mを測る。煙道は煙出しに向かって約35度の傾斜で下がる。煙出しの平面形は楕円形を呈し、0.7m×0.55mを測り、深さは約90cmである。埋土は3層に分かれる。いずれもシルト質の軟らかく締まりのない層である。D<sub>1</sub>層は、黄褐色土混じりの黒褐色土。D<sub>2</sub>層は黒色土。D<sub>3</sub>層は暗褐色土混じりの褐色土層で、土器片、羽口、炭、焼土塊を含む。

このカマドはD区の中で最大規模のものである。

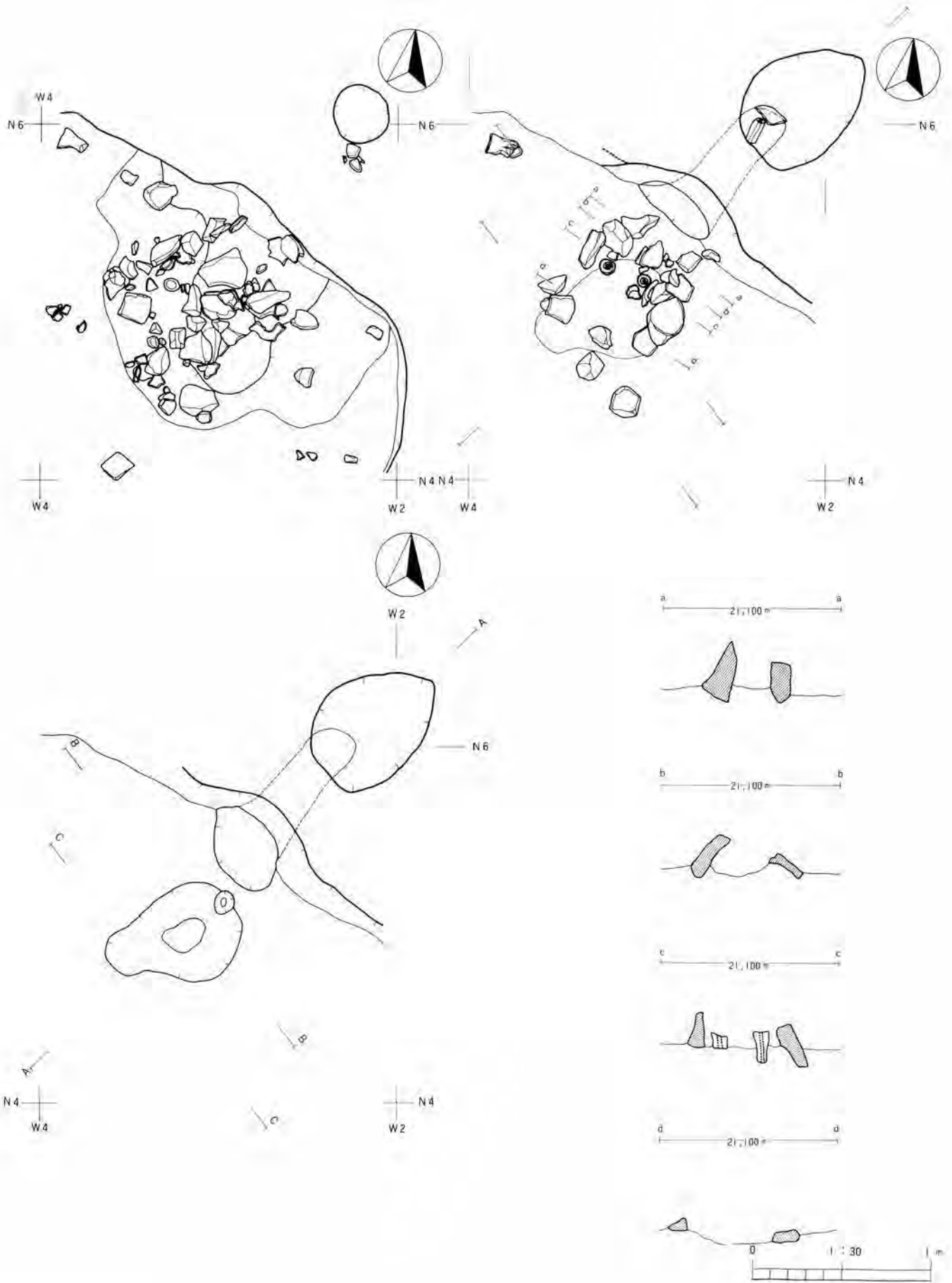


第64图 第26号竖穴住居跡

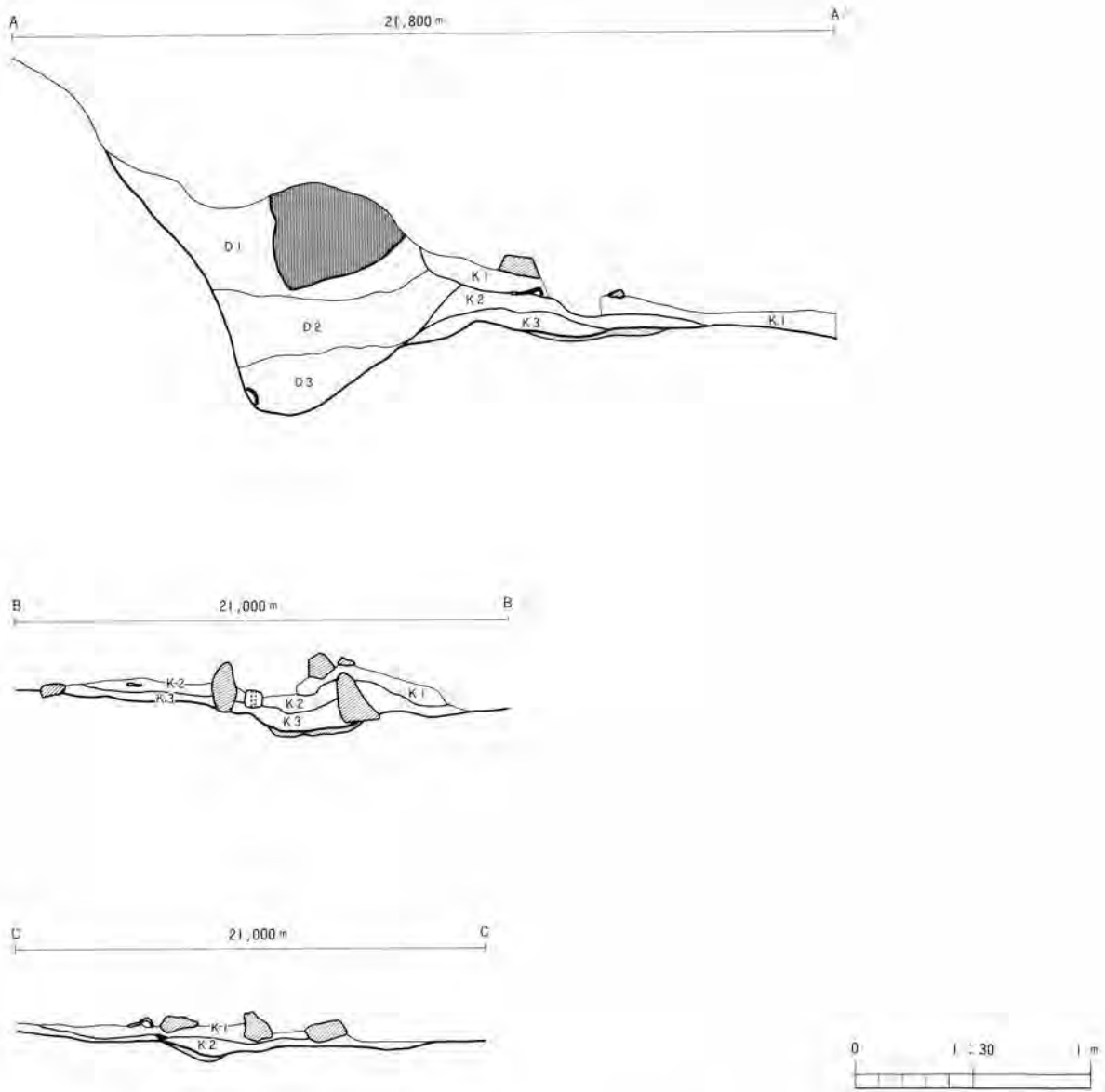


第65図 第26号竖穴住居跡土層断面





第66図 第26号竪穴住居跡カマド (1)



第67図 第26号竪穴住居跡カマド (2)

遺物

遺物はカマドの崩壊土から多量に出土している。(第68図～第70図)

1～3は土師器の坏である。1は、K<sub>3</sub>層から出土。色調は、外面はにぶい黄橙、内面は黒色処理されている。底部は肥厚し、やや内湾しながら立ち上がる。調整は、外面はヘラミガキを交えたヘラナデ、内面は放射状にヘラミガキが施されている。胎土は緻密で、焼成は良好である [一×一×5.6、カマド]。2は、K<sub>1</sub>層から出土。やや薄手で、底部からわずかに内湾しながら立ち上がる。外面底部は回転糸切り痕を残し無調整。内面には、横、斜方向にヘラミガキが施されている。内面に炭化物が付着している。胎土は橙色で白い細砂を含み、焼成は良好である [14.8×5.1×5.2、カマドK<sub>1</sub>層]。3は、K<sub>3</sub>層から出土。底部が肥厚し、底部から外傾

しながら直線的に立ち上がる。外面底部は回転糸切り痕を残し無調整。内面は黒色処理され、放射状にヘラミガキを施している。胎土はにぶい黄橙色で緻密、焼成は良好である [一×5.6×(1.0)、カマドK<sub>3</sub>層]。

4～8、13は床面から出土した甕形土器である。4は長胴甕、頸部のくびれは浅く、口縁部は真っすぐに立ち上がり、口唇部はわずかに外反し丸む。体部の脹らみはわずかで、底部は張り出している。最大径を口縁部にもつ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦方向、内面が横方向を主としたナデを施されている。体部には明瞭な輪積み痕が残り、外面底部分には木葉痕が残る。胎土は黒い粗砂を含み、焼成は良好である [15.6×26.5×10.4、床面]。5は長胴甕。色調はにぶい橙～灰色。頸部は「く」の字にくびれる。口縁部は外傾し直線的に立ち上がり、口唇部は先細りしやや尖る。体部の脹らみはわずかで、最大径を口縁部にもつ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦方向、内面が横方向のヘラナデを施されている。胎土には白い粗砂が混じり、焼成は良好である [15.4×一×一、床面]。6は小形の長胴甕。色調はにぶい橙～灰色。頸部のくびれは浅く、口縁部は外傾し真っすぐに立ち上がる。口唇部は先細りになりやや尖る。体部の脹らみは小さく、最大径を口縁部にもつ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヨコナデ、内面が縦方向のヘラナデが施されている。輪積み痕を残す。胎土には白と黒の粗砂が混じり、焼成は良好である [15.4×一×一、床面]。7は球胴甕か。色調はにぶい橙～橙。頸部は「く」の字にくびれる。口縁部は外傾し真っすぐに立ち上がり、口唇部で先細りになりやや尖る。体部の脹らみ加減からみて、最大径は体部になる可能性が大きい。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヨコナデ、内面が縦方向のヘラナデが施されている。胎土には白と黒の粗砂が混じり、焼成は良好である [20.6×一×一、床面]。8は甕の口縁部。色調はにぶい黄橙～灰色。口縁部は直線的に外形する。口唇部で先細りになりやや尖る。調整は、内外面ともヨコナデを施されている。胎土には白と黒の細砂が混じり、焼成は良好である [19.3×一×一、床面]。13は甕の底部。色調はにぶい黄橙～灰白色。底部の張り出しがなく、体部は外傾し直線的に立ち上がる。器面は全体に粗く、調整は外面が横方向のヘラケズリ、底面や内面は摩滅し観察できない。胎土は粗砂を含む [一×一×9.4、床面]。

9～12はカマドの崩壊土から出土したものである。

9は球胴甕。色調はにぶい黄橙～にぶい橙。頸部は「く」の字にくびれ、口縁部は直接的に外傾する。口唇部は丸む。体部は大きく内湾し、最大径を体部にもつ。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は、外面がヘラケズリを交えたナデ、内面がヘラケズリを交えたハケメが施されている。胎土には多量の粗砂が混じり、焼成は良好である [16.7×一×一、カマド]。10は長胴甕。色調はにぶい黄橙色で、外面の一部に黒斑をもつ。頸部は「く」の字にくびれ、口縁部は直線的に外傾し、口唇部は先細りになり端部は丸む。体部の脹らみは小さく、口縁部と体部の径はほぼ同じである。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともハケメを施されている。胎土には粗砂が混じる [22.5×一×一、カマド]。11は長胴甕。色調はにぶい黄橙～にぶい橙であり、一部に黒斑をもつ。底部はわずかに張り出し、底上げされている。

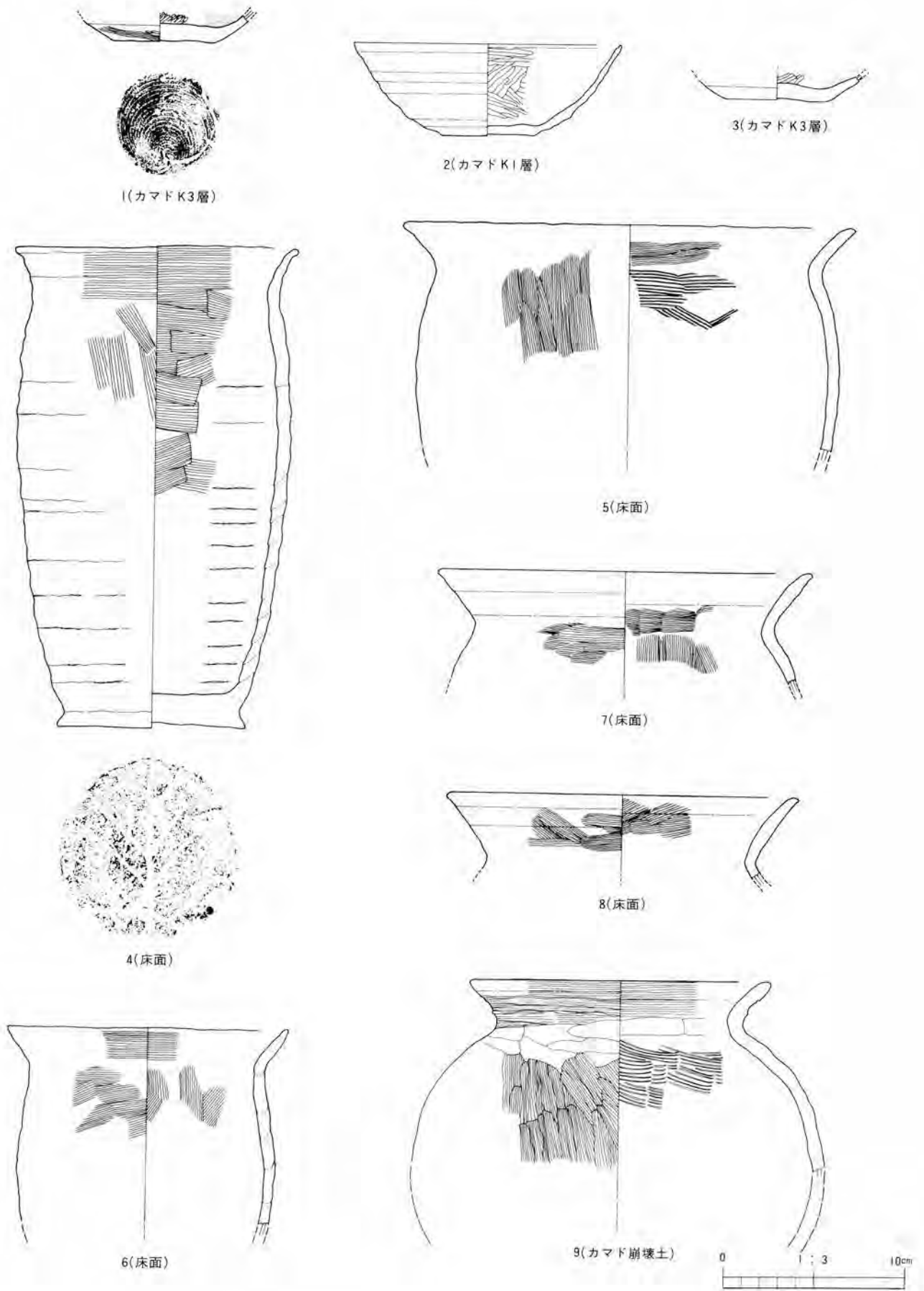
体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。調整は、底部は丁寧なヘラナデ、体部は内外面とも縦方向のヘラナデが施され、体部には明瞭な輪積み痕が残る。胎土には粗砂が含まれ、焼成は良好である [一×一×8.7、カマド]。12は甕の底部。色調はにぶい黄橙色。底部に張り出しはなく、体部はやや内湾しながら立ち上がる。調整は、底面外部はヘラミガキ、体部は外面がナデの交じる縦方向のヘラケズリ、内面がヨコナデを施されている。胎土は細砂の混じる褐灰色で、焼成はあまりよくない [一×一×9.6、カマド]。14は甕の底部。色調はにぶい黄橙色で、外面の一部に黒斑をもつ。底部は一部がわずかに張り出し、体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。調整は、外面にナデ、内面にはハケメを施している。底部外面は剥離が甚だしく観察できない。胎土には白い細砂が混じり、焼成は良好である [一×一×11.0、カマド]。15は甕の底部。色調はにぶい黄橙色。底部は張り出し、体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。調整は、外面にナデ、内面にハケメを施している。胎土には白い細砂が多量に混じり、焼成は良好である [一×一×8.7、カマド]

16~18は土製品である。いずれも羽口で、カマドの中から出土している。

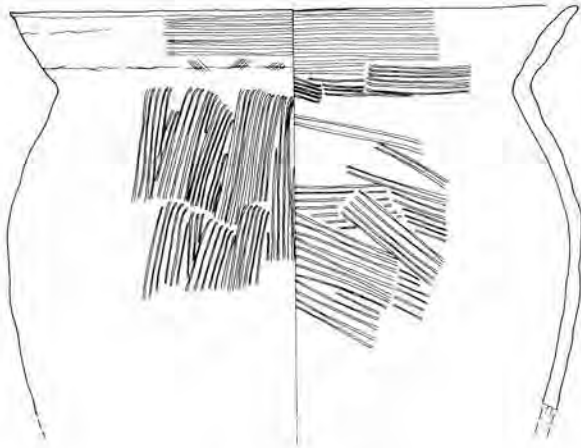
16はカマドの焚口に据えられた2個の羽口のうち東側のものである。溶滓も付着しておらず未使用のものと思われる。内径は2.4cm~3.0cmを測り、先端部でやや大きくなっている。調整は縦方向のヘラナデが施され、「L」字状の刻みが残っている。胎土はにぶい黄橙色であるが、網点は橙色に焼けている部分を示す。17は西側に据えられていた羽口である。23と同じく溶滓の付着はなく、やはり未使用のものと思われる。内径は3.0cm~3.1cmを測る。調整は、ヘラケズリ、ヘラナデが施されている。胎土は、白い細砂を含み、網点の範囲は赤褐色に焼けている。18は煙道埋土D層から出土したものである。16、17と同じく溶滓の付着はない。内径は2.7cm~2.9cmを測る。調整は、ヘラナデが施され、数箇所に小さな刻みが残る。胎土はにぶい黄橙色である。

19~25は埋土C層から出土したものである。

19は長胴甕。色調はにぶい黄橙~橙。頸部は「く」の字にくびれ、口縁部は直接的に外傾し、口唇部は丸む。体部の脹らみは小さく、最大径を体部にもつ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦方向のヘラナデ、内面が横方向のハケメが施されている。胎土には少量の粗砂が混じり、焼成は良好である [19.0×一×一、NE区最下層]。20は甕。色調はにぶい黄橙~橙色である。頸部のくびれは浅く、口縁部は短く直線的に外傾する。口唇部で垂直に立ち、端部はやや尖る。体部の脹らみは小さく、径は口縁部とほぼ同じくらいになるものと思われる。胎土には粗砂が含まれ、焼成はあまりよくない [18.4×一×一、埋土C層]。21は小形甕の口縁部。色調はにぶい黄橙色。口縁部は外湾しながら立ち上がり、口唇部で先細りになり端部が尖る。口縁部の下位に沈線が入る。調整は、内外面ともヨコナデであるが、外面の一部に縦方向のナデが施されている。胎土は白い細砂を含み、焼成は良好である [16.0×一×一、西側埋土]。



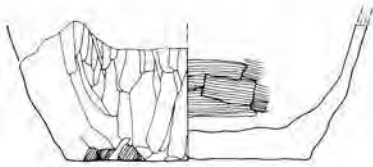
第68図 第26号竪穴住居跡出土遺物 (1)



10(カマド崩壊土)



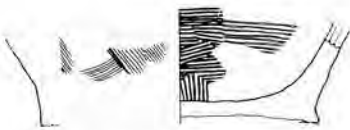
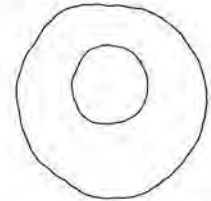
11(カマド崩壊土)



12(カマド崩壊土)



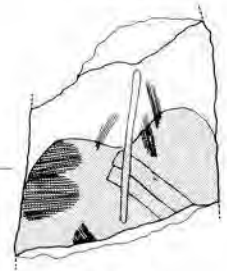
13(床面)



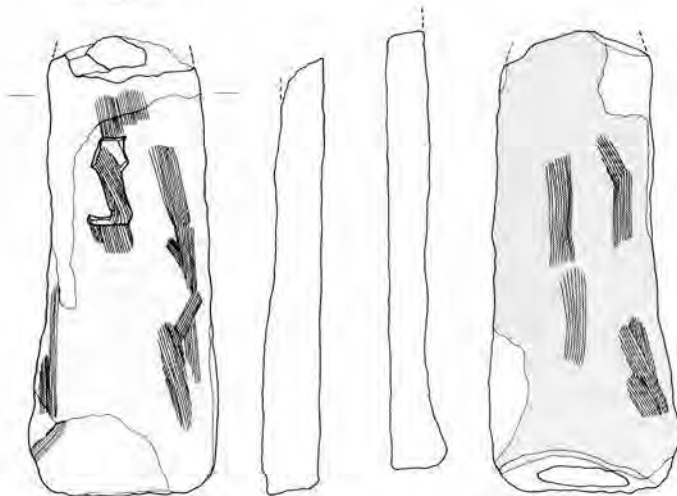
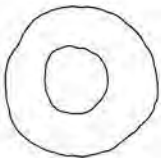
14(カマド、煙道)



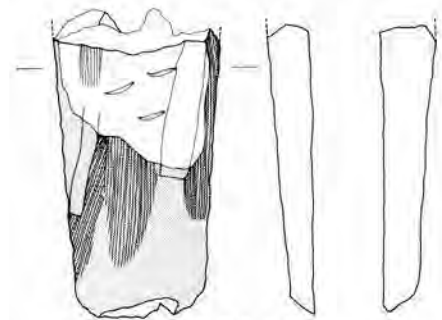
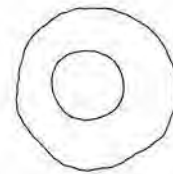
15(カマド、煙道)



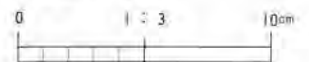
17(カマド)



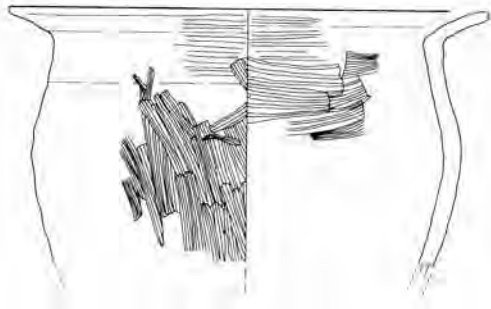
16(カマド)



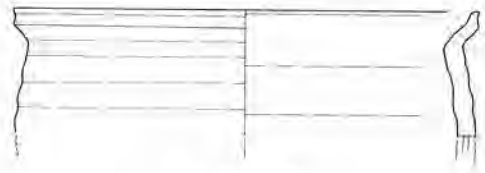
18(煙道、D3層)



第69図 第26号竪穴住居跡出土遺物 (2)



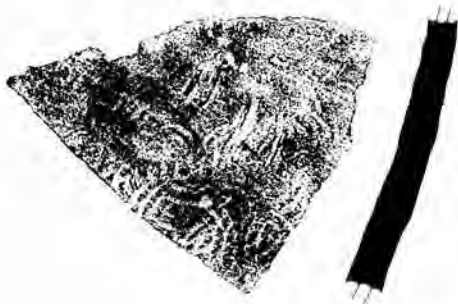
19(埋土C1層)



20(埋土C1層)



21(埋土C1層)



22(埋土C1層)



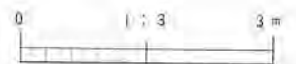
24(埋土C1層)



25(埋土C1層)



23(埋土C1層)



第70図 第26号竖穴住居跡出土遺物 (3)

22～25は須恵器である。

22は体部片。外面が平行叩目、内面が竹管様の押圧痕が残る。胎土には、粗砂が混じり、焼成は良好である。23は体部片。外面に平行叩目、内面にナデツケが施されている。胎土は、灰色～にぶい黄橙で、焼成はあまりよくない。24は壺の体部片か。ロクロ成形。成形後の調整痕は観察されない。外面に暗赤灰色の釉薬が施されている。胎土は灰色で、焼成は良好である。25は大甕の口縁部。ロクロ成形で、調整痕は観察されない。器面は粗い。胎土は灰色で、焼成は良好である。

#### 第27号竪穴住居跡（第71図）

遺構はD区西の中央部に位置する。第26号竪穴住居跡と重複し、同遺構に切られている。遺構の平面形は方形を呈すると思われるが、東壁は確認されなかった。規模は南北6.6mを測る。埋土は2層に分かれる。E<sub>1</sub>層は第26号竪穴住居跡と重複する部分に堆積し、黒褐色土の基本土とするやや固めの層で、多数の土器片を含む。B<sub>1</sub>層は北の周辺部に堆積し、やはり黒褐色土を基本土とする層であるが、遺物は出土していない。

柱穴は13本検出しているが、柱あたりが確認されたのは3本である。P<sub>16</sub>とP<sub>15</sub>の距離は3.8m、P<sub>12</sub>とP<sub>4</sub>の距離は3.2mを測る。床面は平坦であり、北の床面を中心に貼床を施している。F<sub>1</sub>層は貼床で、多量の褐色土が混じる固い黒色土層で、多量の粘土粒や焼土粒を含む、周溝は検出していない。

カマドは北壁の西隅で1基検出している。第26号竪穴住居跡を検出する際に壊してしまい、煙道、煙出しの一部を欠いた調査となった。天井部、袖部は遺存せず、煙道に芯礫や構築土の一部が存在していた。煙道は刳貫式で、断面は不整形を呈し、径は約0.4m～0.3mを測る。煙道は、入り口で一旦下がるが、すぐに水平になって煙出しに向かっており、長さは約1mである。煙出しの平面形は楕円形を呈し、0.7m×0.5mであり、煙道にむかって細くなり、深さは1.2mを測る。

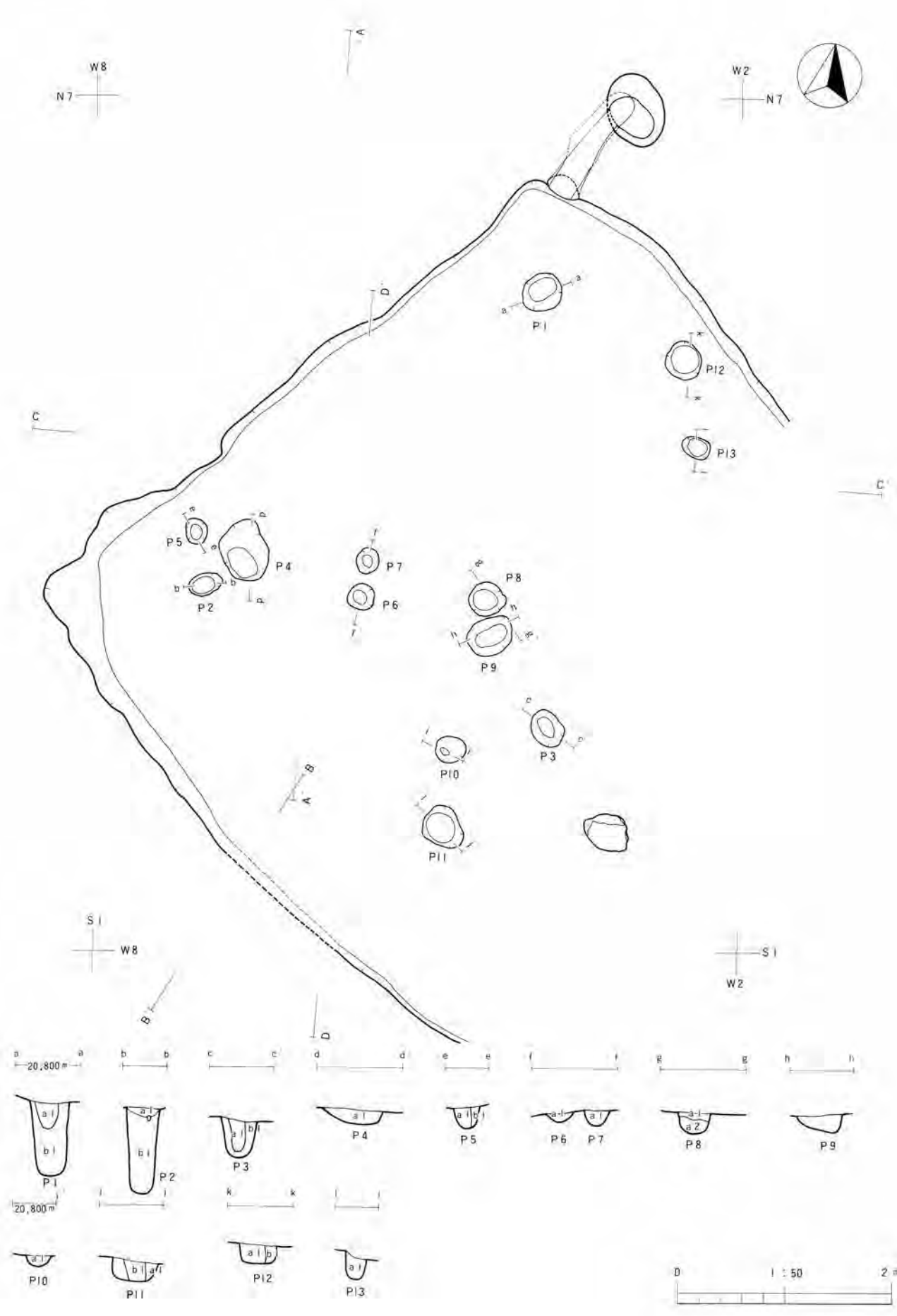
#### 遺物

遺物はE<sub>1</sub>層と床面から出土している。（第73図、第74図）

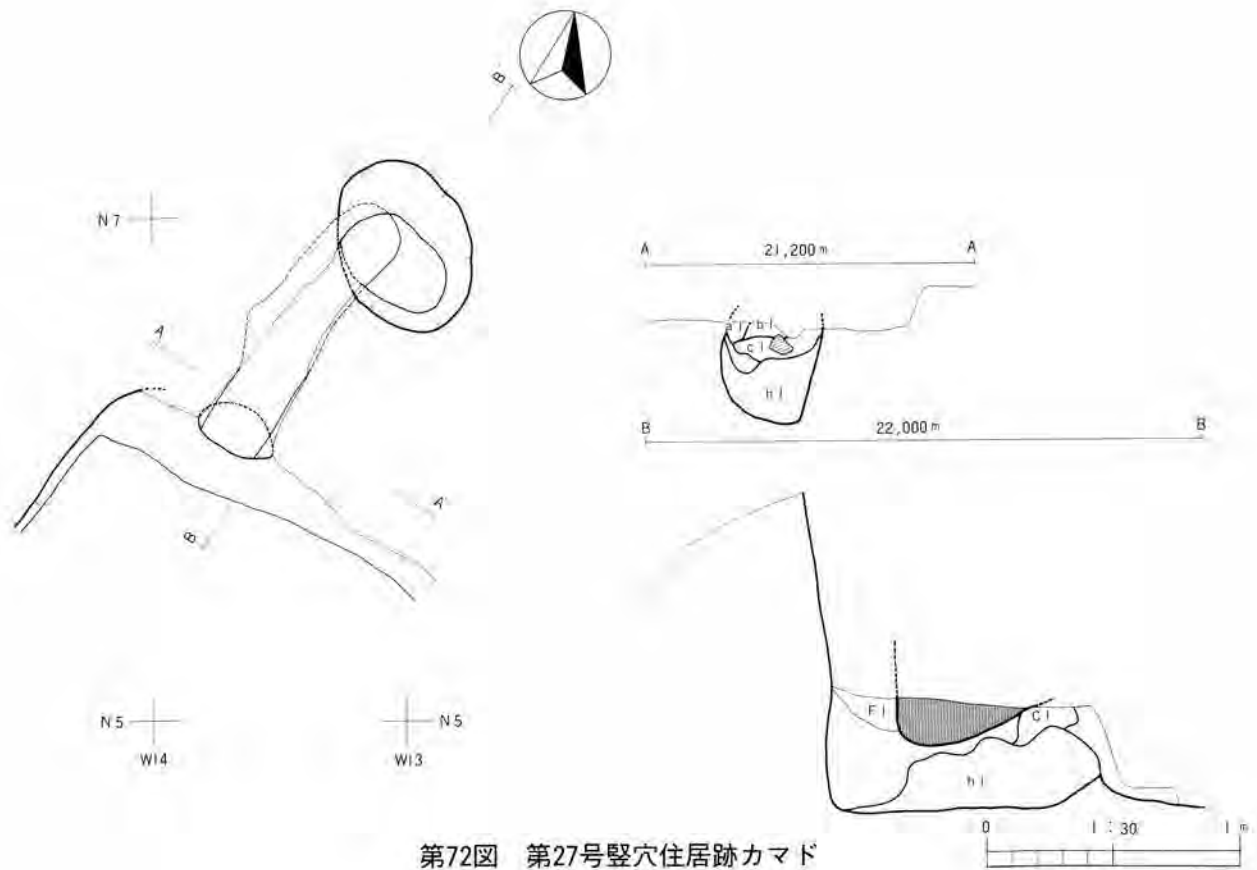
1はE<sub>1</sub>層から出土した土師器の坏である。色調は、外面はにぶい黄橙、内面は黒色処理されている。底部から内湾しながら立ち上がる。口縁部で垂直に立ち、口唇部はやや尖る。体部に段をもつ。調整痕は、外面が段を境にしてヘラミガキとヘラケズリに分かれている。内面はヘラミガキを施されている。胎土は白い細砂を含み、焼成は良好である [14.2×5.2×—]

2～5は床面から出土した甕である。2は甕の口縁部である。色調はにぶい褐色。頸部のくびれは浅く、口縁部は直線的に外傾する。口唇部は丸む。調整は、内外面ともヘラナデが施され、内面にはヘラミガキが混じる。胎土はにぶい黄褐色で、焼成は良好である [17.8×—×—、床面]。3は球胴甕である。色調はにぶい黄橙。頸部のくびれは深く、口縁部は直線的に外傾する。口唇部でさらに外傾し、端部は尖る。体部は大きく脹らむ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面が斜方向、内面が横方向のナデが施されている。胎土は白い細砂を多量に含み、焼成は普通である [14.6×—×—、床面]。4は球胴甕である。色調は灰白～にぶい黄橙。頸部は「く」の字にくびれ沈線が入る。口縁部は立ち上がって外傾する。口唇部は先





第71図 第27号豎穴住居跡



第72図 第27号竪穴住居跡カマド

細りになり、端部は尖る。体部の脹らみは大きく、最大径を体部にもつ。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がヨコナデ、内面が横、斜方向のナデが施されている。胎土は多量の粗砂を含み、焼成は良好である [19.8×—×—、床面]。5は床面出土の長胴甕である。色調は灰白色～にぶい橙で、内面の一部に黒斑をもつ。頸部のくびれは浅く、口縁部は直線的に外傾する。口唇部は平らで稜線をもつ。体部の脹らみは小さく、最大径を口縁部にもつ。胎土は白い細砂を含み、焼成は良好である [16.3×—×—、床面]

6～10は埋土E層から出土したものである。

6は長胴甕。色調はにぶい黄橙。頸部に段をもち、くびれは浅い。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は平に仕上げている。体部の脹らみは小さく、最大径を口縁部にもつ。調整は、口縁部は内外面ともヘラナデで、外面には斜方向のナデが交じる。体部は外面が縦方向、内面が横方向のヘラナデが施されている。胎土は多量の粗砂を含み、焼成は中程度である [19.2×—×—、E層]。7は甕の底部である。色調は橙。底部はわずかに張り出す。調整は、外面は縦方向のヘラナデ、内面はヨコナデを施されている。底部外面にはハケメの痕が残る。胎土は細砂が混じり、焼成は良好である [—×—10.2、E層]。8は甕の底部である。色調はにぶい黄橙～橙。底部に張り出しはなく、体部は内湾しながら立ち上がる。調整は内外面ともヨコナデを施されている。胎土は白い細砂を多量に含み、焼成は良好である [—×—8.9、E層]。9は甕の底部である。色調はにぶい橙。底部に張り出しがない。調整は、外面がミガキを交えたナデ、内面が斜方向のナデが施されている。胎土は白い細砂を含み、焼成は良好である [—×—

×7.0、E<sub>1</sub>層]。10は甕の底部。色調は内面が黒褐色、外面がにぶい黄橙である。底部は張り出している。調整は、外面はナデが施されているが、内面、外面底部は摩滅のため観察できない。胎土は褐灰色で白と黒の細砂を含み、焼成は良好である [一×一×9.8、E<sub>1</sub>層]

土製紡垂車はE<sub>1</sub>層から3点出土している。(第74図)

15は、平面形は円形で、中央に貫通孔をもつ。断面形は等脚台形を呈し、中心の上部と下部が凹んでいる。孔径は0.8cmを測る。調整は、ヨコナデが施されている。16は15と同形である。色調は明赤褐色。孔径は推定で0.9cmを測る。外面にヘラケズリが施されている。17もほぼ同形であるが、中心の凹みがない。色調は、にぶい黄橙～橙。孔径は0.7cmを測る。ヘラナデが施されている。18は器形不明の土製品の底部である。底面にはほぼ直角の角が作られ、体部は外傾しながら立ち上がる。体部には沈線文と刺突文が施されている。

11～14はE<sub>1</sub>層から出土した縄文土器である。いずれも沈線による曲線文を主体とした施文である。縄文時代後期前葉に伴う。

#### 第28号竪穴住居跡 (第75図)

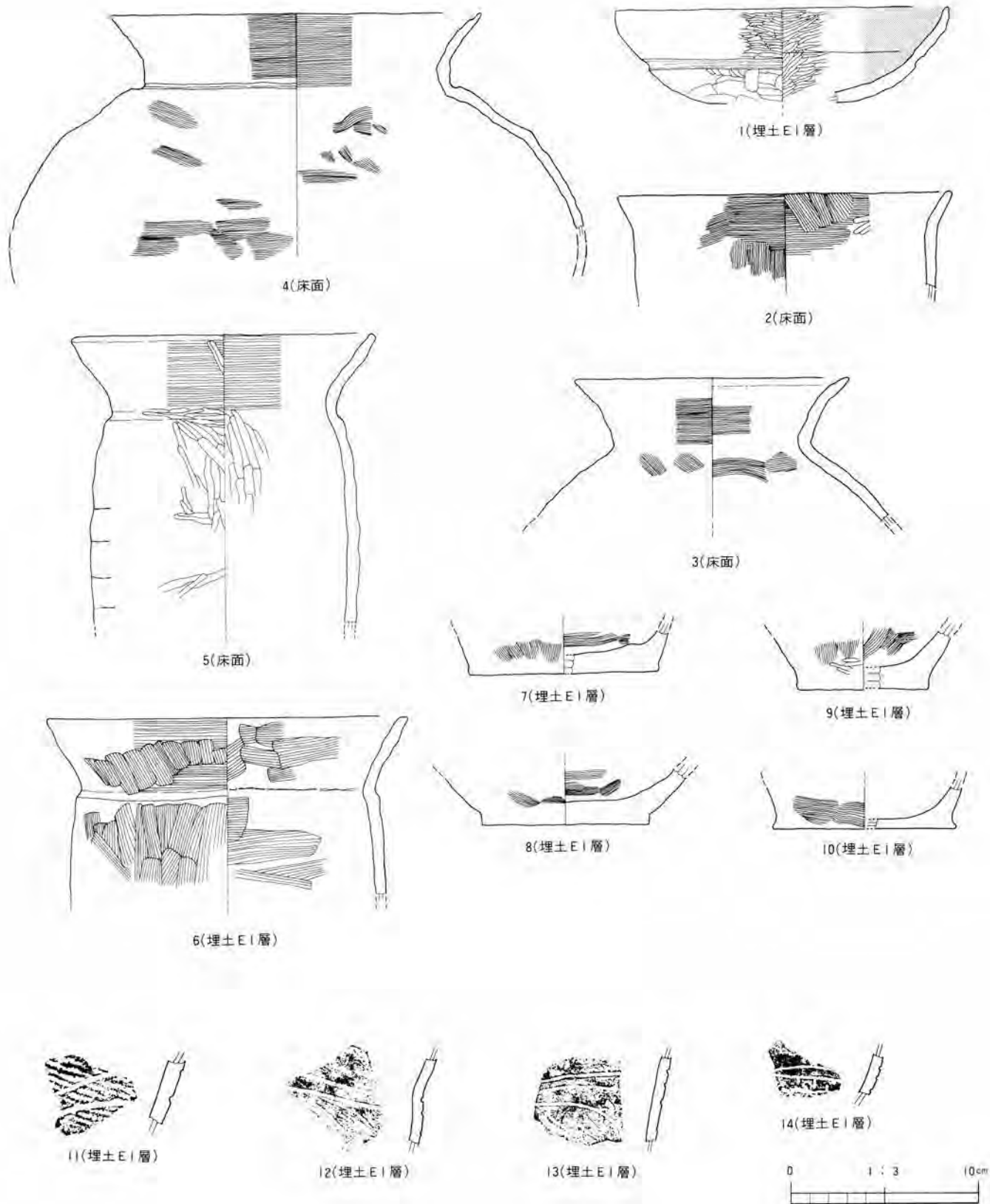
遺構は、D区南西の端に位置する。平面形は隅丸正方形を呈し、規模は一辺約4mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がり、壁高は、0.4m～0.25mを測り、西壁は地山を掘り込んで構築されている。埋土は5層に大別される。A<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>層は、固めの締まりのない黒褐色土を基本土とし、わずかに炭を含む。B<sub>1</sub>層は、固めの暗褐色土を基本土とし、多量の炭を含む。C<sub>1</sub>層は、黄褐色土混じりの褐色土で、多量の細礫を含む。D<sub>1</sub>、E<sub>1</sub>層は、第2号カマドの崩壊土層である。固めの黒褐色土を基本土とし、多量の粘土を含んでいる。

床面は、南に小さな段をもつが、その他の部分では平坦である。貼床、周溝は検出されていない。

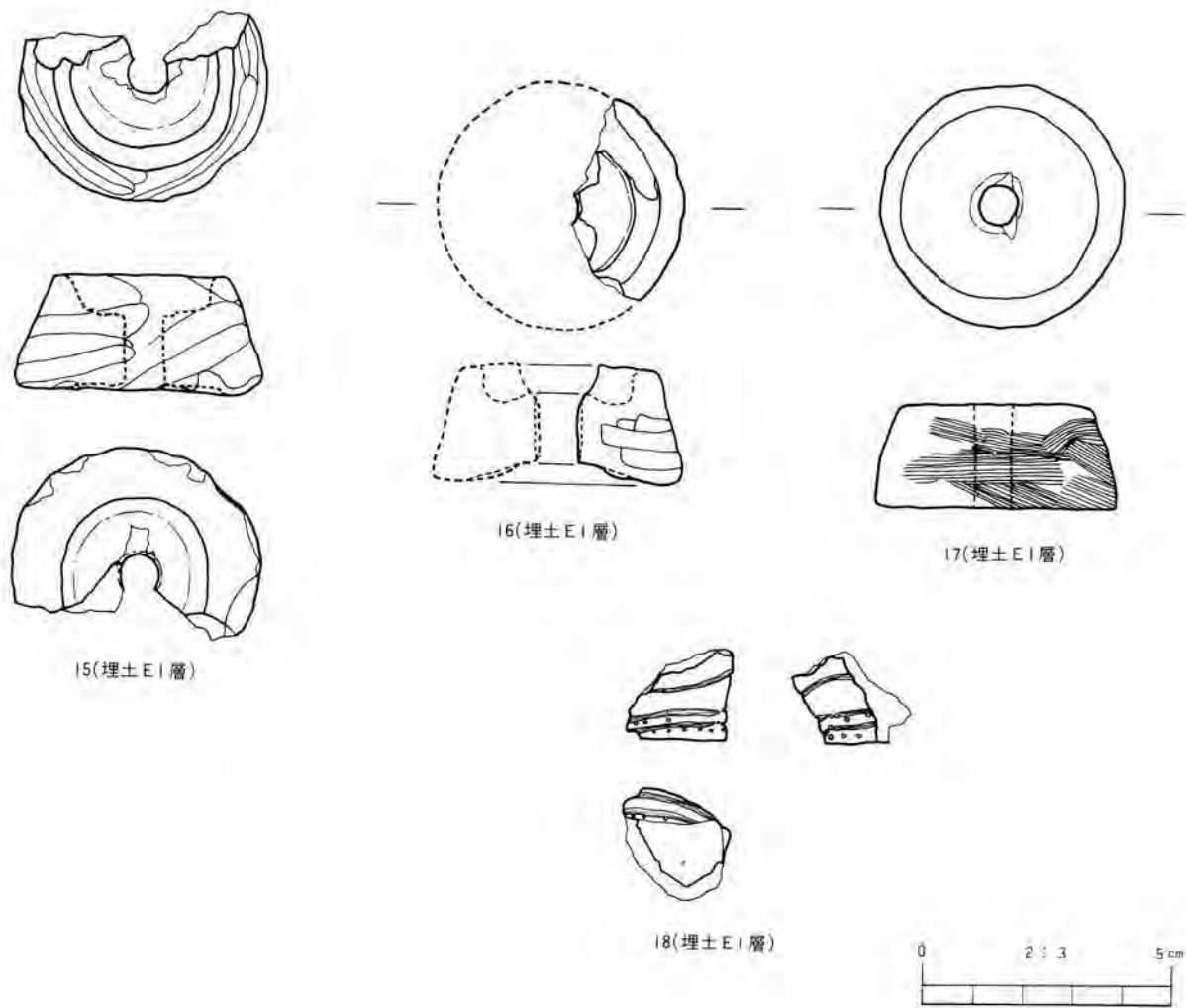
柱穴は検出していない。

カマドは北西の隅で1基(カマドⅠ)、北壁の東寄りでも1基(カマドⅡ)検出している。カマドⅡは、北面の壁に埋設されていた。

カマドⅠの天井部、袖部は崩壊しているが、芯礫として使用されたとと思われる礫が周辺に遺存している。煙道は刳貫式で、長さは約0.8mを測る。煙道は煙出しに向かってわずかに下る。燃焼部の規模は不明であるが、焼土層厚は最大0.05mである、火床面はわずかに掘り窪められている。煙出しの平面形は、不整形円形を呈し、径約0.3mである。深さは0.8mを測り、底部は掘り窪められている。埋土は、構築土層が3層、煙道埋土が4層に分かれる。K<sub>1</sub>層は粘性のあるにぶい黄褐色土が混じる黒褐色土層。K<sub>2</sub>層は、粘性のあるにぶい黄褐色土混じりの褐色土。K<sub>3</sub>層は、軟らかい赤褐色土層である。D<sub>1</sub>～D<sub>3</sub>層は、いずれも軟らかくあまり締まりのない黒褐色土を基本土とする層で、礫を含む。D<sub>4</sub>層は、褐色土混じりの明黄褐色土層である。



第73図 第27号竪穴住居跡出土遺物 (1)



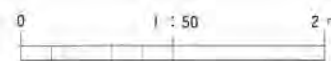
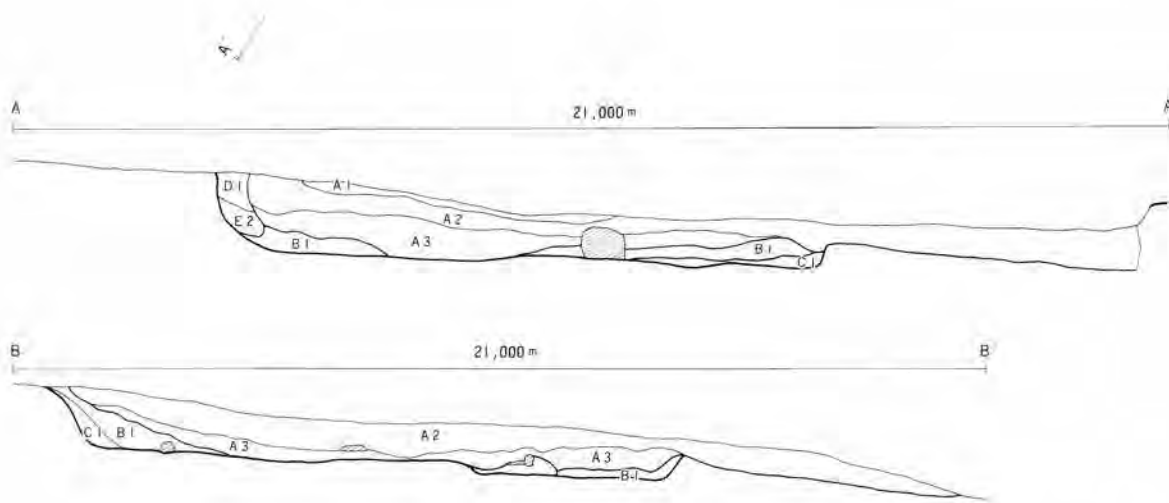
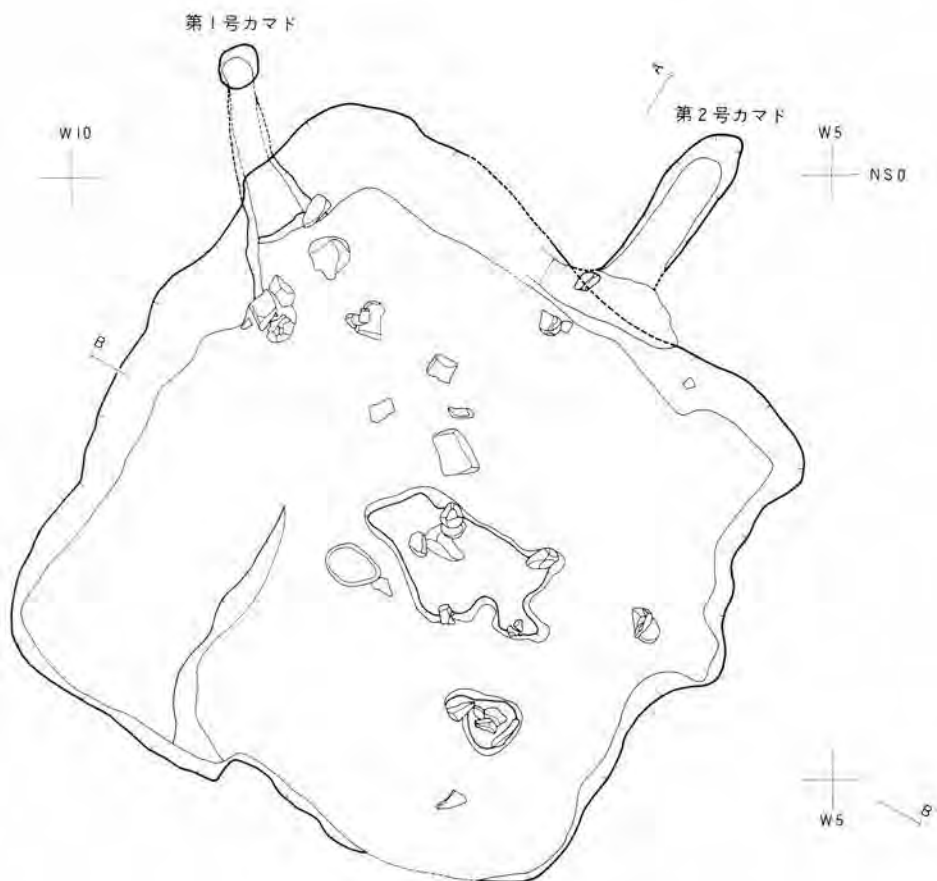
第74図 第27号竪穴住居跡出土遺物 (2)

カマドⅡは北壁のやや東寄りで検出された。第27号竪穴住居跡を検出する際に一部を壊してしまい、煙道上面を欠いた調査となった。床面から約0.2m上のところから掘り込まれている。天井部、袖部は崩壊しているが、芯礫の一部が遺存する。煙道は刳貫式で、長さは120cmを測り、煙出しに向かって下がる。燃烧部の規模は不明であるが、焼土層厚は最大0.03mである。煙出しの平面形は径約0.3mの円形を呈し、深さは約0.75mを測る。埋土は、構築層が3層、煙道、煙出しの埋土が4層に分かれる。K<sub>1</sub>、K<sub>3</sub>層は、粘性のある固めの褐色土で、にぶい黄橙土が混じり、少量の炭化物、焼土粒を含む。K<sub>2</sub>層は、固く締まりのある赤褐色土である。D<sub>1</sub>層は軟らかい にぶい黄褐色土で土器片を含む。D<sub>2</sub>、D<sub>3</sub>層は、軟らかい暗褐色土を基本とし、炭化物、焼土粒を含む。D<sub>4</sub>層は、軟らかめの黒褐色土で、粘土塊を含む。

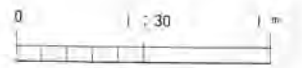
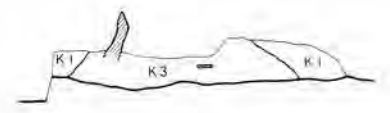
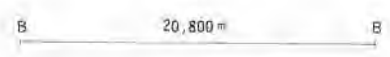
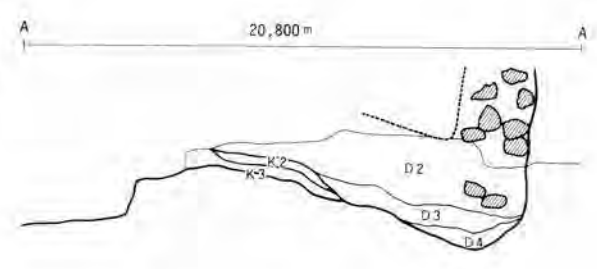
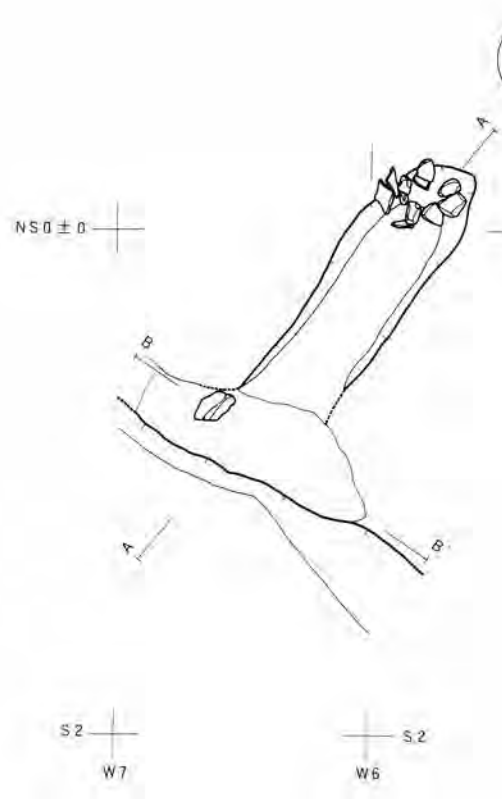
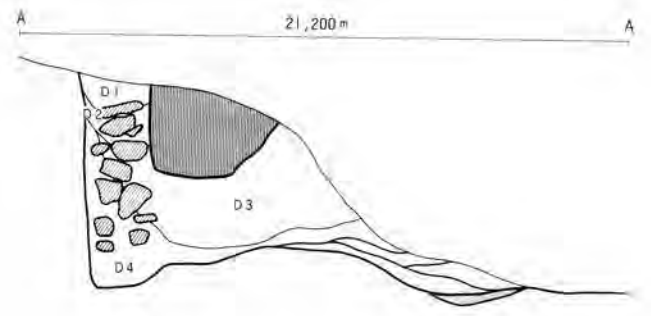
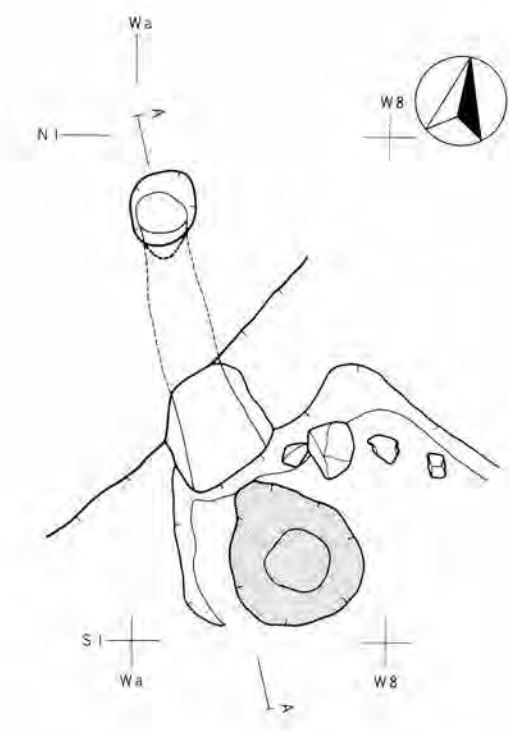
遺物

遺物は床面、カマド、埋土から出土している。(第77図、第78図)

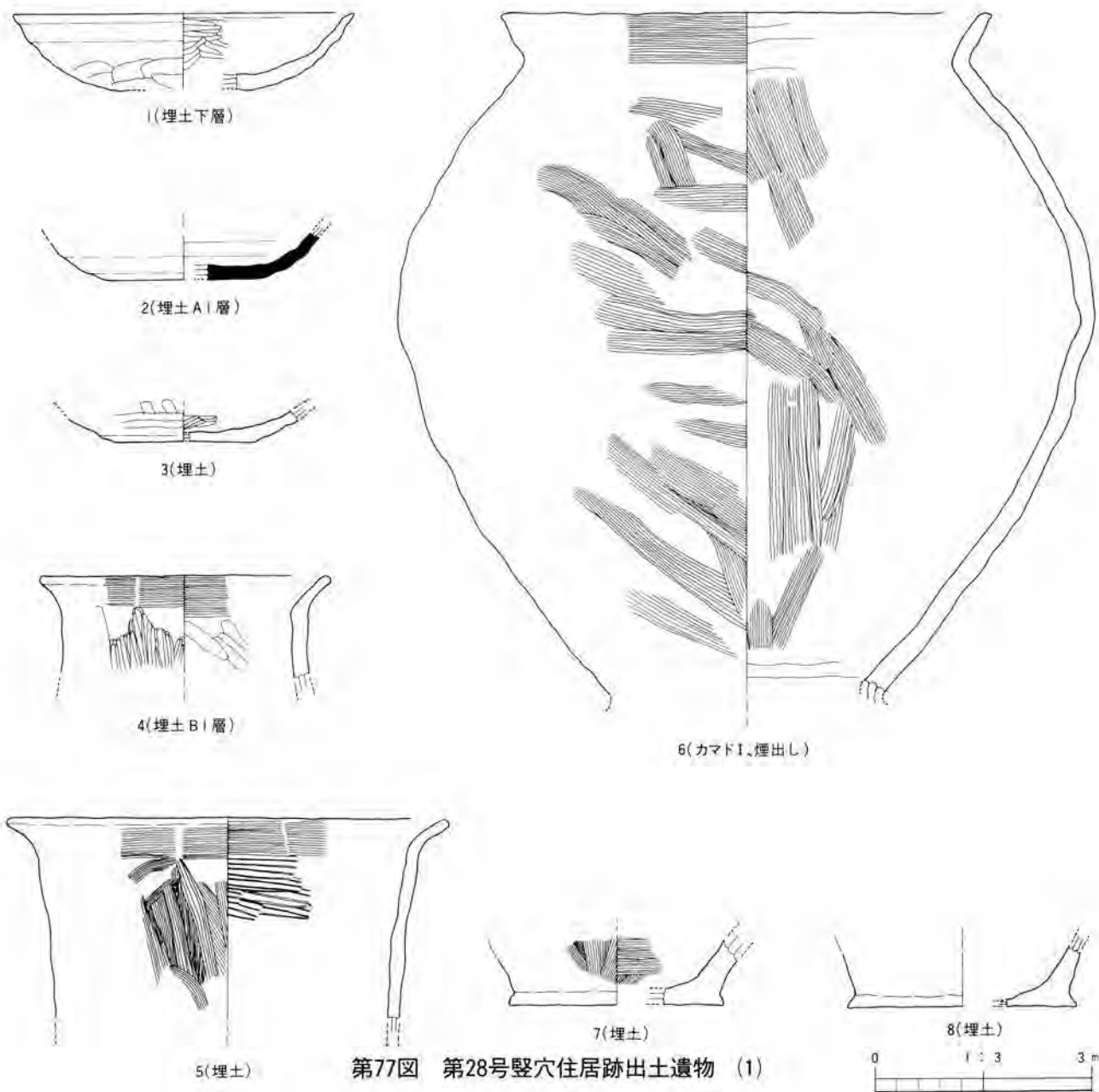
1は埋土下層A<sub>3</sub>から出土土師器の坏である。色調は、外面はにぶい黄橙、内面は黒色処理されている。底面から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は先細りになり、口唇部は尖



第75図 第28号竪穴住居跡



第76図 第28号竪穴住居跡カマド I、II

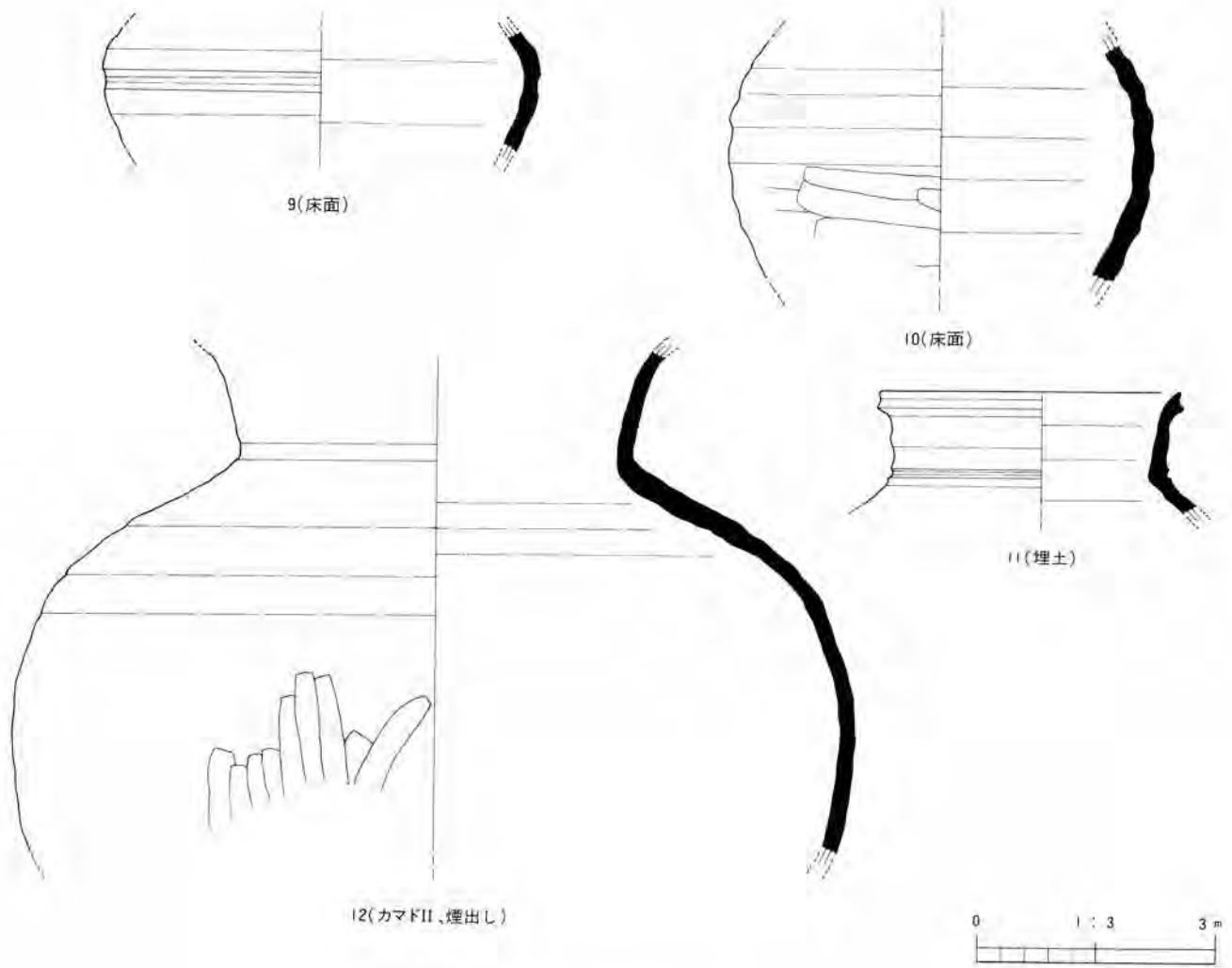


第77図 第28号竪穴住居跡出土遺物 (1)

る、調整は、外面は体部の下位に横方向のヘラケズリ、内面には横方向のヘラミガキが施されている。胎土は、細砂を含み、焼成は良好である [15.8×—×—、埋土下層]。2はA1層から出土した土師器の坏である。色調は、外面はにぶい黄橙で、内面は黒色処理を施されている。底面から直線的に外傾する。調整は、外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキを施されている。胎土は堅緻で焼成は良好である [—×—×6.5、A1層]。3は須恵器の坏である。底部からやや内湾しながら立ち上がる。ロクロ成形で、成形後の調整痕は観察されない。胎土は灰色で、焼成は良好である [—×—×7.1、埋土]。

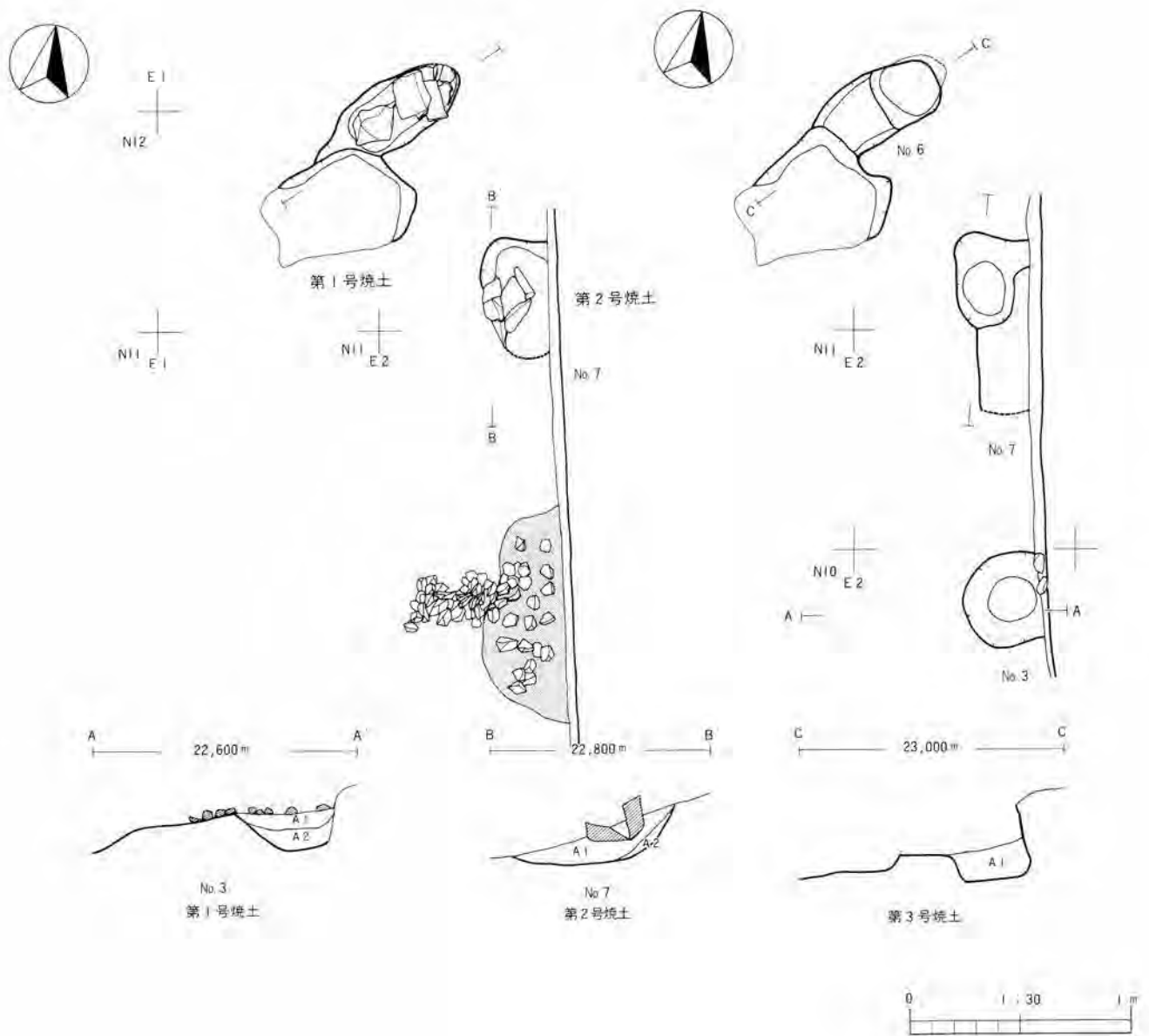
4はB1層出土の小形甕。色調はにぶい黄橙。頸部のくびれは浅く、口縁部は直接的に外傾し、口唇部は丸む。体部の脹らみは小さい。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラミガキ、内面がヘラケズリを施されている。胎土は白い細砂を含み、やや粗い。焼成は普通である [13.5×—×—、B1層]。5は長胴甕か。色調はにぶい黄橙～橙。口縁部は短く、





第78図 第28号竪穴住居跡出土遺物 (2)

直線的に外傾する。口唇部は丸む。体部は底部に向かってわずかに細くなる。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がナデ、内面がハケメを施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好である [20.5×—×—、埋土]。6は煙出しから出土した球胴甕である。色調はにぶい黄橙～灰色で、頸部の一部に黒斑をもつ。口縁部は短く、直線的に外傾し、口唇部は丸む。頸部は「く」の字にくびれ、体部は大きく脹らむ。最大径を体部にもつ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は内外面とも斜、縦方向のナデが施されている。胎土は、密で、白と黒の細砂を含む。焼成は良好である [22.6×—×—、煙出し]。7は甕の底部である。色調はにぶい黄橙～橙。底部は張り出し、体部は直線的に立ち上がる。調整は、内外面ともヘラナデ、外面底部にはナデを交えたヘラミガキが施されている。胎土は赤い粗砂を含みやや粗い。焼成は普通である [—×—×9.9、埋土]。8は甕の底部である。底部は張り出し、薄くなっている。体部は直線的に立ち上がる。内外面とも摩滅し、調整痕は観察できない。胎土は粗砂を大量に含み、焼成は良好である [—×—×10.7、埋土]



第79図 D区焼土遺構

9～12は須恵器である。

9は床面出土の体部片である。ロクロ成形。外面に浅い沈線が施され、一部に自然釉がかかる。胎土は灰色で、焼成は良好である〔床面〕。10も床面出土の体部片である。ロクロ成形後にヘラケズリが施されている。胎土は灰色で、焼成は良好である〔床面〕。11は壺の口縁部か。口縁部は垂直に立ち、口唇部を肥厚させ、頸部に沈線を施す。ロクロ成形。胎土は灰色で黒い細砂を含む。焼成は良好である〔埋土〕。12は、第2号カマドの煙出しから出土した球胴甕の

体部片である。口縁部はやや開き気味に立ち上がり、体部は大きく脹らむ。頸部に浅い沈線が施されている。外面体部には、ロクロ成形後にケズリ調整がなされている。胎土は灰色で、やや粗い。焼成は良好である。

#### D区焼土遺構（第79図）

焼土遺構はD区の北斜面寄りの緩斜面で検出している。検出面はⅣ層とⅤ層である。

第1号焼土は小礫の塊の下から出土し、検出面はⅣ層上面である。最終的にはほぼ円形を呈する土壇状の掘込みとなり、埋土は2層に分かれる。A<sub>1</sub>層は大量の赤褐色土が混じる固い黄褐色土層、B<sub>1</sub>層は褐色土の混じる軟らかい明褐色土層である。

第2号焼土と第3号焼土の検出面はⅤ層である。いずれも楕円形の掘込であり、礫が埋設されていること、また埋土も固い焼土ではなく、粘土塊の多量に含んだ焼土混じりの層であることも共通している。第2号焼土は、A<sub>1</sub>層の明黄褐色の塊状の粘土を基本土とする赤褐色土が混じりの層で、A<sub>2</sub>層は炭化物を多量に含む暗褐色土層である。第3号焼土のA<sub>1</sub>層は、黄褐色の塊状の粘土を基本土とする赤褐色土混じりの層である。

#### D区遺構外出土遺物

出土地点は、D区中央部の北から南に下る緩斜面で、検出面は表土とⅣ層～Ⅴ層である。

1は、Ⅳ層下部出土の土師器の坏で、墨書土器である。色調は明赤褐色。ロクロ成形。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに内反する。口唇部はやや尖る。体部内面にヘラナデを施す。墨書は「右」と読めるが、偏をもつ可能性もある。胎土は、白い粗砂をわずかに含み、焼成は良好である。[Ⅱ層下部]。2は土師器坏の口縁部である。色調はにぶい黄橙～橙。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は先細り、端部は尖る。調整は、内外面ともヘラミガキが施されている。胎土はにぶい黄橙で、焼成は普通である[13.6×—×—、Ⅱ層下部]。3は土師器坏の底部である。色調はにぶい黄橙で、内面は黒色処理が施されている。底部から直線的に外傾する。調整は、外面がヘラケズリ、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。底面は回転糸切り痕をもち、若干のミガキが施されている。胎土は、にぶい黄橙で、焼成は普通である[—×—×6.0、Ⅱ層下部]。4は土師器坏の口縁部である。器面は全体に粗い。色調は、外面はにぶい黄橙～黒灰色、内面は黒色処理が施されている。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は丸む。調整は、外面はナデとミガキ、内面はミガキが施されている。胎土はにぶい黄橙で、焼成は普通である[13.4×—×—、黒上]。5は土師器坏の底部である。黒色処理は外面にまで及ぶ。わずかに内湾しながら立ち上がる。調整は、内外面ともヘラケズリを施されている。底面に回転糸切り痕をもち、胎土には白い細砂が混じり、焼成は普通である[—×—×5.7、D<sub>2</sub>ベルト]。6は土師器坏の口縁部である。器面は全体に粗く、内黒処理が施されている。体部は直線的に外傾し、口縁部で垂直に立つ。口唇部はやや尖る。胎土には白い粗砂が混じり、焼成はあまり良くない[12.6×—×—、粗掘]。

7～10は須恵器で、11はロクロ成形土器である。

7は坏で、底部から内湾しながら立ち上がる。ロクロ成形。成形後の調整痕は観察されない。胎土は明赤褐色～にぶい赤褐色で、緻密である。焼成は良好である[13.9×—×—、Ⅱ層下部]。

8は坏で、底部から直線的に外傾する。ロクロ成形。成形後の調整痕は観察されない。底部に回転糸切り痕をもつ。胎土は灰色で焼成は良好である[一×一×6.3、黒上]。9は、やや厚手の底部である。ロクロ成形。外面の一部にヘラナデ調整を施す。胎土は褐灰色で、焼成は良好である[一×一×5.0、黒上]。10は坏の口縁部で、直線的に外傾する。口唇部はわずかに外反し、やや尖る。ロクロ成形。成形後の調整痕は観察されない。胎土は、暗赤灰色～灰色で、焼成は良好である[12.2×一×一、粗掘]。11は、坏のロクロ成形土器で、色調は橙。底部は薄くなり、体部は直線的に外傾する。ロクロ成形。調整痕は、外面にヘラナデが施されている。底面に回転糸切り痕をもつ。胎土は、白い細砂を少量含み、焼成は良好である[一×一×6.6、粗掘]。

12は、反転復元した甕の底部である。色調はにぶい黄橙。底部は張り出し、底部から外傾しながら直線的に立ち上がる。調整は、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。底面に木葉痕をもつ。胎土は白い細砂を含み、焼成は良好である[一×一×9.9、右側深掘]。

13は、反転復元した甕の底部である。色調は、にぶい黄橙～橙。底部は張り出し、やや内湾しながら立ち上がる。調整は、内外面ともヘラナデが施されている。底面に木葉痕をもつ。胎土は白い細砂を含み、焼成は良好である[一×一×9.0、深掘]。14は甕の底部である。色調は、にぶい黄橙～浅黄橙。底部は張り出し、内湾しながら立ち上がる。調整は内外面ともヘラナデを施されている。底面に木葉痕をもつ。胎土は、白い細砂を含み、焼成は普通である[一×一×8.6、右側深掘]。

15～18は須恵器である。15は甕の体部片。ロクロ成形。内外面にヘラケズリによる調整痕をもつ。胎土は灰色で、焼成は良好である。16は甕の体部片。ロクロ成形。外面に平行叩き目、内面にヘラケズリが施されている。胎土は、灰～にぶい黄橙で、焼成は普通である。17は長頸瓶の口縁部か。反転復元である。外面の一部に自然釉がかかる。ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部を肥厚させる。胎土は灰色で、焼成は良好である[11.7×一×一]。18は甕の体部片。内外面とも平行叩き目が施されている。胎土は灰褐色で、白い細砂を含み、焼成は良好である。

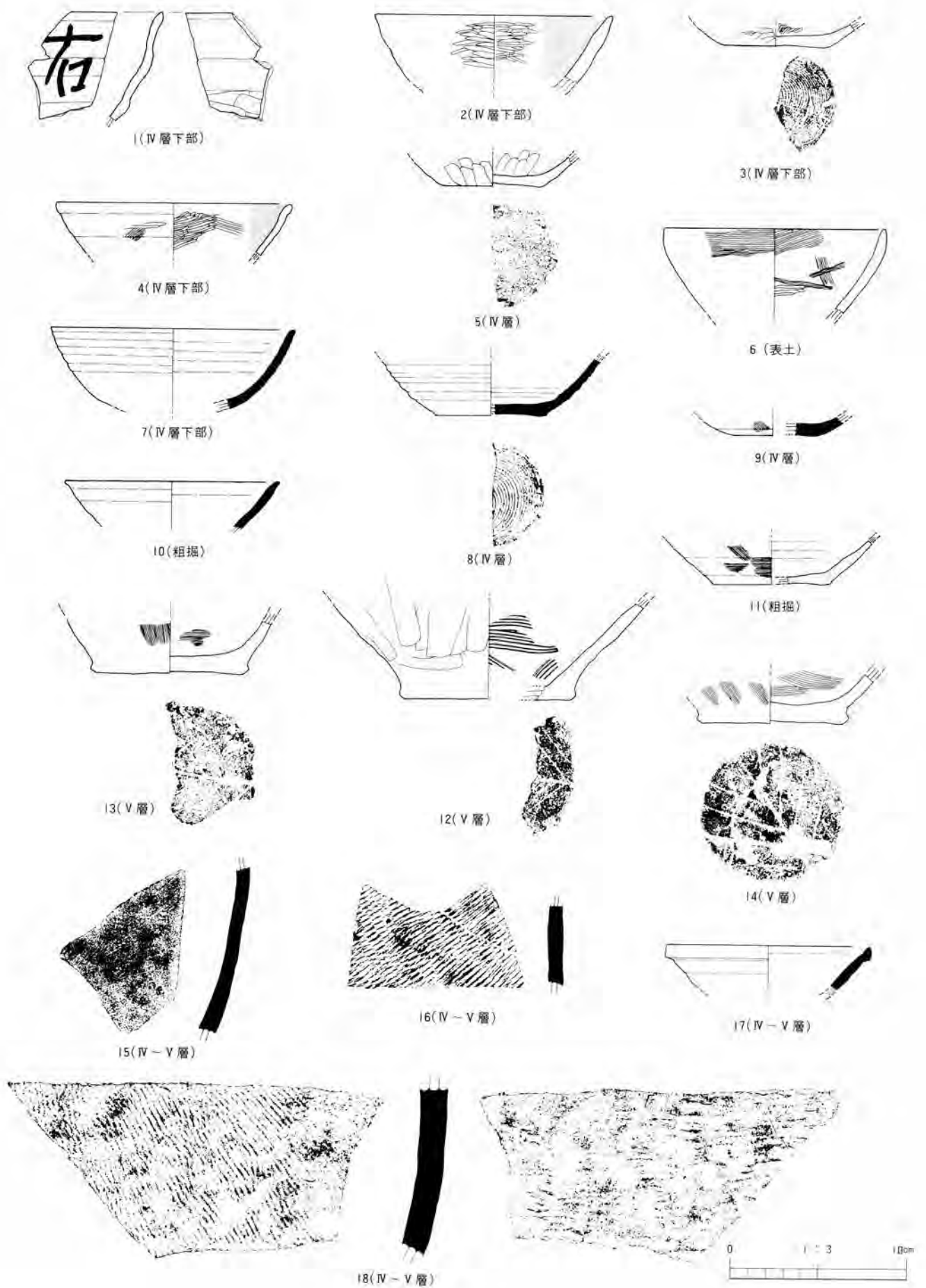
19～22は土製品である。

19～21は羽口である。19の孔は不整形を呈し、孔径は2.5～2.8cmである。20は外面にヘラナデによる調整痕をもち、孔径は推定で2.7cmである。21は外面に刺突痕をもち、孔は中心からずれている。いずれも胎土は白い粒子の混じった黄橙土である。羽口外面のスクリーントーン（斜線）は、暗灰色に変色した部分を示し、内面のスクリーントーン（網点）は、黒い粒の広がりを示す。

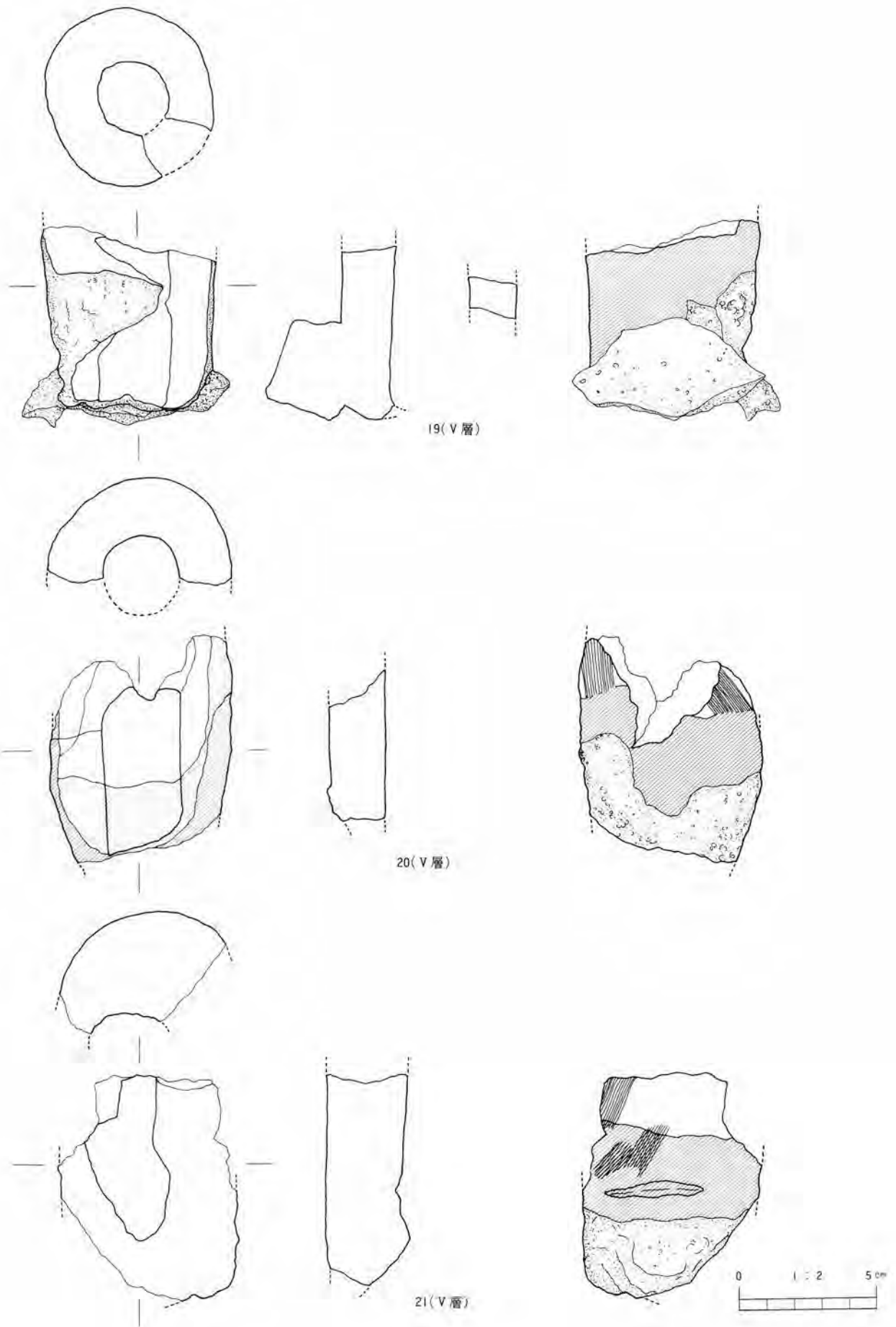
22は紡垂車である。色調はにぶい黄橙。断面は等脚台形を呈し、貫通孔をもつ。孔径は2.7cmを測る。外面にヘラケズリが施されている。紡垂車は、D区で他に3点検出している。

23～28は鉄製品である。

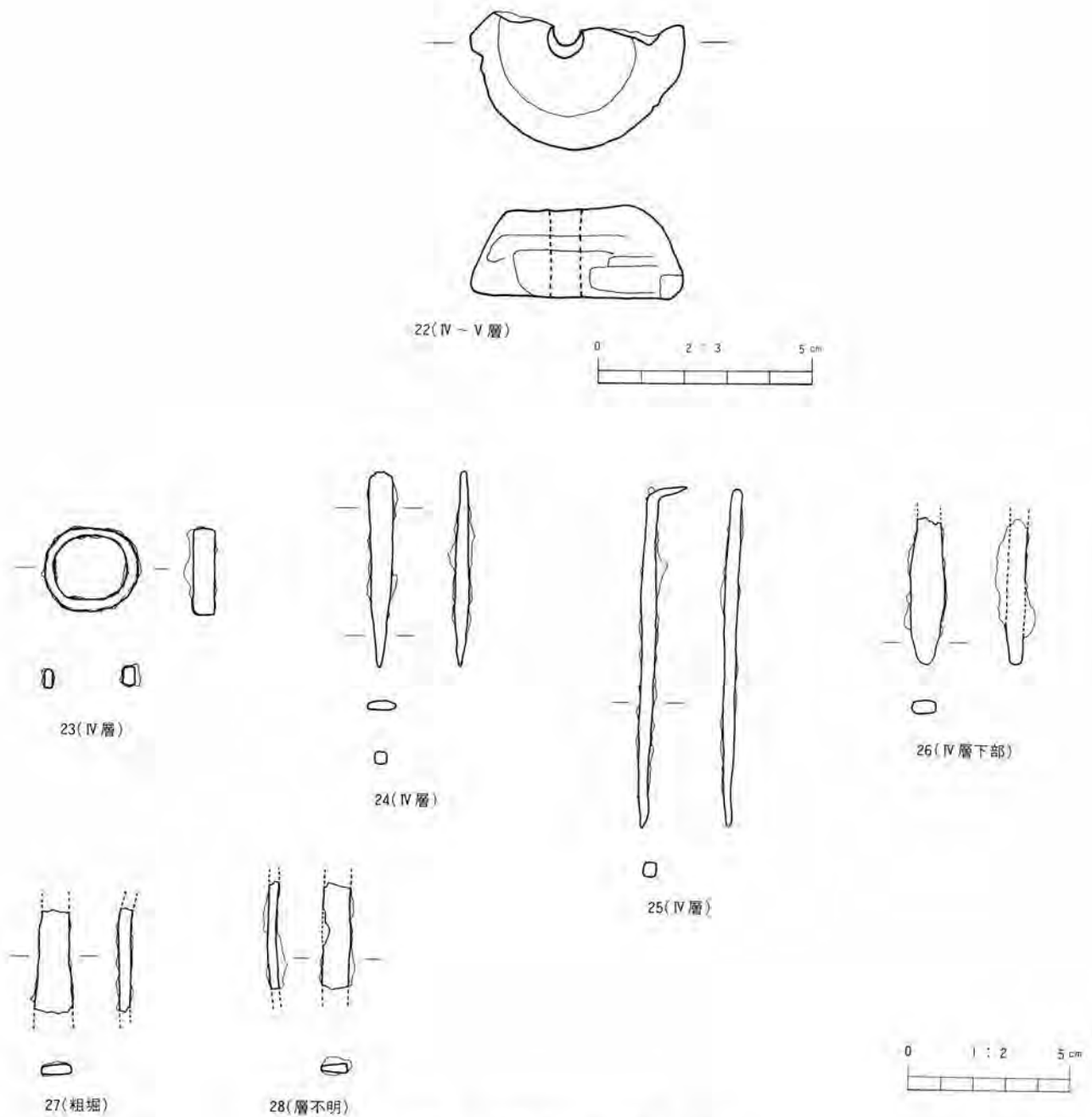
23は環状の鉄製品。24は、扁平な板状の製品であるが、先端部を角形の棒状に尖らせている。25は棒状の製品で、両端が尖り、片端がほぼ直に曲がる。26は四角い棒状の製品で、先端はやや尖る。27は板状の製品であり、片端がやや広がる。28は薄い板状の製品であるが、断面は刃のように片方が薄くなる。



第80図 D区遺構外出土遺物 (1)



第81図 D区遺構外出土遺物 (2)



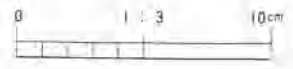
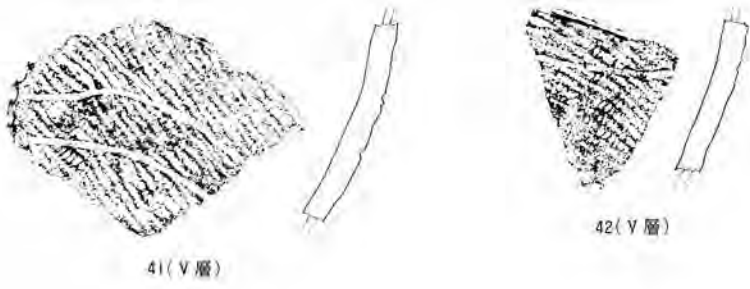
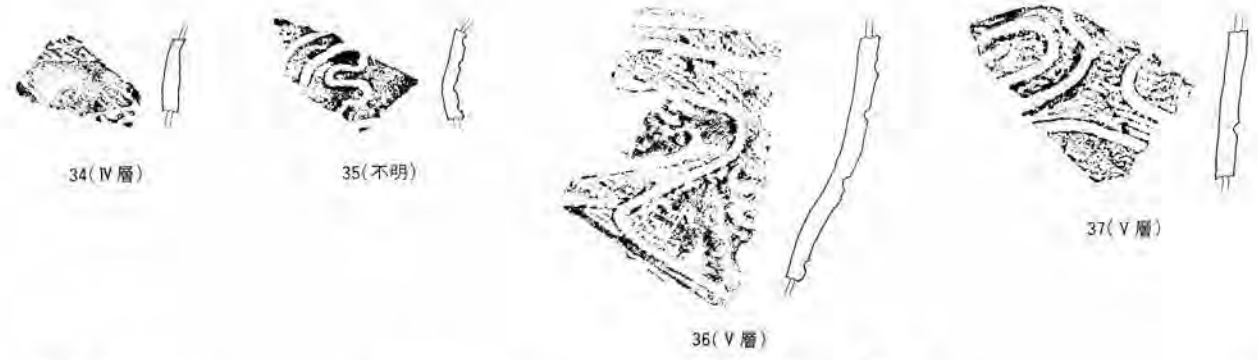
第82図 D区遺構外出土遺物 (3)

29～45は縄文土器である。(第83図)

29～31は細かい絡条体圧痕を縦位、斜位に施す。32は口縁部で、沈線文と刺突文をめぐらし、口唇部に刻目を施す。33は口縁部で、横位の沈線により施文される。34は沈線と刺突文による施文である。29～32、34は天王山式に相当し、弥生時代後期に伴う。

35～43は地文の縄文に沈線による曲線文を施したものである。35～43は縄文時代後期前葉にともなう。

44は隆沈線により渦巻文を施文したもので、大木8 b式に相当し、縄文時代中期中葉に伴う。



第83图 D区遺構外出土遺物 (4)



## B・C区遺構検出状況

前述したようにB・C区は西尾根の先端部と中腹の斜面である。

B区では、稜線沿いに調査区を設定し、地山面まで掘り下げた。遺構は検出されず、遺物もわずかに炭化物が出土しただけであった。

C区では、最初に中腹の平場に調査区を設定した。そこで炭の広がり、竪穴住居跡などの遺構が検出したことにもない、西側の急斜面に調査区を拡大した。斜面では道路跡、竪穴住居跡が出土している。

検出された遺構は、竪穴住居跡7棟、炉跡、土壇跡2基、道路跡2条である。

平場の遺構のうち炭の広がり、炉跡、竪穴住居跡2棟、土壇2基は地山面から出土している。さらに炭の広がり、炉跡の下からそれぞれ竪穴住居跡が1棟ずつ出土した。

西の斜面では、平場の竪穴住居跡とほぼ等高線上に道路跡が出土し、調査区北端で切り合っている2棟の竪穴住居跡が検出された。

## 第29号竪穴住居跡

C区の平場の西端に位置する。検出面は地山面で、急斜面を掘り込んでいる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、東西4.2m、南北2.7mを測る。埋土は、4層に大別できる。いずれも軟らかく締まりのない層で、細礫を多く含む。A<sub>1</sub>層は褐色土。B<sub>1</sub>～B<sub>3</sub>層は、暗褐色土混じりのにぶい赤褐色土で、粘性があり少量の炭を含む。

壁は、やや外傾しながら真つすぐに立ち上がっており、西壁の端に小段が設けられている。出入口として使用されたものか。床面は、平坦であるが、貼床は検出されなかった。

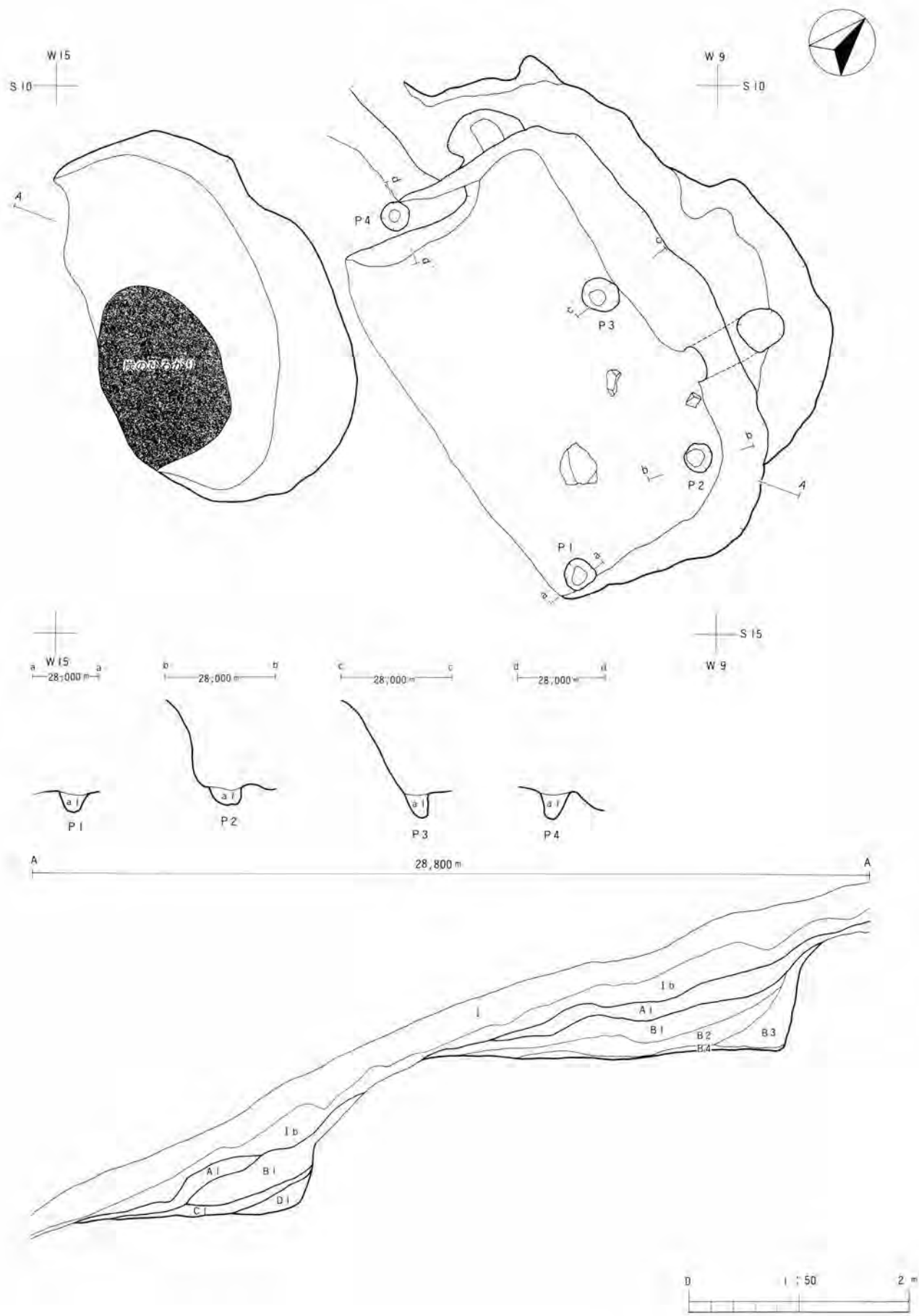
柱穴は4本検出された。北壁際に2本、東壁際に1本、小段上で1本である。いずれも掘り方が浅く、0.15m～0.22mである。埋土は、P<sub>1</sub>がにぶい赤褐色土であるが、他は多量の細礫が混じる褐色土である。柱あたりは検出されなかった。また周溝も検出されていない。

カマドは、北壁の中央やや東より1基検出された。天井部と袖部は崩壊しているが、崩壊土のなかに芯礫が遺存していた。焼土層の厚さは最大0.1mである。焚口部では、地山をわずかに掘り窪めて火床面を構築している。煙道は刎貫式で、長さは約1.3m、断面は径約0.5mである。煙道底部は、煙出しに向かって上がる。煙出しの平面形は円形で、径約0.7m、深さは150cmである。埋土は8層に分かれる。K<sub>1</sub>～K<sub>3</sub>層は構築土層である。K<sub>1</sub>層は、固めの褐色土で、多量の黄橙土が混じる。K<sub>2</sub>層は固めの赤褐色土。K<sub>3</sub>、K<sub>4</sub>層は軟らかめのにぶい黄褐色土を基本とする。D<sub>1</sub>～D<sub>4</sub>層はいずれも軟らかく締まりのない褐色土～暗褐色土を基本土とし、D<sub>4</sub>層は土器片を含んでいる。

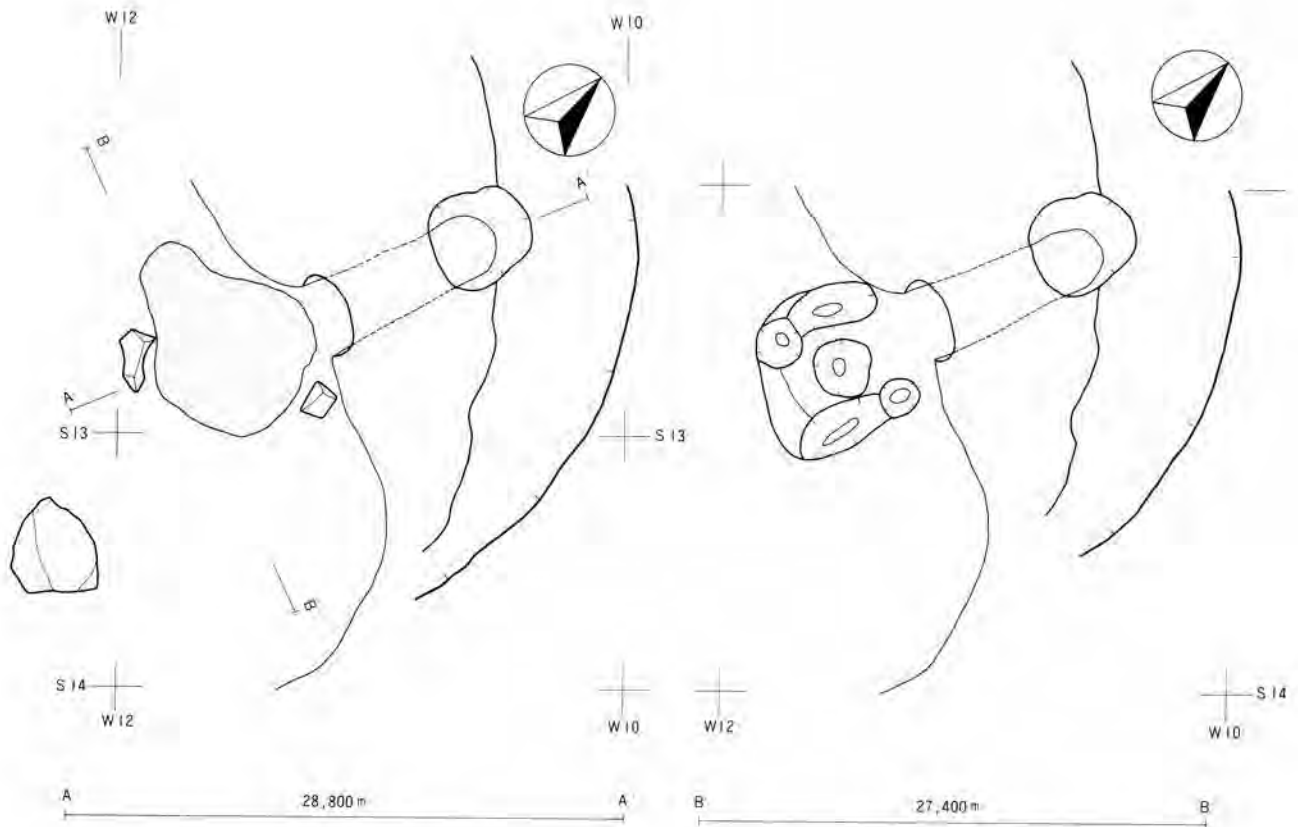
遺物は煙道、埋土から出土している（第86図）

## 遺物

1はカマドの煙道から出土した長胴甕である。色調は、にぶい黄橙であるが、一部黄橙～灰色に変色する。口縁部と胴部の一部が著しく歪んでいる。口縁部わずかに外傾し、口唇部は丸む。頸部のくびれは浅く、胴部が脹らみ、胴部中位が最大径となる。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデを施す。体部は、内外面ケズリ調整であるが、外面は主に斜方向、内面は横方向に施されている。胎土は、多量の細礫を含んでいる。2は土師器で、甕の口縁部。埋土



第84図 第29号、第30号、竪穴住居跡

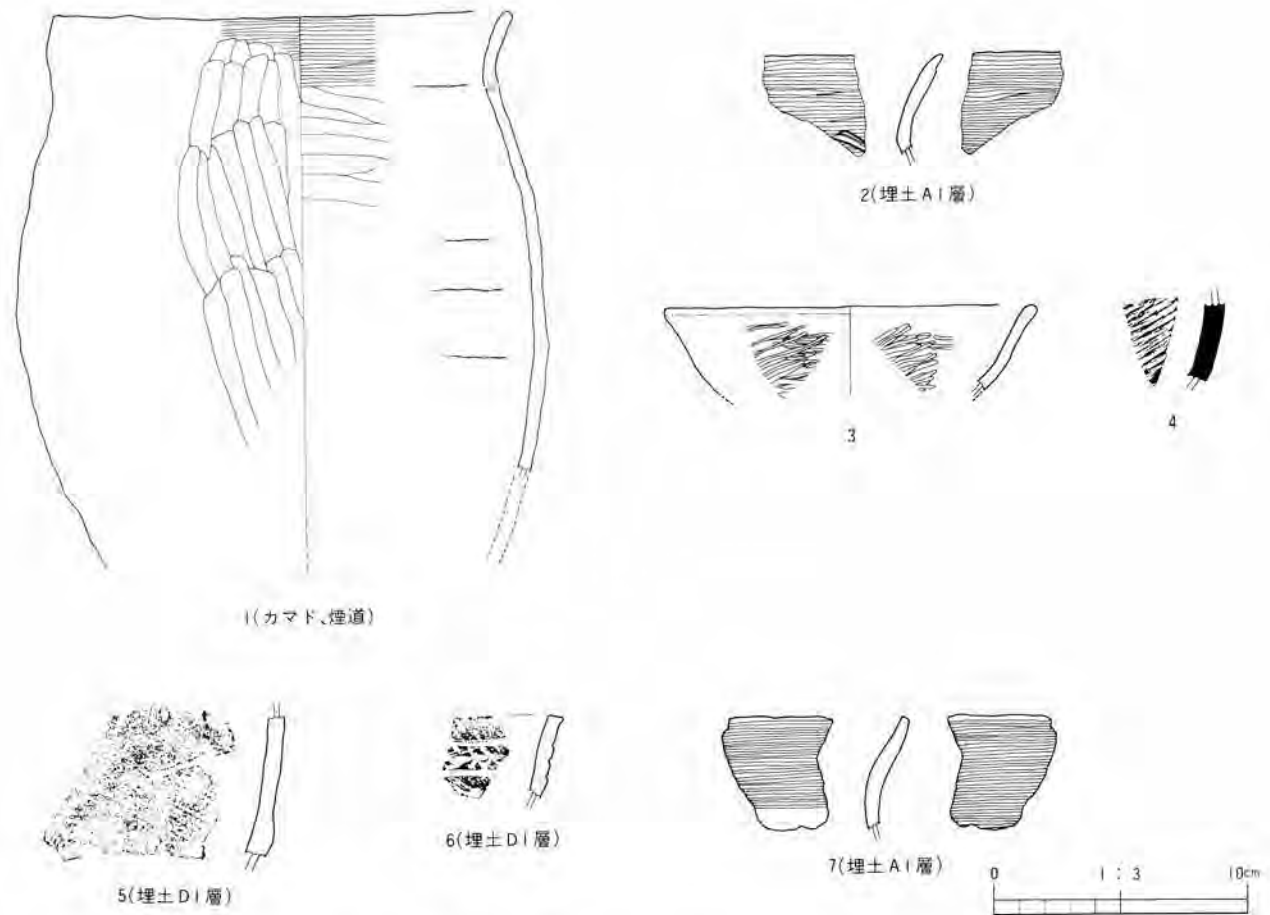


第85図 第29号竪穴住居跡カマド

A<sub>1</sub>層出土、直線的に外傾し、端部が尖る。内外面ともヨコナデ調整を施されている。3、4は遺構検出面から出土している。3は土師器の坏。わずかに内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸む。内外面ともヘラミガキ調整され、内面は黒色処理される。4は須恵器の体部片で、外面に叩き目が施される。焼成は良好である。

#### 第30号竪穴跡（第84図）

第29号竪穴住居跡のすぐ南に位置する。検出面は、第29号竪穴住居跡と同様に地山面で、急斜面を掘り込んでいる。平面形は、楕円形を呈し、規模は東西3.5m、南北2.2mを測る。埋土は4層に分かれる。いずれも固さ、締まりの程度は中位の層で、多量の細礫を含む。A<sub>1</sub>層は、黒褐色土。B<sub>1</sub>層は暗褐色土混じりの褐色土。C<sub>1</sub>層は黒褐色土。D<sub>1</sub>層は黄褐色土混じりの褐色土である。



第86図 第29号、第30号竪穴住居跡出土遺物

南壁は、わずかに外傾しながら真つすぐに立ち上がる。床面は平坦である。貼床、周溝は検出されなかった。南の床面には、黄粘土が混じった炭粉が貼りつくようにして残っていた。

柱穴は検出されなかった。

遺物は埋土A<sub>1</sub>層、D<sub>1</sub>層から出土している。(第86図)

5、6は、D<sub>1</sub>層下部出土の土器。5は外面に縄文を施し、内面は火を受け橙色と黒色に変色する。7は、A<sub>1</sub>層出土の土師器。甕の口縁部。調整は内外面ともヨコナデ。

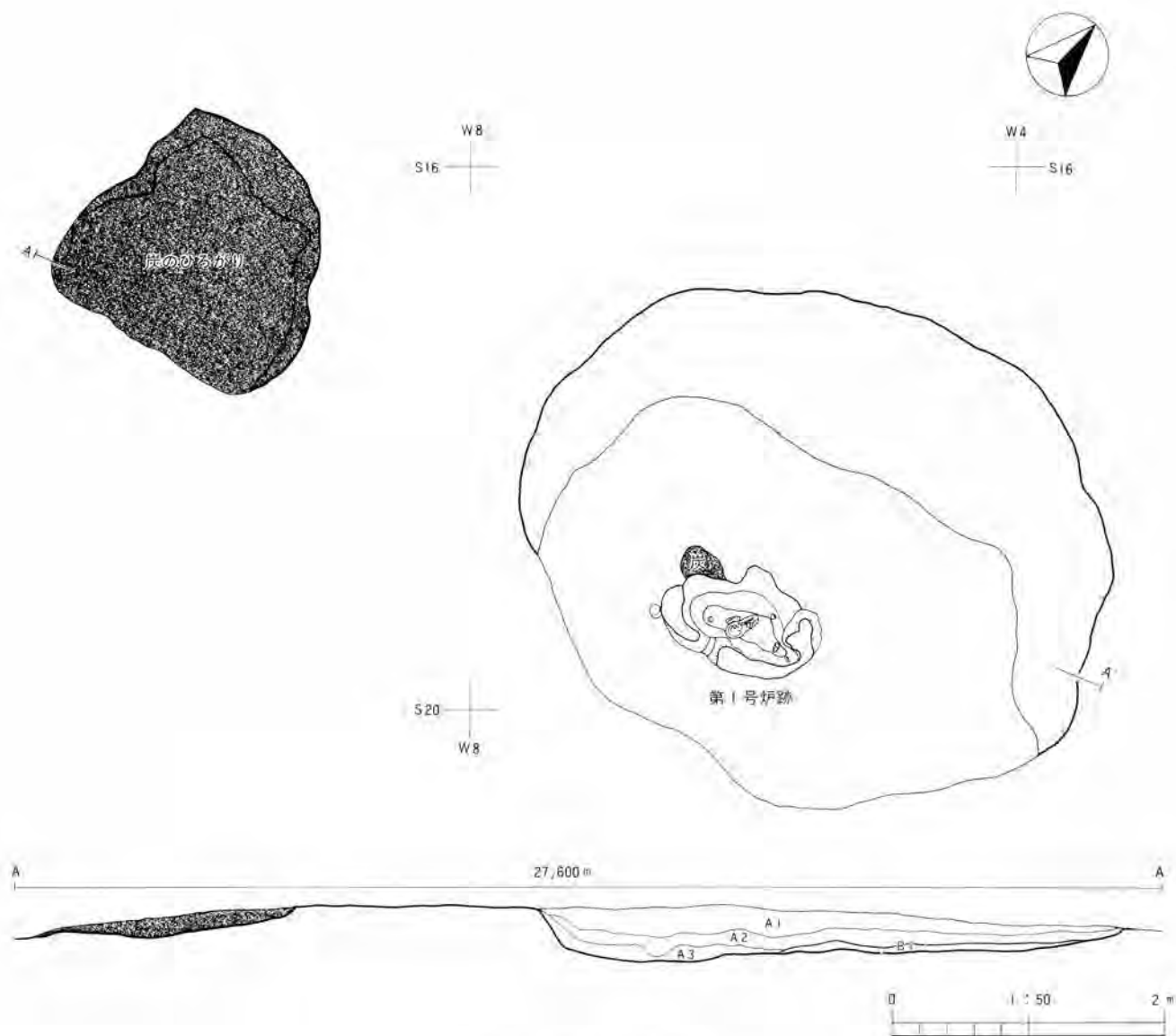
第1号炉跡と炭の広がり。(第87図)

第1号炉跡(第87図)

この2つの遺構は、C区平場の中央部で出土している。検出面は、炭の広がりが地山面で、炉跡は、後述する第34号竪穴住居跡の埋土から出土している。

西側の炭の広がりの平面形は、半円形を呈し、規模は南北約1.7m、東西約1.8mを測る。地山面が浅く掘り込まれており、最大厚は約0.15mを測る。

東側の第1号炉跡は、前述したように第34号竪穴住居跡を利用して構築されている。竪穴の平面形は、楕円形を呈し、規模は東西約4.4m南北約3.5mを測る。埋土は、4層に分かれる。いずれも軟らかめであまり締まりのないシルト質の層である。A<sub>1</sub>~A<sub>4</sub>層は、黒色土の混じる

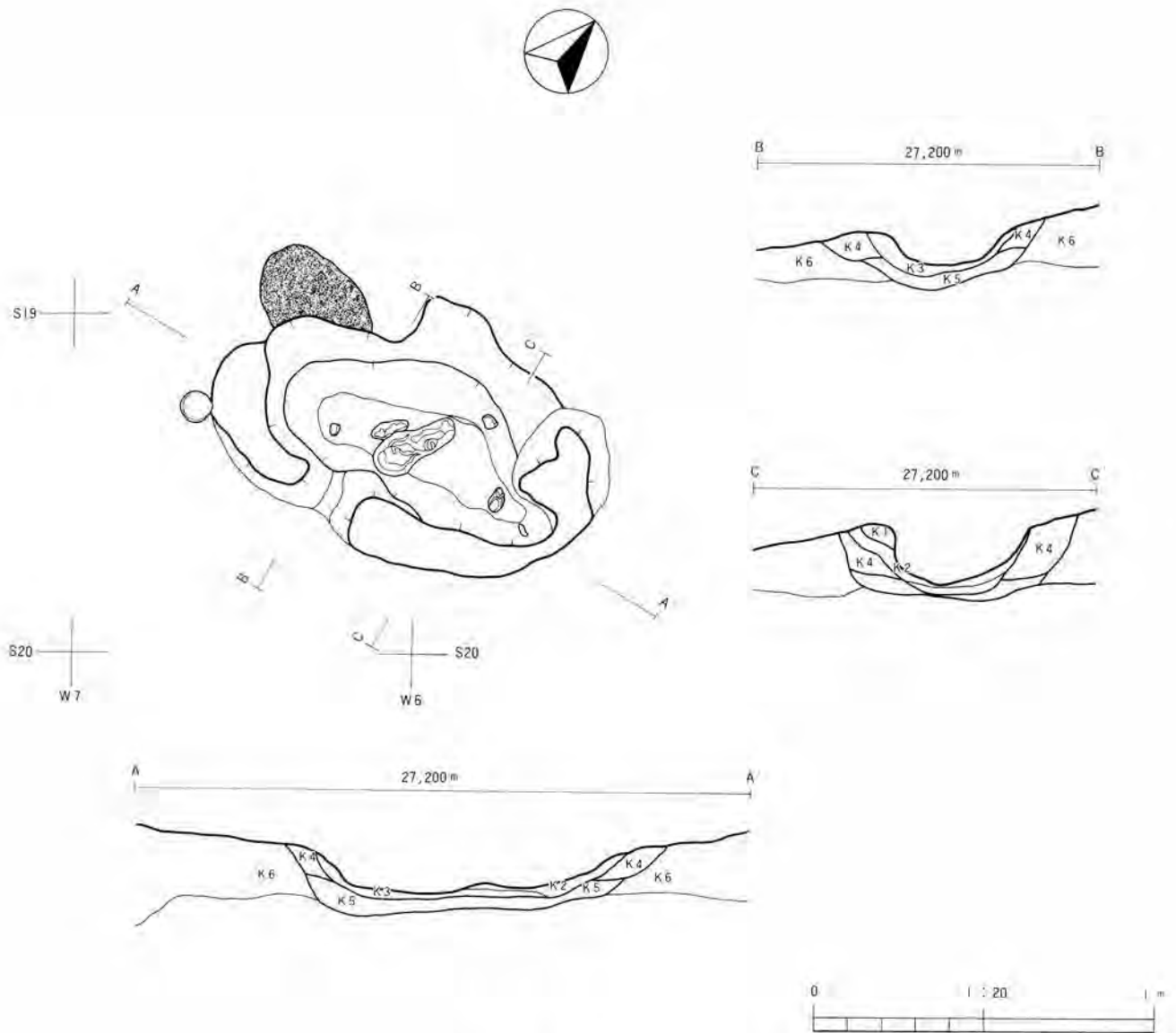


第87図 第1号炉跡と炭

黒褐色土で、A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>層には少量の鉄滓が混じる。B<sub>1</sub>層は、黒色土で、多量の炭や鉄滓を含んでいる。

炉跡は、竪穴の中央に構築されている。平面形は、楕円形を呈し、規模は、長軸約1.2m、短軸約0.6m、深さは最深部で約0.18mを測る。炉壁は、南側中央部で途切れ、U字状に開いた状況で検出した。

構築層は、いずれも砂質の壤土で6層に分かれる。1層は、固く締まりのある橙色土で、多量の粘土を含む。2層は、固く締まりのある黒色土で、多量の鉄滓、少量の粘土塊を含む。3層は、固く締まりのあるにぶい赤褐色土。4層は、固く締まりのある暗褐色土で、褐色土が混じる。5層は、やや固めで締まりのある明赤褐色土。6層は、軟らかめでやや締まりのない褐色土である。

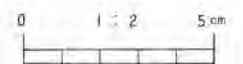
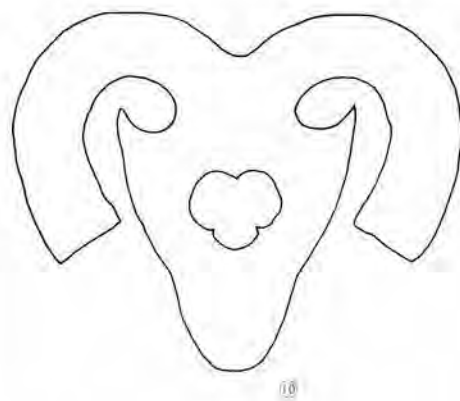
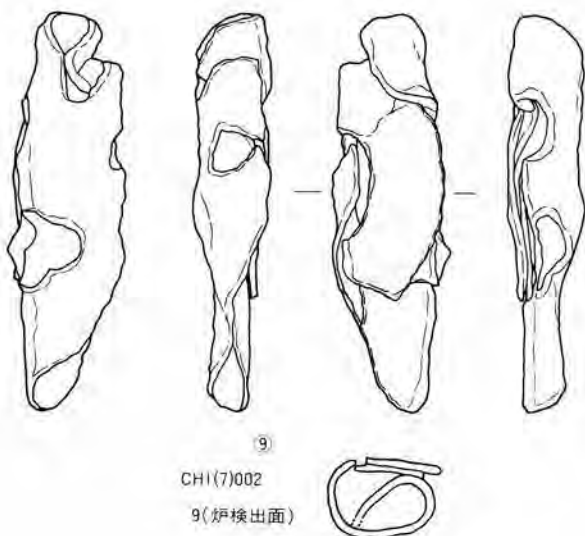
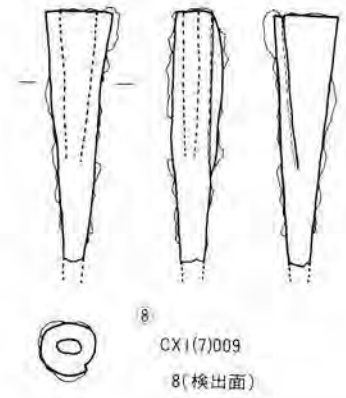
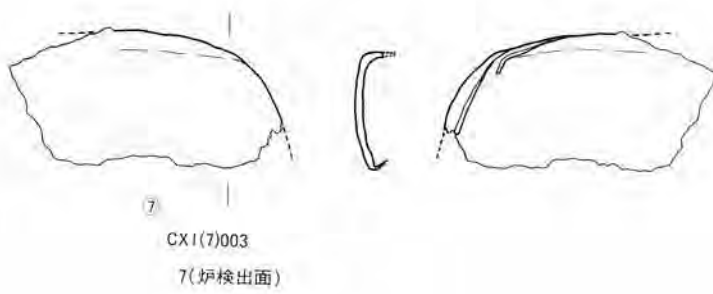
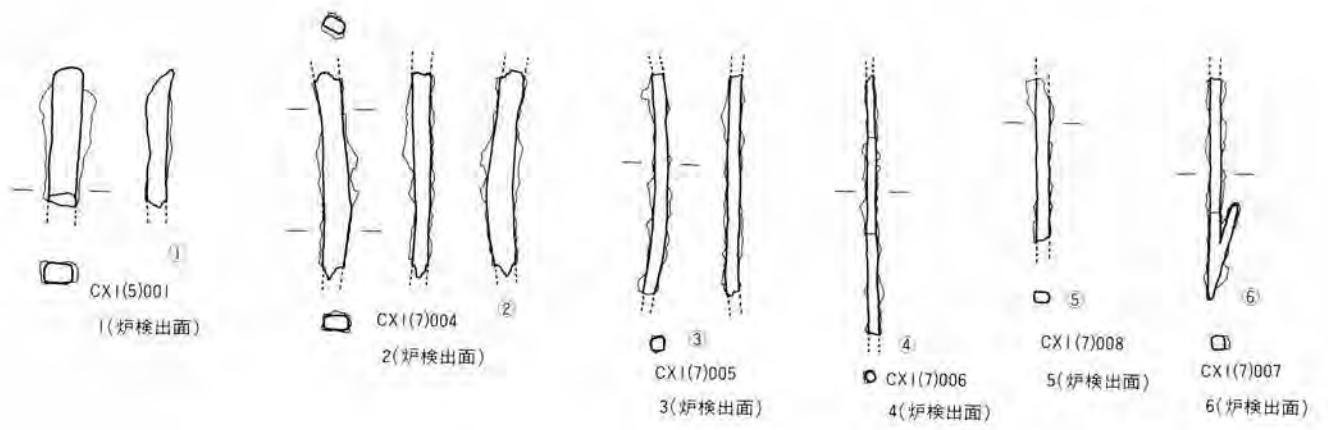


第88図 第1号炉跡

遺物

遺物は、炉床あるいは竪穴内の炉検出面で出土したものである。(第89図)

1から6までは釘状の製品である。1の断面は方形で、 $[0.5\text{cm} \times 0.7\text{cm} \times \text{残長}3.7\text{cm}]$ 。2も断面は方形であるが、中程でねじれ細くなる。3の断面は正方形である $[0.3\text{cm} \times 0.3\text{cm} \times \text{残長}5.8\text{cm}]$ 。4の断面は円形である $[\text{径}0.2\text{cm} \times \text{残長}6.8\text{cm}]$ 。5の断面は方形である $[0.4\text{cm} \times 0.25\text{cm} \times \text{残長}4.2\text{cm}]$ 。6の断面は正方形であるが、1個体か2個体がくっついたものか肉眼では判断できない $[0.4\text{cm} \times 0.4\text{cm} \times \text{残長}5.8\text{cm}]$ 。7は板状の製品で、片端が折り曲がる $[7.2\text{cm} \times 3.5\text{cm}]$ 。8は、先細りになる筒状の製品で、継ぎ目と思われる切れ目をもつ。9は板状の製品を振ったものである。10は9を展開した模式図である。一見動物を模したようなデザインであるが、祭祀儀礼に使用されたものではないかと思われる。



第89图 第1号炉跡出土遺物

### 第31号竖穴住居跡（第92図）

西尾根の急斜面に位置する。検出面は地山面で、標高は約23m。竖穴の平面形は、隅丸方形で、規模は南北約4m、東西約2mを測る。埋土は4層に分かれる。いずれもやや軟らかく、締まりも中程度の層で、細礫を多く含んでいる。A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層は、暗褐色土混じりの黒褐色土で、A<sub>2</sub>層は多量の炭を含む。B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>層は、暗褐色土の混じる褐色土層である。東壁は、やや外傾しながら真つすぐに立ち上がっている。床面は平坦で、貼床、周溝は検出されなかった。

柱穴は、壁の斜面に掘り込まれたものを含め10本検出しているが、柱あたりを確認できたのは2本である。掘り方は浅く、0.1m～0.3mである。

カマドは、竖穴の南東の隅で2基検出し、床面の2個所で焼土が確認されている。

いずれのカマドにおいても崩壊土や礫は検出されていない。焼土Iは、両カマドの軸上に位置する。火床面と思われるが、どちらのカマドに伴うものかは確認できなかった。

南側カマドIの煙道は刳貫式で、長さは約0.9m、断面は径約0.2mの円形を呈する。煙道底部は煙出しに向かって下がる。煙出しの平面形は、楕円形を呈し、0.55m×0.43mを測る。深さは、約1.15mである。埋土は、2層に分かれる。いずれも軟らかめの締まりのない暗褐色～黒褐色土を基本土としている。

北側のカマドIIは、床面から約0.4m上の壁に掘り込まれている。煙道は刳貫式で、長さは約0.65m、断面は径約0.2mの円形を呈する。煙道底部は、水平に煙出しに向かう。煙出しの平面形は、径0.3mの円形で、深さは0.65mである。埋土は3層に分かれる。D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>層は、黄褐色土混じりの固めの暗褐色土層である、D<sub>3</sub>層は、暗褐色土混じりの固めの黒褐色土層である。

#### 床面焼土I

竖穴の南東隅の床面に位置し、前述したように2基のカマドの軸上にあたる。平面形は、楕円形を呈し、0.45m×0.35mを測る。皿状に掘り窪めてあり、深さは、最深部で0.05mである。埋土は、B<sub>1</sub>層が固い明赤褐色土の層で、厚さ約0.03mを測る。

#### 竖穴床面焼土II

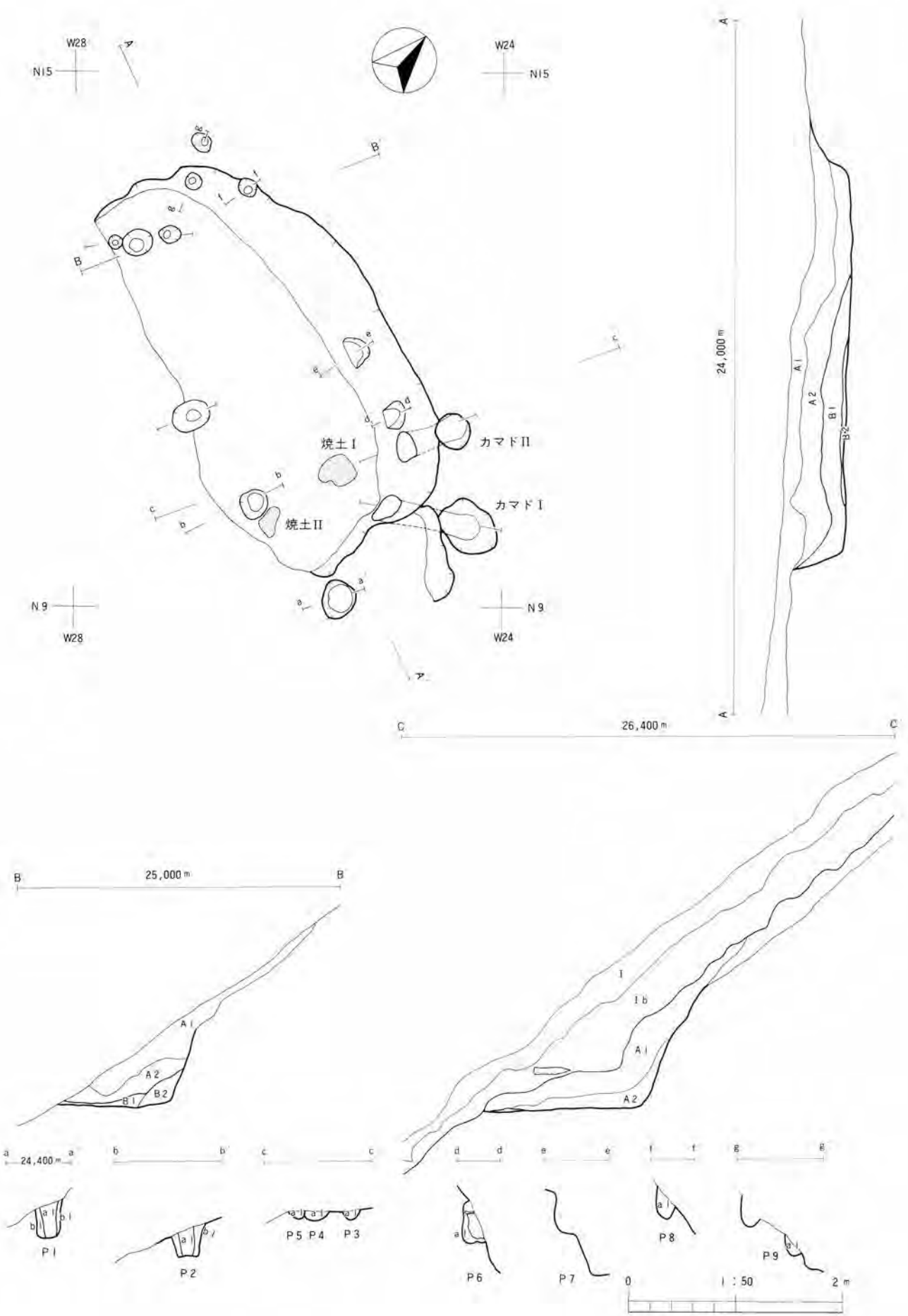
焼土Iの西に位置する。検出面は、径約0.33mの不整円形を呈し、P<sub>17</sub>に切られている。埋土は、B<sub>1</sub>層が固い赤褐色層で、厚さ0.03mを測る。P<sub>17</sub>埋土中の石の表面は焼けている。遺物は検出されていない。

### 第32号竖穴住居跡（第92図）

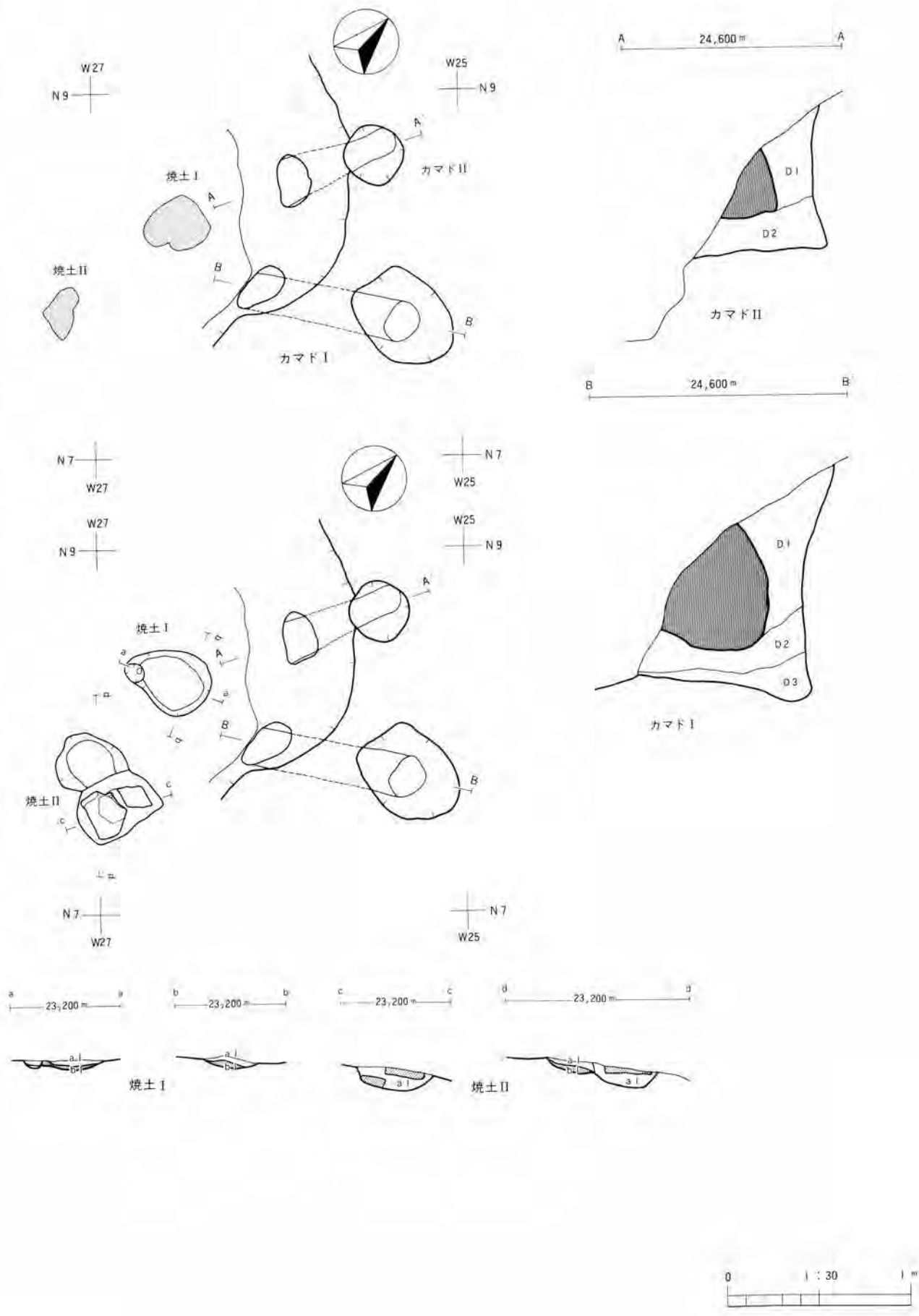
この遺構は、第31号竖穴住居跡の北側に位置し、同遺構に切られている。東壁と床面の一部が依存する。規模は、南北約4m、東西約1mを測る。埋土は、3層に分かれる。A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層は、第4号竖穴住居跡と共通し、C<sub>1</sub>層は、固い明褐色土である。

東壁は、外傾しながら立ち上がるが、凹凸が目立つ。床面は平坦で、周溝、貼床は検出されなかった。

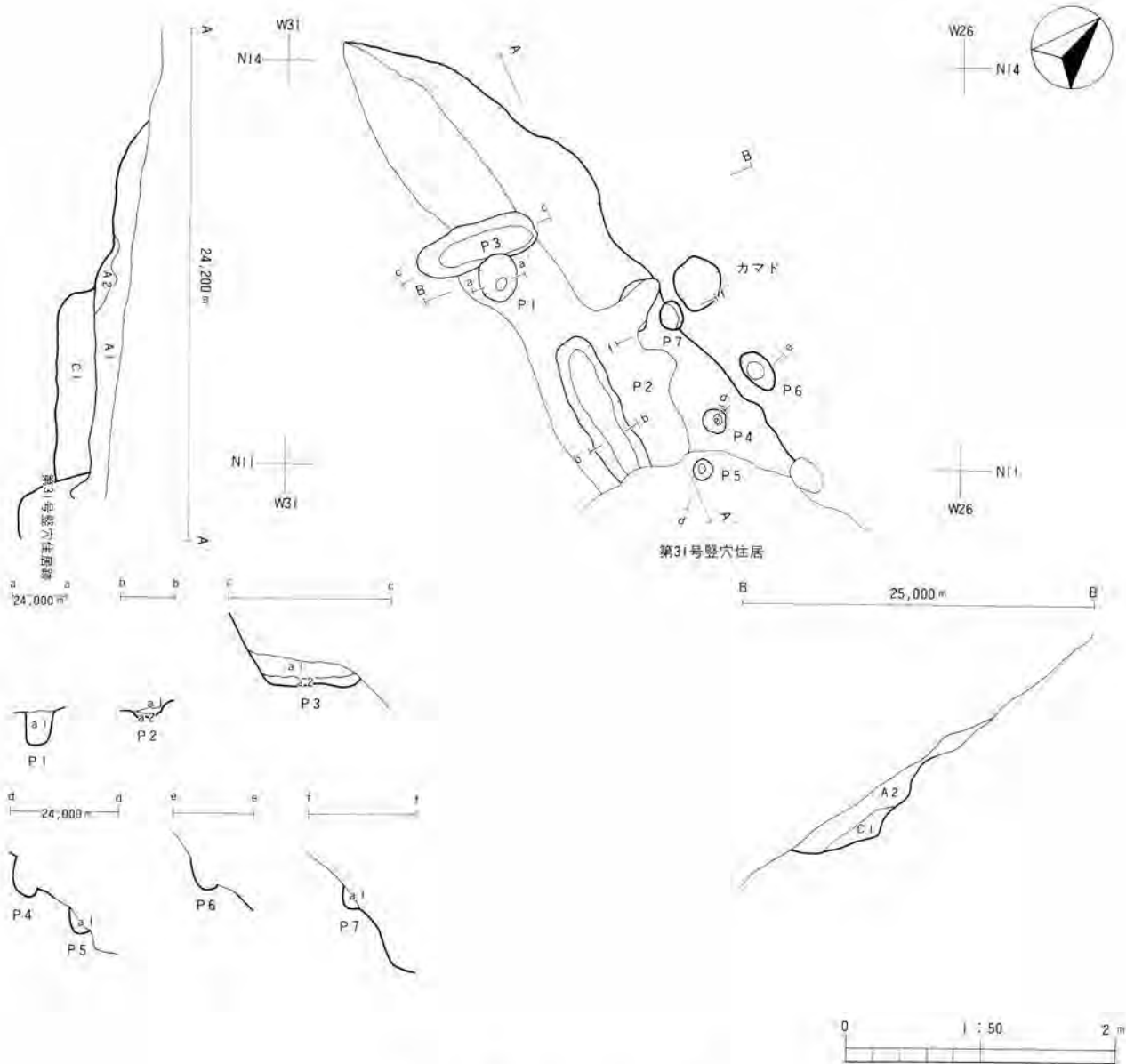




第90図 第31号竪穴住居跡



第91図 第31号竪穴住居跡カマド I、II

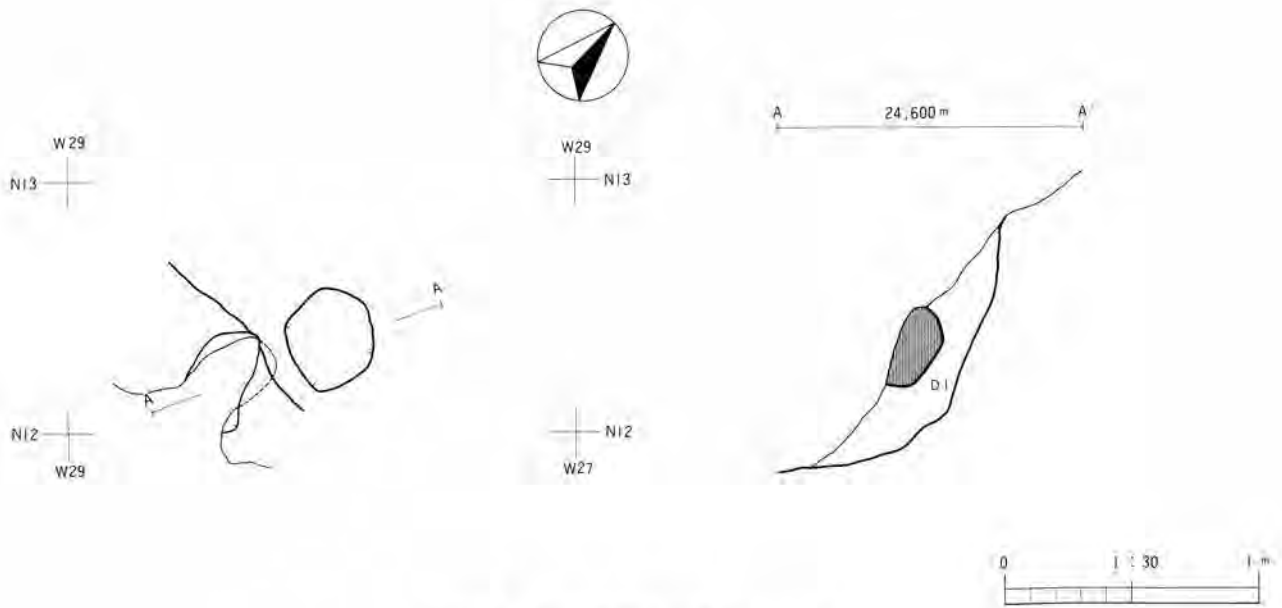


第92図 第32号竖穴住居跡

柱穴、土坑、溝状の掘り込みが検出している。いずれも掘り方が浅く、柱あたりは確認できなかった。

カマドは、東壁中央部で1基出土している。遺存状態が悪く、かろうじて煙道と煙出しが残っている。煙道は刳貫式で、長さは約0.3m、断面は径約0.25mの円形を呈する。煙道底部は、煙出しに向かって上がる。煙出しの平面形は、径約0.35mの円形を呈し、深さは約0.5mである。D<sub>1</sub>層は、褐色土混じりの軟らかい暗褐色土である。

遺物は検出されていない。



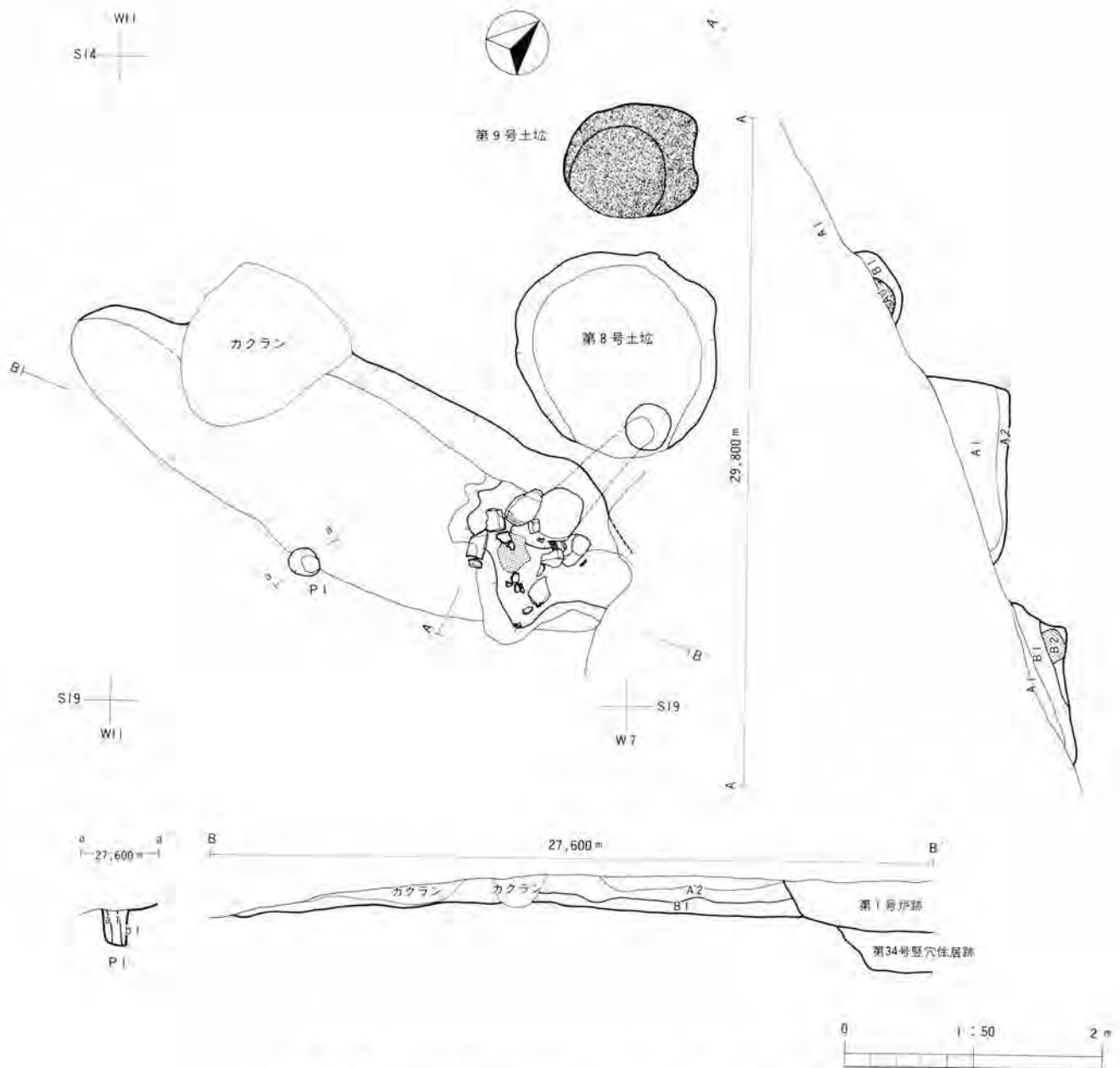
第93図 第32号竪穴住居跡カマド

第33号竪穴住居跡（第94図）

C区平場の中央に位置し、炭の広がりの中から検出し、東側を第34号竪穴住居跡に切られている。北壁と床面の一部が長楕円形状に遺存し、規模は、東西4.7m、南北1.6mを測る。埋土は3層に分かれる。いずれも固さ、密度ともに中程度の層である。A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>層は褐色土混じりのにぶい黄褐色層で、B<sub>1</sub>層は褐色土の混じる暗褐色土層である。

北壁は外傾しながら真っすぐに立ち上がる。床面は平坦で、周溝や貼床は検出されていない。柱穴は、中央部の南端で検出されている。a<sub>1</sub>層はやや固めのにぶい赤褐色土層である。

カマドは、北壁の西端で1基検出している。天井部と袖部は崩壊しているが、芯となった礫が遺存している。礫の数は片側3個ずつで計6個である。燃焼部の規模は、0.5m×0.4mであり、焼土層厚は最大0.1mである。煙道は笏貫式で、長さは約0.8mである。煙道底部は煙出しにほぼ水平に向かう。煙出しの平面形は円形で径0.33mを測り、深さは約0.6mである。K<sub>1</sub>～K<sub>4</sub>層は構築土層である。K<sub>1</sub>層は、黄澄土混じりの軟らかめの褐色土。K<sub>2</sub>層は、黄褐色土混じりの固めの明赤褐色土の焼土層である。K<sub>3</sub>層は軟らかめの褐色土層で、土器片を含む。K<sub>4</sub>層は、固めの黄褐色土で、土器片を含む。D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>層は、いずれも軟らかく、細礫を多量に含む。D<sub>1</sub>層はにぶい黄褐色土、D<sub>2</sub>層は暗褐色土混じりの褐色土である。

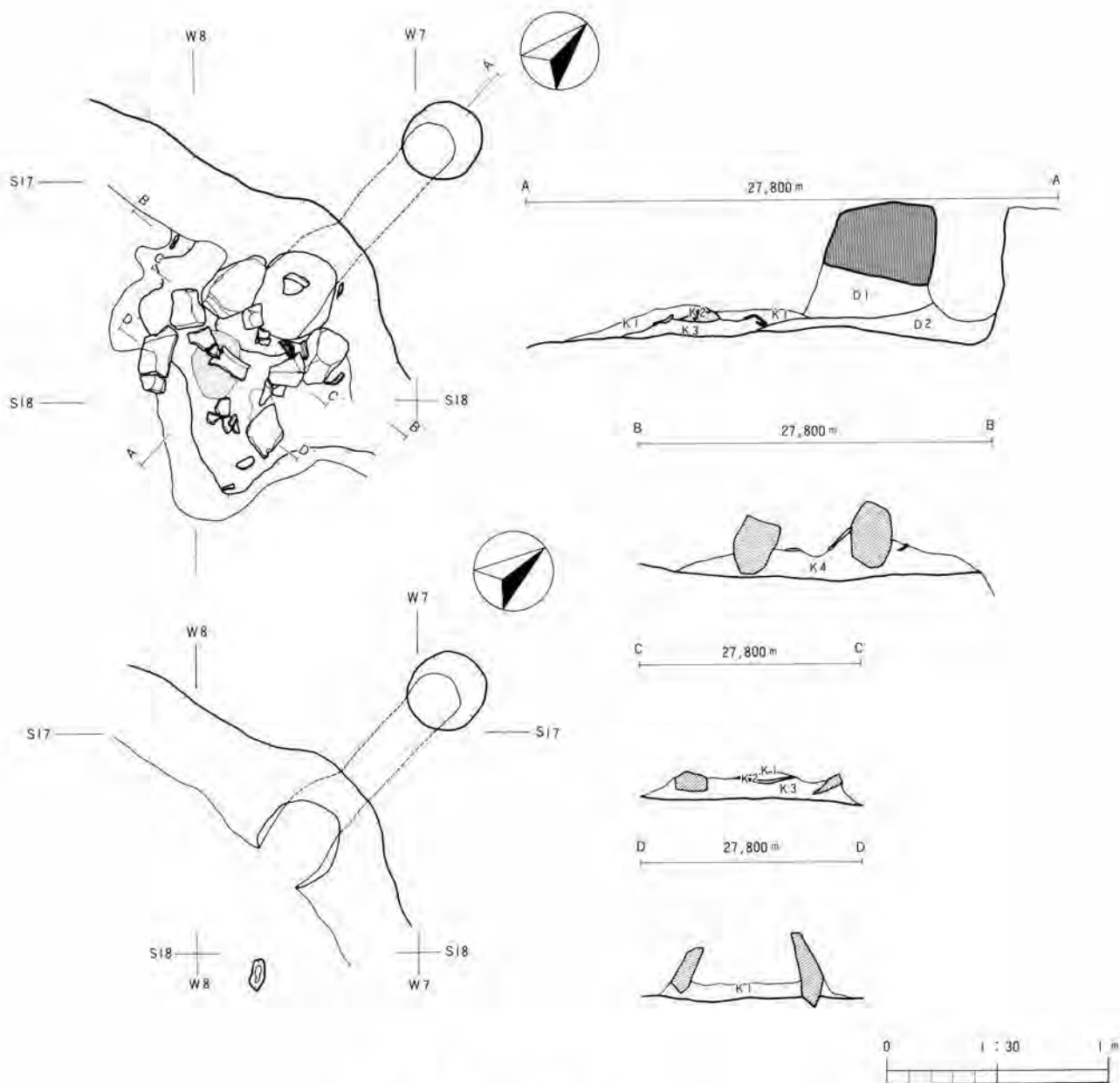


第94図 第33号竪穴住居跡、第2号、第3号土壇跡

遺物はすべてカマドの崩壊土から出土したものである。(第96図)

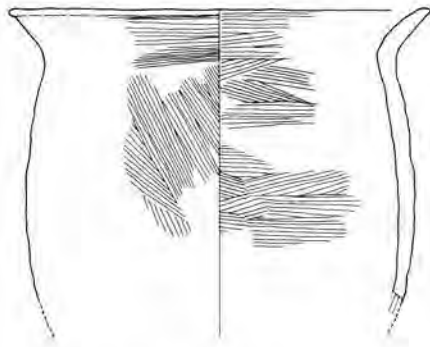
遺物

1は長胴甕である。色調は、にぶい黄橙色で、一部灰褐色を呈す。胎土には多量の細礫が含まれている。全体に歪みが著しい。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は尖り気味である。頸部のくびれは小さく、胴部はわずかに脹らむ。最大径は口縁部にもつ。口縁部の調整は、内外面ともヨコナデであり、胴部も内外面ともナデであるが、外面は斜方向、内面は横方向に施している [16.5×(11.5)×一]。2は長胴甕である。色調はにぶい黄橙色。胎土には多量の細礫が混じる。口縁部は外傾し、口唇部でやや尖り気味になる。頸部のくびれは浅く、体部の脹らみも小さい。最大径を胴部にもつ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデであり、体部は外面

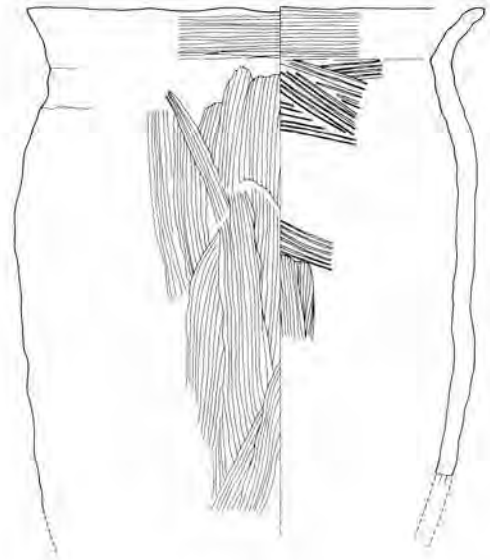


第95図 第33号竪穴住居跡カマド

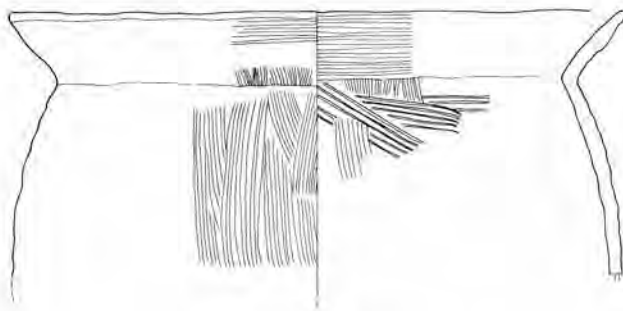
が縦方向のナデ、内面が縦方向のナデを交えたハケメ調整である [18.1×18.5×—]。3は長胴甕である。色調はにぶい黄橙色である。胎土に砂粒、細礫が大量に混じり、器面はかなり荒れている。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は先細りになり、端部は丸む。頸部のくびれは浅く、体部はわずかに脹らむ。口縁部に最大径をもつ。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデであり、体部は、外面が縦方向のナデ、内面が縦方向のナデを交えたハケメ痕を残す [(24.3) × (10.5) ×—]。4は長胴甕である。色調はにぶい黄橙色である。胎土には白い細礫が混じる。底部は張り出し、外面にかすかに木葉痕が観察される。体部は、やや内湾しながら立ち上がる。調整は、体部はナデ調整で、外面が縦方向、内面が横方向に施されている。底部には横方向にナデとハケメの痕が残る [— × (11.4) × 10.0]。5は須恵器で、甕の口縁部である。



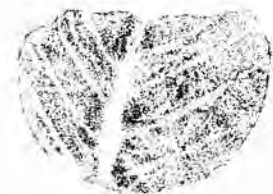
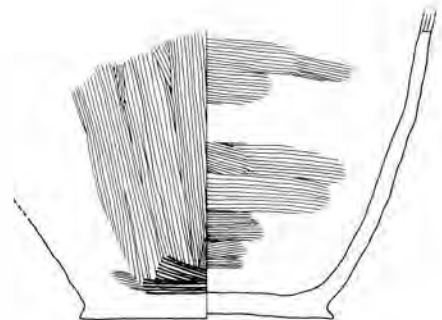
1(カマド崩壊土)



2(カマド崩壊土)



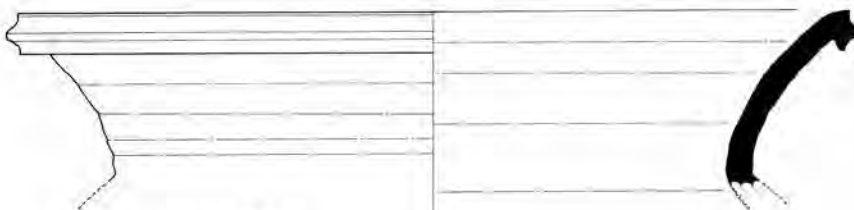
3(カマド崩壊土)



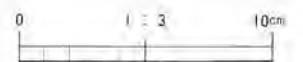
4(カマド崩壊土)



6(カマド崩壊土)



5(カマド崩壊土)



口縁部は湾曲しながら外傾し、口唇部をさらに外反させる。内外面ともロクロナデ成形である。胎土は、細礫の混入しているがやや緻密な粘土であり、灰色～にぶい褐色を呈す [(33.5) × (8.5) × 一]。6は須恵器で、甕の体部と思われる。内外面とも明瞭なロクロナデ調整痕を残す。焼成は良好。胎土は緻密で、少量の砂粒が混じり、灰色～にぶい褐色を呈す。

#### 第8号土坑跡

遺構は第33号竪穴住居跡の背後の斜面に位置する。同遺構の煙出しを切って掘り込まれている。平面形は円形を呈し、規模は径1.6m、深さは北壁で0.6mを測る。埋土は2層に分かれる。いずれもやや固めの締まりのない層である。A<sub>1</sub>層はにぶい赤褐色土混じりのにぶい黄褐色土層、A<sub>2</sub>層は褐色土層である。

壁はわずかに外傾しながら真っすぐ立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は検出されなかった。

#### 第9号土坑跡

第8号土坑のすぐ北に掘り込まれた浅い土坑である。平面形は円形を呈し、規模は径約1m、深さは約0.18mを測る。埋土は2層に分かれる。A<sub>1</sub>層は、軟らかい黒色土で、多量の炭が混じる。B<sub>1</sub>層は、明黄褐色土が混じる褐色土である。

遺物は検出されていない。

#### 第34号竪穴住居跡（第97図）

この遺構は、前述した第1号炉跡の下から検出している。西側の第33号竪穴住居跡を切って掘り込まれている。平面形は、隅丸の不整形で、規模は東西約4.5m、南北約3.5mを測る。埋土は2層に分かれる。いずれもやや軟らかく締まりのない層で、多量の細礫が混じる。A<sub>1</sub>層は、褐色土、A<sub>2</sub>層は明黄褐色土である。

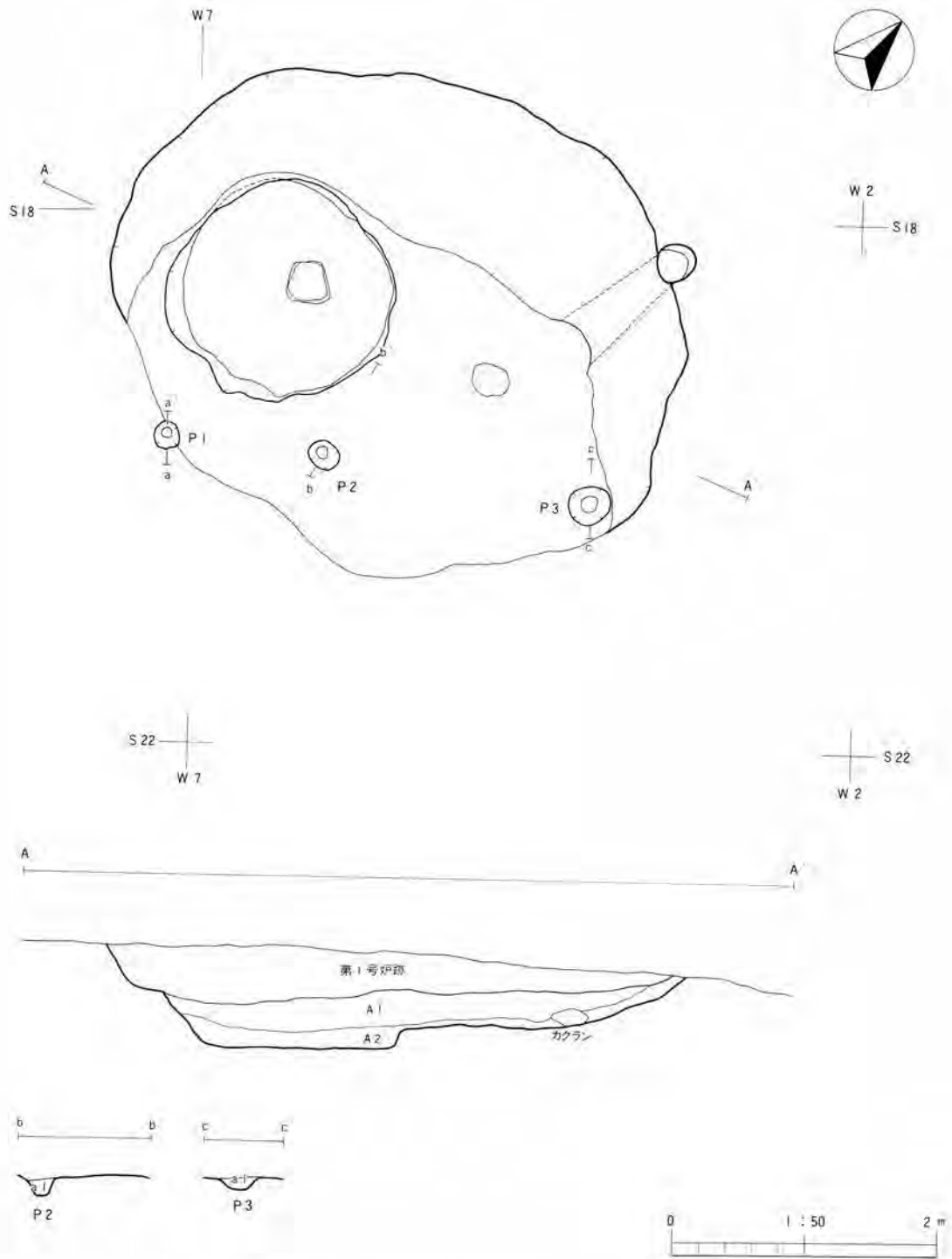
壁はかなり外傾し、やや湾曲しながら立ち上がる。床面は平坦である。周溝、貼床は検出されなかったが、北西の壁際に浅い土坑が設けられている。土坑の平面形は、円形を呈し、径1.7m、深さは約0.14mを測る。

柱穴は、3本検出している。いずれも掘り方は浅く、深さは0.05m～0.14mであり、柱あたりは確認できなかった。

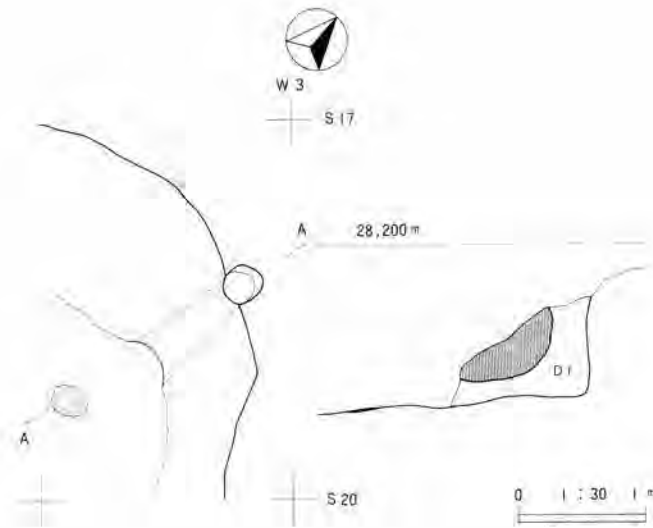
カマドは、北東の壁の隅で1基検出している。焚口部では、火床面の焼土層だけが検出した。焼土の平面形は不整形円形を呈し、規模は、0.3m×0.24m、厚さ約0.02mを測る。煙道は刳貫式で、長さは約1m、断面は約0.18mの円形を呈す。煙道は煙出しに向かってわずかに上がる。煙出しの平面形は円形を呈し、径0.3mを測る。深さは約0.7mである。埋土は3層に分かれる。いずれも軟らかく多量の細礫を含む。D<sub>1</sub>層は暗褐色土混じりの褐色土。D<sub>2</sub>層は黄褐色土混じりのにぶい黄褐色土。D<sub>3</sub>層は、暗褐色土混じりの灰黄褐色土である。

遺物は検出していない。





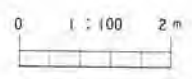
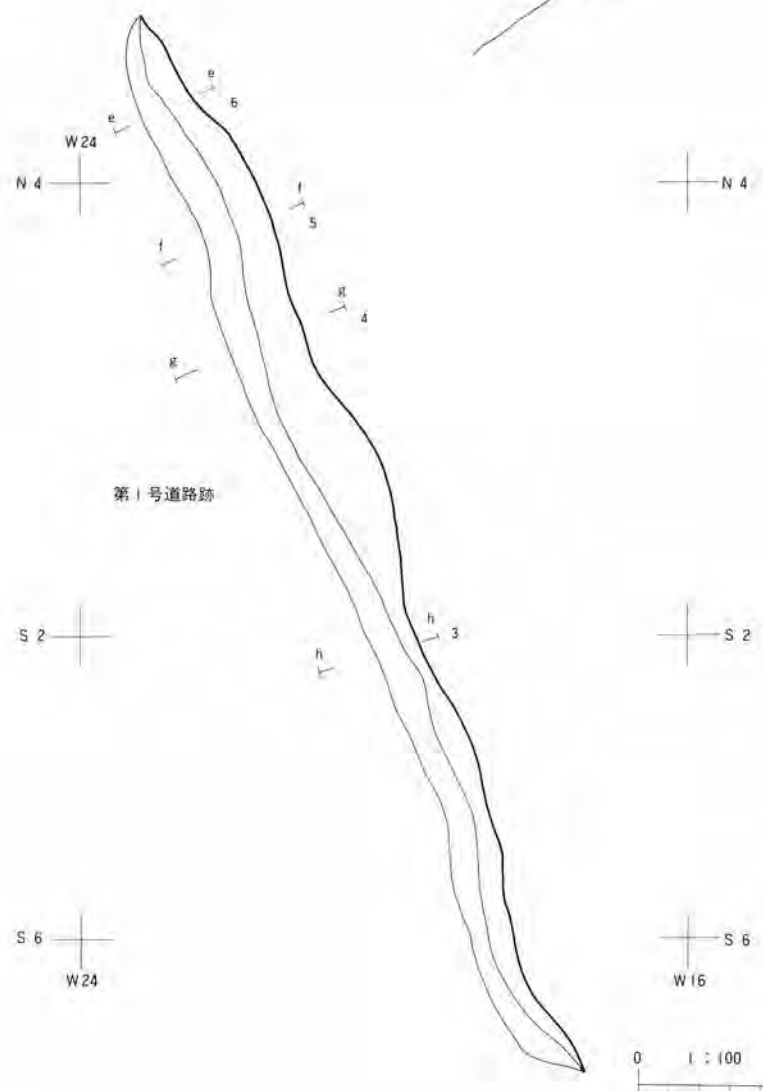
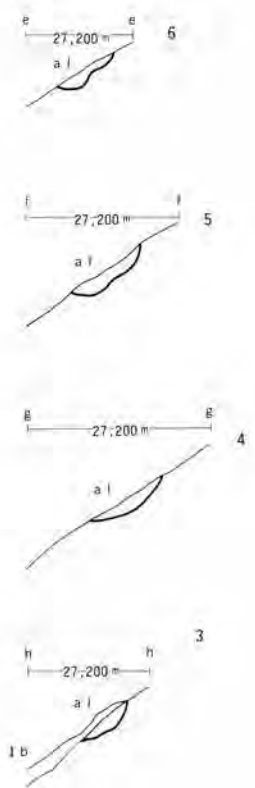
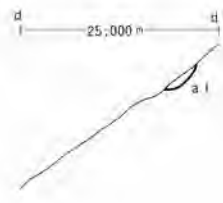
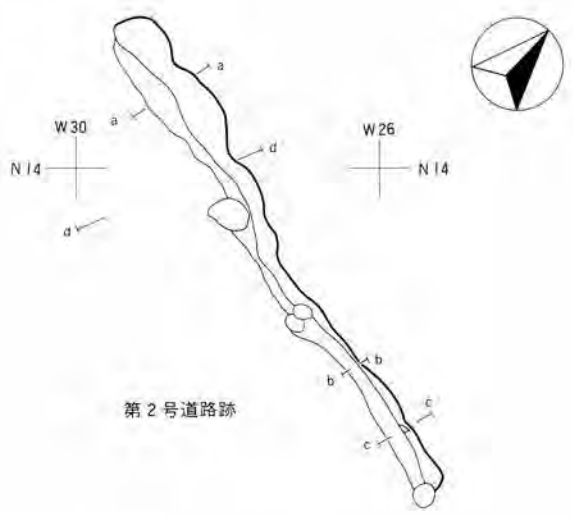
第97図 第34号竖穴住居跡



第98図 第34号竖穴住居跡カマド

道路跡（第99図）

遺構はC区西の急斜面上に位置し、標高25m～26mの等高線上と（第1号道路跡）、標高24m～24.5mの等高線上（第2号道路跡）の2箇所で検出している。検出面は地山面である。道幅は、最大25cmを測る。埋土は、第1号道路跡は多量の細礫を含む褐色土～暗褐色土であり、第2号道路跡はやはり多量の細礫を含む黄褐色土～褐色土である。遺物は検出されていない。



第99图 道路跡

## Ⅳ 調査のまとめと考察

今回の発掘調査の結果は以上のとおりである。以下、時代毎にその遺構・遺物などについて考察をまじえながらまとめとするが、担当者の認識不足と時間的な制約も加わり、決して満足のいくものとはならなかったが、不足した部分については、何らかの機会を把らえ随時公表することとする。

### 1 縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 遺構

今回の調査で検出した縄文時代の遺構としては、調査区A区から土壇跡5基（第1号～第5号）と調査区C区の第6号土壇跡の計6基だけで、竪穴住居跡などの遺構は検出しなかった。当然、このような土壇跡を作った人たちの居住域である竪穴住居跡を含む集落跡の存在は確実に予測できるものである。

フラスコピット

今回検出した各土壇跡は、C区内に位置する第6号土壇跡は上部の削平が著しいが、すべてその断面形が所謂フラスコ状を呈するフラスコピットといわれるもので、一般的には貯蔵穴と考えられるものである。第1号と、第6号土壇跡以外は、すべてA区の南端部の標高22.5m付近にまとまっており、そのうち第4号と第5号土壇跡は重複関係にある。後述する出土土器などから縄文時代中期頃のものと考えられる。

構成要素

宮古市内において、このような土壇跡（フラスコピット）の検出例を見てみると、金浜館跡（『金浜館 85』）、嶽ヶ崎館山貝塚（『館山貝塚 90』）、高根遺跡（『高根 89』）、崎山貝塚（『崎山遺跡群 I～V』）などで多数検出し調査されているが、いずれも竪穴住居跡などの集落（居住域）とはその立地が異なっている。金浜館跡では、独立した丘陵部のなだらかな斜面部にあり、この丘陵内には同時代の住居跡は見つかっていない。嶽ヶ崎館山貝塚も同様で、フラスコピットだけが22基検出したが明確にそれらに伴う住居跡については不明であった。ただし、同一地点で重複する竪穴状の遺構はあった。高根遺跡では、緩やかに北から南に傾斜する斜面部の中腹にあり、この地点よりも高い平坦部に居住域がある。崎山貝塚では、舌状に伸びる台地の中央部に多数検出しているが、このフラスコピット群に伴う住居跡は検出しておらず、時期的にはむしろ尾根をひとつ越えた白石遺跡の住居跡（集落）との関連性が予想されている。このようなことは、宮古市内のみならず、他地域においてもほぼ同様で、縄文時代の集落の構成・在り方を考えていく上でのひとつの構成要素として考えられるべきものであると思われる。最近、特に話題となっている集落論の枠組の大きな視点から、その立地条件や用途などの性格づけを考えていくべきものと思われる。それには2つの側面があり、ひとつのある空間（例えば独立した丘陵部など）の中での各役割を果たすような空間の作り方と全く別々の地点にそれぞれの単一の役割を持たせるような在り方の2側面があるのではと知っている。それが時代背景を表しているかはまた別の問題としてでもある。

さて、以上のようなことを念頭に置き今回の当遺跡の状況を考えてみるならば、ひとつは今回調査の対象外であったA区の北側に大きく広がる更に標高の高い地点に住居跡などを含む集

落の存在が予想される。また、別の考えとしては今回調査区の南にある丘陵（花輪館跡）の中にそれを求めるといふことも想定される。あるいは、これらとは全く別個に考えていくのかと様々な可能性が想定されるが、後述する縄文土器の出土状況などや宮古市内における同様の地形に立地する遺跡の調査例では、尾根の中腹から突端部には弥生～古代の遺構があり、逆に高い方には縄文時代の遺構が存在している（例えば、泉町狐崎Ⅱ遺跡『狐崎Ⅱ 85』）ことなどを考えあわせると、A区の北側に大きく広がる更に標高の高い地点に住居跡などを含む集落の存在するものと思われる。

集落の存在

いずれにしても、今回の調査で検出した数基のフラスコビット群からも考えられるように、当遺跡が立地する千徳丘陵は、大～小河川・沢などにより大小に、そして樹枝状に開析がかなり進んだ状況にあり、ひとつの尾根を機軸とした遺跡（集落）の構造を考えていかなければと思われる。と同時に資料の蓄積も進みもっと広い視野で遺跡（人々の行動圏）の在り方、連がりを考えていく機会になってきたものと思われる。

## (2) 遺物（第14図1～6、第83図35～44）

今回出土した縄文時代の遺物は、土器片が大半だが、量的には多くない。前述したフラスコビット内の遺構内のほか、調査区D区を中心とした古代の堅穴住居跡の埋土やD区中央の沢筋に堆積した土層（遺物包含層）などから出土した。なお、この遺物包含層を観察すると上部の尾根部から流れこんだ状況であり、遺構の項で考えた根拠のひとつにもなっている。土器片は、おおむね縄文時代中期から後期を主体としたものである。以下、今回出土した縄文時代の土器についてまとめるが、縄文主体のみのものが多くしかも破片だけであるため、個々の土器の有する文様などの特徴から判断したものである。

### 〈中期〉（第14図1～6、第83図44）

第83図44は隆沈線文で渦巻き文を連結させたもので、大木8b式に相当するものである。また、第14図1～6は第2号から第5号土坑跡から出土したものだが、縄文主体の土器片で所属時期不明である。しかし、その地文や器面、胎土などの観察から中期の土器に施文されるものと類似しておりあえてここに含めた。

大木8b式

### 〈後期〉（第83図35～43）

第83図35～43は同一個体と思われるもので、縄文の施文後に沈線による曲線文を施文している。後期前葉に相当するものと思われる。

後期前葉

## 2 弥生時代の遺構と遺物

### (1) 遺構

弥生時代に確実に所属するものとしては、調査区C区の尾根中腹に検出した第1号堅穴跡で、2.2×1.7mをはかるだ円形を呈する小規模なものである。相伴している土器から弥生時代後期に所属するものだが、周辺部には古代の堅穴住居跡が構築されており、周辺部に広がりがあったのかなどについては不明であった。

弥生時代後期

次に、本文中でも簡単に触れていたが、調査区A区内の第5号と第7号竪穴住居跡が弥生時代に伴う可能性が高い遺構である。しかし、どちらもその大半部分が古代の竪穴住居跡に切られており詳細は全く不詳であり、決して強弁するものではない。この様に、古代（奈良時代）の竪穴住居跡と弥生時代の竪穴住居跡が完全に重複している例が、市内においても狐崎遺跡でも確認されている。

平面形は、ほぼ長だ円形になると思われるもので、市内で確認された狐崎遺跡や上村遺跡の例と同じで、また、県内の他の調査例とも類似する。

では、この2つの竪穴の時期についてだが、第5号竪穴住居跡と重複している奈良時代の第4号竪穴住居跡の埋土（A3層）から後述するが、第28図25～31のような弥生時代後期の遺物がまとまって出土しており、少なくともこの第5号・7号竪穴の時期は、弥生時代後期と考えられる。

## (2) 遺物

### a. 土器

遺構の項でも記したほかに、調査区D区からも若干量出土している。縄文時代出土土器同様にその量は少ないため、以下、個別にその特徴と推定される所属時期などについて記すことに滞める。

調査区C区の第1号竪穴跡のものは（第16図1、2）、埋設されていたもので同一個体片である。図示した以外にも地文のみの小破片が出土している。土器内面が剥落しているなど遺存状態が悪い。口縁部が大きく外反し胴部が内湾気味となる粗製の甕形土器で、口縁部が複合口縁となり口縁上端から撚糸状が施文されている。同じ様に調査区D区から出土している第83図29～31も細かい撚糸状の縄文を地文としているもので、弥生時代後期の赤穴式土器に類似した特徴を有している。調査区A区の第4号竪穴住居跡A3層から出土したのも、同様であると思われる。

赤穴式

第83図32は、口縁部片で沈線文に交互刺突を施した弥生時代後期の天王山式に相当する。

天王山式

以上簡単ではあるが、今回出土した弥生時代の土器について記したが、近年、宮古市内においても狐崎遺跡、上村遺跡、長根I遺跡（『長根 90』）、芋野II遺跡（『細越・芋野 92』）など当該期の土器の出土がみられるようになってきたが、上村遺跡（弥生時代前期初頭）では竪穴住居跡とともに比較的大量に出土している以外は、まだまだ断片的で今後の資料の蓄積が期待される。

### b. 土製品

紡垂車

調査区A区の第4号竪穴住居跡A3層から紡垂車が1点だけ土器と一緒に出土している。径6.1cm、厚さ1.6cm、重量57.6gをはかり、中央部に径0.6cmの小孔があけられており小孔の周辺部が盛り上がっている。両面及び側縁部には、沈線と刺突により文様を描いている。一緒に出土している土器片から弥生時代後期に伴うものである。

さて、弥生時代の紡垂車は宮古市内では前記の上村遺跡F-4住居跡から、弥生時代前期初頭期の石製のものが出土しているだけで、土製のものは初例である。岩手県内をみても土製の

紡垂車の出土例は極めて少なく、一関市谷起島遺跡、東山町熊穴洞穴遺跡、滝沢村湯舟沢遺跡で出土している。県外では青森県の根城跡など秋田から青森県の東北北部で比較的多く出土しているようだが、本遺跡のものは形態的には熊穴洞穴遺跡、根城跡のに極めて類似しており、湯舟沢遺跡のものは形態的には、縁辺部に張り出しを有しており異なる。

いずれにしても、出土例が少なく今後の検討課題となろう。

### 3 奈良・平安時代の遺構・遺物

#### (1) 遺構

##### a. 竪穴住居跡

今回の調査では重複し全容が不明なものまで含めると計32棟の竪穴住居跡を検出している。これは、宮古市内では磯鷄館山遺跡跡の26棟（現在調査報告書作成中）に匹敵するものである。市内では他に上村遺跡で16棟、細越Ⅰ遺跡（『細越・芋野 92』）で10棟、赤前遺跡群で5棟、狐崎遺跡で5棟等々があり、近年奈良・平安時代の古代の竪穴住居跡の調査例が増加し、それに伴う資料の蓄積も大分進んできたようである。

それでは、今回調査した32棟について本文中では言及し得れなかった住居跡の年代も含め、一覧表を掲載し、それを基に若干の分析を試みたい。ただし、伴出遺物がなくその所属年代が不明なものについては除く。なお、一覧表は133Pに掲載している。

#### ① 奈良時代の竪穴住居跡

（1号、2号、4号、6号、8号、9号、15号、20～22号、27号住）

〔立地〕 調査区A区の尾根の平坦部と一段低いD区の洞状の地形の平坦部にあり、C区の急な斜面部には立地していない。

〔重複〕 同時期同士の重複は、1号住と2号住、20号住と21号住の2例だけで、後の重複は平安時代の住居跡とである。直接重複はしていないが、比較的近接している状況が窺える。

〔平面形・規模〕 隅丸方形・長方形が主体を占める。規模は、A区内の4号住とD区内の27号住の2棟が長軸で、7.4m、6.6mと大形の部類に入るほかは、ほぼ5m内外におさまっている。

〔周溝〕 周溝を巡らすものが多い。1号住、4号住、7号住、22号住などであるが、いずれも全周するものではなく、カマド周辺を中心とした壁側に形成されている。

〔柱穴〕 明確に柱穴の位置がわかるものが少ないが、4号住は各コーナーに柱を配す4本柱の構成となりそうである。

〔カマド跡〕 位置的には北壁、西壁側とあるが、大分地形的に制約されているようで勾配の高いほうに煙出口を設けている。ほとんどが、角礫、垂角礫を芯材として構築されている。

〔煙道〕 大部分が刳り貫き式の煙道で下勾配のものが多い。

## ② 平安時代の竪穴住居跡

(3号、10号、16号～19号、23号～26号、28号～34号)

[立地] 前述の奈良時代とかわりなく平坦部にもあるが、大きく違っているところはC区の急な斜面部に立地しているものがある。

[重複] 同時期同士の重複は、17号住と18号住、24号住～26号住、31号住と32号住、33号住と34号住があり奈良時代と比較すると多い。

[平面形・規模] ほとんどが隅丸方形・長方形だが、方形、長方形のものもみられる。規模は、3.5m4.0m前後、5m前後が主体で6.0m超のものはない。

[周溝] 24号、25号住以外には確認されなかった。

[柱穴] 明確に柱穴の配置がわかるものが少ないが、4本柱の構成となりそうなものが多いようである。

[カマド跡] 位置的には北壁、西壁、東壁側とあるが、やはり地形的に制約されている面が窮え、ほとんどが、角礫、垂角礫を芯材として構築されている。また、28号住、31号住では新旧2時期の複数のカマドがつくられている。

[煙道] やはり大部分が刳り貫式の煙道で下り勾配のものが多い。それから、16号住、17号住、18号住、28号住の煙出口埋土には多量の中～小礫が混入している点が注目される。

## ③ 奈良・平安時代の竪穴住居跡の分布などについて

今回調査した住居跡は、奈良時代と平安時代のものがあつた。①と②の観察からその相違を分析すると、大きな違いは平安時代にはC区のような急斜面部にまで立地しているという特異性がある。これは、磯鷄館山遺跡においても同様な地形に立地する竪穴住居跡(平安時代もの、現在報告書作成中)一群が確認されており、市内では2例目となつた。次に、平面形・規模については、若干奈良時代のものに大形の住居跡がある。そして、竪穴の構造としては、平安時代のものの中に煙出口埋土に多量の礫が混入している点に大きな相違があり、また、カマドの位置にバラツキがあるようである。このような相違は、ある程度時代・時期的な差を表わしているものと考えられる。

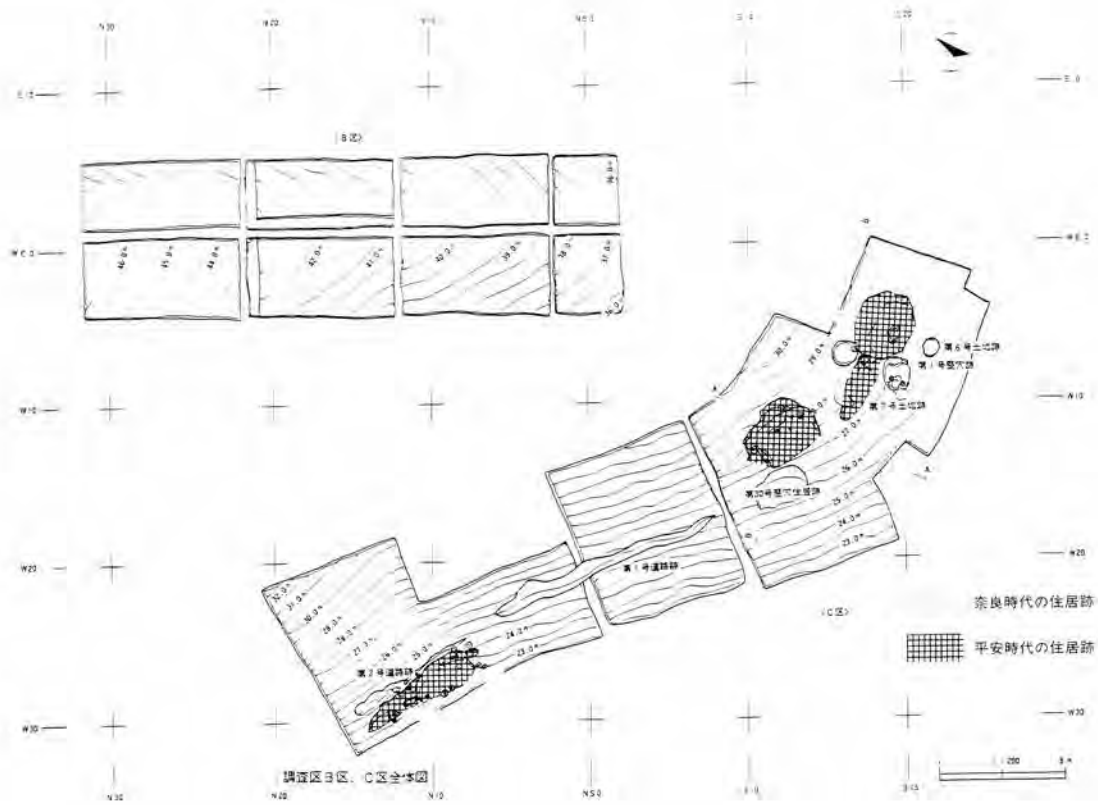
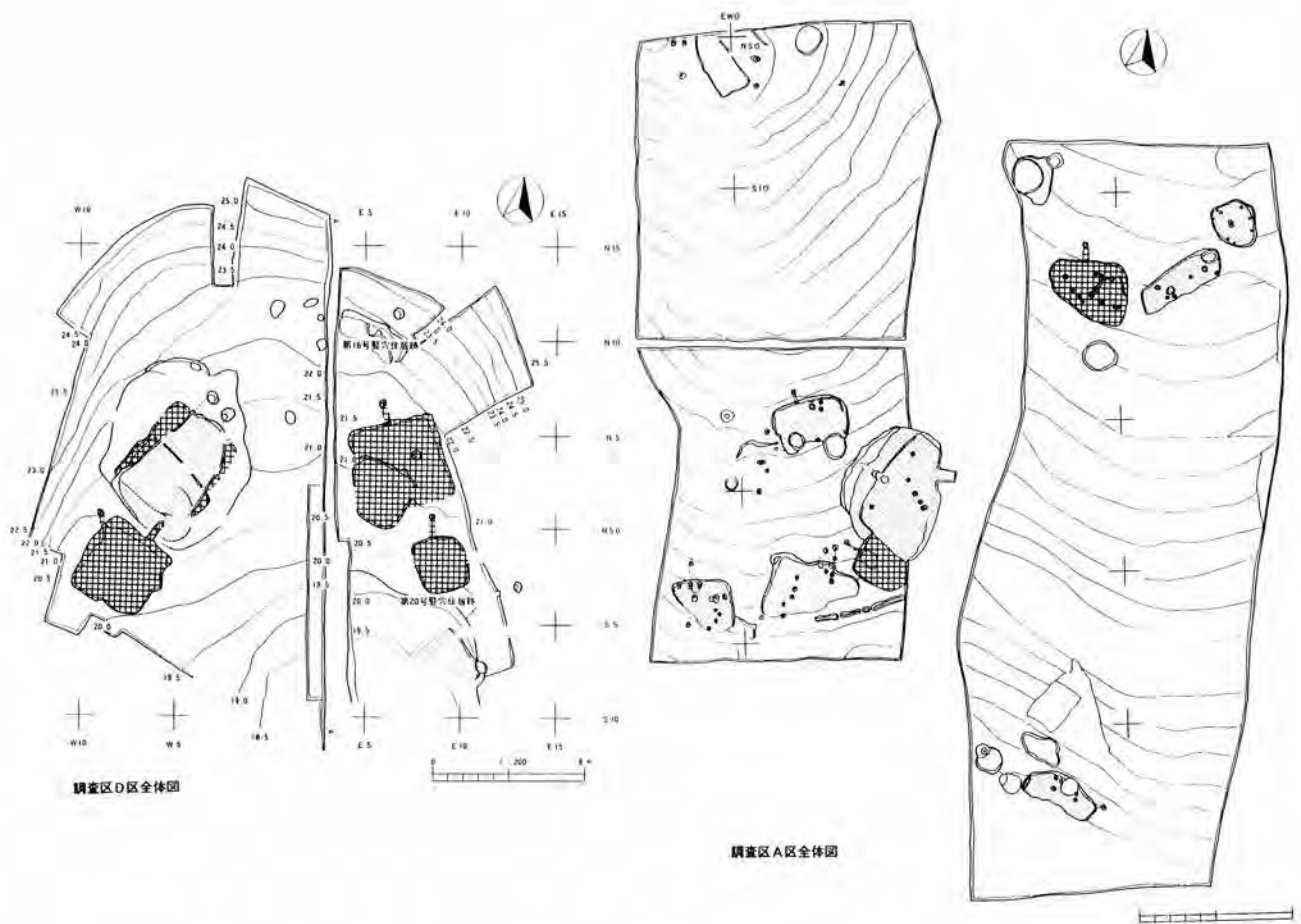
では、今回の調査区内で住居跡がどの様に分布しているのかをみてみると、第100図のようになる。大きな流れとしては、A区内に奈良時代の住居跡が多く、それが平安時代になっていくと、D区、C区へと移行していくようである。後述する出土土器などの編年観からもこれらは継続して営まれていたものと考えられる。



住居跡	平面形	規模(m)	柱穴数	カマドの位置	煙道	その他特記	重複関係	時代
1号住	隅丸方形	5.1×(3.2)	—	北壁中央西寄り	上り勾配	周溝確認	—	奈良
2号住	隅丸方形?		—	北壁中央	下り勾配		1号住に切られる	奈良
3号住	方形	4.3×(4.0)	—	西壁南寄り	下り勾配		4号住を切る	平安?
4号住	隅丸方形	7.4×(5.5)	4?	西壁中央部	上り勾配	周溝、埋土より弥生時代の遺物出土	3号住に切られる	奈良
5号住	楕円形?	(6.0)×(1.1)	—	—	—		4号住に切られる	弥生?
6号住	隅丸方形	(4.7)×(4.0)	—	北壁東寄りに2基	下り勾配		7号住を切る	奈良
7号住	楕円形?		—	—	—		7号住に切られる	弥生?
8号住	隅丸方形	3.9×(3.4)	—	北壁中央西寄り	下り勾配	周溝	9号住を切る	奈良
9号住	—	—	—	北東隅	下り勾配		9号住に切られる	奈良
10号住	隅丸方形	5.1×4.3	—	北壁中央部	ほぼ平坦	周溝		平安
11号住	長方形	6.0×(1.0)	—	—	—			
12号住	楕円形	3.1×2.5	—	—	—	東側一部張り出し部あり		
13号住	方形?							
14号住	隅丸方形	5.0×(2.0)	—	北東隅	下り勾配			奈良
15号住	方形	(3.0×2.1)	—	—	—			
16号住	方形	3.9×(1.5)	—	北壁中央部	下り勾配	煙出口埋土に中～小れき多量を含む		平安?
17号住	長方形	5.6×4.5	4	北壁中央部	下り勾配	煙出口埋土に中小れき多量。馬具、琥珀出土		平安
18号住	隅丸方形	3.2×2.6	—	北壁東寄り	下り勾配	煙出口埋土に中小れき多量	17号住を切る	平安
19号住	方形	2.9×2.7	—	北壁中央部	下り勾配		20.21号住を切る	平安
20号住	方形?	4.9×	—	東壁中央部?	—		21号住を切る	奈良?
21号住	長方形?	—	—	東壁中央部?	—			奈良?
22号住	方形?	—	—	—	—			奈良?
23号住	楕円形?	(3.5)×(1.2)	—	—	—	東壁際に焼土		平安
24号住	方形	4.5×(2.0)	—	—	—	北壁に周溝	25号住に切られる	平安
25号住	不整円形	径4.0	—	—	—	北壁に周溝	24号住を切る	平安
26号住	隅丸方形	5.5×4.3	4	北壁東寄り	下り勾配		27号住を切る	平安
27号住	方形	6.6×(6.0)	4?	北壁西隅	ほぼ平坦		26号住に切られる	奈良
28号住	隅丸方形	4.0×4.0	—	北壁西隅と北壁中央に2基	Iは下り勾配、 IIは下り勾配	どちらも煙出口に中～小礫を含む		平安
29号住	隅丸方形	4.2×(2.7)	4?	北壁中央東寄り	上り勾配			平安
30号住	楕円形	3.5×(2.2)	—					平安
31号住	隅丸方形	4.0×(2.0)	—	南東隅に2基	Iは下り勾配、 IIは平坦			平安
32号住	隅丸方形?	(4.0)×(1.0)	—	東壁中央部	上り勾配		31号住に切られる	平安
33号住	隅丸方形?	(4.7)×(1.6)	—	北壁中央部	ほぼ平坦		34号住に切られる	平安
34号住	隅丸方形?	4.5×(3.5)	—	北壁東側	上り勾配		33号住を切る	平安

※ ( )内は残存値

第1表 鯉沢遺跡住居跡一覧



第100図

#### b. 炉跡と炭の広がり

調査区C区の尾根中腹に検出したもので、第34号竪穴住居跡が自然状態である程度埋没した段階で、それを掘りこみ構築されておりその西側の炭の広がりも同時期のものである。時期的には、年代が把握できる土器が共伴していないため確実ではないが、周囲の状況などから平安時代と考えられる。

炉跡は、長軸1.2m、短軸0.6m、深さ0.18mをはかる長だ円形状を呈するもので、炉壁は南側の一部が開放するU字形をしている。基本的には、下部構造を有せず周囲にも柱穴などの上屋構造をつくったと思われる遺構も発見されておらず、所謂屋外につくられた炉と考えられるが、確かに平安時代の竪穴が埋まりかけたやや平坦部を利用しているので一概に屋外炉といいきれない面があるかもしれない。遺物としては、炉検出面や炉内の埋土から棒状の鉄製品？や板状の製品を振ったと思われるもの（第89図1～9）、若干の鉄滓が出土している。

長だ円形

屋外炉

宮古市内では、このような炉跡は未報告も含めて何箇所かで検出しているが、最近では細越I遺跡で多量のハンマースケールを伴う17基もの同様の炉跡が検出している。これらは、やはり平安時代の竪穴の埋土途中に形成されていたものでA、B、Cの3群への変遷が確認されている。また、同遺跡では竪穴内部にもこのような炉跡を有する一群も同時に確認されており、所謂、小鍛冶の工房址として位置づけている。そして、屋外のものについては、大鍛冶ないしは小鍛冶前の段階の炉としている。

さて、当遺跡の炉跡は、ハンマースケール自体は確認できなかったものの前記遺跡の屋外の炉跡群に極めて類似している。また、遺物としても第89図1～9のような製品とはいえないような、むしろ一度使用した製品を溶解するために振った板状のものなどを考えあわせると、細越I遺跡でいうような小鍛冶前の段階の炉と考えざるをえないのではないかと思われる。

#### c. 道路状遺構

調査区C区の急斜面部に検出したもので、途中で途切れて第1号と第2号とあるが、ほぼ等高線上に沿った形でC区斜面にある竪穴住居跡から斜面部を通り抜け西側の平坦部に至るためのものと考えられる。わずかだが両者にレベル差があるが、埋土の状況などから同時期で本来は1本になると思われる。31号住居跡を切っており、29号、30号、33号、34号住居跡のいずれかの住人が使用したのと考えられる。磯鶏館山遺跡でも同様の遺構を検出している。

## (2) 遺物

### a. 土器

ここでは、各住居跡などから出土した奈良・平安時代に所属する土師器・須恵器について一括してまとめる。第101図～第104図までは各竪穴住居跡毎に出土した土器類をまとめて掲載したもので、この中には、埋土からのものや層位不明のものは省いてある。以下、土師器・須恵器について分類し、そしてこれらの図を基に各住居毎のセット関係などについてまとめ、さらに市内の遺跡や周辺部の遺跡のものなどと比較し年代的な位置づけを行う。

#### ① 土師器

坏形土器、甕形土器を中心として出土している。坏形土器としたものの中には鉢形土器といわれるものが、また、甕形土器としたものの中には壺形土器（球胴形としたもの）が含まれているものと思われるが、以下、坏形土器、甕形土器として分類する。

##### [ 坏形土器 ]

ロクロ未使用（A類）と使用（B類）、そして丸底（Ⅰ）と平底（Ⅱ）の底部の形態で大きく分けられる。更に、体部内外面の段・沈線の有無や全体の器形、内外面の調整技法などの組合わせで分類される。

AⅠ類 ロクロ未使用で丸底を呈するもので以下に細分される。

AⅠa類 体部内外面に明瞭な段・沈線を有し、内外面ナデもしくはヘラミガキ調整し内面は黒色処理を施すもの。体部外面の段・沈線は中位にあるもの（①類）と下位にあるもの（②類）に細分され、①類は体部から口縁部は内湾気味、②類は外傾し平底風となる。

AⅠb類 AⅠa類同様だが、外面底部をヘラケズリ調整しているもので、体部外面の段は中位から上位にある。体部から口縁部は内湾気味（①類）である。

AⅡ類 ロクロ未使用で平底を呈するもので以下に細分される。

AⅡa類 体部外面に段を有し、体部から口縁部は外傾する（②類）。内外面にナデやヘラミガキ調整を施し、内面は黒色処理を施す。

AⅡb類 体部内外面に明瞭な段・沈線はなく、内面はヘラミガキ後黒色処理、外面はナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ調整を施すもの。器形は①類、②類がある。

BⅡ類 ロクロ使用で平底を呈するもので以下に細分される。

BⅡa類 外面にヘラミガキ、ヘラケズリなどの再調整を施し、内面はヘラミガキ後に黒色処理を施すもの。器形は②類の外傾するものが多い。

BⅡb類 BⅡa類同様だが底部に台が付くもの。

BⅡc類 外面に再調整を施さず内面だけにヘラミガキ調整後に黒色処理を施すもの。

BⅡd類 内外面とも無調整のもの。小破片でしかも量的に少なくほとんど出土していないものと考えてもよい状況である。

[ 甕形土器 ]

ロクロ未使用 (C類) と使用 (D類)、そして頸部の段・沈線のあるもの (I) とないもの (II) に大きく分けられ、器形や底部の形態、調整技法などにより細分できる。

C I類 ロクロ未使用で頸部に明瞭な段・沈線を有するもので、器形などにより以下に細分できる。

- ① 口縁部ないし体部に最大径を有し体部から底部にかけて直線的になるもの。
- ② 体部に最大径を有すが球胴状に膨らむもの。

C II類 ロクロ未使用で頸部に明瞭な段・沈線を有さないもので、器形などにより以下に細分できる。

- ① 口縁部ないし体部に最大径を有し体部から底部にかけて直線的になるもの。
- ② 体部に最大径を有し体部が球胴状に膨らむもので、最大径部が中位のものと同位のものがある。

③ 口縁部が短かく外反し体部が膨らむもの。

C III類 ロクロ未使用の小形甕形土器を一括した。

C IV類 甕形土器の底部片をまとめた。

- ① 底部外面の端部が外側に張り出しているもの。
- ② 底部外面の端部が外側に張り出さないもの。

D I類 ロクロ使用で頸部に明瞭な段・沈線を有するものだが、口縁部片が主体で全体の器形が判明するものが少ないが、器形的には①、②類がある。

D II類 ロクロ使用で頸部に明瞭な段・沈線を有さないもの。D I類同様、①、②類がある。

D III類 ロクロ使用の小型甕土器を一括した。

以上の甕形土器のうち②類としたものの中に、壺形土器が含まれていると考えられる。

② 須恵器

土師器同様、坏、甕、壺形土器があり比較的多く出土している埋土からのもの大半である。以下同様に坏類、甕類として分類する。

[ 坏形土器 ] 全体の器形が判明するものは少なく底部の切り離しは回転糸切りで、体部下半から底部にかけて再調整されているもの (E I類) とされないもの (E II類) とに分けられる。

[ 甕形土器 ] 大部分が破片で、全体形を把握できるものは少ない。やはり埋土から出土のものが大半である。28号住、29号住から出土している球胴形をした壺形土器と思われるものに分けられる。

さて、各住居跡から出土している土師器・須恵器をみると、冒頭にも記したが埋土のものを除きある程度まとまりのある共伴関係を第101図～第104図で見ると次の様になる。

住居跡名	土師器坏形土器	土師器甕形土器	小形甕形土器	甕形土器底部	須恵器	土器群
4号住（B層一括土器）	A I a ①類、A I a ②類、A II a 類、A II b ①類	C I ①類、C II ①類	C III 類	C IV ①類、C IV ②類	共伴せず	第Ⅱ期
4号住（カマド崩壊土）	?	C II ①類	C III 類	C IV ①類	共伴せず	第Ⅰ期
8号住	A II b ②類	C II ①類	C III 類	C IV ①類	共伴せず	第Ⅱ期
10号住	B II b 類	C I ①類、C II ③類	須恵器の小瓶	C IV ②類	坏形、甕形土器	第Ⅳ期
12号住	?	C I ②類	?	C IV ①類	共伴せず	第Ⅱ期？
14号住	?	C II ①類	?	C IV ①類	共伴せず	第Ⅱ期？
17号住	?	D I ①類、D II ②類	?	?	共伴せず	第Ⅲ期
18号住	B II a 類、B II b 類	C II ②類、D I ①類	D III 類	C IV ①類、C IV ②類	甕形土器	第Ⅳ期
19号住	?	C II ①類、C II ③類	C III 類	C IV ②類	坏形、甕形土器	第Ⅳ期
26号住（床面土器）	B II a 類、B II c 類	C II ①類、C II ②類、D II ②類	?	C IV ②類	共伴せず	第Ⅲ期
26号住（C1層土器）	?	D I ①類、D II ①類	?	C IV ②類	甕形土器	第Ⅳ期
27号住（床面土器）	?	C I ①類、C I ②類、C II ①類、C II ②類	?	?	共伴せず	第Ⅰ期
27号住（E1層土器）	A I b 類	C I ①類	?	C IV ①類、C IV ②類	共伴せず	第Ⅱ期
28号住	?	C II ②類	?	?	甕形土器	第Ⅳ期？
29号住	A II b 類	C II ①類	?	?	甕形土器	第Ⅳ期？
33号住	?	C II ①類、C II ②類	?	?	甕形土器	第Ⅳ期？

第2表 鯉沢遺跡住居跡出土土器一覧表

上記の出土土器一覧表及び竪穴住居跡の一覧表、重複関係などから当遺跡出土の土器群は次の様に第Ⅰ期～第Ⅳ期までの変遷が考えられる。

**第Ⅰ期** 4号住（カマド崩壊土器）、27号住（床面）に代表される一群。器種組成は、坏（鉢形含）・甕（壺形含）からなり、すべてロクロ未使用のもので構成されている。坏形土器については全体の器形が判明するものが出土しておらず不明である。甕形土器はC I ①類、②類、C II ①類、②類、C III 類、C IV ①類が出土している。27号住3、4は体部が膨らみ頸部がしまる壺形土器になると思われるが、体部がきれいに半円状を描く。器面の調整は外面は軽いヘラナデ、ヘラミガキ、内面は強いヘラナデ、刷毛目調整が多用されている。また、4号住8のような手捏ね状の小形の甕が伴う。須恵器は共伴しない。いずれにしても、土器の出土、特に坏形土器が不明な点が大きく詳細は把握できない。後述する第Ⅱ期の範疇に含まれるのかもしれないが、ここでは一応第Ⅰ期の土器群として捉える。

**第Ⅱ期** 4号住（B層土器）、8号住、27号住（E1層土器）に代表される一群。器種組成は、第Ⅰ期同様土師器坏形・甕形土器からなり、すべてロクロ未使用のもので構成されている。須恵器はやはり共伴していない。

坏形土器はAⅠa①・②類、AⅠb類、AⅡa類、AⅡb①・②類が出土しているが、27号住（E1層土器）ではやや大ぶりの丸底の坏、4号住（B層土器）では前者に平底の坏が一緒にバラエティーに富み、そして8号住では平底の坏だけが出土している。4号住（B層土器）5は体部が直立気味となり鉢形土器の部類に入るものと思われる。器面調整は、内外面ともヘラミガキ調整が多用され一部ヘラケズリ調整（AⅠb類）、軽いヘラナデ調整がみられ、内面はすべて黒色処理されている。甕形土器はCⅠ①類、CⅡ①類、CⅢ類、CⅣ①、②類が出土している。第Ⅰ期でみられた体部が球胴形に膨らむ器形（②類）が欠落している。器面の調整は、外面は強いヘラナデ、ヘラケズリ、刷毛目調整、内面は強いヘラナデ、刷毛目調整が多用され、第Ⅰ期でみられた外面のヘラミガキ調整はほとんど施されない。須恵器は共伴しないが、8号住埋土からは坏・甕類が出土している。

以上が第Ⅱ期の土器群だが、丸底、平底の坏の出方や甕の器面調整の違いから細分されそうだが、ここではこれらを第Ⅱ期の土器群として扱っておく。

**第Ⅲ期** 17号住、26号住（床面土器）に代表される一群。器種組成は土師器坏、甕形土器からなりロクロ使用のものが出現してくる。須恵器はやはり共伴しない。



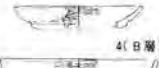












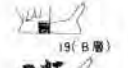
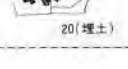
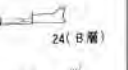






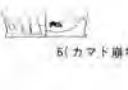



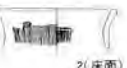






坏形土器はロクロを使用したBⅡa類・c類が出土している。底部の切り離しは糸切である。図示できなかったが、ロクロ未使用のものも共伴している。甕形土器はロクロ使用と未使用が混在しているが未使用のものが多く、CⅡ①・②類、DⅠ①類、DⅡ②類、CⅣ②類が出土している。口縁部の形態などは、第Ⅰ、Ⅱ期のものに似ておりさほど外反の強いものは少ない。器面の調整はヘラナデ、刷毛目調整が主体だが、26号住（床面土器）9、12にはヘラケズリ調整がみられる。内面は口縁部がナデ、体部がヘラナデが多用されている。須恵器の共伴は確認されなかったが、埋土からは比較的多数の須恵器片が出土している。

以上が第Ⅲ期として把握された土器群である。

**第Ⅳ期** 10号住、18号住、26号住（C1層土器）に代表される一群。器種組成は第Ⅲ期同様だが、明確に須恵器の共伴が確認される。

坏形土器はBⅡa類・b類・c類が出土している。BⅡb類は台付の坏で10号住から出土している。甕形土器はロクロ使用と未使用が混在している。CⅡ①・②類・③類、DⅠ①類、DⅡ①類、DⅢ類、が出土している。CⅡ③類やCⅡ②類でも口縁部の形態が短く外傾するもの、そしてDⅢ類が新たにみられる。器面の調整は、内外面とも強いヘラナデ調整が主体で刷毛目調整がわずかに内面の調整としてみられる。そして何よりも第Ⅳ期になると、須恵器が確実に伴っていることが挙げられる、坏、甕形土器などである。

以上が、第Ⅳ期として把握された土器群である。














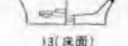


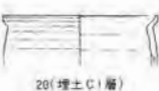

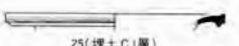











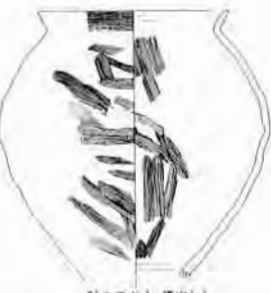
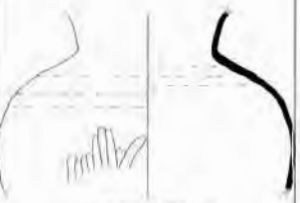
	土 師 器		須 恵 器	
	坏 類	壺 甕 類		
第1号竪穴住居跡		 1(第1号竪穴住居跡床面)  2(第1号竪穴住居跡床面)		
第4号竪穴住居跡 B層出土土器	 4(B層)  2(B層)  1(B層)  5(B層)  3(B層)	 9(B5層)  13(B層)  10(B層)  11(B層)	 14(B層)  21(B層)  22(B層)  23(B層)  19(B層)  20(埋土)  24(B層)	
カマド崩壊土出土器	 8(カマド崩壊土)	 15(カマド崩壊土)  17(カマド崩壊土)		
第8号竪穴住居跡 カマド崩壊土出土器	 7(カマド崩壊土)  1(床面)	 5(カマド崩壊土)  5(カマド崩壊土)  4(カマド崩壊土)		
第10号竪穴住居跡 床面出土土器	 1(床面)	 4(A層)  2(床面)  3(床面)	 5(カマド崩壊土層)  6(床面)	
第12号竪穴住居跡 床面出土土器		 3(床面)  2(床面)  1(B3層)		

第101図 竪穴住居跡の土器 (1)



	土 師 器		須 恵 器
	坏 類	甕 壺 類	
第14号竪穴住居跡 カマド崩壊土出土 土器		<p>2(カマド崩壊土) 1(カマド崩壊土) 4(カマド崩壊土)</p>	
第17号竪穴住居跡		<p>3 5 4</p>	
第18号竪穴住居跡 床面出土土器	<p>2(床面) 3(床面)</p>	<p>4 5 7(床面) 5(カマド崩壊土) 1(カマド煙道部埋土)</p>	<p>6</p>
第19号竪穴住居跡		<p>1(第19号竪穴住居跡) 3(第19号竪穴住居跡) 4(第19号竪穴住居跡)</p>	<p>2(第19号竪穴住居跡) 6(第19号竪穴付近)</p>

第102図 竪穴住居跡の土器 (2)

	土 師 器			須 恵 器	
	坏 類	甕 壺 類			
第26号竪穴住居跡	 2(カマドK1層)   1(カマドK3層)   3(カマドK3層)	 4(床面)   6(床面)	 8(床面)   7(床面)   5(床面)   11(カマド崩壊土)	 10(カマド崩壊土)   9(カマド崩壊土)   12(カマド崩壊土)  14(カマド、煙道)   13(床面)  15(カマド、煙道)	
埋土C1層出土土器		 21(埋土C1層)   20(埋土C1層)	 19(埋土C1層)	 25(埋土C1層)   24(埋土C1層)	
第27号竪穴住居跡 床面出土土器		 5(床面)   2(床面)	 4(床面)   3(床面)		
埋土E1層出土土器	 1(埋土E1層)	 6(埋土E1層)	 10(埋土E1層)   7(埋土E1層)   9(埋土E1層)   8(埋土E1層)		
第28号竪穴住居跡 カマドI、II焼出し 出土土器		 6(カマドI、焼出し)	 12(カマドII、焼出し)		

第103図 竪穴住居跡の土器 (3)

	土 師 器		須 恵 器
	坏 類	甕 壺 類	
第29号竪穴住居跡			
第33号竪穴住居跡 カマド崩壊出土土器			

第104図 竪穴住居跡の土器 (4)

さて、以上のように竪穴住居跡の床面やカマド跡、ある層からまとめて出土した土器群は竪穴住居跡の重複関係などから、第Ⅰ期～Ⅳ期までの土器群の変遷として把握された。この変遷は、大きくみればロクロ未使用の段階（第Ⅰ期、Ⅱ期）とロクロ使用（第Ⅲ期、Ⅳ期）が導入されてくる段階の2時期がある。また、この大きな時期差のほかにある程度の時期差を持つものと思われる。

2 時期

岩手県内における古代の土器の編年については、内陸部の北上川中流域の資料を基礎として進められてきて、その集大成として昭和57（1982）年に高橋信雄氏（註1）、続く昭和58（1983）年には相原康二・遠藤勝博氏（註2）らによってその大綱が発表されている。その後は、各氏が発掘調査報告書等で断片的に細分を試みているが、いずれも前述の諸氏の編年が基礎となっている。

当遺跡のように奈良・平安時代の集落として変遷を迫える調査例としては、宮古市内においては、上村遺跡の調査例がある。近辺の遺跡として大槌町の夏本遺跡（『夏本 89』）がある。また、市内では奈良時代の集落として既述の狐崎遺跡、払川Ⅰ遺跡が、平安時代の集落として赤前遺跡群、磯鶏館山遺跡第2次調査、細越Ⅰ遺跡、磯鶏館山遺跡（現在報告書作成中）、青猿Ⅰ遺跡などが調査されており、更には長根Ⅰ遺跡では奈良時代の終末期の古墳群が調査されている。市外の沿岸部では北部の久慈市中長内遺跡、源道遺跡などの大規模な集落遺跡が調査され、岩手県沿岸部においても奈良・平安時代の資料の蓄積が進んできている。

当遺跡で第Ⅰ期とした土器群は、坏形土器を欠き不詳な点が多いがヘラミガキ調整が多用される有段・沈線のある甕形土器や手捏ね状の小形甕、球胴形の甕（壺形土器）の存在などの特

第Ⅰ期

徴があり、上村遺跡G-2号住居跡、狐崎遺跡の各住居跡、夏本遺跡A A 3住居跡などから出土している土器群に類似し、高橋編年のⅡ-2群、相原・遠藤編年の第7-a、第7-b群土器に相当するものと考えられるが、前記のような特徴や後続する第Ⅱ期の土器群との関係なども加味すれば、8世紀の前半に位置づけられるものと考えられる。

## 第Ⅱ期

第Ⅱ期とした土器群は、その土器の組成や特徴からやはり第Ⅰ期同様、高橋編年のⅡ-2群、相原・遠藤編年の第7-a、第7-b群土器の範疇に入るものと考えられる。坏形土器に有段・沈線をもつものもたないものの丸底と平底がありバラエティーに富んでおり、また、甕形土器の器面調整も第Ⅰ期にみられたヘラミガキ調整が少なく、第Ⅱ期以降はヘラナデ、刷毛目調整が主体となってきている。これは、当該時期の甕形土器の器面調整としては、県北部から沿岸部のひとつの特徴としてヘラミガキ調整の多用が挙げられており、確かに第Ⅰ期土器群では他の遺跡例をみてもいえるが、当遺跡の第Ⅱ期の土器群以降は決して多用されているといえない。このことは、『夏本 89』で高橋与右エ門氏が指摘しているように、久慈市中長内遺跡ではヘラナデ、刷毛目調整が多用される土器群の住居跡の一群があり、時間差とみるのか地域差としてみるのか重要な要素と思われる。当遺跡の土器群の出土状況から考えると第Ⅰ期土器群に後続する状況で出土しており、また、第Ⅱ期以降の土器群についても同じ様な状況であることを考えあわせると、これは時間差と考えたい。よって、第Ⅱ期土器群については、第Ⅰ期に後続する8世紀半ばから後半と理解したい。そして、なおかつ坏形土器のバラエティーさと第Ⅱ期とした住居跡からその出土状況の違いなどをみると、更に、細分される可能性も考えられる。

## 第Ⅲ期

第Ⅲ期とした土器群は、ロクロ使用の土器（BⅡ類、DⅠ、Ⅱ類）が出現しているが、土師器坏形土器に関しては出土点数も少ないが、ロクロ未使用との混在が認められている。甕形土器も同様で両者が混在しておりどちらかといえばロクロ未使用のものが多。これらの状況は明らかに第Ⅱ期土器群に後続するものと考えられる。上村遺跡N-2住居跡土器群と類似する。また、久慈市中長内遺跡のRA516、517住居跡などから出土している土器群にも類似している。しかし、これらの例では確実に須恵器との共伴がみられる。しかし、当遺跡においては須恵器との確実な共伴関係が確認できない時期である。日常的な須恵器との共伴関係がいつの年代からなのか明確でないが、高橋編年では、Ⅱ-2群の8世紀中～後半から共伴する遺跡が増加し、続くⅢ-1群では定着している。一方、相原・遠藤編年では第7-b群土器の8世紀後半～末には共伴するようになると捉えている。確かに当遺跡の場合、第Ⅱ期とした8号住の埋土からは須恵器が出土しており後続する第Ⅲ期には共伴する可能性を示唆しているとも思えたが、前述のとおり第Ⅲ期でも確認されていない。第Ⅳ期になると共伴が確実に認められる。

第Ⅲ期の土器群は若干の問題点もあるが、高橋編年のⅢ-1群、相原・遠藤編年の第8群土器群に相当し、年代としては9世紀前半位と理解したい。

## 第Ⅳ期

第Ⅳ期とした土器群は、第Ⅲ期よりも更にロクロ使用の土器の割合が増え新たにDⅢ類としたロクロ使用の小形甕が出現し、また、土師器甕形土器の口縁部の形態も短く外反する傾向やCⅡ③類とした口縁部が短く体部がゆるやかに開いていく器形のものなどが出てくる。そしてなによりも、須恵器の共伴が確実であることが挙げられる。このような土器群は、宮古市内では上村遺跡のH-2号住居跡、赤前遺跡群H H03竪穴住居跡、鎌ヶ崎館山貝塚第1002号竪穴住居跡などの土器群が類似し、大槌町の夏本遺跡のⅣ群住居跡（L17住居跡、L28住居跡）など

があり、高橋編年のⅢ-2群、相原・遠藤編年の第9群ないしは10群土器群に相当し年代としては、9世紀末～10世紀代に位置づけられるものと理解するが、先行する第Ⅲ期土器群との間（9世紀半ば～末）が抜けていることとなり、細分できる可能性もあると考えられる。

#### b. 鉄製品

鉄製品は遺構の内外から出土しているが、大きく馬具、刀子類、釘状のもの、板状を呈するものなどに分けられる。遺構から出土しているものに関しては、平安時代の鍛冶炉跡も検出しており、奈良・平安時代に所属するものと考えられる。ここでは、紙幅及び時間的制約の関係上馬具など特徴的なものに焦点をあてることでまとめたい。

馬具は、第17号竪穴住居跡床面から出土したものであり、年代的には当遺跡の土器群第Ⅲ期に相当し9世紀代の平安時代に所属する。県内での馬具の出土例は高橋義介氏によってまとめられており（註3）、それによれば古墳群から出土したもの3例あり、当遺跡のように平安時代の住居跡などからの出土は6例紹介されている。しかし、その後大槌町夏本遺跡や最近、北上市の上鬼柳Ⅲ遺跡からも出土しており（註4）、当遺跡のものも含めると9例となる。

まず、当遺跡以外の8例について検討すると、轡金具が5例（北上市西野遺跡、同上鬼柳Ⅲ遺跡、盛岡市志波城跡、水沢市玉貫遺跡、大槌町夏本遺跡）、鉸具が2例（安代町上の山Ⅶ遺跡、江刺市宮地遺跡）、帯金具様のもの1例（盛岡市竹花前遺跡）で水沢市玉貫遺跡以外は住居跡からの出土である。奈良時代のもは比較的原形を滞めているが、平安時代のもは残存状況がよくない。さて、当遺跡のものは轡金具で銜と両側の鏡板、引手が付いたと思われるリング状のもの（遊環）まで残っておりほぼ完形に近い。比較検討資料が上記のようにあまりにも少ないが、形態的には北上市の上鬼柳Ⅲ遺跡出土のものと類似している。

馬具自体は古墳時代の副葬品として宮城県以南で数多く出土しているが、平安時代となると以外と少ない。7世紀末まで馬具の変遷については、坂本美夫氏の著書（註5）がある。あえてこの中から類似しているものをあてはめると、双環式轡にその形状が近似している。

馬具が出土したということは、ひとつには当然その当時には乗馬の風習があったことを物語ると同時に馬の飼育をも想定される。しかしながら、県内においてはその出土例があまりにも少なく乗馬、馬の飼育の困難性、極く限られた人たちのものであったことも考えられる。そして、宮古市内では長根Ⅰ遺跡から終末期の古墳群があるが古墳群の副葬品の中には、このような馬具がないことを考えると、宮古地方では8世紀初頭までは乗馬の風習がなかったのではと想定させるが、内陸部の江釣子古墳群では副葬品としてすでに有り（馬具の風習とは結び付くとは限らないが）、沿岸部と内陸部の様相の違いを感じざるをえない。

もうひとつ考えられることは、宮古地方を含めた周辺部では奈良・平安時代の遺跡からは多種多様で精巧な鉄製品が出土しており、また、当該期の製鉄？炉跡や鍛冶炉跡が多数発見されている。これは原料となる砂鉄あるいは鉄鉱石の存在がその源となっていると考えられる。事実、前述した夏本遺跡では鍛冶工房跡も検出している。また、当遺跡においても鍛冶炉跡と思われる遺構を調査している。このようなことから馬具をはじめとする鉄製品の供給源であったのではないということも推測される。その供給先としては内陸部の遺跡である。ひとつのデータとして当遺跡の馬具と北上市の上鬼柳Ⅲ遺跡出土のものを金属学的に解析（註6）したが、

結論として一応地金の材質に共通性を認めることができる、ということがある。しかし、このようなことは、様々な鉄製品を含む数多くのデータの蓄積が必要であり、また、考古学的にも所謂、炉跡といわれる遺構や遺物面からの比較検討、議論が必須で化学的なデータのみを以ていえるものではない。

次に、第1号炉跡の検出面から出土した板状のものを振った鉄製品についてだが、これを展開図にしたのが第89図9である。一見何かの動物？を形どったものに見えるが、祭祀儀礼に使用されたものではないかと思われる。類例が全く検討がつかないためにこれ以上言及しないが、むしろ、こういったものをいわば壊して振っている状態で出土していることの方の問題を考えたい。即ち、これを含めた第89図のような鉄製品の破損品？がまとまって出土しており、遺構の項でも記したが、製品を作る前の段階の機能を有する炉跡であることを物語る傍証ではないかということである。更に、突っこんでいえば、馬具のところで述べた鉄製品の供給源と供給先の関係が仮にあるとするならば、このような破損品の供給源は内陸部の遺跡であり丁度、逆の関係が成立するのではとも考えられる。しかし、これは全く根拠もなにもなく言い過ぎなのかもしれない。

いずれにしても、鉄に関連する遺跡、遺構が近年宮古地方を中心に相次いで検出しており、鉄を巡る問題は今後の重要な検討課題であると思われる。

#### c. その他の遺物

土器、鉄製品以外の出土遺物としては、土製の紡垂車、フイゴの羽口、鉄滓などがある。すべてについてを記すだけの紙幅がないため、ここでは第26号住居跡から出土しているフイゴの羽口についてのみ記して終わりとしたい。

第69図16、17だが、出土状況が第66図にあるとおりカマドの支脚として転用？されている。未使用のものであったかは、丁度先端部が欠失しており判明しないが（おそらく16の方は未使用と思われる）、このような出方は今まで例がなく興味をそそるものである。

その他、奈良、平安時代の土製紡垂車の出土例なども多くなって来ており、今後、鉄製のものと関連や分類などが検討課題となるであろう。

(註1) 高橋信雄 1982 「古代」『岩手の土器』 岩手県立博物館

(註2) 相原康二・遠藤勝博 1983 「岩手県南部(北上川中流域)における所謂第I型の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢①』 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行委員会と相原康二 1981 「岩手県南部における古代の土器編年試案」『石田遺跡』 岩手県教育委員会の両方より

(註3) 高橋義介 1984 「岩手県における奈良・平安時代出土の鉄製品について」『紀要Ⅳ』 (助)岩手県埋蔵文化財センター

(註4) (助)岩手県埋蔵文化財センター小田野哲憲氏からのご教示によるもので、報告書が未刊ながら実測図の提供まで頂いたものである。

(註5) 坂本美夫 1985 『考古学ライブラリー34 馬具』 ニュー・サイエンス社

(註6) 岩手県立博物館の赤沼英男氏により江釣子古墳群出土のもの、上鬼柳Ⅲ遺跡出土のもの、そして当遺跡のもの分析を行なってもらっている。

## 4 宮古市内における古代の集落と土器群の様相

以上、鯉沢遺跡の発掘調査の成果について若干の考察をまじえまとめてきた。ここでは、近年の宮古市内の古代の遺跡について現在までのデータから考えられる集落と土器群の様相について、やはり高橋編年、相原・遠藤編年を基に記述する。これは、あくまでも現段階のものであり、これから刊行予定の磯鶏館山遺跡の成果は抜けている。また、筆者の勉強不足もあり、よって、不十分なものであることは承知願いたい。

第Ⅰ群 高橋編年Ⅱ-1群、相原・遠藤編年第6群ないしは5群に相当するもので、年代的には、6世紀末～7世紀代に所属するものと考えられるが遺構が未だに検出していない。僅かに土器が出土（発掘調査により出土したものではない）しているだけである（第105図）。これは、弘川地区から発見された土師器の壺型土器で体部が正円状に張り出している。焼成状態もかなり良く器外面には刷毛目調整、内面にはヘラナデ調整が施されている。

第Ⅰ群

第Ⅱ群 高橋編年Ⅱ-1群、相原・遠藤編年第7-a群に相当するもので、年代的には8世紀前半～前半に位置づけられる。

第Ⅱ群

弘川Ⅰ遺跡第3号竪穴住居跡に代表される。集落以外の構成要素としては、竪穴住居跡の他に、終末期の古墳群（長根Ⅰ遺跡）がある。竪穴住居跡は大形の方形を呈する。土器群は土師器の坏形土器を欠き甕形土器が出土している。甕形土器の内面底部形態が卵形を呈する古い特徴を残している。

土器自体は長根Ⅰ遺跡、上村遺跡、鯉沢遺跡などから出土しているが、確実に遺構とセットとなっているものは現在のところ弘川Ⅰ遺跡の1棟だけである。

第Ⅲ群 高橋編年Ⅱ-2群、相原・遠藤編年第7-b群に相当するもので、年代的には8世紀前半～後半に位置づけられる。この頃から類例が増加し鯉沢遺跡の調査成果などから2つの時期に細分されると思われる。

第Ⅲ群

第Ⅲ-1群 狐崎遺跡竪穴住居跡群、鯉沢遺跡（第Ⅰ期土器群）、弘川Ⅰ遺跡第1号・2号竪穴住居跡などが該当する。須恵器は共伴しない。土師器は有段・沈線を持つ丸底の坏形土器、長胴形・球胴形を呈する甕及び壺形土器、手捏ね状の小形甕などからなり甕及び壺形土器の体部外面の調整にヘラミガキ調整が多用される。

第Ⅲ-1群

竪穴住居跡は径5m前後の方形ないしは隅丸方形を呈している。狐崎遺跡の5棟はほぼ同一の規格のもとに作られている。しかし、鯉沢遺跡4号住、27号住は径が6m超の大形で第Ⅱ群的要素を残している。その他の集落の構成要素としては、土坑跡が検出されている。また、遺物の面からは、鉄製品や土製紡垂車などが出土してくるようになる。

年代的には、8世紀前半～半ば位までを考えている。

第Ⅲ-2群 鯉沢遺跡（第Ⅱ期土器群）が該当する。土器群の構成などは本文中に記したの

第Ⅲ-2群

で詳細は省くが、坏形土器に平底のものが伴ったり、甕形土器の器面調整にヘラミガキ調整が多用されなくなってくる。

集落の構成要素としては、第Ⅲ-1群とほぼ変化がないが、竪穴住居跡は大形のものではなく、むしろ径が3.5m前後の小形のものもありかなりバラツキがでてくる。

年代的には、8世紀後半に位置づけられるものと思われる。

## 「古館山」

以上の8世紀代の土器群については、斎藤邦雄氏が「古館山」において野田村から久慈市の遺跡例をもとにして詳細に分析しているが、宮古市内のものだけでは器種や絶対的な出土量の違いから斎藤氏のような綿密な土器群の呈示には至らなかった。しかし、沿岸部北部地方と宮古を中心とした沿岸部中央部の比較検討にはかかせない資料であると思われる。

## 第Ⅳ群

第Ⅳ群 高橋編年Ⅲ-1群、相原・遠藤編年第8群に相当するもので、年代的には9世紀初頭～前半に位置づけられるものと思われる。

上村遺跡N-2号住居跡、磯鶏館山遺跡（第2次調査）第1号竪穴住居跡、鰐沢遺跡第Ⅲ期などが該当する。土器群は須恵器が共伴し、土師器にもロクロ使用のものが出現してくる。土器群を見ると鰐沢遺跡第Ⅲ期土器群では須恵器の共伴が確認できず、前述の第Ⅲ-2群的要素を残している。

集落の構成要素としては、遺構面ではやはり竪穴住居跡、土坑跡だけがあるが、遺物の面からは、鉄製品の増加傾向や鉄滓、フイゴの羽口などが出土しており生産活動の在り方に変化が出はじめている。

## 第Ⅴ群

第Ⅴ群 高橋編年Ⅲ-1群、相原・遠藤編年第9、10群に相当するもので、年代的には9世紀前半～末とやや広い幅で位置づけられる。今のところ宮古市内の遺跡では該当するものが少なく。現在報告書作成中の磯鶏館山遺跡の一群がこの中に入ってくるものと思われる。

上村遺跡O-2号住居跡が該当する。また、鰐沢遺跡第Ⅳ期の一部に該当するものがある可能性が考えられる。いづれにしてもこの段階は磯鶏館山遺跡の成果を待つことにしたい。

集落の形成要素としては、第Ⅳ群に加速がかけられ鉄製品の多種多様化が見られまだ確実に確認されていないが、製鉄から小鍛冶段階までの遺構の存在が考えられる。また、集落としての立地が今までの丘陵の尾根や緩やかな斜面を中心としていたものが、急斜面部にまで対象となってきたようである。

## 第Ⅵ群

第Ⅵ群 高橋編年Ⅲ-2群、相原・遠藤編年第10群に相当するもので、年代的には9世紀末～10世紀代と幅広く位置づけられる。この頃になると集落としての多様性が確立し第Ⅴ群で記述した状況が遺構の面でも確認される。また、土坑跡や竪穴住居跡の埋土などから貝殻、魚骨を主体とした小貝塚や穀物などの種子や製塩土器と考えられる土器片が出土するなど、社会状況や生産活動、交易活動などを構築できる状況になっている。

赤前遺跡群、上村遺跡、鯨ヶ崎館山貝塚、細越Ⅰ遺跡、青猿Ⅰ遺跡などが該当し、おそらくは、これらは細分できるものと考えられる。例えば、細越Ⅰ遺跡では土師器の坏形土器が出土



せず甕形土器だけで構成されており、坏形土器の衰退が見られる時期が考えられる。

第Ⅶ群 高橋編年第Ⅳ期、相原・遠藤編年第10群に相当するもので、年代的には11世紀代に位置づけられる。所謂土師器の衰退期であかやき土器の出現期で、宮古市内では断片的に確認されているだけである。

第Ⅶ群











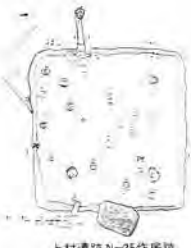




島田Ⅰ～Ⅴ遺跡から、あかやき土器、土師器甕形土器と須恵器甕形土器を出土する竪穴住居跡の一群を検出している（『中谷地・島田 87』）。ここが今のところ宮古市内では古代の遺跡としては最終段階に位置づけられる。土器の実測図など不備な点が多々あり再度整理し別の機会に公表したい。

## 5 まとめにかえて



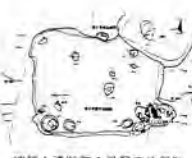
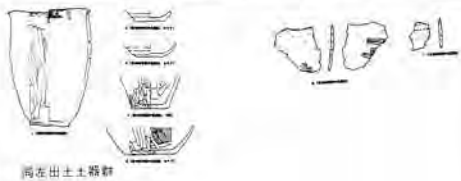




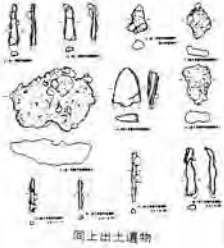
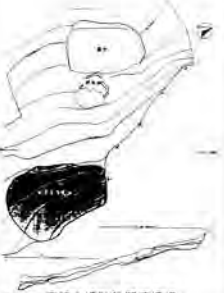
以上、鯉沢遺跡の調査成果を基に長々と書いてきたが、調査のボリュームの割には十分な分析・検討がなされたとは言えないと思っている。そこには、当然筆者の勉強不足もその一端としてあり、今後まだまだ検討の余地がある。特に最近の沿岸部における古代の資料の蓄積の増加が進んでおり、本来であればそれらの資料などを手がかりとして比較検討がなせたものと思う。これらについては、今後何らかの機会にまとめたいと思っている。

参考・引用文献（例言・註記以外のもの、順不同、敬称略）

- ・1990 光井文行・玉川英喜 『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集→『長根 90』と略記
- ・1990 小田野哲憲・高橋義介 『上村貝塚発掘調査報告書』 岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集→『上村 91』と略記
- ・1989 高橋与右エ門・酒井宗孝 『夏本遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第134集→『夏本 89』と略記
- ・1989 佐々木嘉直 『源道遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第138集→『源道 89』と略記
- ・1988 千葉啓蔵 『中長内遺跡発掘調査報告書』 久慈市埋蔵文化財調査報告書第8集→『中長内 88』と略記
- ・1986 桐生正一・桜井芳彦・高橋裕子他 『湯舟沢遺跡』 滝沢村文化財調査報告書第2集
- ・1987 斎藤邦雄 『古館山—昭和45年度三日市場遺跡発掘調査報告書（遺物編）—』 野田村文化財調査報告書→『古館山』と略記
- ・1987 小田野哲憲 『岩手の弥生式土器編年試論』『岩手県立博物館研究報告 第5号』岩手県立博物館
- ・1985 『岩手東山町熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書』『岩手県立博物館調査研究報告 第1冊』岩手県立博物館
- ・1990 「天王山式期をめぐって」の検討会 弥生時代研究会

	遺跡名	竪穴住居跡	出土土器群	竪穴住居跡以外の集落構成要素等
第I群			 (弘川地区出土土器)	
第II群	弘川I遺跡 長根I遺跡	 弘川I遺跡第3号竪穴住居跡	 弘川I遺跡第3号竪穴住居跡出土土器群	 長根I遺跡3号古墳と出土土器
第III群 III-1群	狐崎I遺跡 弘川I遺跡 鯉沢遺跡(第I期)	 狐崎遺跡竪穴住居跡	 狐崎遺跡出土土器群	 狐崎遺跡出土鉄品と土製紡車
III-2群	鯉沢遺跡(第II期)	 鯉沢遺跡8号住居跡	 鯉沢8号住居出土土器群 鯉沢4号住居B層出土土器群	 鯉沢8号住居出土磁石
第IV群	上村遺跡 磯鷲鉾山遺跡 (第2次調査) 鯉沢遺跡(第III期)	 上村遺跡N-25住居跡	 上村N-2号住居出土土器群  磯鷲鉾山(第2次調査)1号住居出土土器群	
第V群	上村遺跡 鯉沢遺跡(第IV期)?	 上村遺跡0-2号住居跡	 上村0-2号住居出土土器	

第105図 宮古市内における古代の集落と土器群の様相 (1)

	遺跡名	竪穴住居跡	出土土器群	竪穴住居跡以外の集落構成要素等
第VI群	鎌ヶ崎館山貝塚 赤前遺跡群 上村遺跡 細越I遺跡 青塚I遺跡 鯉沢(第IV期)など	 <p>鎌ヶ崎館山貝塚第1002号住居跡</p>  <p>赤前遺跡群 HHD4 住居跡</p>  <p>細越I遺跡第9号竪穴住居跡</p>	 <p>同左出土土器群</p>  <p>同左出土土器群</p>  <p>細越I遺跡出土土器群</p>	 <p>鎌ヶ崎館山貝塚第1002号住居跡埋土の地点貝塚</p>  <p>細越I遺跡第1号住居跡</p>  <p>同上出土遺物</p>  <p>青塚I遺跡竪穴住居跡</p>
第VII群	高田I-V遺跡	(再整理後掲載)	(再整理後掲載)	

第106図 宮古市内における古代の集落と土器群の様相 (2)



# 写真図版





調査前の景観（B、C区）



同上（D区）

## 第2図版



第1号土坑跡（完掘）



同上（土層断面）





第1号竪穴住居跡（完掘）



同上 カマド跡

# 第4図版



第4号竪穴住居跡（完掘）



同上 カマド跡



第4号竖穴住居跡土層断面（東西）



同上（南北）

## 第 6 図版



第 3 号竖穴住居跡（完掘）



第 8 号竖穴住居跡（完掘）



第17号・18号竪穴住居跡（完掘）



同上 土層断面

# 第8図版



第19号竪穴住居跡（完掘）



第21号竪穴住居跡カマド跡



第22号～25号竪穴住居跡土層断面



第26号竪穴住居跡

# 第10図版



第26号竪穴住居跡カマド跡



第27号竪穴住居跡





第28号竪穴住居跡



同上 カマド煙出口礫出土状況

# 第12図版



第30号竪穴住居跡



同上 カマド跡

# 第13図版



第 8 号土坑跡出土鉄製品  
(第22図 1、31ページ)



第 6 号竪穴住居跡出土鉄製品  
(第31図 1、43ページ)



第 6 号竪穴住居跡出土鉄製品  
(第31図 2、43ページ)



第 8 号竪穴住居跡出土鉄製品  
(第31図 3、44ページ)



第14号竪穴住居跡出土鉄製品  
(第43図 5、59ページ)

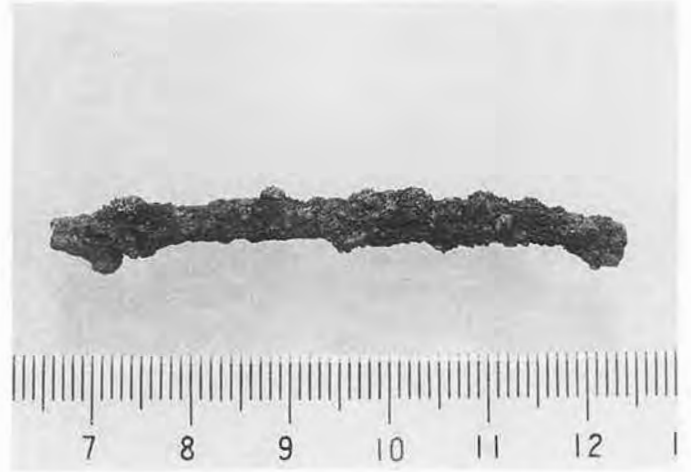


第 1 号炉跡跡出土鉄製品  
(第89図 8、115ページ)

# 第14図版



第1号炉跡出土鉄製品  
(第89図5、115ページ)



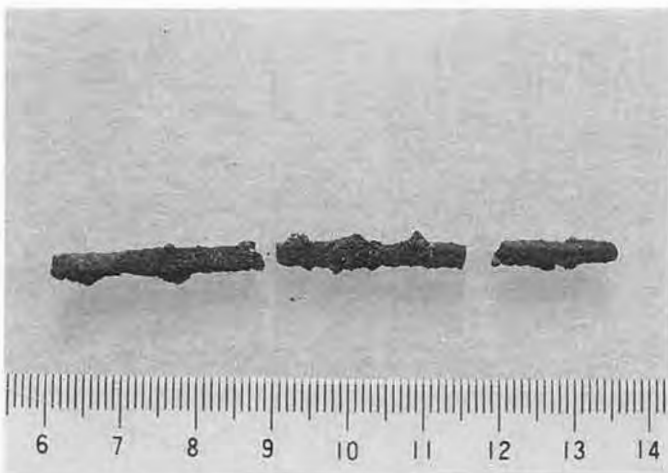
同左  
(第89図3、115ページ)



同上  
(第89図6、115ページ)



同左  
(第89図1、115ページ)



同上  
(第89図4、115ページ)



同左  
(第89図7、115ページ)

# 第15図版



第1号炉跡出土鉄製品  
(第89図9、115ページ)



第21号竪穴住居跡出土鉄製品  
(第60図9、78ページ)



第21号竪穴住居跡出土鉄製品  
(第60図8、78ページ)



D区遺構外出土鉄製品  
(第82図26、107ページ)



D区遺構外出土鉄製品  
(第82図24、107ページ)



第17号竪穴住居跡出土鉄製品(馬具)  
(第50図1、68ページ)



宮古市埋蔵文化財調査報告書34

# 花輪鯉沢遺跡

—平成2年度発掘調査報告書—

1992.3

発行 岩手県宮古市教育委員会  
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷  
岩手県宮古市大通2丁目5の2